

八尾市文化財調査報告61
平成21年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書

2010年3月

八尾市教育委員会



はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置しており、市域は、東方の生駒山地西麓から、西方の大坂平野東部にかけての範囲に広がっております。古くは、北に河内湖、河内潟に面し、旧大和川の支流であった多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数の遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書は、当教育委員会が、平成21年度に(財)八尾市文化財調査研究会に委託して実施した市内の周知の埋蔵文化財包蔵地における個人住宅等の建設に伴う発掘調査や民間の各種事業の開発工事等に伴う遺構確認調査の成果を収めております。

縄文時代の包含層や弥生時代中期の集落の様相を知ることができる多量の土器が出土した恩智遺跡、弥生時代後期を中心とした遺跡の広がりを確認できた大竹西遺跡、古墳時代前期の手焙り形土器が出土した東郷遺跡、奈良時代の土器棺を確認した東弓削遺跡、中世の有力集落の可能性がある遺構を確認した中田遺跡、中世寺院の存在を明らかにできた矢作遺跡、近世八尾の寺内町の内部及び外周施設の様相を知ることができた八尾寺内町の調査など、今年度の調査においては、縄文時代から近世に至るまで、幅広い時期の様々な遺跡や遺構の広がりを確認できる多数の貴重な成果を得ることができました。

今後、埋蔵文化財の重要性を市民の方々をはじめとして、多くの人々にご理解をいただき、地域の貴重な歴史資産のひとつとして、保存・活用していくことが文化財行政の重要な課題となります。本書が、その役割の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に際し、ご理解とご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

八尾市教育委員会
教育長 中原敏博

例　　言

1. 本書は、平成21年度の国庫補助事業（市内発掘調査）として、大阪府八尾市で実施した発掘調査の報告書である。
2. これらの発掘調査は、八尾市教育委員会が平成21年度に（財）八尾市文化財調査研究会に委託して実施したものである。
3. 本書には、市内の埋蔵文化財包蔵地での発掘調査及び遺構確認調査と埋蔵文化財包蔵地外での試掘調査のうち、平成21年度に実施した平成21年4月から12月までの調査と、平成20年度に実施した平成21年1月から3月までの調査について掲載している（掲載順序は遺跡名の五十音順となっている）。そのうち、特に成果のあった調査については、その概要を掲載している。
また、平成20年度及び平成21年度の国庫補助事業（市内発掘調査）で（財）大阪市文化財協会に委託して実施した保存処理事業の成果についても掲載している。
4. 調査した場所及び位置については、それぞれの年度の巻頭に一括して位置図を掲載している。
5. 本書の作成にあたっては、八尾市教育委員会　藤井淳弘・吉田珠己、（財）八尾市文化財調査研究会　岡田清一・坪田真一・成海佳子・西村公助・樋口　薰・木村健明・米井友美、（財）大阪市文化財協会　伊藤幸司、奈良文化財研究所年代学研究室　客員研究員　藤井裕之、東北学院大学文化財保存修復研究センター　手代木美穂、大阪大学大学院　金澤雄太が執筆を行い、執筆分担は目次末に記している。
6. 本書に掲載している出土品及び図面類は、埋蔵文化財の活用に資するため、八尾市立埋蔵文化財調査センター（八尾市幸町四丁目58-2）において保管している。
7. 本書の編集は、八尾市教育委員会生涯学習部文化財課　藤井が行った。

本文目次

はじめに

例言

I 平成20年度市内遺跡発掘調査報告（平成21年1月～3月）

1. 平成20年度1～3月発掘調査一覧表	1・2
2. 平成20年度1～3月発掘調査位置図	3～7
3. 市内遺跡発掘調査報告	8
1) 跡部遺跡(2008-347)の調査	(西村) 8
2) 恵智遺跡(2008-476)の調査	(西村) 9
3) 蒜振遺跡(2008-460)の調査	(坪田) 10
4) 小阪合遺跡(2008-478)の調査	(木村) 11
5) 成法寺遺跡(2008-383)の調査	(坪田) 12
6) 太子堂遺跡(2008-232)の調査	(坪田) 13
7) 東郷遺跡(2008-454)の調査	(坪田) 15
8) 中田遺跡(2008-500)の調査	(西村) 16
9) 西郡廃寺(2008-420)の調査	(坪田) 17
10) 東弓削遺跡(2008-461)の調査	(坪田) 19
11) 矢作遺跡(2008-481)の調査	(西村) 21
12) 小阪合遺跡隣接地(2008-537)の調査	(坪田) 22

II 平成21年度市内遺跡発掘調査報告（平成21年4月～12月）

1. 平成21年度4～12月発掘調査一覧表	23～27
2. 平成21年度4～12月発掘調査位置図	28～38
3. 市内遺跡発掘調査報告	39
1) 跡部遺跡(2009-45)の調査	(西村) 39
2) 跡部遺跡(2009-157)の調査	(坪田) 39
3) 植松遺跡(2008-521)の調査	(坪田) 40
4) 老原遺跡(2009-160)の調査	(坪田) 41
5) 大竹西遺跡(2009-184)の調査	(成海) 43
6) 恵智遺跡(2008-230)の調査	(坪田・吉田) 47
7) 恵智遺跡(2009-220)の調査	(坪田) 59
8) 蒜振遺跡(2008-535)の調査	(坪田) 61
9) 蒜振遺跡(2009-75)の調査	(西村) 62
10) 蒜振遺跡(2009-179)の調査	(西村) 63
11) 木の本遺跡(2009-57)の調査	(西村) 64
12) 久宝寺遺跡(2009-40)の調査	(樋口) 66
13) 久宝寺遺跡(2009-302)の調査	(坪田) 66
14) 郡川遺跡(2009-318)の調査	(岡田) 68
15) 小阪合遺跡(2009-197)の調査	(坪田) 69
16) 渋川廃寺(2008-217-2)の調査	(坪田) 69
17) 東郷遺跡(2009-126)の調査	(坪田) 71
18) 東郷遺跡(2009-170)の調査	(成海) 72
19) 東郷遺跡(2009-187)の調査	(坪田) 73
20) 東郷遺跡(2009-234)の調査	(坪田) 75

21) 中田遺跡(2008-424)の調査	(西村)	76
22) 中田遺跡(2009-39)の調査	(成海)	77
23) 中田遺跡(2009-19)の調査	(坪田)	78
24) 中田遺跡(2009-99)の調査	(坪田)	79
25) 中田遺跡(2009-88)の調査	(成海)	86
26) 中田遺跡(2009-128)の調査	(坪田)	87
27) 中田遺跡(2009-208)の調査	(西村)	87
28) 中田遺跡(2009-214)の調査	(坪田)	89
29) 中田遺跡(2009-244)の調査	(岡田)	89
30) 東弓削遺跡(2009-116)の調査	(成海)	91
31) 八尾寺内町(2009-16)の調査	(西村)	92
32) 八尾寺内町(2009-18)の調査	(樋口)	93
33) 八尾寺内町(2009-188)の調査	(西村)	94
34) 八尾寺内町(2009-264)の調査	(成海)	95
35) 八尾寺内町(2009-254)の調査	(岡田)	100
36) 矢作遺跡(2009-46)の調査	(西村)	101
37) 矢作遺跡(2009-120)の調査	(西村)	108
38) 龍華寺跡(2009-130)の調査	(西村)	109
39) 埋蔵文化財包蔵地外(2009-194)の調査	(坪田)	110

III 平成20・21年度保存処理事業報告

1. 保存処理事業の概要	(藤井)	113
2. 小阪合遺跡出土遺物の保存処理	(伊藤)	114
3. 小阪合遺跡出土木製品の樹種同定	(藤井裕之)	119
4. 小阪合遺跡第41次調査出土の古墳時代前期後半遺物	(樋口)	121
5. 市内遺跡出土金属製品の保存処理	(伊藤)	129
6. 小阪合遺跡第41次調査出土の古代錢貨	(樋口)	139
7. 郡川東塚古墳出土の挂甲小札に付着した繊維品	(手代木)	144
8. 郡川東塚古墳出土の鉄製品		149～160
1) 鉄製品の出土状況	(藤井)	149
2) 鉄製品の概要	(金澤)	149
3) 郡川東塚古墳の再検討	(藤井)	155

図版目次

- 図版1 I-3-1) 跖部遺跡(2008-347)
I-3-2) 恩智遺跡(2008-476)
- 調査地(南東から) 1区北壁 2区北壁 3区北壁
調査地(北西から) 1区全景(南から)
2区全景(南から) 3区西壁(東から)
- 図版2 I-3-3) 莢振遺跡(2008-460)
- 調査地(南から) 第1面(西から) 第2面(東から)
第3面(西から) 西壁 南壁 出土遺物
- 図版3 I-3-3) 莢振遺跡(2008-460)
I-3-4) 小阪合遺跡(2008-478)
I-3-5) 成法寺遺跡(2008-383)
I-3-6) 太子堂遺跡(2008-232)
- 出土遺物
全景(南から) 南壁
調査地(北西から) 北壁
調査地(北西から) 1区第1面(北から)
1区西壁 2区第1面(南から) 2区南壁 4区南壁
出土遺物
- 図版4 I-3-6) 太子堂遺跡(2008-232)
- 調査地(西から) 調査状況(北から) 全景(南から)
S P101(南西から) 西壁
- 図版5 I-3-7) 東郷遺跡(2008-454)
- 調査地(西から) 全景(西から) 東壁
1区第1面(南から) 1区第3面(北から)
1区北壁 2区北壁 出土遺物
- 図版6 I-3-9) 西郡庵寺(2008-420)
- 調査地(西から) 1区北壁
2区南壁 3区全景(東から) 3区土器棺(東から)
3区北壁 出土遺物
- 図版7 I-3-10) 東弓削遺跡(2008-461)
- 調査地(南西から) 北壁
1区北壁 2区北壁
- 図版8 II-3-1) 跖部遺跡(2009-45)
II-3-2) 跖部遺跡(2009-157)
- 3層上面(西から) 西壁
1区機械掘削(北西から) 1区西壁
- II-3-3) 植松遺跡(2008-521)
II-3-4) 老原遺跡(2009-160)
- 1区西壁 1区21層上面(北から)
2区東壁 2区20層上面(北から) 3区東壁 出土遺物
- 図版9 II-3-4) 老原遺跡(2009-160)
II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184)
- 2区北壁 6区調査状況(南から) 6区東壁
6区第1面(南から)
7区北壁 7区第1面(南から) 9区南壁
9区第1面(北から) 9区第2面(北から) 10区北壁
10区第1面(西から) 11区第1面(西から)
- 調査地(北西から) 1区北壁 1区107層上面(東から)
2区全景(西から) 5区501層上面(東から)
6区601層上面(南から) 6北区601層上面(北から)
6北区調査状況(北から)
- 図版10 II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184)
- 出土遺物 1
- 図版11 II-3-6) 恩智遺跡(2008-230)
- 出土遺物 2
- 出土遺物 3
- 立会C区SD2(西から) 立会D区東壁 出土遺物 1
- 立会調査出土遺物 2
- 1区機械掘削(南西から) 1区調査状況(北東から)
1区西壁 2区南壁 出土遺物
- 図版12 II-3-6) 恩智遺跡(2008-230)
- 図版13 II-3-6) 恩智遺跡(2008-230)
- 図版14 II-3-6) 恩智遺跡(2008-230)
- 図版15 II-3-6) 恩智遺跡(2008-230)
- 図版16 II-3-6) 恩智遺跡(2008-230)
- 図版17 II-3-7) 恩智遺跡(2009-220)

- 図版18 II-3-8) 莢振遺跡(2008-535)
II-3-9) 莢振遺跡(2009-75)
- 図版19 II-3-10) 莢振遺跡(2009-179)
II-3-11) 木の本遺跡(2009-57)
- 図版20 II-3-11) 木の本遺跡(2009-57)
II-3-12) 久宝寺遺跡(2009-40)
- 図版21 II-3-13) 久宝寺遺跡(2009-302)
II-3-14) 郡川遺跡(2009-318)
II-3-15) 小阪合遺跡(2009-197)
II-3-16) 渋川廃寺(2009-217-2)
- 図版23 II-3-17) 東郷遺跡(2009-126)
II-3-17) 東郷遺跡(2009-126)
II-3-18) 東郷遺跡(2009-170)
- 図版24 II-3-19) 東郷遺跡(2009-187)
II-3-20) 東郷遺跡(2009-234)
II-3-21) 中田遺跡(2008-424)
II-3-22) 中田遺跡(2009-39)
- 図版26 II-3-23) 中田遺跡(2009-19)
II-3-24) 中田遺跡(2009-99)
II-3-24) 中田遺跡(2009-99)
- 図版27 II-3-24) 中田遺跡(2009-99)
II-3-24) 中田遺跡(2009-99)
- 図版28 II-3-24) 中田遺跡(2009-99)
II-3-24) 中田遺跡(2009-99)
- 図版29 II-3-24) 中田遺跡(2009-99)
- 図版30 II-3-24) 中田遺跡(2009-99)
- 図版31 II-3-25) 中田遺跡(2009-88)
II-3-26) 中田遺跡(2009-128)
II-3-27) 中田遺跡(2009-208)
II-3-28) 中田遺跡(2009-214)
- 1区西壁 1区5層上面(東から)
2区6層上面(西から) 3区6層上面(東から)
4区2層下面(西から) 5区調査状況(北西から)
北壁0~6層 3層上面(南から)
第1面(南から) 第2面(南から) 北壁 出土遺物
調査地(西から) 2区北壁 3区北壁 7区南壁
8区南壁 9区南壁 10区南壁 11区南壁
13区南壁 15区南壁
調査地(西から) 北壁
1区16層上面(西から) 2区調査状況(南東から)
2区北壁 2区11層上面(南から)
3区11層上面(南から)
4区南壁 4区10層上面(北から)
出土遺物
1区東壁 2区南壁
北壁 4層上面(西から)
2区南壁 3区南壁 出土遺物
1区5層上面(南から) 2区5層上面(南から)
3区南壁 3区5層上面(北から) 出土遺物
北壁・完掘(南から) 調査風景(北東から)
1区北壁 1区9層上面(西から)
2区9層上面(南から) 3区西壁 3区S E301北東壁
出土遺物
調査地(北から) 1区西壁
1区8層上面(西から) 2区北壁
1区4層上面(南から) 2区SK201(南から)
西壁 調査状況(南東から)
北壁 4層上面(南から)
調査地(南から) 1区4層上面(南から)
1区10層上面・北壁(南から) 1区S P112(南から)
2区西壁 2区調査状況(南から)
2区3層上面(北から) 2区3層上面(南から)
2区北3層上面(東から) 2区南3層上面(東から)
3区東壁 3区S X321(東から)
4区6層上面(東から) 5区3層上面(東から)
出土遺物 1
出土遺物 2
出土遺物 3
調査地(南東から) 東壁
西壁 5層上面(東から)
北壁 3層上面(南から)
機械掘削(北から) 北壁

- 図版32 II-3-29) 中田遺跡(2009-244)
II-3-30) 束弓削遺跡(2009-116)
- 図版33 II-3-31) 八尾寺内町(2009-16)
II-3-32) 八尾寺内町(2009-18)
- 図版34 II-3-33) 八尾寺内町(2009-188)
II-3-34) 八尾寺内町(2009-264)
- 図版35 II-3-34) 八尾寺内町(2009-264)
- 図版36 II-3-35) 八尾寺内町(2009-254)
II-3-36) 矢作遺跡(2009-46)
- 図版37 II-3-36) 矢作遺跡(2009-46)
- 図版38 II-3-36) 矢作遺跡(2009-46)
II-3-37) 矢作遺跡(2009-120)
II-3-38) 竜華寺跡(2009-130)
- 図版39 II-3-39) 埋蔵文化財包蔵地外
(2008-194)
- 西壁 5層上面(西から)
遺物出土状況(北から) 出土遺物
調査地(南から) 東壁
機械掘削(南西から) 北壁 東壁 3層上面(南から)
周辺の状況(南から) 南壁SK1(北東から) 出土遺物
調査地(南西から) 2層上面全景(南から) 出土遺物
東～南壁 1・2面全景(西から)
SK1瓦柱(南から) 3面全景(西から)
出土遺物
南壁 3層上面(南から) 出土遺物
1区機械掘削(南西から) 1区東壁
1区SE101(南西から) 2区3層上面(南から)
3区東壁 3区3層上面(南から)
3区SD301(西から)
4区東壁 出土遺物
出土遺物
機械掘削(西から) 北壁
1区3層上面(南から) 2区北壁
調査地(南西から) 1区4層上面(東から)
1区西壁 2区9層上面(東から)
2区11層上面(東から)
2区東壁 5区東壁 出土遺物

I 平成20年度市内遺跡発掘調査報告
(平成21年1月～3月)

1. 平成20年度1~3月発掘調査一覧表

遺跡名 (申請番号)	調査地	調査日	目的・対象 (調査種別)	調査方法(面積)	調査結果	担当者
跡部遺跡 (2008-347)	跡部北の町1丁目3, 6, 7, 8, 9	021年 2月4-5日	工場・墓地 (遺構確認調査)	2.5m×2.5mの調査区3ヶ所深さ2.0mまで測定(18.75m ²)	詳細はI-3-1)に記載	西村
迹島・福乃寺遺跡 (2008-475)	迹島町北2丁目16-4	021年 2月27日	分譲住宅: 从縫部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.5mの調査区3ヶ所深さ2.0mまで測定(18.75m ²)	T.P.+6.0m南側で、中段段の洪水による砂の堆積を確認した。	西村
恩智遺跡 (2008-441)	恩智北4丁目427番、433番 2	021年 2月16日	個人住宅: 基礎 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで測定(1.00m ²)	T.P.+2.8m~23.7mで中段段の水位痕が上土、以下の土壌に削上まで追跡を確認した。また、T.P.+22.3mで竪溝が多く当時の傾向を確認。	西村
恩智遺跡 (2008-476)	恩智中町4丁目247	021年 3月3-11日	分譲住宅: 从縫部分 (遺構確認調査)	基礎: 2.5m×2.5mの調査区2ヶ所深さ2.0mまで測定(6.25m ²) 竪溝: 2.0m×1.5mの調査区1ヶ所深さ1.5mまで測定(21.50m ²)	詳細はI-3-2)に記載	西村
龜井遺跡 (2008-519)	指扇町1丁目25-2, 26-4, 31-2の一部	021年 3月16日	工場: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区3ヶ所深さ3.0mまで測定(12.00m ²)	T.P.+7.4m-9.9mで土壌化層を確認したが、追跡の傾向および遺物の出土にはなかった。	西村
豊郷遺跡 (2008-460)	豊郷町6丁目64番3	021年 2月9日	個人住宅: 基礎 (個人住宅発掘調査)	2.5m×2.5mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで測定(6.25m ²)	詳細はI-3-3)に記載	坪田
都川遺跡 (2008-342)	牧野寺5丁目127番	021年 2月26日	宿泊寺: 基礎 (遺構確認調査)	2.0m×2.0m: 2.0m削除、3.0m×3.0m: 1.5m削除と2.0mまで測定(31.00m ²)	T.P.+11.7m以下で都川塔場の妙報塔や、T.P.-10.4m以下では都堤北岸段の傾き層を確認した。	坪田
小坂合造跡 (2008-478)	古山町4丁目28-19	021年 3月18日	専用住宅: 建物基礎 部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.5mの調査区1ヶ所深さ2.5mまで測定(6.25m ²)	詳細はI-3-4)に記載	本村
小坂合造跡 (2008-536)	青山町4丁目36-2, 36-3	021年 3月27日	店舗: 人孔部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区3ヶ所深さ2.0mまで測定(12.00m ²)	T.P.+7.6mの蛇十櫛の上辺は現作を受け土壌化していることから、中段以前の傾斜土と考えられる。	西村
成法寺遺跡 (2008-383)	市立4丁目60-2, 65-40の一部 25	021年 3月12日	個人住宅: 基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区3ヶ所深さ2.0mまで測定(1.00m ²)	詳細はI-3-5)に記載	坪田
太子堂遺跡 (2008-232)	南北1丁目4丁目の街並1, 89 等地	021年 1月9日	分譲住宅: 宅地部分 (遺構確認調査)	3.0m×3.0mの調査区4ヶ所を深さ3.0mまで測定(18.00m ²)	詳細はI-3-6)に記載	坪田
大正塙遺跡 (2008-477)	太田8丁目64番の一部	021年 3月12日	店舗: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ1.5mまで測定(1.00m ²)	現作上の下段T.P.+11.9m南側で、時局不明の遺物を確認した。	本村
東原遺跡 (2008-454)	光町1丁目30番3, 33番, 34番 2丁目3番	021年 2月3日	店舗併用住宅: 基礎 (遺構確認調査)	3.0m×2.0mの調査区1ヶ所を深さ2.5mまで測定(9.00m ²)	詳細はI-3-7)に記載	坪田
東原遺跡 (2008-345)	桜ヶ丘3丁目72	021年 2月26日	個人住宅: 基礎 (個人住宅発掘調査)	床敷: 砂留石、セリフレス: 2.0m×1.0m: 2.0m削除と1.5mまで測定(6.00m ²)	T.P.-6.0m南側で、中段層と考えられる耕作面を確認した。	坪田
中田遺跡 (2008-463)	別荘4丁目272番の一部	021年 2月12日	分譲住宅: 基礎 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ1.8mまで測定(4.00m ²)	盛上下からみて河原堆積と考えられる段階を検出した。	本村
中田遺跡 (2008-472)	別荘3丁目45番(-30) 等地	021年 3月2日	共同住宅: 木建・洋 水槽 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区3ヶ所深さ1.8mまで測定(12.00m ²)	T.P.-9.9m以下で中段段の小区域を検出し、T.P.+1.9-5.5mで古墳時代初期-前秦の遺物を含む層を確認した。	坪田
中田遺跡 (2008-500)	中田5丁目163番の一部 等地	021年 3月5日	分譲住宅: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ1.0mまで測定(4.00m ²)	詳細はI-3-8)に記載	西村
西郡寺遺跡 (2008-420)	光町4丁目80番1, 81番9番, 70-1, 71番, 72番, 73番 等地	021年 1月23-34日	丁場: 基礎 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区2ヶ所、2.5m×3.5mの調査区1ヶ所(深さ2.0mまで測定(18.5m ²)	詳細はI-3-9)に記載	坪田
東寺町遺跡 (2008-461)	八尾木5丁目75-76番(一部) 77番1	021年 2月5日	共同住宅: 基礎 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区2ヶ所、2.5m×3.5mの調査区1ヶ所(深さ2.0mまで測定(21.25m ²)	詳細はI-3-10)に記載	坪田
矢作遺跡 (2008-481)	高木町4丁目100番	021年 2月19日	専用住宅: 基礎 (遺構確認調査)	2.0m×2.5mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで測定(6.25m ²)	詳細はI-3-11)に記載	西村
弓削遺跡 (2008-403)	弓削町3丁目72番の一部	021年 1月22日	分譲住宅: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区3ヶ所を深さ2.5mまで測定(18.75m ²)	第1面で平安-鎌倉時代、第2面で奈良時代にそれぞれ遺物を含む層を確認したが、遺物の検出はなかった。	西村

退跡名 (申請番号)	調査地	調査日	目的: 対象 (調査種別)	調査方法(面積)	調査結果	担当者
小坂合遺跡耕作 地 (2008-537)	旭ヶ丘 2丁目58-1, 58- 2, 58-3	H21年 3月27日	分譲住宅: 入孔部分 試掘調査(埋蔵文化財 包蔵地外)	2.0m×2.0mの調査区4ヶ所深さ2.0m まで調査(16.00m ²)	詳細はI-3-12)に記載	坪田
東側遺跡耕作地 (2008-430)	旭ヶ丘 1丁目62番17から62番 21まで	H21年 2月2日	分譲住宅: 入孔部分 試掘調査(埋蔵文化財 包蔵地外)	2.0m×2.0mの調査区3ヶ所深さ2.0m まで調査(12.00m ²)	T.P.-7.0mの3層土壌で、中段の耕 作層を検出。また、4層上面は土壤化 を確認したが、遺構の検出および遺 物の出土はなかった。	内村
埋蔵文化財包蔵 地 (2008-527)	若原6丁目91番1の一部、92 番・93番1, 93番2	H21年 3月25日	工場: 基礎部分 試掘調査(埋蔵文化財 包蔵地外)	2.5m×2.5mの調査区4ヶ所深さ2.3m まで調査(25.00m ²)	T.P.-8.9~9.8mの黏土層は中世～近 世の耕作土と考えられる。T.P.-8.6 mのシルト層は洪水層。T.P.-8.2m で強烈な粘土層である。	西村

2. 平成20年度1～3月発掘調査位置図(※トーン入り調査名は報告を掲載)



第1図



第2図



第3図



第4図



第5図

3. 市内遺跡発掘調査報告

1) 跡部遺跡(2008-347)の調査

(1) 調査地：跡部北の町1丁目5, 6, 7, 8, 9(第1図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 3箇所(北から1～3区：面積約 18.75m^2)について、現地表(T.P.+9.2m前後)下 2.5m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北東側道路上：T.P.+9.0m)である。

【地層】0層は盛土。以下現地表下 2.5m 前後までの 1.6m 間において6層の層序を確認した。1層は旧耕作土(T.P.+8.3m前後)。2層(T.P.+8.2m前後)は近世頃の作土と思われる。3層(T.P.+7.9m前後)は粘土のブロックが混入する整地土で、奈良～平安時代の土師器、須恵器、瓦器、瓦の破片が出土した。上面は搅拌を受けた中世の作土(第1面)で、1・2区では溝を4条(S D101～103・201)検出した。4層(T.P.+7.65m前後)の上面は土壤化している(第2面)。3区では溝を1条(S D301)検出した。5層(T.P.+7.1～7.3m)は土壤化している(第3面)。6層(T.P.+6.9～7.1m)は河川堆積である。

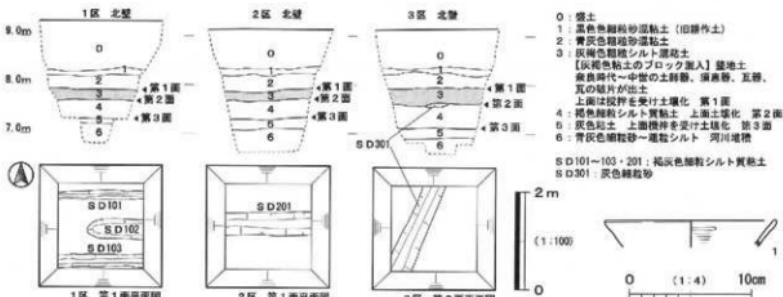
【検出構造・出土遺物】1区：S D101～103は東西方向に直線に伸びる。幅0.2～0.4m、深さ0.15～0.35mを測る。埋土は褐灰色細粒シルト質粘土。2区：S D201は東西方向に直線に伸びる。幅0.5m、深さ0.15mを測る。埋土は褐灰色細粒シルト質粘土である。中世の土師器、瓦器の破片が出土した。3区：S D301は南北～北東方向に直線に伸びる。幅0.45m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色細粒砂。

【出土遺物】1～3区の3層からは奈良～平安時代の土師器、須恵器、瓦器、瓦の破片が出土した。出土量は西側の2区が多い。また2区の2層からは近世の瓦、S D201からは中世の土師器、瓦器の破片が出土した。この内図化したものはS D201出土の鎌倉～室町時代の瓦器(1)である。1の口縁部はやや内湾して伸び、端部は丸く終わる。口縁部の内面は横向方向のヘラミガキ、外面はナデを施す。

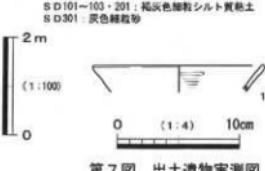
(3)まとめ：今回の調査地の北20mでは、(財)八尾市文化財調査研究会が平成11～12年に久宝寺遺跡第29次発掘調査(以下29次と記載)を実施しており(原田他2003)、弥生時代中期～近世に至る遺構、遺物の検出があった。このうち29次Ⅲ層【奈良～平安時代の遺物を含む】は3層に、29次Ⅳ層【奈良時代の遺物を含む】は4層に、29次V層【古墳時代後期の遺物を含む】は5層にそれぞれ相当する。したがって、今回の調査地付近に上記した各時期の遺構が広がっていると考えられる。

【参考文献】

- 原田昌則他2003『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書 一大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う一』(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会



第6図 断面図



第7図 出土遺物実測図

2) 恩智遺跡(2008-476)の調査

(1) 調査地: 恩智町4丁目247(第1図参照)

(2) 調査概要: 平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 2箇所、 $1.5 \times 1.5\text{m}$ - 2箇所計4箇所(南から1~4区)について、現地表(T.P.+26.7m前後)下1.5~2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西側道路上: T.P.+25.9m)である。

【地層】 0層は盛土。以下現地表下2.0m前後までの1.8m間において7層の層序を確認した。1層(T.P.+26.5m)は旧耕作土。2層は中世~近世の地層である。3層(T.P.+25.9m)はシルト質粘土で攪拌を受け土壤化した中世の耕作土と思われる。土師器の破片が出土した。4層(T.P.+25.6m)は上面が土壤化しており、1区で土坑(SK101)、2区で土坑(SK201)、3区で土坑(SK301)を検出した。層内からは土師器や瓦器の破片が出土している。5層(T.P.+25.4m)は粗流砂混粘土で、弥生土器の破片が出土した。6層は粘土で、湿地性堆積と考えられる。7層(T.P.+25.1m)は中疊混粗粒砂の上石流堆積である。

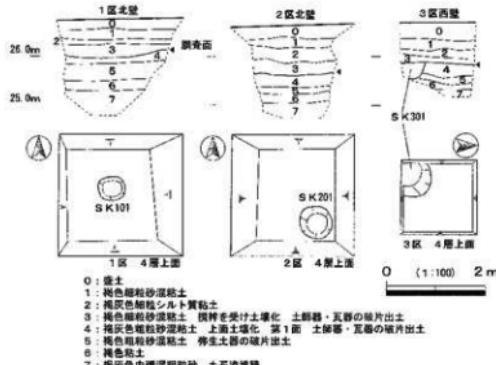
【検出遺構】 1区SK101 - 平面形状は円形で、径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は粗粒砂混粘土で、平安時代末期の瓦器碗の破片が出土。2区SK201 - 平面形状は円形で、径0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は粗粒砂混粘土で、平安時代末期の土師器の破片が出土。3区SK301 - 南西隅で検出した。平面形状は円形と思われ、径0.6m以上を測る。断面形状は逆台形と思われ、深さ0.3mを測る。埋土は細粒砂混粘土で、平安時代末期の瓦器碗の破片が出土。

【出土遺物】 1区SK101・2区SK201・3区SK301からは平安時代末期の土師器・瓦器の破片、1・2・4区の3層からは中世の土師器・瓦器の破片が出土した。このうち図化したものは1区SK101の瓦器碗(1)、2区SK201の土師器小皿(2)・瓦器碗(3)である。1の口縁部は内湾して伸び、端部は丸く終わる。口縁部の内面はヘラミガキ、外面はヘラミガキのちヨコナデを施す。2の底部は平らである。口縁部は内湾して伸び、端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデ、底部の内外面はナデを施す。3の口縁部は内湾して伸び、端部は丸く終わる。口縁部の内面はヘラミガキ、外面はヘラミガキのちヨコナデを施す。

(3)まとめ: 今回の調査地では、T.P.+25.6m付近で平安時代末期の遺構を検出したことから、周辺に同時期の集落が広がっていると推測される。

【参考文献】

- 原田昌則2007「IV 恩智遺跡第18次調査(072005-18)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告98』(財)八尾市文化財調査研究会



第8図 平断面図

第9図 出土遺物実測図

3) 葦振遺跡(2008-460)の調査

(1) 調査地：葦振町6丁目64番3(第2図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 2.5×2.5 m、面積約 $6.25m^2$ 1ヶ所について、現地表(T.P.+6.4m前後)下 2.0 m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西部に位置する市道中央:T.P.+6.5m)である。

【地層】現地表下 0.2 mは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)である。以下現地表下 2.0 m前後までの 1.8 m間において10層の基本層序を確認した。1層はブロック状の整地層で炭を多く含む。2~4層もブロック状の整地層で、2・3層上面(T.P.+6.0m)が第1面、4層上面(T.P.+5.9m)が第2面である。5・6層は暗色を呈する土壤化層で、5層上面(T.P.+5.6~5.7m)が第3面である。7層は搅拌された土壤化層で、上面(T.P.+5.3m)が第4面である。8層以下(T.P.+5.2m以下)はシルト～粗粒砂の河川堆積で、8層はやや土壤化する。

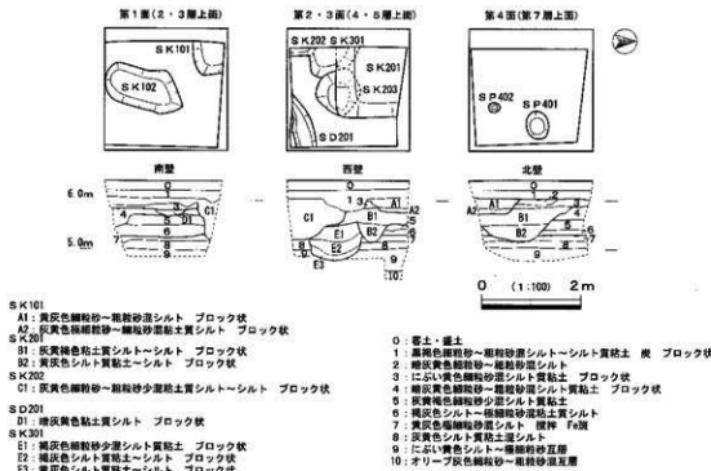
【検出構造・出土遺物】

第1面：土坑2基(S K101・102)を検出した。ブロック状の埋土で、時期は近世～近代に比定される。

第2面：土坑3基(S K201～203)、溝1条(S D201)を検出した。S K201は一边 1.5 m以上・深さ 0.7 mを測る。近世陶磁器が出土。S K202は北西角で一部を検出したもので、北壁で深さ約 0.8 mを測る。S K203は直径約 0.9 m・深さ約 85 cmを測る。埋土はブロック状の3層から成る。形状からみて井戸であろう。瓦片が出土している。時期は中世～近世であろう。S D201はやや弧状を成す溝で、幅約 40 cm・深さ約 12 cmを測る。少量の瓦片の他、多量の瓦質不明製品・焼壁の破片(かまど?)で充填されている。

第3面：土坑1基(S K301)を検出した。直徑約 1.1 mの円形を呈すると思われ、深さ約 0.8 mで、埋土はブロック状の3層から成る。形状からみて井戸であろう。土器部(皿等)・須恵器片が出土しており、時期は平安時代後期に比定される。

第4面：ピット2個(S P401・402)を検出した。S P401は 58×44 cmの橢円形を呈し、深さ 40 cmを測る。埋土は4層から成り柱痕が見られる。S P402は 23×20 cm・深さ 24 cmを測り埋土は単層である。S P401から古墳時代前期(布留式期)の土器片が出土したが、時期は明確でない。



第10図 平断面図

【出土遺物】SK201-1は陶器壺。瀬戸系の錢甕と考えられ、外面底部付近に、円の中に縦線が1本に入るスタンプ記号を施す。2は肥前系磁器碗で、外面に草花文が描かれる。2点は17世紀後半～18世紀に比定できる。**SK301-3・4**は土師器皿で、3は口縁付近が2段にナデが施されたもの、4は口縁端部が屈曲して丸く成形された「て」の字状口縁である。2点とも10世紀後半～11世紀に比定できる。

(3)まとめ：調査では戦国時代末期に恵光寺を中心に成立したとされる萱振衆豪集落の時期の遺構は認められなかつた。第3面で平安時代の遺構が検出されたが、北部で確認されている平安時代～中世に埋没する自然河川の南に位置する集落域と捉えられる。第4面のピットについては古墳時代前期(布留式期)の可能性がある。

【参考文献】

- ・中世土器研究会編 1992『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2002『江戸時代の瀬戸窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録

4) 小阪合遺跡(2008-478)の調査

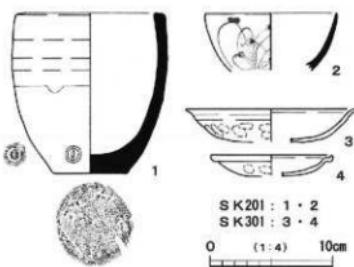
(1)調査地：青山町4丁目28-19(第2図参照)

(2)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25m²1ヶ所について、現地表(T.P.+9.2m前後)下2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西に位置する府道八尾道明寺線高美中前交差点中央:T.P.+8.6m)である。

【地層】現地表下1.2mまでは盛土(0層)である。以下1.3m間で8層の基本層序を確認した。1層(T.P.+8.0m前後)は旧耕作土である。2層は緑灰色粘土層で、耕作土である。この層を除去した段階で遺構を検出した。3層は攪拌の頗著な粘土層である。上面で検出した遺構より黒色土器の細片が出土したことから、平安時代後半以降以前の層と考えられる。4層も攪拌の頗著な粘土層である。3・4層とも耕作土と考えられる。5層は暗灰黄色粘質シルト層、6層は黄灰色粘質シルト層である。7・8層は河川堆積層である。7層は灰黄色粘質シルト層、8層は灰色微粒砂～粘土層で、湧水層である。

【検出遺構】3層上面で溝1条(SD1)と土坑1基(SK1)を検出した。SD1は南北方向に延びる溝である。幅30cm、深さ6cmを測る。SK1は調査区の南西隅で検出した。全体の形状は不明で、深さは5cmを測る。

【出土遺物】SD1と2層内からは土師器・須恵器・瓦器の細片が出土した。この内図化したもののはSD1から出土した瓦器碗(1)である。1は平安時代後期の瓦器碗である。高台部は「ハ」の字にひらく。体部の内面は磨耗しており不明瞭であるが、ヘラミガキを施すと思われる。外面はヨコナデを施す。高台部の内外面はヨコナデを施す。



第11図 出土遺物実測図



第12図 平断面図



第13図 出土遺物実測図

(3)まとめ：今回の調査では、現地表下1.5mで遺構面を検出した。遺構は溝と土坑である。出土遺物から平安時代中期以降の耕作関連の遺構と考えられる。4層も遺構は検出しなかったが、攪拌された層相であるため、耕作土と考えられる。調査地では連続して耕作がなされていたと考えられる。

【参考文献】

- ・高萩千秋1988『小阪合遺跡一八尾都市計画事業南小阪合上地区兩蔵理事業に伴う発掘調査』(昭和59年度 第4次調査報告書) (財)八尾市文化財調査研究会報告15』(財)八尾市文化財調査研究会

5) 成法寺遺跡(2008-383)の調査

(1)調査地：南本町2丁目68-2.68-4の一部(第2図参照)

(2)調査概要：平面規模約2.0×2.0m-1箇所；面積約4.0m²について、現地表(T.P.+9.3m)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北部に位置する交差点中央:T.P.+8.8m)である。

【地層】0層は盛土、以下現地表下2.0m前後までの0.8m間において7層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+8.0~8.2m)。2層も近世頃の作土であろう。3層(T.P.+7.7~7.9m)も攪拌が著しく作土と思われ、下層から巻き上げられた土器を少量含む。4層(T.P.+7.65~7.8m)、5層(T.P.+7.5~7.65m)は鉄分が多く含む層相で、4層は古墳時代初頭の遺物包含層である。6層以下(T.P.+7.5m以下)は水成層である。

【検出遺構・出土遺物】3・4層から古墳時代初頭(庄内式期)の土器が出土している。4層出土の1は甕で、庄内式新相に比定される。

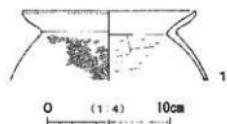
(3)まとめ：調査では古墳時代初頭(庄内式期)の遺物包含層を確認した。遺構は検出されなかったが、遺物量から見て周辺に遺構が存在するものと考えられ、北西部で確認されている集落域が当地まで広がっている可能性がある。

【参考文献】

- ・高萩千秋1991「第5章 第4次調査(SII88-4)発掘調査報告『成法寺遺跡<第1次~第4次・第6次調査報告書>』(財)八尾市文化財調査研究会報告33』(財)八尾市文化財調査研究会



第14図 断面図

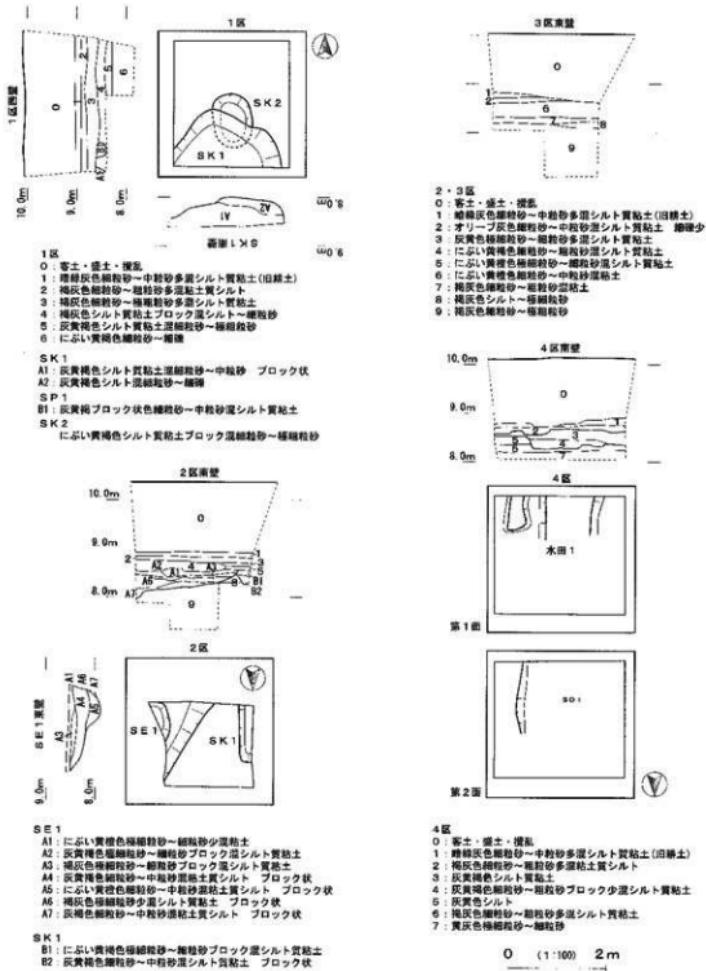


第15図 出土遺物実測図

6) 太子堂遺跡(2008-232)の調査

(1) 調査地：南太子堂4丁目89番地4、89番地5(第3図参照)

(2) 調査概要：平面規模約3.0×3.0m-4箇所(北西から1～4区：面積約36m²)について、現地表(T.P.+10.0～10.4m)下2.0～3.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地西部交差点中央:T.P.-9.9m)である。



第16図 平断面図

【地層】

1・4区-0層は客土・盛土。以下現地表下2.0m前後までの1.0m間において7層の基本層序を確認した。1層は旧耕土(T.P.+8.7~9.0m)。2層(T.P.+8.6~8.9m)も近世頃の作土と思われ1区が高い。1区3層(T.P.+8.6~8.8m)は攪拌された包含層で、平安時代までの土器細片を多く含んでいる。4・5層(T.P.+8.3~8.6m)はブロック状で土壤化の著しい層相である。6層(T.P.+8.3m以下)は河川堆積である。4区3・4層(T.P.+8.3~8.6m)は整地層と思われる均質な粘土層で、SO1埋土となっている。5層(T.P.+8.5m)は水成層の可能性があり、上部は土壤化する。6層(T.P.+8.2~8.3m)はブロック状で、3区7層に相当する。当層も整地層の可能性がある。7層(T.P.+8.2m以下)は河川堆積である。

2・3区-0~2層は1・4区と共通。2区3~5層(T.P.+8.5~8.7m)は攪拌され、中世頃の作土と考えられる。3区では見られず、整地層と思われる均質な粘土層の6層(T.P.+8.3~8.6m)となっている。6層は4区3・4層に相当する。3区7層(T.P.+8.2~8.3m)はブロック状で、当層も整地層の可能性がある。8層(T.P.+8.1~8.5m)は土壤化の著しい層相で、上面で飛鳥~奈良時代の遺構を検出した。9層(T.P.+8.2~8.3m以下)は河川堆積である。

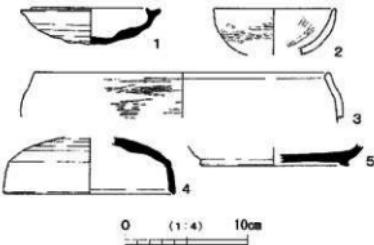
【検出遺構・出土遺物】1区7層上面(T.P.+8.6m)で土坑2基(SK1・2)、2区9層上面(T.P.+8.5m)で井戸1基(SE1)、土坑1基(SK3)、4区では2層下面(T.P.+8.6m)で水田1筆(水田1)、5層上面(T.P.+8.5m)で落込み1基(SO1)を検出した。

SK1-方形に近い掘方が想定される。埋土はブロック状の2層を確認した。規模は一辺2.0m以上、深さ60cmを測る。奈良時代頃の土師器片が出土。SK2-規模は南北1.1m・東西0.8m・深さ約45cmを測る。埋土はブロック状の1層を確認した。SK1に切られている。SE1-北東~南西方向の直線的な肩を検出したもので、方形の掘方が想定される。二段掘り状を成し、底部を円形に掘りくぼめている。埋土はブロック状の7層を確認した。規模は一辺1.9m以上、深さ65cmを測る。飛鳥~奈良時代の土師器・須恵器が出土。SK3-規模は南北1.2m以上、東西0.3m以上、深さ約30cmを測る。埋土はブロック状の2層を確認した。奈良時代の土師器・須恵器が出土。SE1に切られている。水田1-南北方向に平行する鋤溝を検出した。時期は近世頃と考えられる。奈良時代頃の土師器・須恵器片が出土。SO1-南北方向の直線的な肩から西に落ち込む。深さ約25cmを測る。埋土は3・4層である。

【出土遺物】2区SE1-1は須恵器杯身で、約1/2が残存する。底部は未調整で、直線状のヘラ記号を施す。2は土師器杯で、外面横方向のヘラミガキ、内面は斜放射暗文を施す。3は土師器鉢である。1・2は飛鳥時代前期、3は奈良時代に比定される。2区10層-4は須恵器杯蓋で、6C前半のMT15型式に比定される。3区7層-5は奈良時代に比定される須恵器杯身である。

(3)まとめ

調査では西の1・2区で奈良~平安時代頃の遺構を検出した。周辺では奈良時代の遺構は確認されておらず貴重な成果といえる。当調査地の西に奈良~平安時代の遺構が広がるものと考えられる。北部~西部の調査では鎌倉時代の遺構が確認されているが、当地は当該期には生産城となっていた可能性がある。下部の河川堆積は古平野川と考えられており、古墳時代中期頃の埋没が考えられる。



第17図 出土遺物実測図

7) 東郷遺跡(2008-454)の調査

(1) 調査地：光町1丁目32番2, 33番, 34番(第3図参照)

(2) 調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0m² 1ヶ所(3ヶ所予定の内の1区)について、現地表(T.P.+7.7m前後)下2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、調査地の南西約120mに位置するベンチャーマーク: T.P.+7.755mである。

【地層】現地表下1.0m前後は、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)である。以下現地表下2.5m前後までの1.0m間ににおいて11層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+6.6~6.7m)である。2~5層は搅拌の著しい作土である(T.P.+6.2~6.6m)。概ね2層は近世、3~5層は古代~中世に比定でき、2層下面では南北・東西方向に展開する耕作溝が見られた。6層(T.P.+6.0~6.2m)は暗色を呈する土壤化層で、土器を少量含む。7層(T.P.+6.0~6.1m)は搅拌され、8層の土壤化部分と捉えられ、上面が第1面である。8層以下(T.P.+6.0m以下)はシルト質粘土～粗粒砂の互層状を呈する水成層である。

【検出遺構・出土遺物】7層上面の北東角部でピット1個(S P101)を検出した。径45cm以上・深さ約58cmを測り、埋土はブロック状の2層からなる。土師器片が出土。

3層-13世紀頃までの土師器片、瓦器碗。

4・5層-平安時代頃までの土師器・須恵器・黒色土器片。

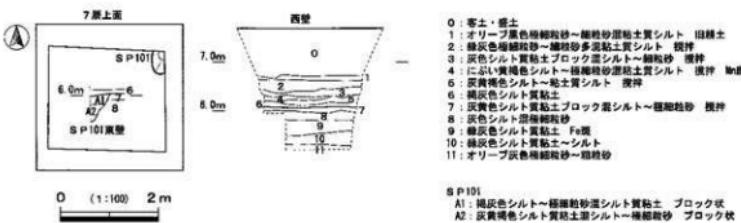
6層-古墳時代初頭の土器片。

(3)まとめ

調査では、古代～中世の水田耕作土と、古墳時代初頭の遺構を検出した。南で実施した第36次調査においても古墳時代初頭前半の溝・落込み等が検出されており、集落域が北に広がることが確認された。

【参考文献】

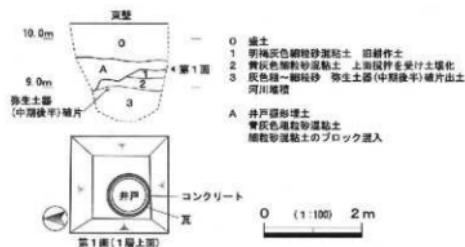
- ・荒川和哉2007「II 東郷遺跡(第36次調査)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告97』(財)八尾市文化財調査研究会



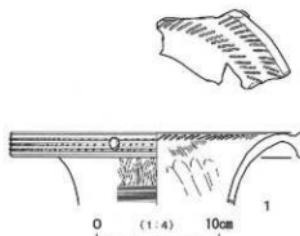
第18図 平断面図

8) 中田遺跡(2008-500)の調査

- (1) 調査地：中田5丁目163番の一部・164番の一部(第4図参照)
- (2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m} = 1\text{箇所}$ (面積約 4.0m^2)について、現地表(T.P.+10.3m前後)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北東側道路上：T.P.+10.3m)である。
- 【地層】0層は盛土、以下現地表下 2.0m 前後までの 1.3m 間において3層の層序を確認した。1層は旧耕作土(T.P.+9.5m前後)で、上面から切り込む井戸を検出した。2層(T.P.+9.2m)は近世頃の作土と思われる。3層(T.P.+9.0m)は粗～細粒砂の河川堆積で、弥生土器が出土した。



第19図 平断面図



第20図 出土遺物実測図

【検出遺構】井戸：掘形は調査区外に至るため形状および規模は不明である。掘形の埋土は青灰色粗粒砂混粘土である。井戸枠は円形で、径 0.8m を測る。枠は内側にコンクリート、外側に瓦を使用していた。径 0.8m を測り、深さは 1.3m 以上を測る。枠内の埋土は黒色粗粒砂混粘土で、針金、ビール瓶、サイダーボトル、井戸枠に使用した瓦の破片など昭和年代の遺物が出土した。

【出土遺物】3層の最上部からは弥生時代中期後半の壺(1)の破片が出土した。1の口縁部は外反する。端部は上下に拡張し面を形成する。口縁部の内面には櫛排列点文を2列施す。拡張した面には四線文を施した後キザミ目を施し、円形浮文を貼り付ける。頸部の内面は左上がりのハケナデのちナデ、外面は縱方向のヘラミガキのち櫛描直線文を施す。河内IV-1様式壺に比定できる。

(3)まとめ：今回の調査地では、昭和年代の井戸を確認した。井戸は旧耕作土の上面から切り込んでいることから、農業用の井戸と考えられる。また、3層の砂層最上部(河川堆積)からは弥生時代中期後半に比定できる壺の破片が出土した。この土器は、表面の磨耗が少ないとから、近隣に同時期の集落が存在していた可能性が高いと推測できる。なお、この河川堆積と同時期に比定できる砂層を南東約 150m 地点での調査で確認している(西村1997)ことから、河川の方向は南西から北東に流れていると考えられる。

【参考文献】

- ・西村公助1997「I 中田遺跡第15次調査(NT92-15)」『中田遺跡』(川村八尾市文化財調査研究会報告56) (川村八尾市文化財調査研究会)

9) 西都廃寺(2008-420)の調査

(1)調査地：泉町3丁目60番1, 2, 69番, 70番, 71番, 72番, 81番(第4図参照)

(2)調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 2箇所(北から1・2区)、 $2.0 \times 3.0\text{m}$ - 1箇所(3区)；面積約 18.5m^2 について、現地表(T.P.+5.0m)下 2.5m 前後までを調査した。なお2区についてはコンクリート製の地下構造物が存在したため調査不能であった。調査で使用した標高は、北側道路で実施した公共下水道工事の際設置された仮BM : T.P. +5.013mである。

【地層】0層は客土・盛土。以下現地表(T.P.+5.3~5.5m)下 2.5m 前後までの 1.9m において1区で5層、3区で4層の基本層序を確認した。

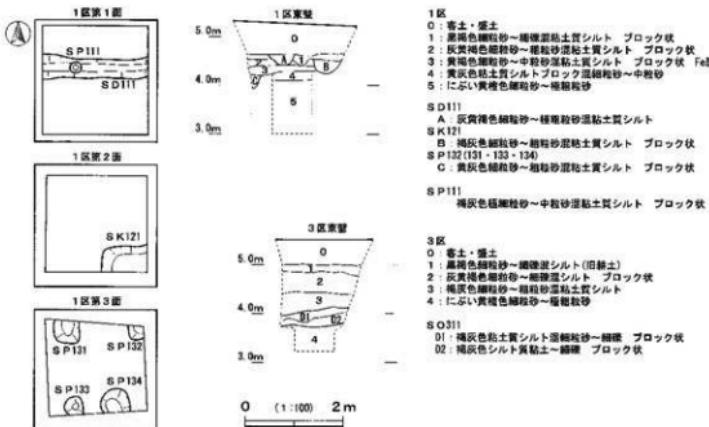
1区：1層(T.P.+4.4~4.6m)は中世頃の整地層と考えられる。2・3層もブロック状で、整地層の可能性がある。4層は5層の土壤化部分で、5層(T.P.+4.1m以下)は河川堆積である。

3区：1層は旧耕土。2層(T.P.+4.4~4.9m)は近世頃の整地層であろう。3層も北東に向かって深くなっていることから下位のS O311を埋めた整地層と考えられる。D層は調査区全域を占めるS O311埋土である。4層(T.P.+3.9m以下)は河川堆積である。

【検出遺構・出土遺物】1区：1層上面(T.P.+4.6m) - 溝1条(S D111)、ピット1個(S P111)。いずれも時期は中世～近世であろう。1層から巻き上げられた土器が出土している。2層上面(T.P.+4.5m) - 土坑1基(S K121)。方形を呈すると考えられ、深さ約40cmを測る。奈良時代頃の土師器が出土している。4層上面(T.P.+4.2m) - ピット4個(S P131~134)。直径40~60cm程度、深さ30~40cm程度を測る。埋土はブロック状の単層で、遺物は出土していない。

3区：調査区全域を占める落込み(S O311)を検出した。構築面はT.P.+4.4mの3層上面あるいは4.2mのD層上面である。底部は南西部がやや高くなっている。ブロック状の埋土で、12世紀頃の瓦器片や土師器・瓦片の他、径35~40cmの花崗岩が出土した。

1区1層：中世頃の整地層で、奈良時代を中心に、古墳時代後期～鎌倉時代の土器片を多量に含んでいる。



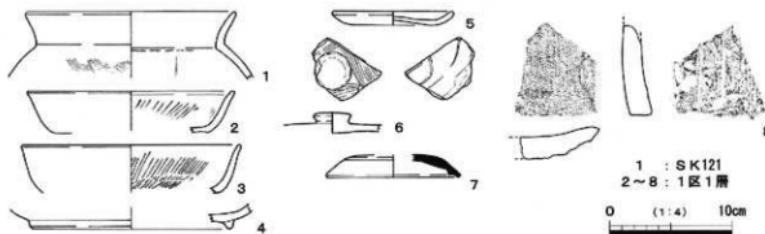
第21図 1・3区平断面図

【出土遺物】1区SK121-1は土師器壺。口縁部は斜め上方に開き、調整はナデとハケが施される。1区1層-2~4は土師器杯。2・3は平底、口縁部斜め上方へ開いて立ち上がり端部は丸く内面に傾く。調整は内面放射状ミガキ、外面はナデとミガキが施される。4は底面に高台がつくやや大形の杯。5は土師器小皿で、口縁部は内湾して立ち上がり、底面中央が上がる。6は土師器杯蓋で、扁平な円形のツマミをもち、調整はナデ、ミガキが施される。7は須恵器杯蓋で、内面かえりをもつ。8は平瓦で、凸面繩目タタキ、凹面布目が認められる。いずれも飛鳥~奈良時代初めに比定される。(米井)

(3)まとめ:調査では1区で中世頃の整地層の他、それ以前の土坑、ピット群、3区で中世頃の落込みを検出した。1区の土坑SK121やピット群の時期は、1層出土土器からみて奈良時代頃が中心と考えられる。3区SO311は12世紀頃に埋められており、出土した石は建物廃絶により廃棄された礎石の可能性がある。

【参考文献】

- ・古代の土器研究会編 1992『古代の土器 I 都城の土器集成』



第22図 出土遺物実測図

10) 東弓削遺跡(2008-461)の調査

- (1) 調査地：八尾木5丁目75・76番(一部)、77番1(第4図参照)
- (2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 2箇所、 $2.5 \times 3.5\text{m}$ - 1箇所(西から1~3区：面積約 21.25m^2)について、現地表(T.P.+11.1~11.2m)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西部に位置する駐車場中央:T.P.+11.2m)である。

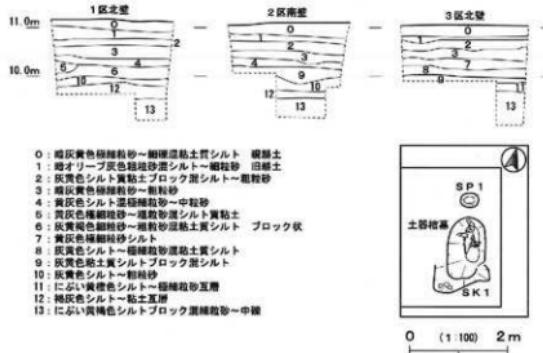
[地層] 0層は現在の耕作土である。以下現地表下 2.0m 前後までの 1.7m 間において13層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+10.7~10.9m)、2層も近世の耕作土であろう。3~8層はFe班を多く含み搅拌の著しい作土である(T.P.+10.0~10.6m)。中世頃の土師器・瓦器の細片が極少量出土しており、時期は中世~近世に比定できる。9層(T.P.+9.8~10.0m)は以下の河川堆積上部の土壤化部分で、2・3区で見られた。10層以下は河川堆積である。

【検出遺構・出土遺物】

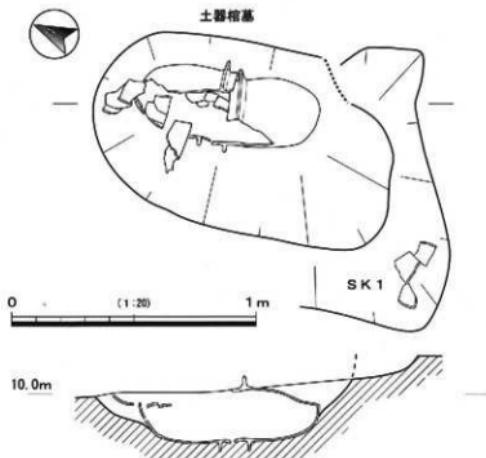
3区8層中に土坑1基(SK1)、9層上面で土器棺墓1基(土器棺墓)、ピット1個(SP1)を検出した。

SK1 - 南部で一部を検出した土坑で、東西約1.1m・深さ約20cmを測る。埋土は灰色極細粒砂混粘土質シルトである。

土器棺墓 - 主体部は土器羽釜2点を横位で合わせ口にした構造で、南北を主軸とする。わずかに口径の大きい北棺(1)に南棺(2)を挿入していた。掘方は南北約1.25m・東西0.8mの梢円形を呈し、深さ約30cmを測る。南部はSK1に削平されている。埋土は灰色シルトブロック混極細粒砂である。主体部は土塙のためやや崩壊している他、北西部が一部削平され破片が遊離している。おそらく8層作土に伴う耕作の際に削平されたのであろう。また1の部材片が約1m南に離れてSK1内から出土している。



第23図 平断面図



第24図 土器棺墓平断面図

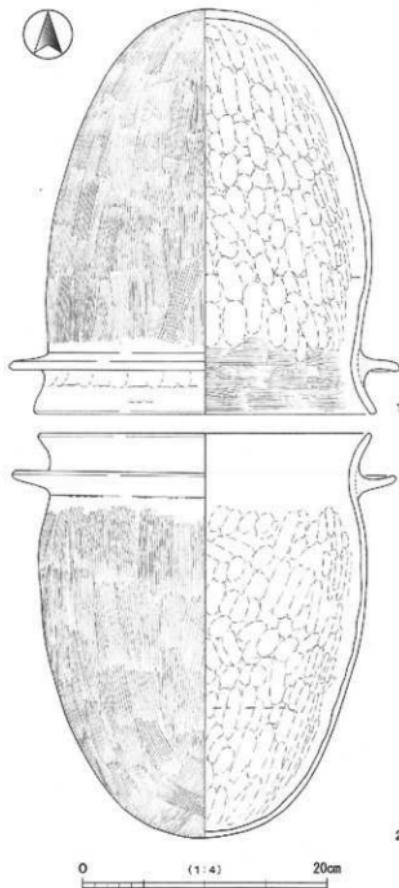
るが、耕作に伴い削平された際に移動したのであろう。1・2の器高・口径・鉢径は、1が33.1・28.0・31.9cm、2が33.1・27.3・31.4cmを測り、ほぼ同一規格といえる。調整は口縁～鉢部ヨコナデ、体部外面縦ハケ、内面ナデ・ユビオサエで、1は口縁部内面横ハケである。1の体部外面上位に2箇所の黒斑が見られるものの、共に煤の付着は認められず未使用品と考えられる。内部に土・骨等の遺存はなかった。共に生駒西麓産で、時期は奈良時代後期に比定されよう。羽釜合せ口土器棺墓は八尾市域では佐堂遺跡に類例がある。

S P 1-28×36cmの楕円形を呈し、深さ6cmを測る。埋土はSK 1と同じであり、8層上面遺構の可能性がある。

(3)まとめ：調査では東部の3区で奈良時代の土器棺墓を検出した。周辺での発掘調査は少ないと想い、当該期の遺構は確認されておらず、貴重な成果といえる。1基のみの確認であり、当地一帯が墓域となっていたのかは周辺の調査により明らかにされるであろう。中世以降は調査地全域が生産域となっている。

【参考文献】

- ・三宅正浩1985『佐堂(その1) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人大阪文化財センター



第25図 出土遺物実測図

11) 矢作遺跡(2008-481)の調査

(1) 調査地：高美町4丁目100番(第5図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5m$ - 1箇所(面積約 $6.25m^2$)について、現地表(T.P.+9.5m前後)下 $2.0m$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西側道路上：T.P.+9.5m)である。

【地層】0層は盛土。以下現地表下 $2.0m$ 前後までの $1.1m$ 間において7層の層序を確認した。1層は旧耕作土(T.P.+8.6m前後)。2層(T.P.+8.55m前後)は近世頃の作土と思われる。層内からは近世頃の遺物が出土した。3層(T.P.+8.5m前後)の上面は攪拌を受け土壤化した中世の耕作土(第1面)で、溝を2条(S D101・102)検出した。層内からは平安～鎌倉時代頃の遺物が出土した。4層(T.P.+8.35m前後)は粗粒砂混粘土で上面は土壤化している(第2面)が、遺構の検出はなかった。層内からは平安時代末期頃の遺物が出土した。5層(T.P.+8.2m)は細粒砂混粘土で上面は土壤化しており(第3面)、南東部で土坑1基(S K301)を検出した。層内からは古墳～平安時代頃の遺物が出土した。6層(T.P.+7.9m)は粘土で湿地帯を示す泥状の堆積であった。7層(T.P.+7.7m)は細粒砂の河川堆積である。

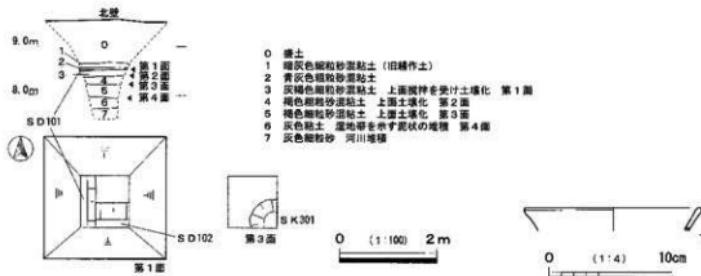
【検出遺構】溝2条-S D101は南北方向、102は東西方向に直線に伸びる。幅 $0.5m$ 以上、深さ $0.1m$ 以上を測る。埋土は青灰色細粒砂混粘土である。耕作に伴う溝である。土坑1基-S K301は南東隅で検出した。径 $0.6m$ 以上、深さ $0.2m$ 以上を測る。埋土は褐色粗粒砂混粘土で、褐色粘土のブロックが混入する。この遺構は南東側が深くなる形状を呈していることから、井戸の可能性が考えられる。

【出土遺物】2層からは近世、3層からは平安～鎌倉時代、4層からは平安時代末期頃、5層からは古墳～平安時代頃の土器が出土した。また、S D101からは中世、S K301からは平安時代末期の土器が出土した。この内圓化したものはS K301から出土した瓦器碗(1)である。1の口縁部は、外反ぎみに上外方へ伸びる。内外面は磨耗しており調整は不明瞭であるが、両面ともヘラミガキを施すと思われる。

(3) まとめ：今回の調査地では、第1面で中世の溝を、第3面で平安時代末期の土坑を検出した。これらの遺構は、今回の調査地の北側約 $100m$ 地点で(財)八尾市文化財調査研究会が昭和61年度に実施した矢作遺跡第1次発掘調査(原田1989)の平安時代後期～鎌倉時代末期の遺構に相当する。

【参考文献】

- ・原田昌則1989「I 矢作遺跡(第1次調査)発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告22』(財)八尾市文化財調査研究会



第26図 平断面図

第27図 出土遺物実測図

12) 小阪合遺跡隣接地(2008-537)の調査

(1) 調査地：旭ヶ丘2丁目58-1, 58-2, 58-3(第5図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 4箇所(北から1～4区)、面積約 16m^2 について、現地表(T.P.+8.3～8.5m)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南東部に位置する交差点中央:T.P.+8.1m)である。

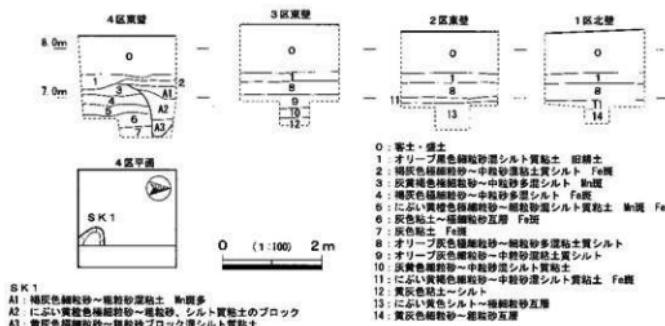
【地層】0層は客土・盛土。以下現地表下2.0m前後までの1.2m間ににおいて14層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+7.3～7.5m)。以下は4区と1～3区で状況が異なる。

4区 - 2層(T.P.+7.3m)は攪拌された作土である。3～5層(T.P.+6.7～7.2m)はMn斑・Fe斑を多く含み土壤化した層相で、3・4層は攪拌が認められ作土の可能性がある。6層以下(T.P.+6.7m以下)は粘土を基調とする水成層である。

1～3区 - 8・9層(T.P.+6.8～7.3m)は攪拌されグライ化した作土である。1区8層から中世頃の土器羽釜の小片1点が出土している。3区10層(T.P.+6.6～6.8m)もやや攪拌され作土の可能性がある。2・3区11層(T.P.+6.8～7.0m)は下位の水成層の土壤化部分と捉えられる。12層以下は4区6・7層に対応する水成層で、1区は砂層(T.P.+6.8m以下)、2区はシルト～極細粒砂(T.P.+6.9m以下)、3区は粘土～シルト(T.P.+6.6m以下)となっている。

【検出構造・出土遺物】4区2層下面(T.P.+7.25m)で土坑1基(SK1)を検出したが、一部分の検出で詳細は不明である。深さ約1.0mを測り、埋土はブロック状の3層からなる。遺物は須恵器小片1点が出土したのみで時期は不明であるが、埋土や規模等の状況からみて中世～近世の井戸掘方である可能性が高い。

(3)まとめ：調査では南端の4区で中世～近世頃の井戸と思われる土坑を検出した。また以下にも土壤化層が認められ、時期は不明であるが層相からみて5層上面が生活面の可能性がある。また下位の水成層の状況から、1区を含み、2～4区西側を北流する河川の存在が想定される。



第28図 平断面図

II 平成21年度市内遺跡発掘調査報告
(平成21年4月～12月)

1. 平成21年度4~12月の発掘調査一覧表

遺跡名 (申請番号)	調査地	調査日	目的・対象 (調査種別)	調査方法 (面積)	調査結果	担当者
跡形遺跡 (2009-45)	春日町2丁目16番及び18番1~6号	2021年 6月2日	分譲住宅・人孔部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0m×2ヶ所深さ2.0mまで開削 (8.0m ²)	詳細はⅢ-3-1に記載	坪田公助
跡形遺跡 (2009-101)	春日町4丁目6番22	2021年 7月22日	分譲住宅・基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0m×1ヶ所深さ2.0mまで調査 (4.0m ²)	調査では既存地の痕跡が見られ、遺物・遺物全く見られなかった。	坪田真一
跡形遺跡 (2009-157)	東太子1丁目13番14号	2021年 7月27日	個人住宅・植物広場 (個人住宅充氮調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで開削(4.0m ²)	詳細はⅢ-3-2に記載	坪田真一
跡形遺跡 (2009-341)	東太子1丁目31-1	2021年 12月4日	共同住宅・建物基礎 部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	中世~近世の住土、及び、古墳時代後半~平安時代の遺物包含層を確認した。	坪田真一
埋蔵遺跡 (2006-521)	木原町2丁目20番1,21番4 の合1譜	2021年 5月12日	共同住宅・基礎 (内構確認調査)	3.0m×3.0m×3ヶ所深さ3.0mまで開削 (27.0m ²)	詳細はⅢ-3-3に記載	坪田真一
埋蔵遺跡 (2006-542)	木原町2丁目1番67	2021年 6月5日	個人住宅・基礎 (個人住宅充氮調査)	2.5m×2.5m×1ヶ所深さ2.0mまで調査 (6.25m ²)	調査地は古河川河川敷の根柢に位置し、4階の柱地盤地盤形状と層の柱地盤地盤へ半幅砂利と平均幅4mに起因する河川堆積物とみられる。	成海佳子
埋蔵遺跡 (2009-90)	木原町2丁目29番1,3,4- 30番,31番4,37~40番	2021年 10月20日~ 21日	店舗・基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区4ヶ所、2.5m× 2.5mの調査区1ヶ所深さ1.5~2.5mま で開削(22.25m ²)	既存地下約1.0m以下は古河川の河川に 沿うとする堆積物(近傍)であることを 確認した。	坪田真一
老廃遺跡 (2009-160)	東原町2丁目4番	2021年 7月30日~ 31日	造営・施設基礎 部分 (遺構確認調査)	3.0m×3.0mの調査区5ヶ所深さ1.5m まで調査(18.0m ²)	詳細はⅢ-3-4に記載	坪田真一
太田遺跡 (2009-71)	太田新町3丁目96番・97番	2021年 9月27日	長屋住宅・基礎 部分 (遺構確認調査)	3.0m×3.0m×1ヶ所、2.0m×2.0m×2ヶ 所深さ2.0~2.5mまで開削(17m ²)	地盤下約1.5m以下で、河川内壁上を 確認した。この河川は東方に突出して いる六角へ中央まで流れていた 河川と推察される。	成海佳子
大竹遺跡 (2009-180)	神立6丁目9番	2021年 9月4日	個人住宅・基礎 部分 (個人住宅充氮調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所、1.0m× 2.0mの調査区1ヶ所深さ1.3~2.0mま で開削(2.0m ²)	河川地盤は古河川河床の堆積地盤に位置 し、内側に盛りて半幅に盛り高くな っていることが判明した。	坪田真一
大竹遺跡 (2006-470)	大竹8丁目29番	2021年 12月16日	専用住宅・浄化槽等 部分 (遺構確認調査)	2.5m×1.8mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで開削(4.5m ²)	近傍明の範囲により見て取られた 落込みを検出した。性格について 不明であるが、構築等が考えられ よう。	坪田真一
大竹西遺跡 (2009-184)	赤坂寺1丁目159~161-1,163 ~171,173,176番地	2021年 8月31日~ 9月4~7日	店舗・基礎部分 (遺構確認調査)	3.0m×3.0mの調査区1ヶ所深さ2.5~ 3.5mまで開削(9.0m ²)	詳細はⅢ-3-5に記載	成海佳子
恩智遺跡 (2006-532)	恩智小町1丁目29	2021年 4月2日	個人住宅・基礎部分 (個人住宅充氮調査)	0.6m×0.6mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで開削(16.0m ²)	既存水下1.0m以下の河川堆積を確認 した。既存時代の构造物には通して いないと思われる。	坪田真一
恩智遺跡 (2009-141)	恩智南町2丁目22の一部	2021年 7月5日	個人住宅・基礎 (個人住宅充氮調査)	2.5m×2.0m×2ヶ所深さ1.5m まで開削(12.5m ²)	既存したが故に、既存地盤深さ40m で確認していることから、既存地盤 構成の基盤に埋没した河川である可 能性が高い。	坪田公助
恩智遺跡 (2006-230)	恩智小町2丁目25,26, 27,28-1	2021年 8月4~ 5日	分譲住宅・人孔部分 (遺構確認調査)	3.0m×2.0mの人孔部分6ヶ所、1.0m× 0.6mの皆路部分1ヶ所を深さ0.5~ 1.0mまで開削(30.0m ²)	詳細はⅢ-3-6に記載	坪田真一
恩智遺跡 (2009-220)	恩智町2丁目24番	2021年 9月14日	個人住宅・基礎・淨 化槽 (個人住宅充氮調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで 開削(8.0m ²)	詳細はⅢ-3-7に記載	坪田真一
恩智遺跡 (2009-308)	恩智町1丁目215の一部	2021年 11月16日	遺構確認調査	1.5m×2.0m×2ヶ所(8.0m ²)	既存地盤、雨水堆積を確認して いた状況であり、集落構造にはなってい ないといった考えられる。	坪田真一
恩智遺跡 (2009-219)	恩智北町1丁目364番・365 番・366番・367番	2021年 12月7日	共同住宅・建物基礎 部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区2ヶ所深さ2.0m まで調査(12.0m ²)	既存地盤下2.0~2.5mの2.0m幅 は、個人泊水系がもたらした河川 堆積解であることがわかった。	岡田清一
芦原遺跡 (2006-346)	芦原町1丁目95	2021年 4月6日	共同住宅・基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×3.0mの調査区2ヶ所深さ2.0m まで開削(6.0m ²)	既耕上・既上の底で河川砂礫を 確認した。層序から、おおむね近世 頃のหล跡であろうと考えられる。	成海佳子
荒堀遺跡 (2006-525)	坂本町3丁目40-16他	2021年 4月6~7日	分譲住宅・基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区2ヶ所深さ2.5m× 2.5mの調査区3ヶ所深さ2.0mまで開 削(20.75m ²)	既耕上・既上の底で人が人为的に埋 められた底土で、以下は、地形性 特徴の地層であった。	坪田真一
荒堀遺跡 (2009-502)	北木町3丁目18-6の一譜	2021年 4月13日	分譲住宅・基礎 部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	既耕上・既上の底で人が人为的に埋 められた底土で、以下は、地形性 特徴の地層であった。	成海佳子

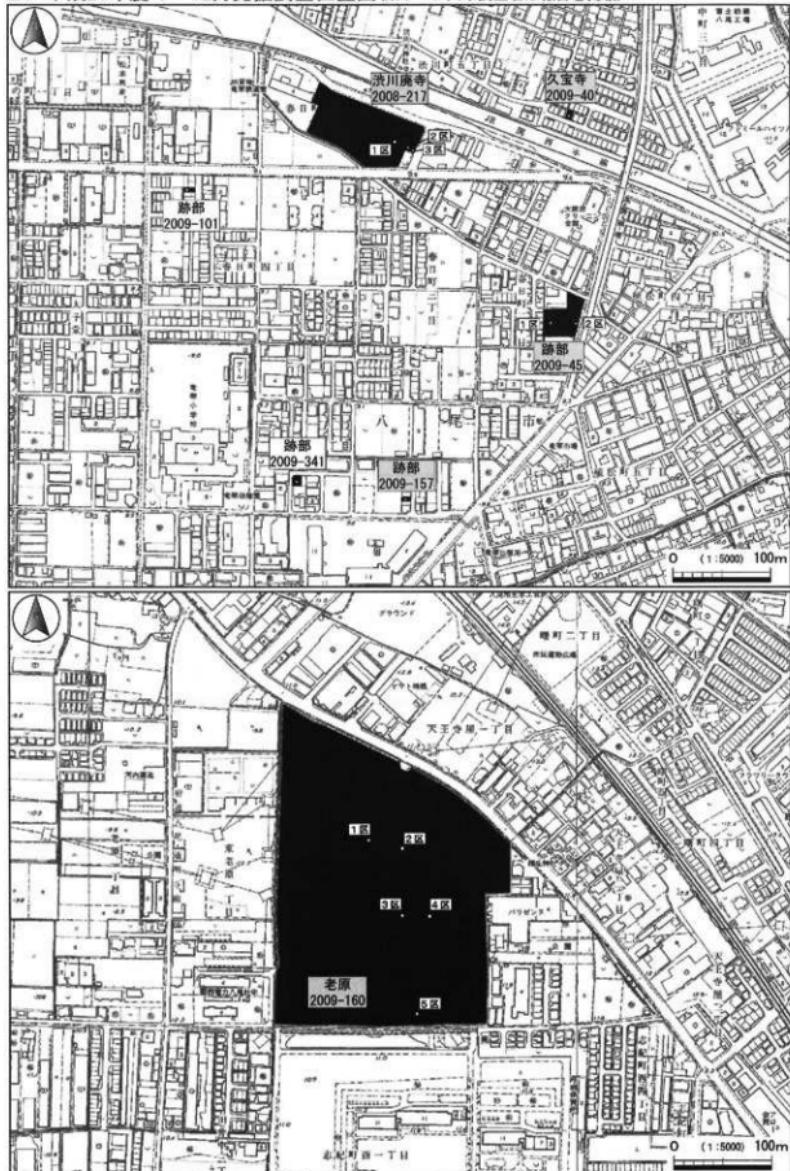
遺跡名 (申請番号)	調査地	調査日	目的:対象 (調査種別)	調査方法 (面積)	調査結果	担当者
葦原遺跡 (2006-75)	麻ヶ丘 1丁目63番3	H21年 9月3日	個人住宅: 基礎部分 (個人住宅発掘調査)	2.5m×2.3mの調査区1ヶ所深さ1.0m まで調査(6.25m ²)	詳細はⅢ-3-9)に記載	西村公助
葦原遺跡 (2006-179)	宮前町 5丁目85番の一部 86番	H21年 9月7日	個人住宅: 建物基礎部分 (個人住宅発掘調査)	2.5m×2.3mの調査区1ヶ所深さ1.0m まで調査(6.25m ²)	詳細はⅢ-3-10)に記載	西村公助
木の本遺跡 (2009-67)	南木の本3丁目1-8	H21年 5月11日 ~14日	分譲住宅: 人札・防 火大檻部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.3m1ヶ所 深さ3.0mまで調査(9.75m ²)	詳細はⅢ-3-11)に記載	西村公助
久宝寺遺跡 (2009-2)	久宝寺2丁目40,41番	H21年 4月28日	分譲住宅: 基礎 (遺構確認調査)	2.5m×2.3m3ヶ所深さ2.0mまで調査 (8.75m ²)	波状堆積、固地形成が見られ、古 墳時代の生糸作業場へ古墳時代初期 の氣泡土は当地には及んでいない と考えられる。	坪田真一
久宝寺遺跡 (2009-40)	熱川町 5丁目10-54	H21年 5月15日	専用住宅: 基礎部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	詳細はⅢ-3-12)に記載	坪田 真
久宝寺遺跡 (2009-230)	北龜井町2丁目18-2	H21年 9月16日	工場: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.5mの調査区3ヶ所深さ2.0m まで調査(15.75m ²)		西村公助
久宝寺遺跡 (2009-279)	熱川町 6丁目29番1	H21年 10月29日	共同住宅: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.5mの調査区2ヶ所深さ2.0m まで調査(12.5m ²)	今後の調査では、中世の移耕土を察 出したことから、小集落の形成に 及ぶ生糸作業場が広がっていたと 想定される。	坪田真一
久宝寺遺跡 (2009-902)	熱川町 6丁目4-1 ~11	H21年 11月2日	共同住宅: 基礎・化 粧・着脱板部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区4ヶ所一深さ 2.5m後まで、2.0m×2.0mの調査区 1ヶ所一深さ1.5m、箇所2.0mまで調 査(29.0 m ²)	今後の調査では、中世の移耕土を察 出したことから、小集落の形成に 及ぶ生糸作業場が広がっていたと 想定される。	坪田真一
久宝寺遺跡 (2009-276)	北久宝寺1丁目109	H21年 11月26日	店舗: 萩宿場・高 麗・着脱板部分 (遺構確認調査)	2.0×3.0m×1.0m - 1ヶ所、2.5×2.5m ×2階所、深さ2.0~2.6m前後まで調 査(21.5m ²)	3区で中世へ近世の製作土を確認し た。当地P.T. P. 6.0m前後までに川 堆積が存在する事が考えられる。	坪田真一
葛原遺跡 (2009-4)	萩原寺2丁目29番の一部	H21年 4月9日	個人住宅: 建物基礎 部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0m1ヶ所、2.0m×3.0m1ヶ 所深さ1.0~2.0mまで調査(10.0m ²)	東の調査区ではP.T. +10.0mで近世 の製作土が上位地層で確認したが、更 換の検出および遺物の出土はなかった。	西村公助
郡原遺跡 (2009-464)	郡原4丁目12番の一部 8番	H21年 4月21日	分譲住宅: 洋化粧 槽・施設部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所3.5m×12m の調査区1ヶ所深さ2.0mまで調査 (46.0 m ²)	南面下段の旧地盤を確認し、 T.P.+0~41mの4箇所、近隣で推測 されている古墳時代や中世以前の上層 地盤の気泡土がある可能性がある。	成瀬伸子
郡原遺跡 (2009-469)	郡谷4丁目36-9、36-9	H21年 5月15日	分譲住宅: 洋化粧 槽・施設部分 (遺構確認調査)	1.0m×2.0mの調査区2ヶ所を深さ 2.4mまで調査(4.0m ²)	南面で近世の窓の下に瓦が確認 され、近世戸戸戸内に遺物・遺物 は認められなかった。	坪田真一
郡原遺跡 (2009-534)	区内2丁目3番の一部	H21年 6月3日	分譲住宅: 基礎・附 着物部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	T.P.+10.8m以降で厚さ0.3m以上を 有する砂の層を確認したところから、 近世以前の利川が存在していた可 能性が高い。	西村公助
郡原遺跡 (2009-168)	区内3丁目104番、105番	H21年 10月9日	個人住宅: 洋化粧 槽・施設部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所、3.0m× 3.0mの調査区1ヶ所深さ2.0~3.0m まで深さ(13.0m)	1区では近世時代、2区では近世の 駆け付け御殿片の層をそれ程の少な く出し、近世においては他の地区 とともに構造できなかった。	岡田清一
郡原遺跡 (2009-318)	郡原3丁目39番の一部、40番 の一部	H21年 12月9日	個人住宅: 建物基礎 部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×1.5mの調査区1ヶ所、2.0m× 3.0mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで 調査(9.0m ²)	調査では中世へ近世と被考される 製作土を検出。当地は中世以 降、生糸作業になっていたことが確 認された。	岡田清一
小坂合遺跡 (2009-76)	小坂合町1丁目36-4の一部	H21年 7月13日	個人住宅: 基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ1.0m まで調査(4.0m ²)	中世へ近世と被考される 製作土を検出。当地は中世以 降、生糸作業になっていたことが確 認された。	坪田真一
小坂合遺跡 (2009-197)	山木町南8丁目169番の一部	H21年 9月25日	個人住宅: 建物基礎部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	3~4層は土壌化・擾乱が見られる 様子から中世へ平成時代にかけての 製作土である可能性が高い。	坪田真一
小坂合遺跡 (2009-282)	吉古山町 5丁目116	H21年 10月29日 ~11月20日	分譲住宅: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.5mの調査区2ヶ所一深さ 2.0m後まで調査(12.5m ²)	西側の縦長い時代の水田が当地まで 広がっていることが判明し、中世以 降現代まで生糸作業として上地利用 されていたことが想定される。	岡田清一
小坂合遺跡 (2009-288)	南小坂合町1丁目30番・40番	H21年 11月24日	分譲住宅: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.5mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(5.0m ²)	中世へ近世と被考される 製作土を検出。当地は中世以 降、生糸作業になっていたことが確 認された。	坪田真一
小坂合遺跡 (2009-538)	南小坂合町1丁目30番・40番	H21年 12月2日	個人住宅: 建物基礎部分 (個人住宅発掘調査)	2.5m×2.5mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(6.25m ²)	平成時代の遺構は自然河川に より削除されている可能性が高い。 河川堆積層下の5~7.8mから遺 物が出土し、周辺の調査結果から見 れば、5層以下に古代末~中世の遺 跡のある可能性が高い。	坪田真一
佐佐遺跡 (2009-243)	久宝寺1丁目45-1	H21年 10月6日	分譲住宅: 基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×3.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(6.0m ²)	成瀬伸子	
热川遺跡 (2008-217)	永田町1丁目11番1(-2)	H21年 5月25日	店舗: 時計櫛・入札 部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.5m1ヶ所、2.0m×3.0m2ヶ 所を深さ1.0~2.1mまで調査(14.25m ²)	坪田真一	

遺跡名 (申請番号)	調査地	調査日	目的・対象 (調査種別)	調査方法 (面積)	調査結果	担当者
成法寺遺跡 (2009-5)	南木町1丁目14番11	平21年 4月7日	個人住宅：基礎部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.5mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで調査(6.25m ²)	T.2.4~T.7mで、中央部の奥・小穴を検出した。これらの遺構は上層が堆積を受けていることから、耕作に伴う遺構である可能性がある。	西村公助
成法寺遺跡 (2009-155)	明光町1丁目31番3, 4	平21年 9月25日	診療所：基礎部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.5mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで調査(6.25m ²)	中段以前加工(?)中に比べてより耕作を受けていることから、耕作に伴う遺構である可能性がある。	西村公助
成法寺遺跡 (2009-323)	南木町1丁目28番1の一部、 29番1, 30番、31番の一部及 び23番	平21年 11月30日	店舗：基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0m~2ヶ所、深さ2.0mまで 調査(8.0m ²)	7層は古墳時代後期の水作土塁と考 えられる。また8~9層の上層の土塁は、 東北側では、主として古墳時代初期の 土塁構造に似た可能性がある。	坪田真一
太子堂遺跡 (2009-287)	南太子堂3丁目69-7	平21年 10月26日	個人住宅：基礎 (個人住宅宅地調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m 限界まで調査(4.0m ²)	2~4層は高地性で示す堆積層は、 古平野川に起源るものであろう。	岡田清一
太子堂遺跡 (2009-365)	南太子堂1丁目22~8	平21年 12月17日	個人住宅：建物基礎 部分 (個人住宅宅地調査)	2.5m×1.5mの調査区1ヶ所を深さ 2.0mまで調査(3.75m ²)	調査では新しい作土塁を検出し、時層 は不明であるが可能性がある生垣域と して利用されていたことを確認し た。	坪田真一
高安吉備群 (2009-154)	駿河川8丁目109番、110番	平21年 9月7日	個人住宅：基礎部分 (個人住宅宅地調査)	3.0m×1.5mの調査区1ヶ所、1.5m× 1.5mの調査区2ヶ所深さ0.7~1.5mまで 調査(9.0m ²)	調査地は駿河山西部の斜傾地上に位 置し、西側に盛り下して平坦に整地さ れていることが判明した。	坪田真一
高安吉備群 (2009-151)	栗谷4丁目157番1の一部	平21年 10月14日	分譲住宅：基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.7.5m 2ヶ所深さ1.5~2.0mま で調査(30.0m ²)	本調査では、遺構・遺物は検出され なかった。	岡田清一
高安吉備群 (2009-320)	駿河6丁目106番1、107番1, 107番3	平21年 10月24日	個人住宅：建物基礎 部分 (個人住宅宅地調査)	3.0m×3.0mの調査区1ヶ所~深さ2.0m、 1.2m×3.0mの調査区1ヶ所~ 深さ1.6mまで調査(12.6m ²)	谷筋地形の発達過程で堆積したと捉 えられる水路網が続くことを確認し た。当地は近世まで耕作地域はな っていないようである。	坪田真一
竹割遺跡 (2009-34)	竹割2丁目17	平21年 5月28日	個人住宅：基礎 (個人住宅宅地調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	T.P.+0.9~1.5mで傾斜した丘陵地へと は、東に接する調査地で確認して いる古墳時代後期~平安時代の埋埴 地に相当する。	西村公助
竹割遺跡 (2009-48)	竹割東1丁目31番	平21年 6月1日	個人住宅：基礎 (個人住宅宅地調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	調査地付近は古必賀町に向かって北 東下がる地形を有するものと考え られ、平安時代には古平野川の影響 は受けなかったことが判明した。	成海佳子
東郷遺跡 (2009-119)	北木町2丁目20-6, 41-2	平21年 7月18日	店舗付住宅：基礎 (遺構確認調査)	3.0m×3.0m 1ヶ所深さ2.5mまで調査 (9.0m ²)	現地敷地下0.0m付近の古的地形とこ ろで、遼寧時代中期に堆積した 駿河川の堆積物を検出した。	成海佳子
東郷遺跡 (2009-126)	桜ヶ丘3丁目112-1~5	平21年 7月23日	宅地造成・洋水井 (遺構確認調査)	2.0m×2.0m 3ヶ所深さ2.0mまで調 査(12.0m ²)	詳細はII-3-17)に記載	坪田真一
東郷遺跡 (2009-170)	桜ヶ丘3丁目112番地の一部	平21年 8月27日	個人住宅：建物基礎 部分 (個人住宅宅地調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	詳細はII-3-18)に記載	成海佳子
東郷遺跡 (2009-187)	桜ヶ丘1丁目56	平21年 9月31日、 9月1日	共同住宅：基礎部分 (遺構確認調査)	3.0m×3.0m~1ヶ所、3.0×2.5m~ 2ヶ所を深さ3.0mまで調査(24.0m ²)	詳細はII-3-19)に記載	坪田真一
東郷遺跡 (2009-234)	桜ヶ丘1丁目93番	平21年 9月18日	店舗：建物基礎部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.5mの調査区2ヶ所を深さ1.8m まで調査(12.25m ²)	詳細はII-3-20)に記載	坪田真一
東郷遺跡 (2009-367)	北木町2丁目209~210	平21年 12月18日	共同住宅：建物基礎 部分 (遺構確認調査)	3.0m×2.0mの調査区2ヶ所~深さ2.5m、 1.5m×1.5mの調査区1ヶ所~ 深さ1.5mまで調査(20.25m ²)	遺構と統く作土塁が検出され、当地 は北部開拓地と同様、古墳時代前期 以降生垣域であったことを確認した。	坪田真一
中田遺跡 (2009-424)	刑部3丁目1番の一部	平21年 4月2日	分譲住宅：人札・苔 路部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区2ヶ所を深さ1.8m まで調査(8.0m ²)	詳細はII-3-21)に記載	西村公助
中田遺跡 (2009-450)	八尾木北2丁目84番の一部	平21年 4月8日	専用住宅：基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	T.P.+0.4m以下で野川堆積層を確認 し、これ以降は、高地性堆積層や、 低地性堆積層を利用した水作土塁 が形成されることを明らかにした。	橋口 也
中田遺跡 (2009-39)	刑部4丁目220-1	平21年 4月23日	分譲住宅：基礎 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(8.0m ²)	詳細はII-3-22)に記載	成海佳子
中田遺跡 (2009-19)	八尾木北2丁目37番3	平21年 5月13日	分譲住宅：基礎部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.5mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(6.25m ²)	詳細はII-3-23)に記載	坪田真一
中田遺跡 (2009-54)	八尾木北6丁目87番	平21年 5月25日	専用住宅：基礎部分 (個人住宅宅地調査)	1.5m×2.0mの調査区1ヶ所を深さ 2.0mまで調査(3.0m ²)	西川堆積層である4~5層からは、 古墳時代初期を上層とする土層が川 上しておらず、近傍に当該時期の遺構 が存在する可能性が高い。	成海佳子
中田遺跡 (2009-99)	中田3丁目47番2の一部、47 番1	平21年 6月18日	老人ホーム：基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区3ヶ所深さ2.0m まで調査(18.75m ²)	詳細はII-3-24)に記載	坪田真一

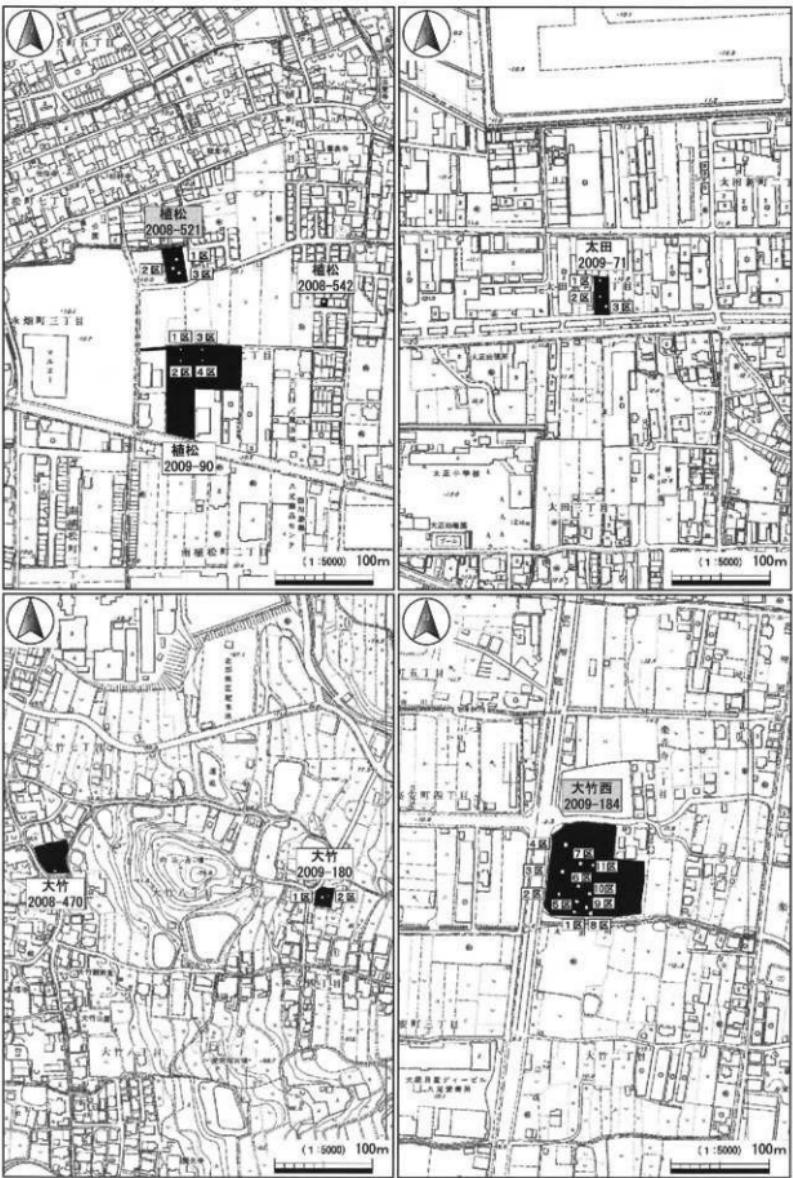
遺跡名 (申請番号)	調査地	調査日	目的:対象 (調査種別)	調査方法 (面積)	調査結果	担当者
中田遺跡 (2009-82)	周辺1丁目58番1	021年 6月19日	個人住宅:基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで調査(4.0m ²)	詳細はE-3-25)に記載	成田佳子
中田遺跡 (2009-99)	中田3丁目47番2の一部、47番1	021年 7月9日	老人ホーム:水面貯 留池 エレベーター ピット部分 (遺構確認調査)	2.0m×1.0mの調査区1ヶ所、2.0m× 3.0mの調査区1ヶ所(0.8~1.1m ²) まで調査(9.0m ²) (4~5m ²)	詳細はE-3-24)に記載	坪田真一
中田遺跡 (2009-126)	周辺1丁目56	021年 7月17日	個人住宅:建物基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	詳細はE-3-26)に記載	坪田真一
中田遺跡 (2009-177)	周辺2丁目233	021年 8月10日	個人住宅:作物基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	③層上面は堤岸を受け土壌化してい ることから、中世以前の耕作を行 っていた可能性を考えられる。	西村公助
中田遺跡 (2009-213)	八尾木北1丁目10番	021年 9月8日	工場:基礎部分 (遺構確認調査)	2.5m×2.0mの調査区2ヶ所深さ1.5~ 2.0mまで調査(12.0m ²)	中世以降と考えられる更東方向の白 川河川(NR1)と耕作土を側面し た。	坪田真一
中田遺跡 (2009-206)	中田5丁目26番	021年 9月9日	個人住宅:建物基礎 部分 (個人住宅発掘調査)	3.0m×3.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(9.0m ²)	詳細はE-3-27)に記載	西村公助
中田遺跡 (2009-214)	周辺4丁目83の一部	021年 9月19日	分譲住宅:基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×3.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(6.0m ²)	詳細はE-3-28)に記載	坪田真一
中田遺跡 (2009-244)	周辺2丁目36番の一部	021年 10月2日	個人住宅:建物基礎 部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(6.0m ²)	詳細はE-3-29)に記載	岡田清一
中田遺跡 (2009-260)	八尾木北3丁目22番	021年 10月23日	分譲住宅:基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	確認した河川は、種子内に含まれ る古物の年代範囲からも墳丘時代初期 頃にかけて既成したものと考えら れる。	岡田清一
東弓削遺跡 (2009-127)	東弓削2丁目67	021年 6月30日	個人住宅:基礎・淨 化槽部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ1.5× 3.0mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで調 査(6.0m ²)	③層の粗・綿密部分に複数河川の可能 性が考えられる。特に3層時は遺物 の出土がなかったため不明である。	西村公助
東弓削遺跡 (2009-118)	東弓削3丁目47番1	021年 7月24日	個人住宅:基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	詳細はE-3-30)に記載	成田佳子
東弓削遺跡 (2009-148)	都留1丁目74番	021年 7月29日	分譲住宅:基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(6.0m ²)	④層の調査では、玉串川の旧河道に むとて考えられる堆积層を出した。 成田佳子	成田佳子
東弓削遺跡 (2009-166)	東弓削2丁目18番の一部	021年 8月20日	分譲住宅:浄化槽部 分 (遺構確認調査)	1.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ1.5m まで調査(4.0m ²)	現地調査下3m付近の比較的浅いとこ ろで、河川堆积層を出した。古大 和町に超えてるものと考えられ、羽 柴時代は、盆地のことと思われる。	成田佳子
東弓削遺跡 (2009-265)	八尾木1丁目10番9・10番 14	021年 10月28日	個人住宅:基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m前後まで 調査(6.0m ²)	調査では、当地が中世以降耕作地 であった状況を確認した。	坪田真一
東弓削遺跡 (2009-352)	八尾木2丁目83番	021年 12月10日	その他住宅:建物基 礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区2ヶ所深さ1.5m まで調査(16.0m ²)	現地調査下1m前後で、中世頃の遺構 を検出した。	岡田清一
美濃遺跡 (2009-286)	美濃町3丁目74番3、74番4	021年 11月19日	分譲住宅:人丸 部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区2ヶ所深さ2.0m まで調査(8.0m ²)	底土が厚く、中世→近世の移行と以 下の粘土層を確認するに至った。	坪田真一
吉瀬遺跡 (2009-212)	木町6丁目25	021年 9月8日	分譲住宅:基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	河川を侵食し、中の古跡街の礫片 が出土していることから、中世木立 付近に埋没していたと推測される。	西村公助
八尾寺内町 (2009-16)	木町2丁目109の一部	021年 4月16日	寺町作所:建物基礎 部分 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで 調査(4.0m ²)	詳細はE-3-31)に記載	西村公助
八尾寺内町 (2009-18)	木町5丁目53番3	021年 4月29日	分譲住宅:基礎部分 (遺構確認調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	詳細はE-3-32)に記載	坪田真一
八尾寺内町 (2009-30)	木町3丁目124番1	021年 4月27日	個人住宅:基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	7.8~16.7mで定位に比定できる遺構 を検出した。八尾寺内町の河川段、 河床まで耕作していた水路の可能性 が考えられる。	西村公助
八尾寺内町 (2009-188)	木町2丁目33番3	021年 5月28日	個人住宅:建物基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0mまで 調査(4.0m ²)	詳細はE-3-33)に記載	西村公助
八尾寺内町 (2009-264)	木町3丁目91番の一部	021年 10月21日	個人住宅:基礎 (個人住宅発掘調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m前後まで 調査(6.0m ²)	詳細はE-3-34)に記載	成田佳子

道路名 (申請番号)	調査地	調査日	目的・対象 (調査種別)	調査方法 (面積)	調査結果	担当者
八尾寺内町 (2009-254)	本町3丁目46番1	H21年 11月4日	個人住宅：基礎 (個人住宅完備調査)	2.5m×2.5m1ヶ所深さ2.0mまで調査 (8.25m ²)	詳細はII-3-25)に記載	西田清一
八尾南道跡 (2009-84)	西木の本2丁目4番	H21年 6月15日	個人住宅：基礎 (個人住宅完備調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	現地地下0.7~1.0m付近で、櫛田川 の土を搬入した。調査地付近が原用 地として利用されていた頃までは機 械で削り取ったものと考えられる。	成海千子
矢作蓮跡 (2009-46)	高木町4丁目1-1, 1-2, 1-3, 1-4の一区、2-5	H21年 5月19日 20日	店舗・基礎部分 (造詣確認調査)	3.0m×3.0mの調査区4ヶ所深さ2.5m まで調査(36.00m ²)	詳細はII-3-26)に記載	西村公助
矢作蓮跡 (2009-120)	南木町5丁目96-11の一部	H21年 7月3日	個人住宅：基礎 (個人住宅完備調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	詳細はII-3-27)に記載	西村公助
矢作蓮跡 (2009-182)	南木町6丁目117番13, 118番 6	H21年 8月19日	個人住宅：建物基礎 (個人住宅完備調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	調査時代の遺構を検出し、築路(居住 或か?)が周辺に存続していた可能性 があると推測できる。	西村公助
矢作蓮跡 (2009-336)	南木町7丁目17-5	H21年 12月3日	個人住宅： 建物基礎部分 (個人住宅完備調査)	2.0m×2.0mの調査区1ヶ所深さ2.0m まで調査(4.0m ²)	当地が中世~近世の生産地であった ことを確認した。	坪田真一
山賀蓮跡 (2008-524)	山野町3丁目45番16~ 18, 20, 48番5, 9, 50番1, 8	H21年 5月21日	店舗：基礎・貯蔵槽 25分 (造詣確認調査)	2.0m×2.0m3ヶ所深さ2.0mまで調査 (12.75m ²)	調査地は櫛田川右岸にあたるため概 土が厚く(最高1.7~2.1m)、調査で は近沢坑の地層を確認するに止まつ た。	坪田真一
蘿草寺跡 (2009-130)	前光園2丁目39	H21年 10月1日	店舗：基礎 (造詣確認調査)	3.0m×2.5mの調査区2ヶ所深さ2.0m まで調査(15.0m ²)	詳細はII-3-38)に記載	西村公助
埋蔵文化財発掘 地外 木の本遺 跡調査地 (2008-505)	木の本遺 跡調査地 90, 91, 92, 93, 94	H21年 4月20日	工場：基礎部分 (試掘調査)	2.5m×2.5mの調査区2ヶ所深さ2.0m まで調査(12.5m ²)	T.P.+16.95m前後の地層は度々受け け土壌化しており、近世以前の堆土 および水戸の耕作上と思われる。以下 は水成堆積が広がっていた。	西村公助
埋蔵文化財発掘 地外 竹割町4丁目247	竹割町4丁目247	H21年 8月25・ 26日	住居：基礎・防火水 槽部分 (試掘調査)	2.0m×2.0mの調査区6.5ヶ所深さ2.0m まで調査(31.25m ²)	詳細はII-3-39)に記載	坪田真一

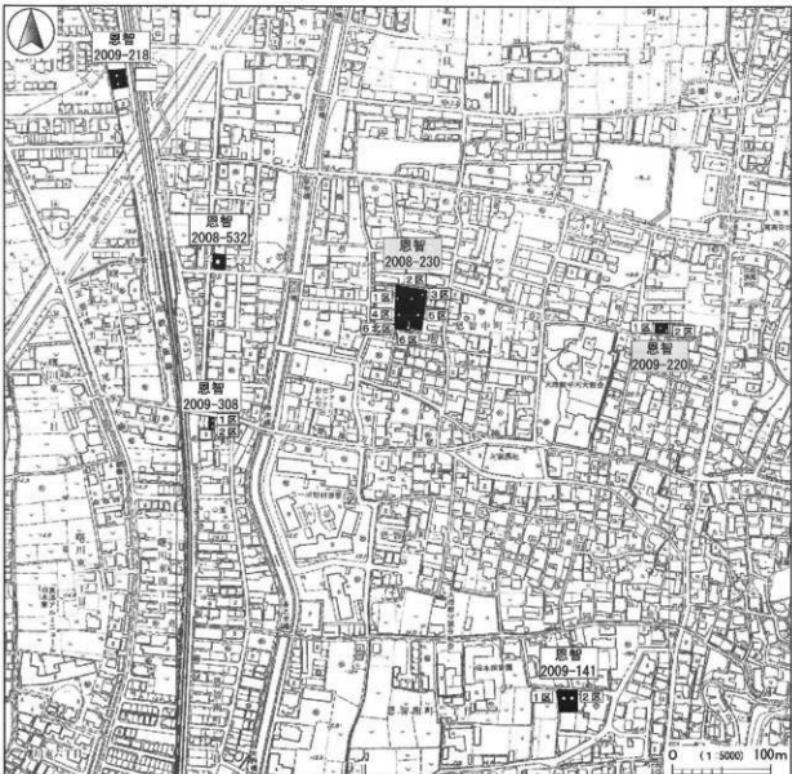
2. 平成21年度 4～12月発掘調査位置図(※トーン入り調査名は報告を掲載)



第29図



第30図



第31図



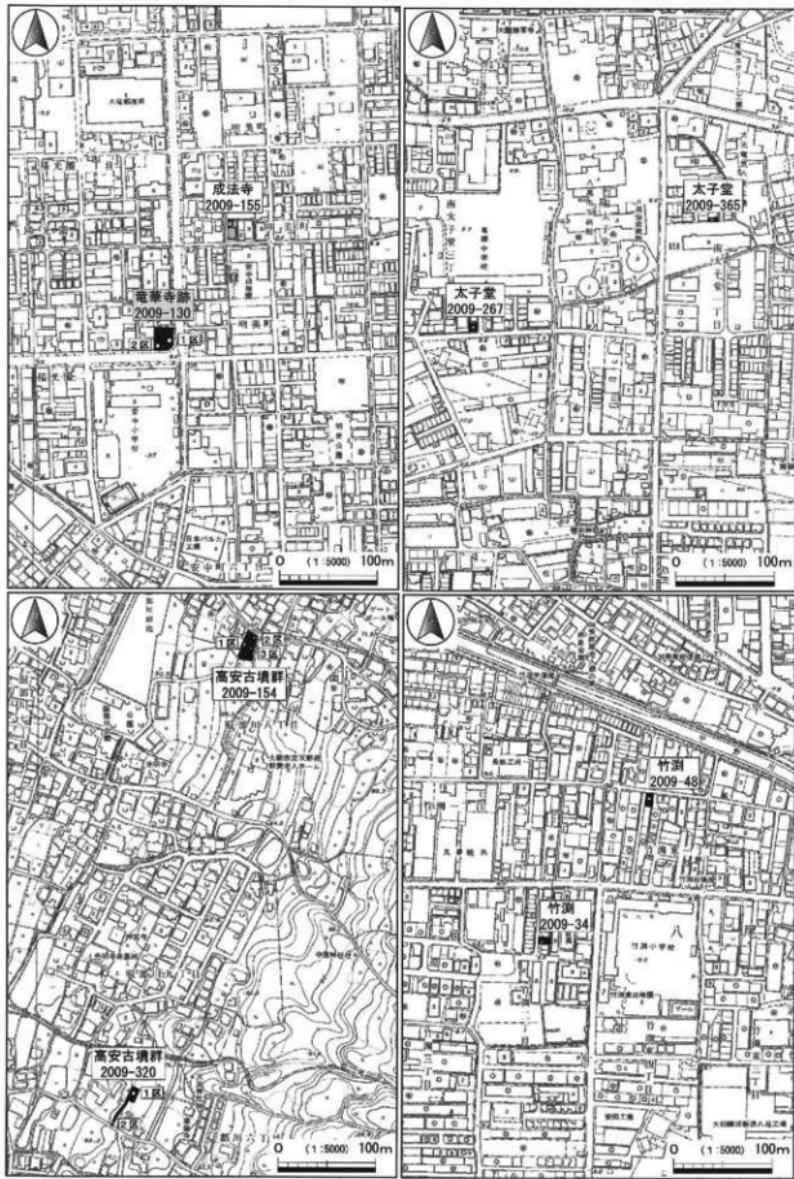
第32図



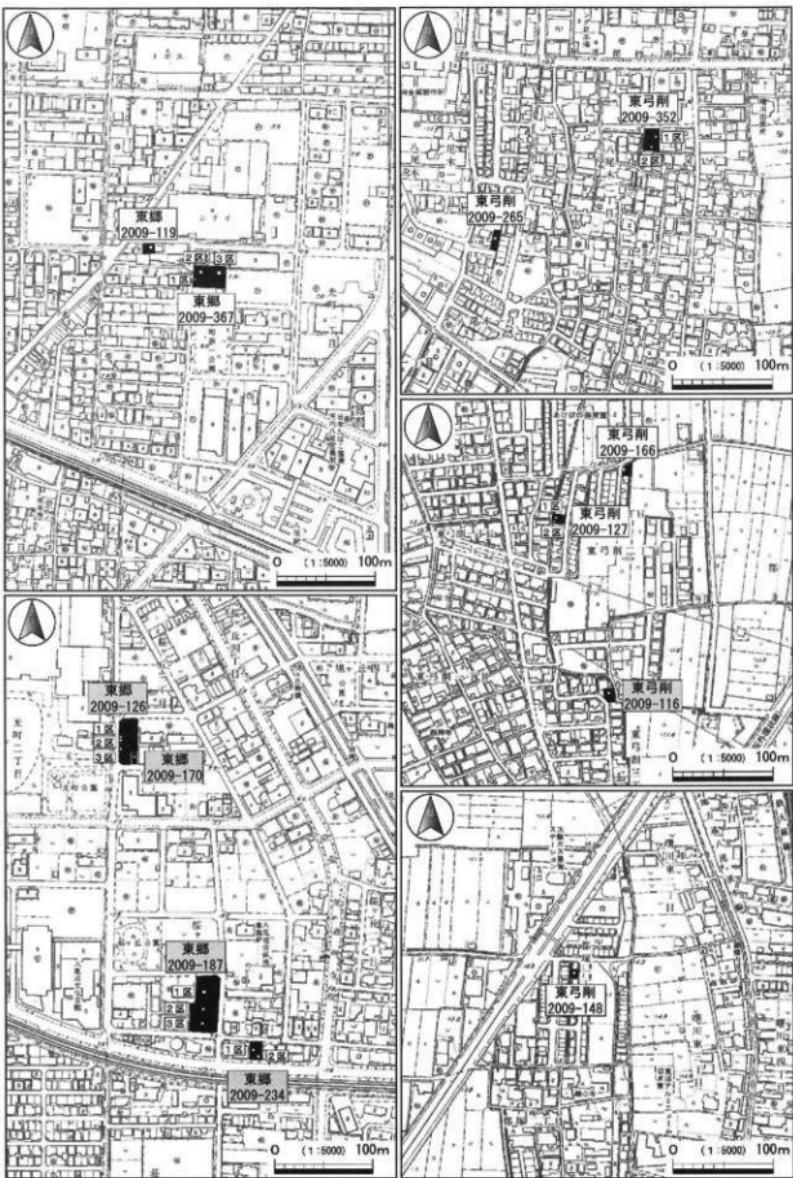
第33図



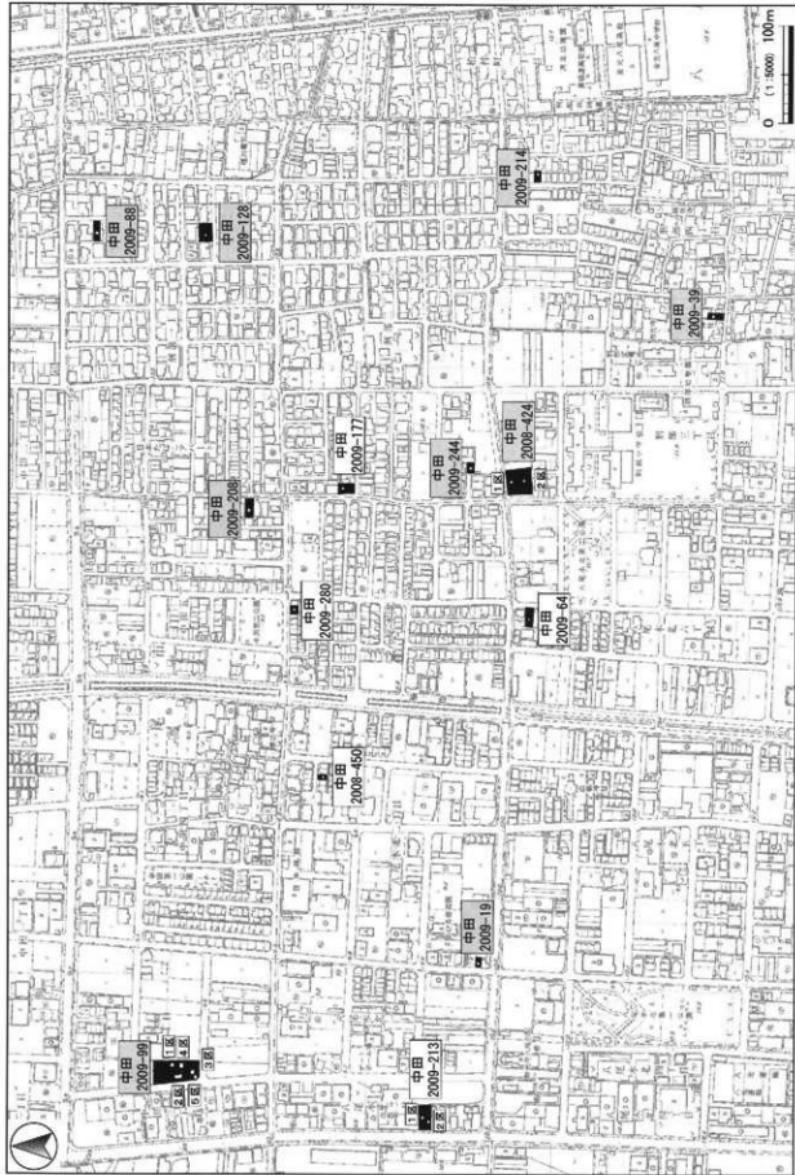
第34図



第35図



第36図



第37図



第38図



第39図

3. 市内遺跡発掘調査報告

1) 跡部遺跡(2009-45)の調査

(1) 調査地：春日町2丁目16番及び18番1(第29図参照)

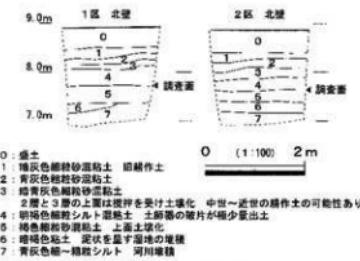
(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 2箇所(面積約 8.0m^2)について、現地表(T.P.+8.9m前後)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北側の道路上：T.P.+9.4m)である。

【地層】0層は盛土。以下現地表下 2.0m 前後までの 1.5m 間において7層を確認した。1層(T.P.+8.5m前後)は旧耕作土である。2層は粗粒砂混粘土、3層は細粒砂混粘土で、2層と3層の上面には攪拌を受け土壤化している。中世～近世の耕作土の可能性がある。4層は細粒シルト混粘土で、上部器の破片が少量出土した。5層は細粒砂混粘土で、上面は土壤化しており、調査を行ったが遺構および遺物はなかった。6層は泥状の粘土。7層は細～粗粒シルトの河川堆積である。

【検出遺構】なし。

【出土遺物】1・2区の4層から出土した土器は、奈良～平安時代頃に比定されるが、同化できるものはなかった。

(3)まとめ：T.P.+8.1mの4層は奈良～平安時代の地層で、近接する跡部遺跡(94-059)調査地(酒井1996)の第2調査区の3層に相当する。同調査では7世紀前半の遺構を検出しており、今回の調査では遺構はなかったが、飛鳥～平安時代の遺構が周間に存在している可能性が高いと予想できる。



第40図 断面図

【参考文献】

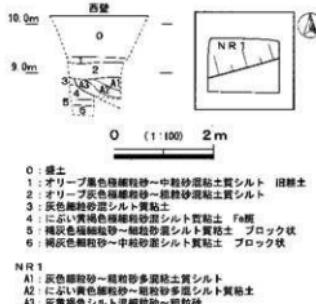
- ・酒井1996「1. 跡部遺跡(94-059)の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告33 平成7年度岡崎補助事業』八尾市教育委員会

2) 跡部遺跡(2009-157)の調査

(1) 調査地：東太子1丁目13番14号(第29図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 1箇所、面積約 4.0m^2 について、現地表(T.P.+10.2m)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点2A070(調査地南部：T.P.+9.956m)である。

【地層】0層は客土・盛土。以下現地表下 2.0m 前後までの 1.2m 間において6層の基本層序を確認した。1層は旧耕土。2層(T.P.+8.9～9.2m)は攪拌の著しいグライ化した作土で、時期は中世～近世であろう。3層(T.P.+8.8～8.9m)はやや攪拌されており、4層の土壤化部分である。4層(T.P.+8.5～8.8m)のシルト質粘土は均質な層相で、湿地性堆積であろう。5・6層(T.P.+8.5m以下)は



第41図 平断面図

ブロック状の層相で、遺構埋土の可能性があるが、遺物は見られず詳細は不明である。

【検出遺構・出土遺物】3層上面で北東～南西方向の自然河川(NR1)を検出した。南肩の検出で、規模は幅0.8m以上・深さ0.5m以上を測り、埋土は上部がブロック状、下部が流水層である。遺物は奈良時代頃までの土師器・須恵器片が少量出土した。

(3)まとめ：調査では3層上面で自然河川(NR1)を検出した。南部の太子堂遺跡調査地で検出されている中世の構群とほぼ同じ方向を示していることから、同時期の可能性がある。5・6層については遺構埋土か、あるいは南部で確認されている古墳時代後期～奈良時代の遺物包含層に相当すると思われる。

【参考文献】

- ・岡田清一 1993 「I 第1次調査(TS83-1) 極端調査概要報告」『太子堂遺跡<第1次調査・第2次調査報告>』八尾市文化財調査研究会報告36』(財)八尾市文化財調査研究会

3) 植松遺跡(2008-521)の調査

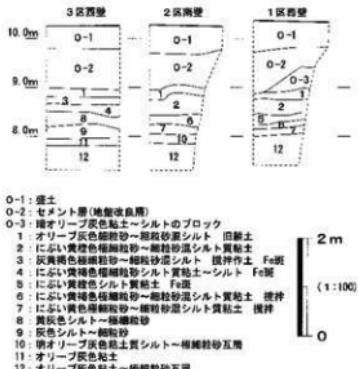
(1)調査地：永畠町2丁目20番1, 21番4の各一部(第30図参照)

(2)調査概要：平面規模約3.0×3.0m - 3箇所(北から1～3区：面積約27m²)について、現地表(T.P.+10.3～10.4m)下3.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南西部の市道交差点: T.P.+10.0m)である。なお掘削に際して削岩機の使用が必要であり、隣接住居との距離を考慮して2区の調査位置をやや北東に移動した。

【地層】0-1層は盛土、0-2層は地盤改良によるセメント層、0-3層もブロック状の盛土である。以下現地表下3.0m前後までの1.7m間ににおいて12層の基本層序を確認した。なお地盤改良は下層にまで及んでおり、特に3区ではそれが顕著で下層が部分的に硬化していた。1層は旧水耕作土(T.P.+8.8～9.0m)である。2～4層(T.P.+8.5～8.8m)、6・7層(T.P.+8.0～8.4m)は攪拌され作土と考えられる。2～4層が中世～近世、6・7層が古墳時代～古代に相当すると考えられる。2区6層には土師器・須恵器の細片がみられた。2・3区の8～10層(T.P.+7.9～8.5m)はシルト～細粒砂を基調とする水成層、11層以下(T.P.+7.8～8.0m以下)は粘土を基調とする水成層である。

【検出遺構・出土遺物】なし。

(3)まとめ：調査では中世～近世、古墳時代～古代に相当すると考えられる水耕作土を検出したが、他に遺構は認められなかった。当地は当該期には居住域とはなっていないと考えられる。



第42図 断面図(断面水平: 1/200)

【参考文献】

- ・西村公助 2007 「I 植松遺跡(第9次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告99』財団法人八尾市文化財調査研究会

4) 老原遺跡(2009-160)の調査

(1) 調査地：東老原2丁目46(第29図参照)

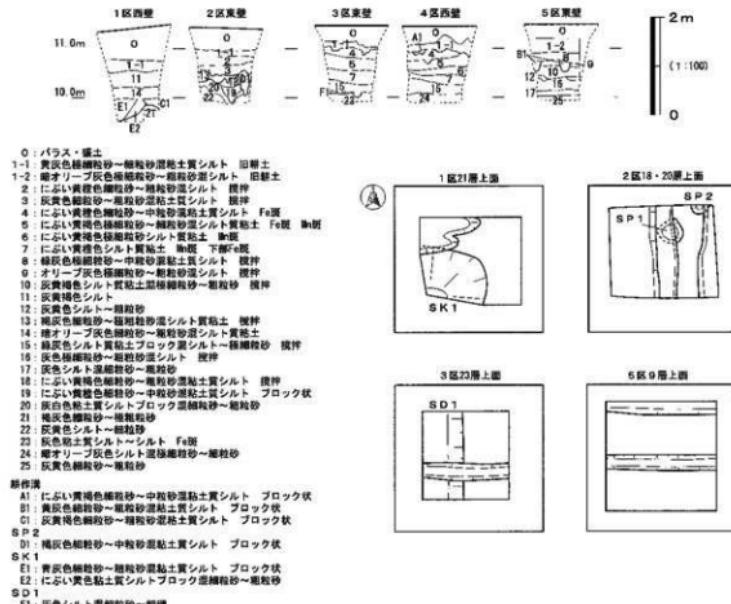
(2) 調査概要：平面規模約 $3.0 \times 3.0\text{m}$ - 5箇所(北から1～5区)、面積約45m²について、現地表(T.P.+11.5m)下1.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点4A150(調査地北東部: T.P.+12.265m)である。

【地層】0層は盛土、以下現地表下1.5m前後までの0.9～1.2m間において25層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+10.5～11.2m)で、1区が最も低く、また5区のみグライ化した層相である。2～10層は近世の耕作土上で、3・4区の4～6層(T.P.+10.5～11.0m)は均質な層相を呈し島畠盛土と考えられる。層中では各調査区で南北・東西方向の耕作溝や耕作で生じた段差が確認でき、一部を図化した。1区11層(T.P.+10.2～10.5m)、5区12層(T.P.-10.4m)は水成層である。13～17層(T.P.+10.0～10.5m)は中世頃の耕作土で、2区が最も高く、また遺物の包蔵も非常に多い。1～3区では下面で土坑・ピット・溝等が検出された。2区18～20層(T.P.+9.9～10.4m)はブロック状を成しており、遺構埋土の可能性がある。東西方向の溝が考えられるが詳細は不明である。21層以下は水成層である。

【検出遺構】

1区14層下面(T.P.+10.0m)で土坑1基(SK1)及び耕作溝と思われる落ちを検出した。SK1は径1.3m以上、深さ0.5m以上を測り、埋土はブロック状の2層から成る。井戸であった可能性が高い。遺物は12世紀後半頃の瓦器焼片が少量出土した。

2区13層下面(T.P.+10.5m)でピット2個(SP1・2)及び耕作溝や耕作による段差を検出した。SP



第43図 平断面図(断面水平: 1/200)

1は平面形が一边50cm程度の方形に近く、深さ約20cmを測る。SP2は径40cm程度の円形と思われ、深さ約50cmを測る。遺物はSP1から土師器細片が出土したのみである。

3区23層上面(T.P.+10.1m)で南北方向の溝1条(SD1)及び東西方向の耕作溝を検出した。SD1は幅80cm以上、深さ約10cmを測る。埋土はシルト混細粒砂・細礫で、流路の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

2区13層・18層、1区14層からは、12世紀後半を中心に13世紀初頭頃までの土師器・瓦器・須恵器片が多く出土しており、2区13層には丸瓦片も1点見られた。

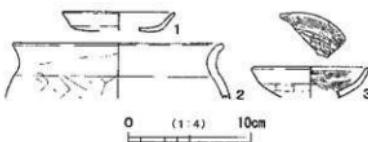
【出土遺物】

2区13層-1は土師器皿である。2は土師器甕で、内面が煤けている。3は瓦器皿で、内面には口縁部圓線状、見込みには斜格子状暗文を施す。3は12世紀代に比定されよう。

(3)まとめ:調査では全域で中世~近世の作土・耕作溝を確認した。また北部の1・2区では中世耕作土の下面で土坑・ピット等の居住城を示す遺構を検出した。時期は12世紀後半と考えられ、西部の調査地で検出されている同時期の集落の東への広がりが確認された。

【参考文献】

- 原川昌則1987「II 老原遺跡(第2次調査)発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告13』(財)八尾市文化財調査研究会



第44図 出土遺物実測図

5) 大竹西遺跡(2009-184)の調査

(1) 調査地：染音寺1丁目159～161-1、163～171、173、176番地(第30図参照)

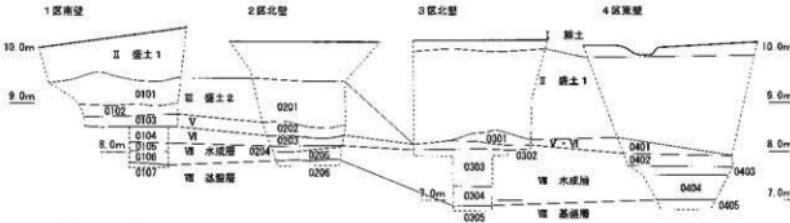
(2) 調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0m²11ヶ所(計99m²)について、現地表(10.0m前後)下2.5～3.5m前後までを調査した。調査で使用した高さの基準は、八尾市街区三角点1016A(調査地南西20m地点:T.P.+11.384m)である。

【地層】北西部の3・4区では、現地表(10.2m前後)下2.0m以上にわたる近年の盛土(II)があり、遺物包含層(V)・第1面ベース(VI)まで削平された部分が多く、遺構面を明確にすることはできなかった。また、8区では、現地表(10.0m)下1m前後で、旧河川の肩を検出したが、湧水が甚だしく、詳細な観察は行えなかった。調査地の南に存在する現在の川の前身の河川であろうか。他の地区では、現地表(10.0m前後)下0.7～2.0m前後までは、現耕土(I)、近世～近代の盛土(III)があり、以下現地表下2.5～3.5m前後までの1.5～2.0m間ににおいてIV～VIIの地層を確認した。IVは東部全城で見られる青灰色系の水成層で、一部に炭を含んでいる。層厚0.2～0.5m、上面の標高は8.8～9.3mで、南東側が高い。Vはいわゆる遺物包含層・遺構内埋土で、褐色系の礫混粘土質シルトからなる。上面の標高は8.3～9.0mで、南東が高い。全城にわたって見られたが、7区には作土状の明褐色系の砂質シルトが堆積しており、他の調査区とは異なる。VIは遺構ベースを構成する層で、褐色系の礫混粘土質シルト～粘土質シルトである。上面の標高は8.0～9.0m、南東が高い。VIIには、複数枚の遺構ベースが存在しているものと考えられ、特に7・9・10区では、1m前後の厚さで数枚の礫混粘土質シルト～粘土質シルトが存在している。VIIIは水成層で、上層の灰色系極細粒砂、下層の粘土質シルトなどからなり、厚さは0.3～0.8m以上を測る。VIIは硬く締まる地層で、シルト・極細粒砂・粗砂・礫などの混じる粘土質シルトからなり、当地の基盤層に対応するものと考えられる。上面の標高は7.0～8.0mを指し、南が高い。

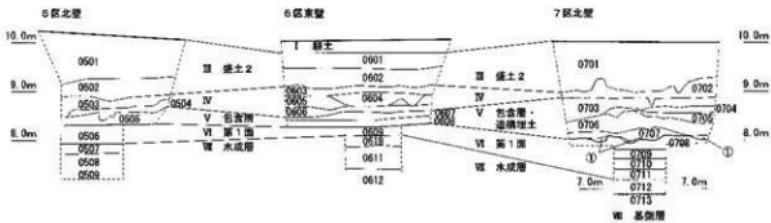
【検出遺構】6区では、調査区西部のVI-0609層上面(標高8.3m前後)で、西へ下がる落込みSO1を確認した。7区では、調査区北部のVI-0708層上面(標高8.0m)で、南北方向に並行して伸びる溝4条(SD1～4)を検出した。溝跡と考えられ、内部からは弥生～古墳時代前期の土器のほか、平安時代頃の土師器の小片が出土している。9区では、VI-0904層上面(標高9.0m)で、小穴1個(SP5)、南北方向の溝2条(SD6・7)東西方向の溝1条(SD8)を検出した。SD6・7は鉢構の可能性がある。これら

検出遺構一覧表

地区名	遺構名	法量(m ²)	幅・径	深さ	埋土	出土遺物
6区	SO1	深さ0.25mまで確認			暗灰色鉄粉砂～礫混粘土質シルト 暗褐色鉄粉砂～礫混粘土質シルト	
7区	SD1	0.3	0.15			
	SD2	0.45	0.1			
	SD3	0.15	0.05			
	SD4	0.3	0.15			
9区	SP5	0.6以上	0.25		褐色礫混土・灰色粗砂のブロック 明褐色粗粒砂・礫混粘土質シルト	
	SD6	0.6以上	0.25		灰褐色礫混土・褐色粗粒砂の互層	弥生～古墳前期・平安
	SD7	0.6以上	0.15		褐色礫混粘土質シルト	
	SD8	1.2以上	0.3		褐色礫混粘土質シルト	弥生～古墳前期・中期
	SO91	深さ0.25mまで確認			褐色礫混粘土質シルト	弥生
	SP9	0.35×0.45	0.15		灰褐色礫混土質シルト	
	SD10	0.3～0.8	0.05		灰褐色礫混土質シルト	弥生
	SO92	深さ0.15mまで確認			青灰色礫混土質シルト	
10区	SK11	1.0×2.4	0.3		暗褐色礫混土質シルト	
	SK12	0.8×1.2	0.05		暗褐色礫混土質シルト	
	SP13	0.6～0.8	0.15		綠灰色極細粒砂	
	SO10	深さ0.4mまで確認				
	SP14	0.3×0.45	0.3		黑灰色鉄粉粗粒砂	弥生後期
	SP15	0.25	0.2			弥生後期
	SP16	0.3×0.5	0.3			
11区	SP17	0.45	0.15			

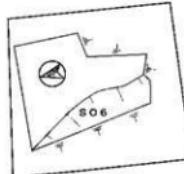


- 0101: 白灰色細粒砂に灰黑色粘土。
青灰色粘土のブロック
0102: 黄灰色粘粒砂質粘土上に灰色粘土。
土のブロック
0103: 灰色細粒砂質粘土上質シルト
0104: 灰色粘粒砂質粘土
0105: 灰色細粒砂質粘土上質シルト
0106: 灰色細粒砂質粘土上質シルト
0107: 黑灰色粘粒砂質
- 0201: 白灰色粗粒砂に灰黑色粘土。
青灰色粘土のブロック
0202: 灰色粘粒砂質粘土上質シルト
0203: 灰色粘土のブロック
0204: 灰色粘粒砂質粘土
0205: 灰色粘粒土質シルト層
0206: 明褐色粘粒シルト
- 0301: 黑灰色粗粒砂
0302: 灰色粘粒砂
0303: 灰色粘粒砂質粘土
0304: 灰色粘粒土質シルト
0305: 黑褐色粗粒砂質粘土上質シルト
- 0401: 出灰層透水性
0402: 隆起内輪砂
0403: 灰色粘粒砂質粘土
0404: 灰色粘土上質シルト
0405: 灰色粘粒砂質粘土上質シルト



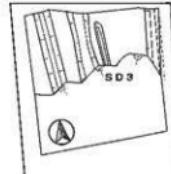
- 0501: 白灰色粗粒砂に灰黑色粘土上・青灰
色粘土のブロック
0502: 古灰層透水性粘粒質シルト
0503: 灰青色細粒砂質粘土
0504: 灰灰細粒砂・灰粘土上質シルト
0505: 灰色粘粒砂質シルト
0506: 灰色粘土上質シルト層
0507: 灰色粘粒砂
0508: 灰色粘土質シルト
0509: 灰色粘土質シルト(炭鉱)

0 [1:100] 2 m



6区平面図

SD-1 SD-2 SD-4



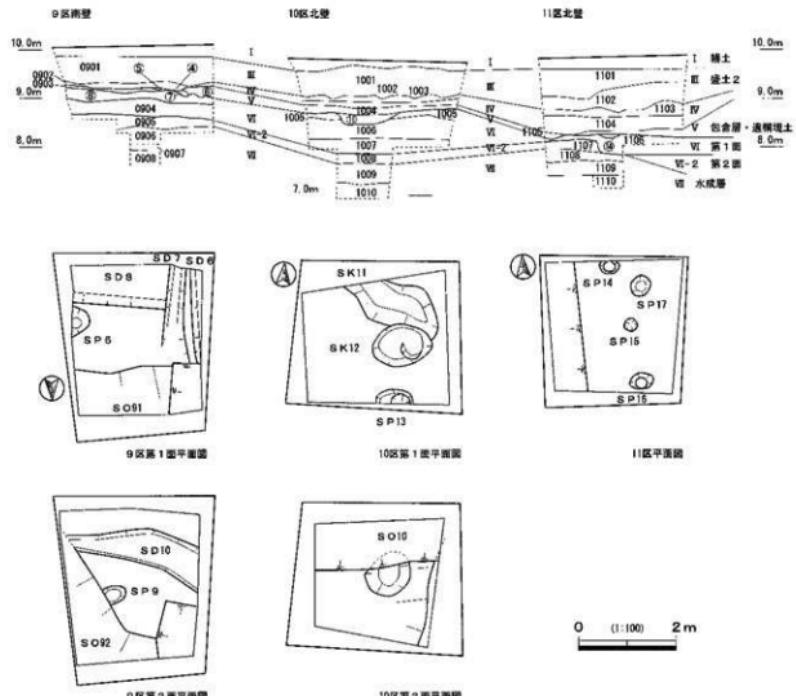
7区平面図

- 0601: 白灰色粗粒砂に灰黑色粘土・青灰色粘土。
青灰色粘土のブロック
0602: 白灰色粗粒砂・一種粘土・質シルト
0603: 黑褐色細粒砂質粘土
0604: 淡灰褐色粗粒砂質シルト(炭)
0605: 淡灰褐色粗粒砂質シルト
0606: 青灰色粘粒砂
0607: 淡灰褐色粗粒砂・一種泥炭・質シルト
0608: 淡灰褐色粗粒砂・一種泥炭・質シルト
0609: 淡灰褐色粗粒砂・一種泥炭・質シルト
0610: 灰色粗粒砂シルト
0611: 灰色粗粒砂・青灰色粘土の互層
0612: 青灰色粘土質シルト

- 0701: 青灰色粘土・青灰色粘土のブロック
0702: 黑褐色粗粒砂・質シルト(炭)
0703: 黑褐色粗粒砂・質シルト
0704: 黑褐色粗粒砂シルト
0705: 明褐色粗粒砂
0706: 黑褐色粗粒砂・高含質シルト(炭土)?
0707: 灰褐色粘土のブロック
0708: 灰褐色粗粒砂上質シルト
0709: 黑褐色粗粒砂・質シルト
0710: 黑褐色粗粒砂・質シルト
0711: 黑褐色粗粒砂・質シルト
0712: 黑褐色粘土質シルト
0713: 黑褐色粘土質シルト

①: 淡灰色細粒砂(SD 1~4地盤)

第45図 1~7区平断面図



- 0901：青灰色調温多質シルト・褐色腐泥
砂質シルトのブロック
0902：灰褐色調温粗粒砂
0903：青灰色调温粗粒砂
0904：褐色调温粗粒砂
0905：褐色大粒粗粒砂シルト
0906：青灰色粗粒砂
0907：褐色色細粒砂粗粒土質シルト
0908：灰褐色細粒砂粗粒土質シルト
0909：灰褐色細粒砂粗粒土質シルト
0910：灰褐色大粒シルト

 ④：灰褐色粗粒土質シルト
 ⑤：褐色粗粒砂
 ⑥：青灰色粗粒砂—鐵錆斑土質シルト
 (SD 6壁上)
 ⑦：灰褐色調温粗粒砂・灰褐色粗粒砂の互層
 (SD 7壁上)
 ⑧：鉛褐色調温粗粒土質シルト(SD 8壁土)

- 1001：青灰色调温粘土質シルト
1002：灰黑色调温粗粒砂(炭)
1003：青灰色调温粗粒砂シルト
1004：青灰色调温粗粒砂
1005：褐褐色粘土質シルト
1006：褐褐色粘土
1007：褐褐色粘土質シルト(SO10壁上)
1008：褐色粘土質シルト
1009：灰褐色粘土質シルト・粘土質シルトの互層
1010：灰褐色大粒シルト

 ⑨：灰褐色粗粒土質シルト
 ⑩：褐色粗粒砂
 ⑪：青灰色粗粒砂—鐵錆斑土質シルト
 (SD 6壁上)
 ⑫：灰褐色調温粗粒砂・灰褐色粗粒砂の互層
 (SD 7壁上)
 ⑬：鉛褐色調温粗粒土質シルト(SD 8壁土)

- 1101：褐色调温粘土・青灰色粘土のブロック
1102：青灰色调温粘土質シルト
1103：青灰色调温粗粒砂(炭)
1104：青灰色粘土—鉛粒物質シルト
1105：灰褐色粘土
1106：淡灰色粗粒砂—鐵錆斑土質シルト
1107：褐褐色粗粒砂土質シルト
1108：灰黑色调温粗粒土質シルト
1109：灰褐色粘土質シルト(炭酸鉄)
1110：灰褐色粘土質シルト

 ⑭：灰褐色粘土質シルト(SP14壁土)

第46図 9~11区平断面図

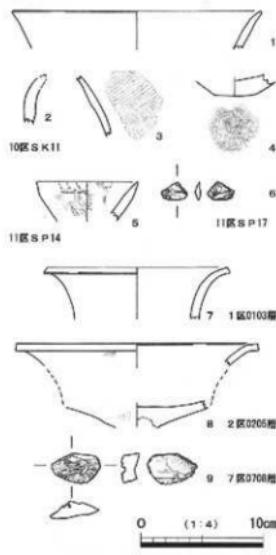
からは、弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土している。SD 8埋没後、SD 6・7が開削されている。調査区南部では、北へ下がる落込み(SO91)を確認した。また、VI-2-0905層上面では、小穴1個(SP9)、溝1条(SP10)、北東方向へ下がる落込み(SP92)を検出した。SP10は東から西へ弧を描いて伸びる。これらからは、弥生土器片が数点出土している。10区では、VI-1005層上面(標高8.6~8.7m)で土坑3基を検出した(SK11~13)。SK11からは弥生時代中~後期、古墳時代前期の壺・甕などがややまとまった形で出土している(1~4)。また、VI-2-1008層上面では、西へ下がる落込み(SP10)を検出した。内部(1007層)から弥生時代後期の甕などが出土している。11区では、VI-1106層上面(標高8.2m前後)で、小穴4個(SP14~17)を検出した。そのうちSP14~16の3個はほぼ1m間隔で南北方向に並ぶ。SP14から弥生時代後期の小型鉢、SP17から弥生土器片、サヌカイト剥片などが出土している。その他、遺構に伴わない遺物として、1区のV-0103層から、弥生時代後期の壺(7)や古墳時代中期の土師器・須恵器片が出土している。2区のVII-0205層から、古墳時代前期の土師器高杯(8)が出土している。6区のV-0607-0608層から、弥生時代後期~古墳時代前期の土器が出土している。7区のVI-0708層から、弥生時代中期頃の土器の小片やサヌカイト剥片(9)が出土している。9区のV-0903層からは弥生土器~古代の土師器が出土している。

【出土遺物】1は口径20.3cmを測る直口壺である。2は複合口縁壺または高杯の口縁部付近の小片である。3は外面に右上がりの細筋タキ・ハケ、内面へラケズリの甕である。4は底面に木葉痕を残す平底で、壺または鉢の底部と考えられる。いずれも古墳時代前期初頭に属するものであろう。5は口径8.2cmを測る小型鉢である。弥生時代後期のものか。6は幅2.1cm・長さ1.5cm・厚さ0.4cmを測るサヌカイト剥片である。7は口径14.6cmを測る弥生時代後期以降の直口壺である。8は古墳時代前期の有稜高杯で、口径19.6cmを測るやや大型のものである。9は幅4.0cm・長さ2.5cm・厚さ1.4cmを測るサヌカイト剥片である。

【まとめ】今回の調査では、東部で多くの遺構・遺物を検出することができた。遺物は弥生時代後期~古墳時代前期のものが多くを占めるが、弥生時代中期・古墳時代中期・平安時代頃のものも若干含まれる。遺構・遺物の分布は東部の9~11区が密である。調査地は山地と平地が融合する地点で、調査地の現状はほぼ水平であるが、旧地形は東西で1m程度の高低差があり、湧水も多い地点である。西部は道路沿いのため開発の影響を受けた部分が多いが、東部は近世頃の溜池から現代の蓮池へと変わっただけで、地下に与える影響も少なかったことから、東部に良好な形で遺構・遺物が遺存していたものと考えられる。近辺は調査件数も少ない地点であったが、今回の調査によって弥生時代の集落の痕跡が残っていることが判明した。また、調査地東方80m地点の調査地では、古墳時代中期の遺物包含層が検出されており(樋口・西村2008)、今回出土の同時期の遺物との関連を考えられる。

【参考文献】

- ・西村公助・樋口 薫 2008.3 「2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査」『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』 八尾市文化財報告57 平成19年度国庫補助事業 八尾市教育委員会



第47図 出土遺物実測図

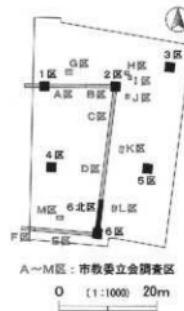
6) 恩智遺跡(2008-230)の調査

(1) 調査地：恩智中町2丁目285、286、287、288-1(第31図参照)

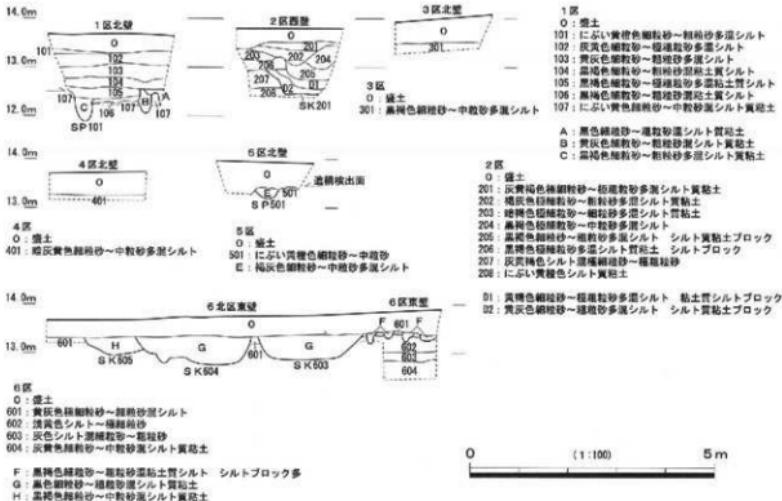
(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 6箇所(北西から1～6区)、及び6区から北への管路部分($1.0 \times 6.0\text{m}$: 6北区)、総面積約 30m^2 について、現地表(T.P.+13.7～14.1m)下 $0.5\sim1.5\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区三角点1071A(調査地西部:T.P.+12.232m)である。

【地層】0層は盛土。以下現地表下 1.5m 前後までの 1.2m 間において各地区で1～8層の基本層序を確認した。大まかに分類すると、1区101～103層(T.P.+12.8～13.3m)、2区201・202層(T.P.+13.2～13.5m)、3区301層(T.P.+13.5m)、4区401層(T.P.+13.3m)が暗黄褐色系の遺物包含層1、104～106層(T.P.+12.3～12.8m)、203～206層(T.P.+12.9～13.2m)が黒褐色～黒色系の遺物包含層2である。1区101層は西部で確認されている整地層の可能性がある。以下のベース層は1区107層、2区207層、6区601・602層が対応し、5区のみ501層の砂層がベースとなっている。ベース層の標高は1区がT.P.+12.5m、2区がT.P.+13.0m、5・6区がT.P.+13.4mで、東から西に、また南から北に下がる状況である。これらベース層上面で遺構を検出した。なお5・6区では遺物包含層は見られなかった。また3・4区では包含層上部までの掘削である。

【検出遺構】1区で土坑1基(SK101)、ピット14個(SP101～114)、2区で土坑1基(SK201)、ピット6個(SP201～206)、溝2条(SD201・202)、5区でピット4個(SP501～504)、6区・6北区で土坑5基(SK601～605)、ピット14個(SP601～614)を検出した。1・2区の遺構については遺物包含層2中の構造と考えられるものもすべてベース面で捉えている。各遺構からは弥生時代中期後半を中心とする土器・石器類が出土している。

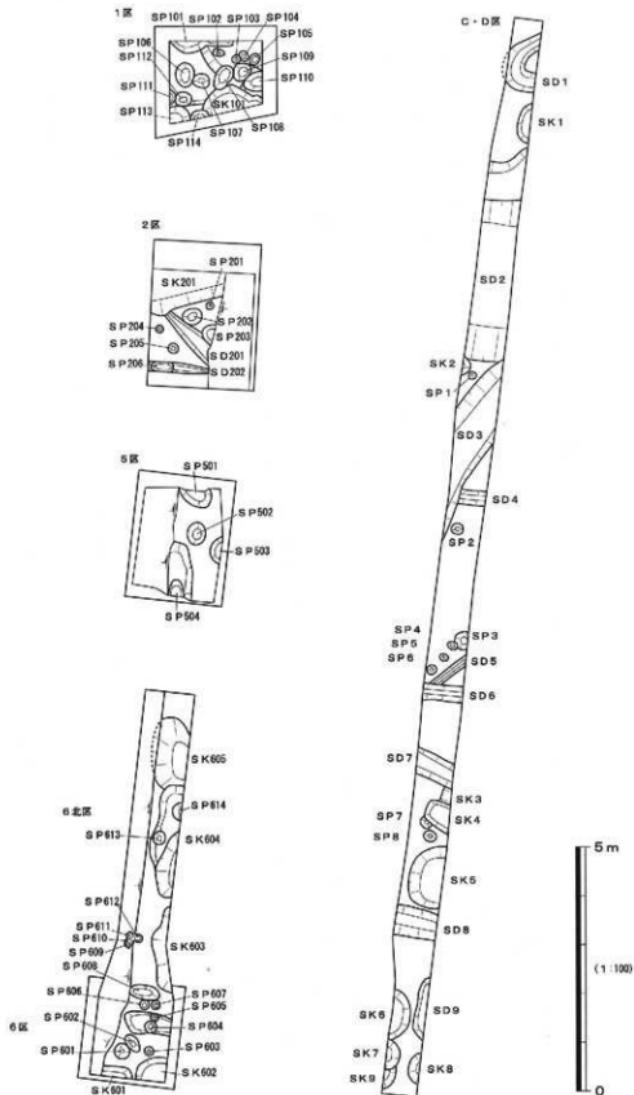


第48図 調査区位置図



第49図 断面図

Ⓐ



第50図 平面図

土坑では2区SK201、6北区SK603～605が深さ50cm程度を測る大規模なものである。いずれからも土器・石器類が多く出土しており、特にSK605では多量の土器片が重層的に集積する状況であった。

ピットでは直径20～30cm・深さ20cm程度のものと、直径40～50cm・深さ50cm程度のものがある。前者がより上層からの構築である可能性があろう。

溝は2区SD201・202のみで、幅20～40cm・深さ10cm程度を測る。また2区205層は東西方向の溝埋土の可能性がある。

遺物包含層1・2とともに弥生時代中期後半の土器・石器類を多量に含んでおり、4区401層では弥生時代後期前半の土器が相当量認められる。

【出土遺物】

1区104～106層(1～19)－1～3は弥生土器広口壺である。1・2は簾状文、3は波状文を口縁部外面に巡らせ、1・2は内面にハケを施す。4は広口短頸壺で、口縁端部に凹線を巡らせ、頸部～体部の外面、体部内面にハケを施す。形態的に瀬戸内系と思われる。5は付加状口縁の大形広口壺で、口縁部外端面には2段に簾状文を巡らせる。6は壺の肩部と考えられるが詳細は不明。端部に刻み目を施した貼付け突帯を巡らせた後、全面に櫛描流水文を施し、その後突帯以下に3条一組の棒状浮文を貼り付けている。胎土は牛駒西麓産で、あまり例を見ない器種であろう。7は高杯で、口縁部外面に櫛描列点文を巡らす。8は水平口縁の高杯で、口縁部の垂下が長めで古い様相といえるである。9は高杯、あるいは台付き器種の脚部で、形状が盃で傾いている。10・11は甕で、調整は10がヨコナデ、11がヘラミガキである。12は無頸壺で口縁端部を小さく折り返す。13・14は11のような河内形甕の底部で、14には焼成後の穿孔が見られる。以上の土器は河内IV様式前半を中心とした時期に比定される。15・16は河内V様式の甕で、体部外面調整は15がタタキ、16がハケで、16が古い様相である。2点は上層からの混入か?。17～19はサヌカイト製の石器である。17は明瞭な調整剥離が認められず剥片であろう。18・19は楔形石器である。18は断面紡錘形を成し、縁辺のほぼ全周に比較的細かい調整剥離を施している。19は主要剥離面側の片辺に粗い調整剥離を施す。

2区SK201(20～25)－20は大形甕、21・22は小形の河内形甕である。いずれも体部外面調整はヘラミガキである。23は壺で縁辺に2個(おそらく一对)の紐孔を有する。24は土器片製円板で、縁辺は平滑に磨いている。以上の土器は河内IV様式に比定される。25はサヌカイト製品で、主要剥離面側から粗い調整剥離を施しており、石劍・石鐵等の未成品の可能性がある。

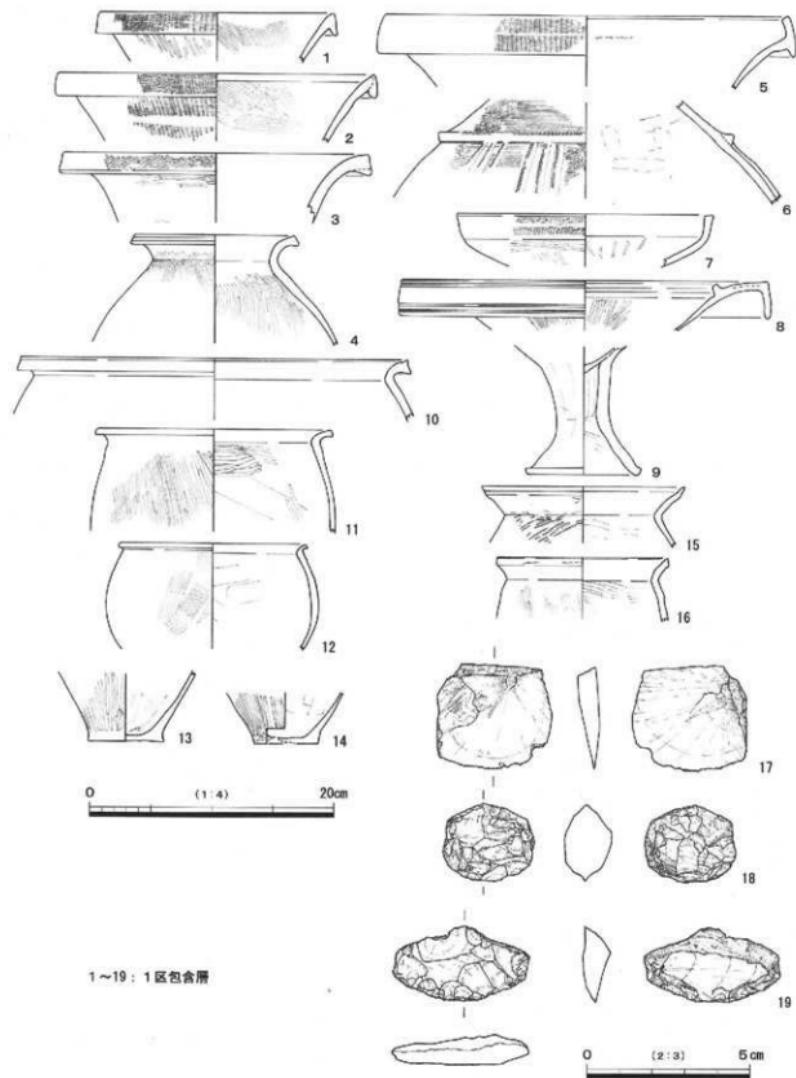
2区SP203(26)－26はサヌカイト製石錐で、梢円形の頭部を有し、先端部は欠損している。頭部先端に自然縫面を残す他は、縁辺の全周に両面からの調整剥離を行う。

3区301層(27～30)－27は付加状口縁の広口壺で、口縁部外端面には2段に簾状文を巡らせた後、間に扇形文を巡らせている。28は甕、あるいは大形鉢で、口縁部外端面に刺突文を巡らせる。29は底部で、穿孔は焼成前である。これらの土器は河内IV様式に比定される。30はサヌカイト製石槍の先端部である。全面に調整剥離が認められる。

4区401層(31～34)－31・32は甕で、外面調整は32がタタキ、31は残存部にタタキは見られない。32はタタキが口縁部に及んでいることから口縁タタキを出しが技法によるもので、口縁部の成形が雑である。33は壺底部。34は高杯で、調整はハケ後ヘラミガキである。胎土中に雲母を多量に含んでいる。これらの土器は河内VI様式に比定される。

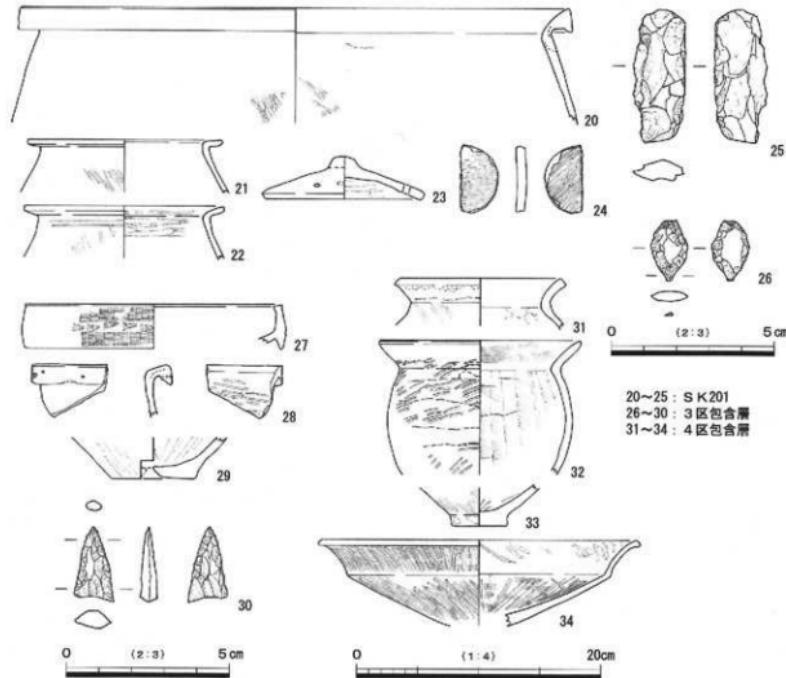
6北区SK603(35～37)－35は広口壺で、口縁部の装飾は端部に刻み目、外面櫛描簾状文、内面円形浮文である。36は台付鉢と思われ、口縁部外面に櫛描刺突文、体部外面に櫛描直線文・扇形文を施す。調整は底部外面・体部内面ヘラミガキである。これら2点は河内III－2～VI様式に比定されよう。37は石錐と考えられる。調整剥離は両面からで、先端は欠損する。

6北区SK605(38～50)－38～47は広口壺である。調整はヘラミガキを基調とする。38～45は口縁端部に刻み目、頸部～体部に櫛描直線文・波状文・扇形文により装飾されるもので、46・47は無文である。特徴的な装飾として38・39の口縁端部は、深く幅広の刻み目により鋸歯状を成す。47の口縁部は二次焼



1~19: 1区包含層

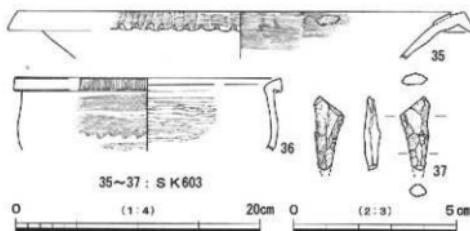
第51図 出土遺物実測図(1)



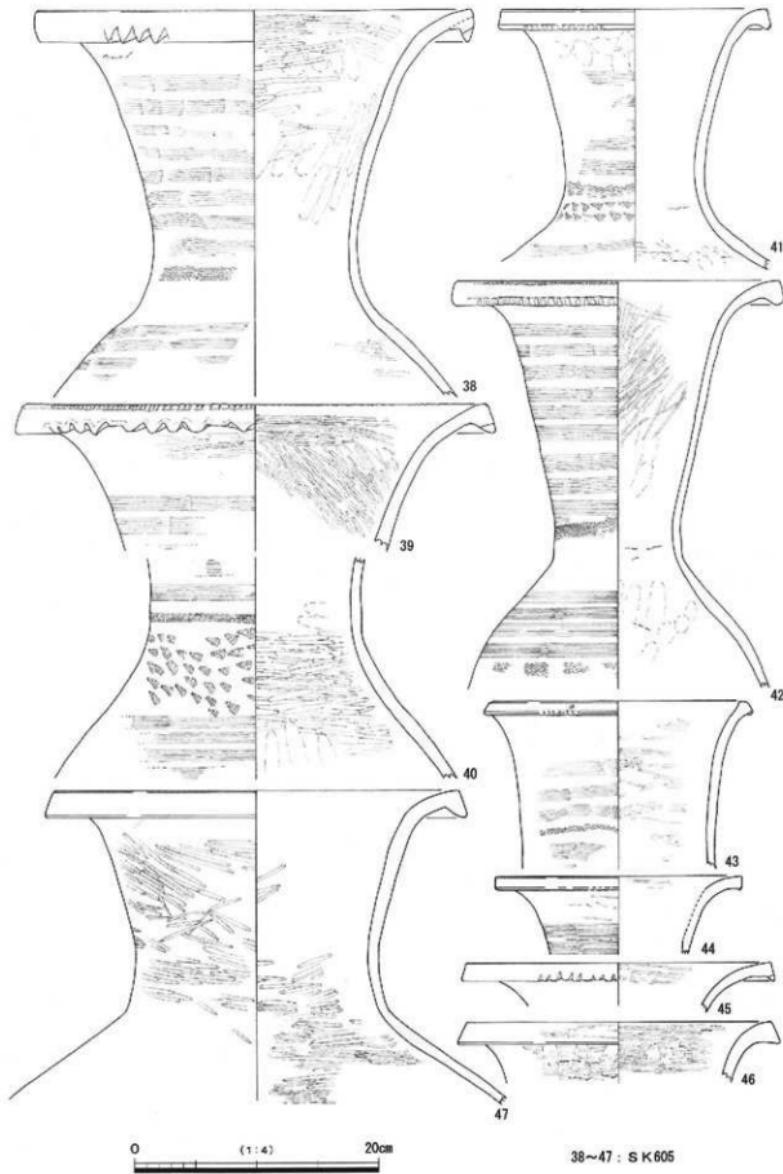
第52図 出土遺物実測図(2)

成を受けていると思われる。48は壺で、調整はヘラミガキである。49・50は無頸壺で、外面の装飾は上から、49は櫛描直線文・流水文、50は櫛描波状文・直線文である。これらの土器は河内II-3～III-1様式に比定されよう。

6北区SK604・605(51～75)－SK604・605は当初一連の遺構として掘削しており、その際検出の遺物である。51～53は広口壺で51は頸部の櫛描直線文、52は口縁部の刺み目や頸部の櫛描直線文を施し、53は無文である。54は大形の壺で、口縁端部に刺突文・刺み目を施す。河内IV-3様式に比定される。55は小形の甕、56は小形の壺、あるいは壺である。57は大形、58は小形の無頸壺で、外面に櫛描直線文・扇形文を施す。59は頸部に櫛描直線文を施す細頸壺で、口縁部は直線的にやや開く。55～59は河内II様式に比定されよう。60・61は蓋で、61は口縁端部内面が全周にわたって、60は内面の一部が焼ける。62～66は底部で、63・64が甕、他は壺であろう。63は焼成前の穿孔を有する。67は土器片製円盤で、縁辺は磨いていない。68～74はサヌカイト製品である。68



第53図 出土遺物実測図(3)



第54図 出土遺物実測図(4)

は石礫で、両面に主要剥離面を残し、縁辺にのみ両面からの調整剝離を行う。69~71は削器である。69はほぼ全周にわたって縁辺に両面から調整剝離を施す。70は調整剝離は主に片面からで、もう片面は主要剥離面の他、大きな剥離面のままである。71は、全体に主要剥離面・自然面を残し、三角形の断面の鋭角部分となる一辺に両面からの細かい調整剝離を施す。72は平面形が方形に近い楔形石器である。上辺に自然面を残し、下辺に主要剥離面側からの調整剝離により刃を作る。73は下辺に自然面を残し、上部は欠損している。両側辺には両面からの調整剝離により刃を作り、石槍等の未完成と思われる。74は両面に主要剥離面を大きく残すもので、調整剝離は顕著ではないか削器と思われる。75は緑泥片岩製石庖丁である。両刃で直線刃と思われ、刃部・背部共に潰れが顕著である。

(3)まとめ：調査では西部・北部の調査地と同様に弥生時代中期後半の遺構群・遺物包含層を検出した。厚い遺物包含層からみて歴史的生活面が存在すると考えられる。西部では特に4区で後期前半の土器が多く見られたことから、規模を縮小して集落が存続していたのであろう。

(市教委立会調査)

遺構確認調査において現地表下0.4m前後から多数の遺構及び遺物包含層が検出されたため、掘削幅を1m以下にするように指導したうえで、東西方向の管路2路線(A~B区・E~F区)と南北方向の管路1路線(C~D区)及び、宅地跡7か所(G~M区)において、立会調査を行った。(第48図参照)

A~B区・E~F区では、土層断面の確認と遺物の収集を主体に行なったが、C・D区では部分的に遺構を検出している。A区では現地表下0.9mで、B区では現地表下0.5mで黒褐色系の弥生時代の遺物包含層がみられ、1・2区の層序と対応する。E・F区では南壁の現地表下0.5m及び0.7m付近で数か所シルトブロックの混じるシルト層がみられ、6区・6北区で検出されているものと同様の遺構の埋土と考えられる。

C区では、現地表下0.5mで瓦器碗が含まれる中世の包含層が見られ、現地表下0.7mで弥生時代の包含層となり、遺構検出面は現地表下0.9m付近である。D区では、現地表下0.35~0.4mで弥生時代の包含層があり、現地表下0.6~0.7mの淡黄灰色砂質土上面で多くの遺構が検出できた。

C・D区で検出できた遺構は、溝9条(SD1~9)、土坑9基(SK1~9)、ピット8個(SP1~8)である。(第50図参照)

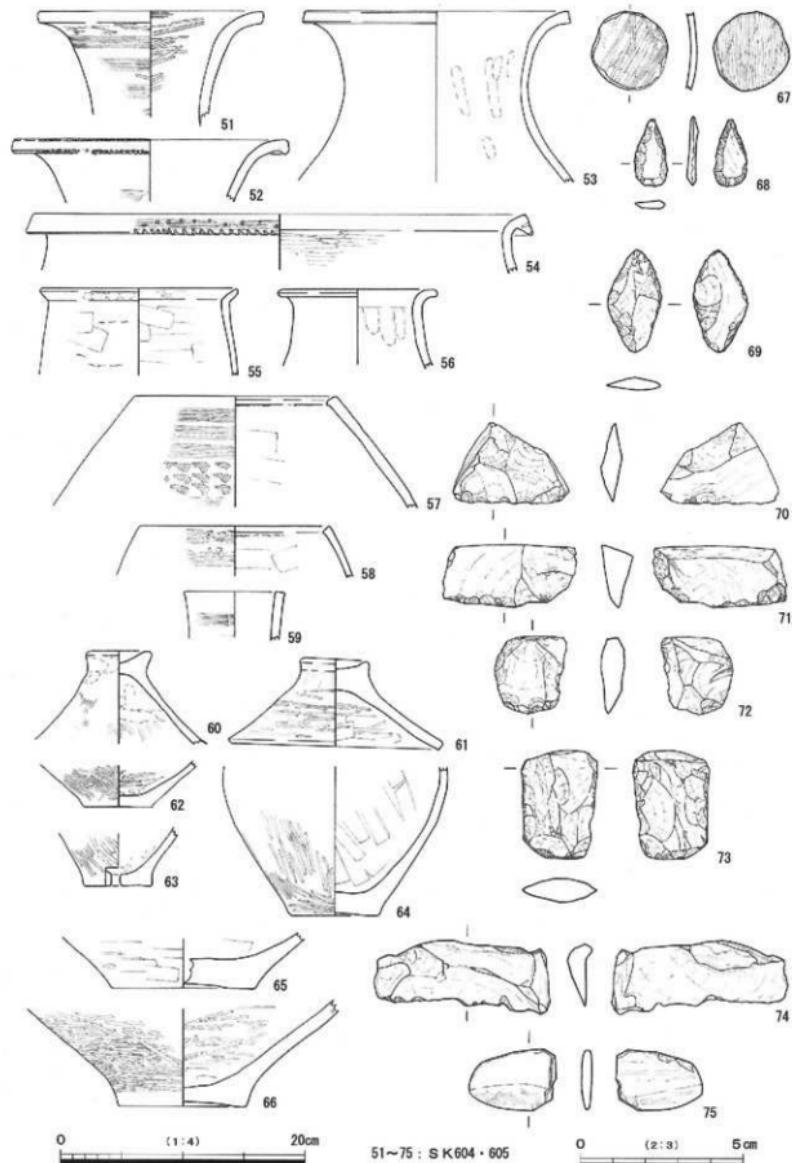
溝ではC区SD2が幅約4.1m・深さ70cmを測るが、遺構の下層にある淡灰白色砂層にも遺物が含まれており、さらに深い溝となる可能性がある。D区SD9は一部のみの検出で幅は不明であるが、深さ40cm程度の規模である。

土坑は、D区SK5が深さ40cm程度あり、C区SK2では一部のみの検出で規模は不明であるが、土器が多く含まれる。

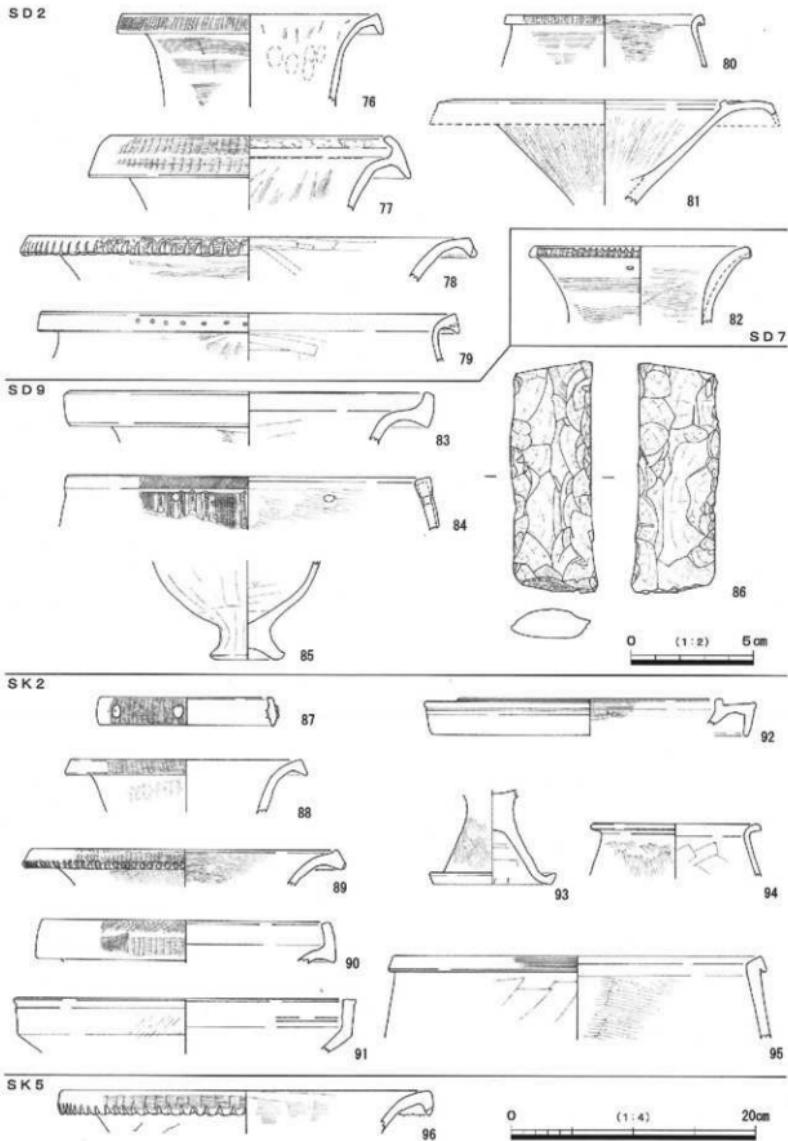
ピットは、D区SP3が直径40cmを測り、その他は直径15~25cm程度のものであった。

G~M区においては狭い範囲での土層の確認であったが、G区では現地表下0.8m、H・I・K・M区では現地表下0.5mで遺物包含層が確認でき、L区では、現地表下0.4mで土坑もしくはピットと考えられる遺構が検出できた。平面形状は不明であるが、土層断面の観察から深さ30cm程度と考えられ、埋土には土器が多く含まれる。

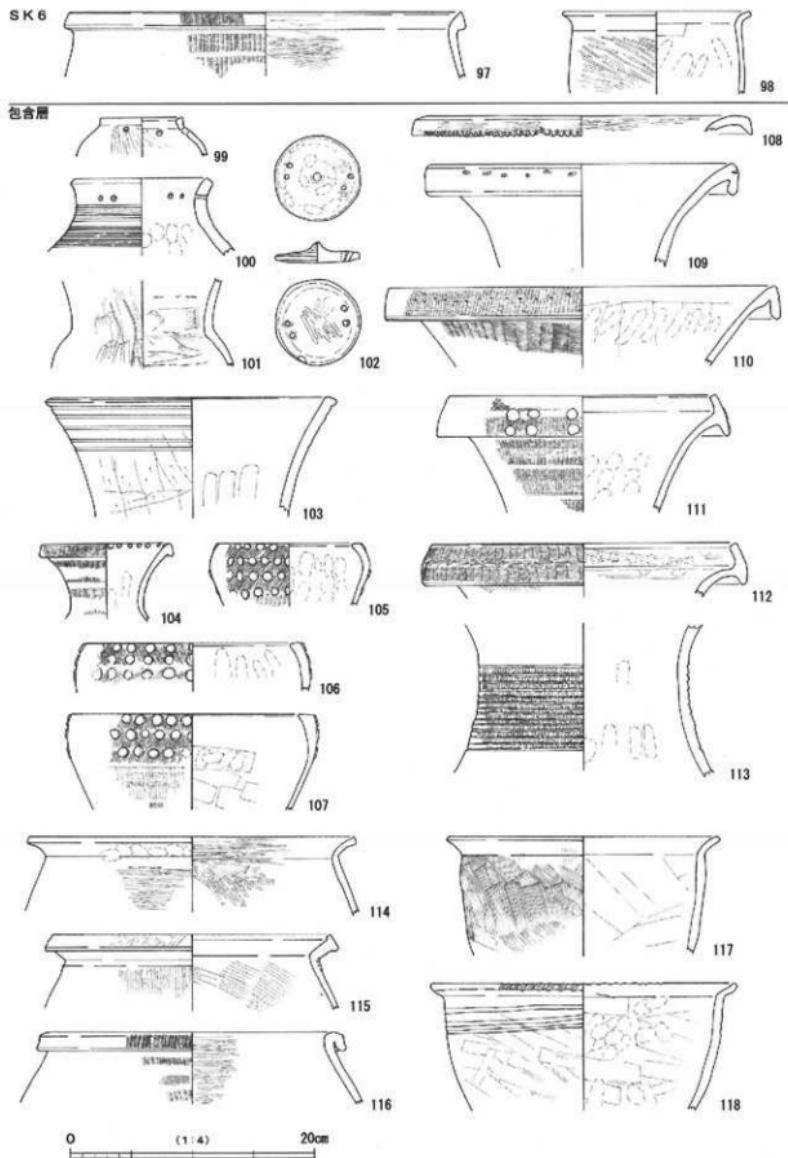
遺物は、遺構及び遺物包含層から、I~IV期にわたる弥生土器及び石器類が多量に出土した。(第57~60図)



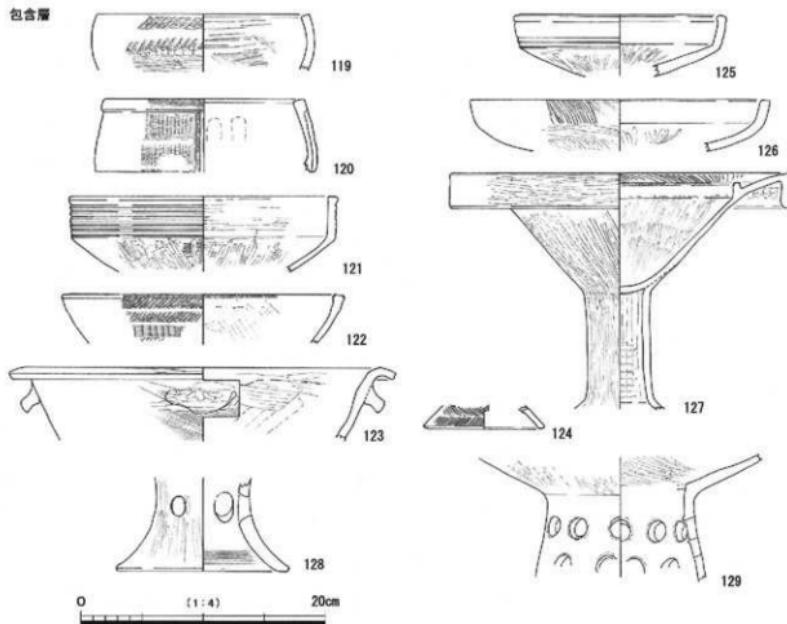
第56図 出土遺物実測図(6)



第57図 出土遺物実測図(7)



第58图 出土遗物实测图(8)



第59図 出土遺物実測図(9)

遺構からは、溝のSD2の広口壺(76~78)・甕(79)・鉢(80)・水平口縁の高杯(81)、SD7の広口壺(82)、SD9の広口壺(83)・鉢(84)・鉢脚部(85)・サスカイト製の石剣(86)などがある。土坑では、SK2の広口壺(87~90)・鉢(91)・水平口縁の高杯(92)・高杯脚部(93)・甕(94・95)、SK5の広口壺(96)、SK6の鉢(97)・甕(98)などがみられる。

遺物包含層からは壺(99~101・103~113)及び蓋(102)・甕(114~118)・鉢(119~124)・高杯(125~127)・器台(128~129)などの多種多様な弥生土器と、石器類(130~146)が出土している。

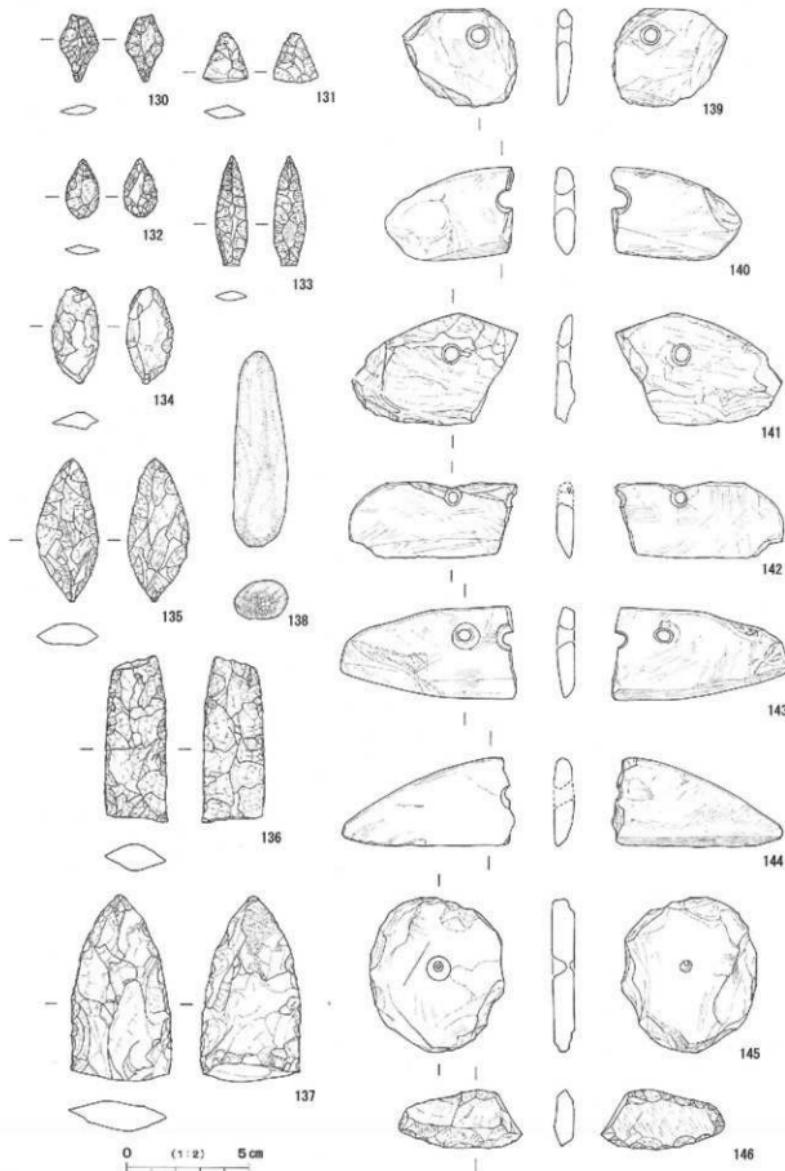
99は無頸壺、100は短頸壺で、102は壺の蓋で対になる紐孔が穿たれている。104は口縁部内面に、105~107は口縁部外面に円形浮文を施している。108~113は広口壺で、口縁部の装飾は、108は端部に刺み目、109は刺突文、110は櫛描籠状文に刺突文、111は櫛描籠状文に円形浮文、112は2条の櫛描籠状文に扇形文を施している。甕の117・118は全体が倒錐形を呈するとみられ、出土している土器の中でも古い様相で弥生時代前期後半頃に比定される。

石器は、図化したサスカイト製の石鎌(130~135)・石槍(136)・石剣(137)などの他、剥片や石核も多く出土している。また、綠泥片岩製の石庖丁(139~144)、紡錘車の未成品(145)、石棒(138)も出土している。

【参考文献】

- ・高萩千秋2006.3「4-3. 恩智遺跡(2005-254)の調査」『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告53 平成17年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

包含層



第60圖 出土遺物實測圖 (10)

7) 恩智遺跡(2009-220)の調査

(1) 調査地：恩智中町2丁目24番(第31図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 1箇所(1区)、 $2.0 \times 2.5\text{m}$ - 1箇所(2区)、面積約 9.0m^2 について、現地表(T.P.+22.1m)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10E29(調査地東部:T.P.+23.163m)である。

【地層】0層は客土・盛土、以下現地表下2.0m前後までの1.7m間ににおいて9層の基本層序を確認した。1層(T.P.+21.6~21.9m)は旧耕土。2・3層(T.P.+21.0~21.6m)は搅拌され作土の可能性がある。4層(T.P.+20.8~21.4m)は洪水砂で1区が低い。5~7層(T.P.+20.4~21.1m)は縄文時代の遺物包含層である。遺物の包蔵は6層が多く、また2区で見られた7層は遺物の包蔵は少量で、焼土や炭を多く含み、整地層の可能性がある。8層(T.P.+20.6m以下)は洪水砂で2区が低い。1区9層(T.P.+20.5m以下)からも土器細片が出土しており、縄文時代の遺物包含層の可能性がある。

【検出遺構】なし。

【出土遺物】5~7層(T.P.+20.4~21.1m) - 土器の他、サヌカイト石核・剥片がある。土器は後期を中心で、晩期と思われる粗製土器も見られる。

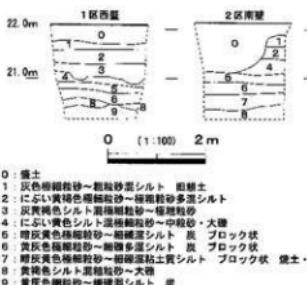
1区5・6層-1は浅鉢で、口縁端部は小さく外反する。調整はヘラミガキである。2~12は深鉢と思われる。2は調整は内面ナデ、外面はヘラミガキを加えているようであるが不明瞭である。3・4は外面幅広のヘラナデ(ミガキ?)、内面は二枚貝の可能性がある余痕が認められ、同一個体の可能性が高い。5は内外面二枚貝条痕、6は内外面ヘラミガキと思われる。7は口縁端部に不規則な刻み目が見られる。8は体部に結節縄文が見られ、後期中葉の一乗寺K式に類似がある。9・10は口縁端部外面に縄文を施す縁帶文土器で、後期前半の北白川上層式と考えられる。11・12は波状口縁の谷部の細片で、11は沈線で区画された口縁部に擦消縄文を施す。後期前葉の中津式に比定される。12は無文である。13は浅鉢の肩部と考えられるが詳細は不明。精製品で、2条の沈線間に擦消縄文を施す他、縦方向の沈線が見られる。なお胎土・色調等から12と同一個体の可能性が高い。14は屈曲部に沈線を巡らせる。15は上げ底状の底部である。

2区5~7層-16は外面に条痕を施す深鉢である。17-18は口縁端部外面に縄文を施す縁帶文土器で、北白川上層式と考えられる。19は口縁端部が内側に屈曲し、外面に沈線を施す。20は深鉢と考えられ、口縁部に角状突起を有する。口縁部外面には突起に沿うように沈線・刺突文を施す。突起先端に黒斑を有する。後期後半の元住吉山I式か?。なお東海地方における中期中葉の北屋敷式に類似がある。21は上げ底状の底部である。

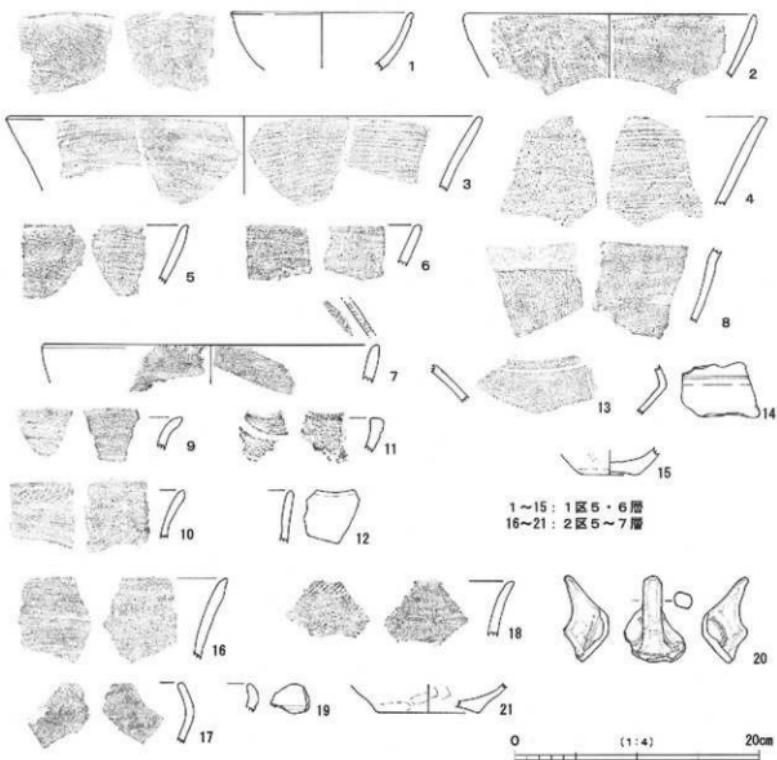
(3)まとめ：調査では縄文時代の遺物包含層が検出された。南西部の「天王の杜」周辺の調査地では縄文時代晩期の集落域が確認されているが、今回の調査により当地に後期、あるいは中期に遡る集落の存在が確実になったと言えよう。

【参考文献】

- 森本めぐみ 2003『恩智遺跡(第11次発掘)』『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・)『沢光則編 1994『縄文時代研究辞典』東京堂出版
- ・)京都大学文学部博物館 1991『先史時代の北白川』



第61図 断面図



第62図 出土遺物実測図

8) 葦振遺跡(2008-535)の調査

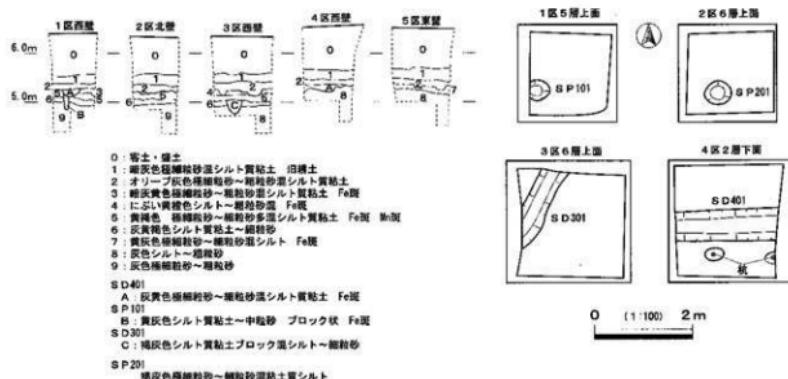
(1) 調査地： 葦振町3丁目40-16他(第63図参照)

(2) 調査概要： 平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 2箇所、 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 3箇所(西から1～5区)、面積約 26.75m^2 について、現地表(T.P.+6.4m)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北東部に位置する交差点中央：T.P.+6.4m)である。

【地層】 0層は客土・盛土。以下現地表下 2.0m 前後までの1.2m間において9層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+5.4～5.7m)。2・3層(T.P.+5.2～5.5m)は攪拌された作土で、時期は中世～近世であろう。1～4区では2層下面で東西方向の溝が見られた。4層(T.P.+5.2m)は3区でのみ見られた水成層である。5層(T.P.+5.0～5.2m)は1～3区で見られた遺物包含層で、古墳時代後期の須恵器や時期不明の土師器片が出土した。1～3区6層(T.P.+4.9～5.1m)、5区7層(T.P.+5.2～5.4m)は攪拌され、下位水成層の土壤化部分と捉えられる。8層以下(1～3区:T.P.+4.9～5.0m以下、4・5区:T.P.+5.2～5.3m以下)は水成層で、河川堆積である。

【検出遺構・出土遺物】 4区2層下面(T.P.+5.3m) - 東西方向の溝1条(S D401)と南に平行する杭列を検出した。S D401は幅約60cm・深さ約15cmを測る。1～3区でも同様の溝が見られ、3区で時期不明の土師器片が出土している。耕作闊達の溝であろう。1区5層上面(T.P.+5.2m) - ピット1個(S P101)を検出した。直径約45cmの円形で、深さ約30cmを測る。遺物は出土していない。2・3区6層上面(T.P.+5.0～5.1m) - ピット1個(S P201)、溝1条(S D301)を検出した。S P201は直径約50cmの円形で、深さ約20cmを測る。時期不明の土師器・須恵器片が少量出土した。S D301は北東-南西方向に伸び、幅約50cm・深さ約30cmを測る。遺物は出土していない。

(3)まとめ： 調査では全域で中世～近世頃の作土・耕作溝を確認した。また下位では西部の1～3区でピット・溝を検出した。包含層出土遺物から、時期は古墳時代後期以降と考えられる。この集落域は東の4・5区には広がらず、遺物も全く見られなかった。



第63図 平断面図(断面水平: 1/200)

9) 莢振遺跡(2009-75)の調査

(1) 調査地：緑ヶ丘1丁目63番3(第32図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 2.5×2.5 m、面積約 $6.25m^2$ 1ヶ所について、現地表(T.P.+7.1m前後)下1.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3B129(調査地西約50m地点:T.P.+7.007m)を使用した。

【地層】現地表(T.P.+7.1m)下0.4m前後までは、盛土(0層)。以下現地表下1.5m前後までの1.1m間において6層の地層を確認した。1層は灰色粗粒砂混粘土の旧耕作土。2層は灰色細粒砂混粘土で、中世頃の土器の破片が少量出土した。3層は褐色細粒砂混粘土で、古墳時代中期～平安時代頃の土器・須恵器の破片が少量出土した。上面は土壤化し、鎌倉時代の遺構を検出した。4層は褐灰色細粒シルト質粘土。5層は黒褐色細粒シルトで、上面は土壤化している。上面で調査を行ったが遺構・遺物の検出はなかった。6層は灰白色粗～細粒砂で、5・6層は河川堆積である。

【検出遺構】

3層上面で調査を行い、鎌倉時代の小穴2個(S P101・102)、溝1条(S D101)を検出した。

S P101は北東部で検出した。遺構の北東側は調査区外に至る。検出した平面形状から推測すると径0.3mの円形になると思われる。深さは0.1m以上を測る。埋土は褐色粗粒シルト質粘土で、鎌倉時代頃の土器の破片が少量出土した。

S P102は南東部で検出した。遺構の南東側は調査区外に至る。検出した平面形状から推測すると一边0.2mの隅丸方形になると思われる。深さは0.1m以上を測る。埋土は褐色粗粒シルト質粘土で、鎌倉時代頃の土器の破片が少量出土した。

S D101は中央部で検出した。平面形状は南北方向に直線に伸び、幅は0.6mを測る。断面形状は皿形を呈し、深さは0.1mを測る。埋土は黄褐色粗粒シルト質粘土で、鎌倉時代頃の土器・瓦器の破片が少量出土した。

【出土遺物】S P101・102、S D101、2層、3層からは土器・須恵器などの破片が少量出土したが、図化できるものはなかった。

(3)まとめ：今回の調査では、3層上面で鎌倉時代の遺構(小穴2個・溝1条)を検出した。これら遺構は南側で調査を行った調査地(西村1993)でも検出しておらず、同時期の遺構は北側へ広がっていることが確認できた。また、3層からは古墳時代中期・後期、奈良時代頃の須恵器の破片が出土していることから、同時期の遺構が周囲に存在している可能性が高いと推測される。

【参考文献】

- ・西村公助1993「VI 莢振遺跡第8次調査(KF89-8)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37』(財)八尾市文化財調査研究会



第64図 平断面図

10) 萱振遺跡(2009-179)の調査

(1) 調査地：萱振町5丁目85番の一部及び86番(第32図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ 、面積約 6.25m^2 1ヶ所について、現地表(T.P.+6.3m前後)下1.8m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3B142(調査地西約100m地点:T.P.+6.547m)を使用した。

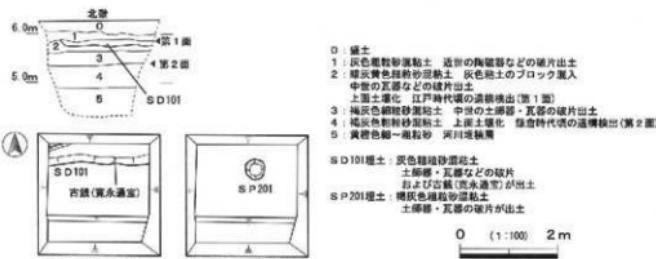
【地層】 現地表(T.P.+6.3m)下0.3m前後までは、盛土(0層)。以下現地表下1.8m前後までの1.5m間ににおいて5層の地層を確認した。1層は灰色粗粒砂混粘土で、近世の陶磁器などの破片が出土した。2層は暗灰黄色細粒砂混粘土で灰色粘土のブロックが混入する。中世の瓦器などの破片が出土した。上面は土壤化しており、江戸時代頃の遺構を検出した(第1面)。3層は褐灰色細粒砂混粘土で、中世の土師器・瓦器の破片が出土した。4層は褐灰色粗粒砂混粘土で、上面は土壤化しており、鎌倉時代頃の遺構を検出した(第2面)。5層は黄橙色細～粗粒砂の河川堆積である。

【検出遺構】

2層上面で江戸時代の溝1条(S D101)、4層上面で鎌倉時代の小穴(S P201)を検出した。

S D101は北部で検出した。平面形状は東西方向に直線に伸び、幅は0.4mを測る。断面形状は皿形を呈し、深さは0.14mを測る。埋土は灰色粗粒砂混粘土で、土師器・瓦器などの破片および銭貨(寛永通宝)が1枚出土した。なお銭貨は埋土内の上部から文字の面を下にして出土した。

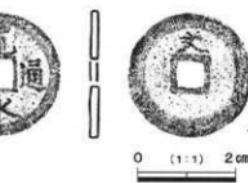
S P201は中央で検出した。平面形状は円形で、径0.4mを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは0.1mを測る。埋土は褐灰色粗粒砂混粘土で、土師器・瓦器の破片が出土した。



第65図 平面図

【出土遺物】 1層から近世の陶磁器、2層から中世の瓦器、3層からは中世の土師器・瓦器の破片が出土し、S D101からは土師器・瓦器などの破片および銭貨が、S P201からは土師器・瓦器の破片が出土した。この内図化したものは銭貨(1)である。1は江戸時代【1636年(寛永13年)】以後幕末まで鑄造された銅銭である。

(3)まとめ：今回の調査では、2層上面で江戸時代の溝1条を検出した。この遺構は江戸時代に埋没したと推測できることから、環濠集落の形態を残す萱振地域の町並みを考える上で貴重な資料になると思われる。また、4層上面では環濠集落形成以前と推測される鎌倉時代の遺構も確認した。



第66図 出土遺物実測図

【参考文献】

- 櫻井敏雄他1988『寺内町の基本計画に関する研究－久宝寺寺内と八尾寺内を中心として－』八尾市教育委員会

11) 木の本遺跡(2009-57)の調査

(1) 調査地：南木の本3丁目1-8(第31図参照)

(2) 調査概要：平面規模約3.5×3.5m-1箇所(浄化槽部分)、約2.5×2.5m-14箇所(人孔部分)(合計面積99.75m²)について、現地表(T.P.+10.1m前後)下浄化槽部分は3.5m前後、人孔部分は2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西側の道路上:T.P.+10.1m)である。

【地層】0層は盛土、以下現地表下3.5m前後までの2.6m間において8層の層序を確認した。1層は旧耕作土(T.P.+9.2m前後)である。2層(T.P.+9.1m前後)の粘土層は細粒砂が混じる攪拌された土で、中世から近世の耕作土と思われる。層内からは土師器・瓦器の破片が極少量出土した。3層(T.P.+8.8m前後)は粘土で、上面は攪拌を受け土壤化しており、中世の耕作土に推定できる。3層上部の攪拌された土からは中世の土師器・瓦器の破片が極少量出土した。4層(T.P.+8.5m前後)は粘土質細粒シルト～粗粒砂の水成堆積。5層(T.P.+8.2m前後)は細粒シルト質粘土、6層(T.P.+7.8m前後)は粘土、7層(T.P.+7.5m前後)は細粒シルト質粘土、8層(T.P.+7.3m前後)は粘土で植物遺体を多く含む。5～8層は湿地帯を示す泥状の堆積土であった。

また、7・10・12・15区では河川堆積を確認した。7区の4層(T.P.+8.5m前後)は細粒砂で、層厚0.9mを測る。10区の4層(T.P.+8.6m前後)は粗～細粒シルトで、層厚0.3m以上を測り、東部は深く落ち込んでいる。12区の6層(T.P.+8.4m前後)は粗粒砂で、層厚0.9m以上を測る。13区の6層(T.P.+8.2m前後)は粗粒砂で、層厚0.2m以上を測り、東部に緩やかに落ち込んでいる。15区の6・7層(T.P.+8.5m前後)は細粒シルト～粗粒砂で、層厚0.75m以上を測る。

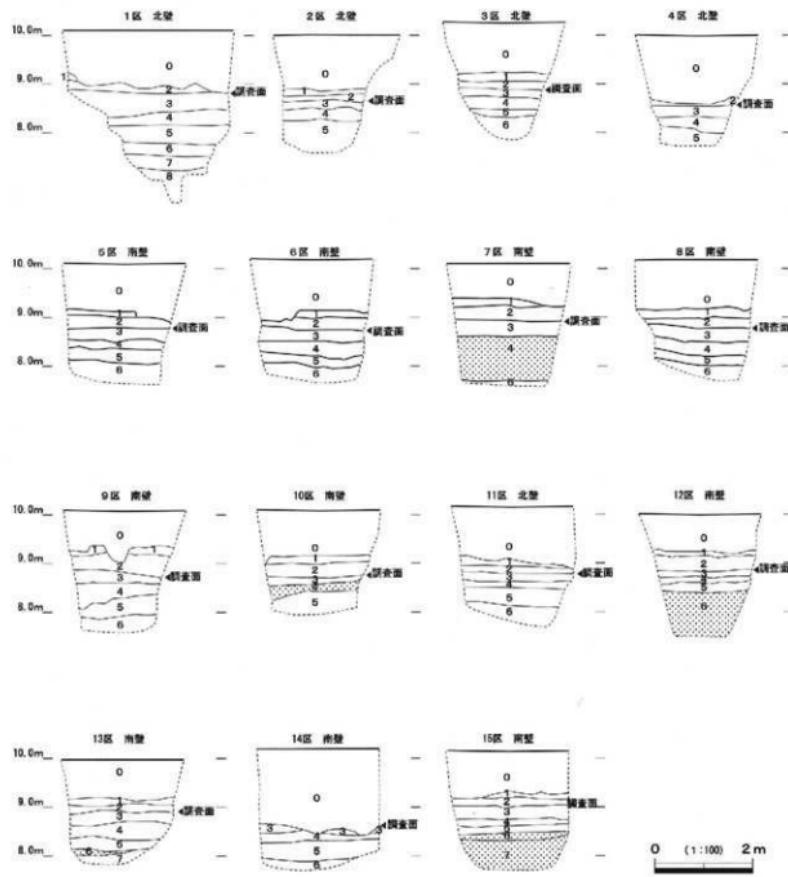
【検出遺構】なし

【出土遺物】1・6区の2層と14・15区の3層からは中世の土師器・瓦器・瓦の破片が極少量出土した。

(3)まとめ：今回の調査では、3層上面(T.P.+8.8m)で、調査を実施したが、遺構の検出はなかった。この地層の上面は攪拌を受けていることから、中世の作土の可能性が高い。出土遺物は1・6区の2層と14・15区の3層のみであることから、今回の調査地よりさらに東部と西部に中世の集落が存在している可能性が考えられる。中央の7区と10区では3層以下で砂層を確認していることから、中世以前の河川が南東から北西方向に伸びていた可能性が考えられる。この河川は、大阪府教育委員会が実施した平野川改修工事に伴う発掘調査のN.R001に相当すると推測できるであろう(岩瀬他1999)。また、12・13・15区でも5層以下で砂層を確認したことから、時期は不明であるが、古代以前の河川が存在していたと思われる。調査区全域の地層を見て推測すると、中世以前は河川または湿地帯であったと言えるであろう。

【参考文献】

- ・岩瀬 透 横川 明1999『木の本遺跡発掘調査概要・IV-1 級河川平野川改修工事に伴う発掘調査』大阪府教育委員会



第67図 1～15区断面図

12) 久宝寺遺跡(2009-40)の調査

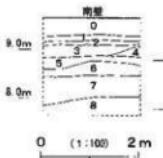
(1) 調査地：渋川町5丁目10-54(第29図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ 、面積約 4.0m^2 1ヶ所について、現地表(T.P.+9.65m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地西部に位置する市道T字路中央:T.P.+9.6m)である。

【地層】現地表下0.4m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土、及び搅乱(0層)である。以下現地表下2.0m前後までの1.6m間において8層の基本層序を確認した。1層はにぶい黄橙色シルト質粘土(T.P.+9.2~+9.3m)である。2層は中世以降の水田耕作土の可能性が高い。3層は河川堆積層である。平瓦細片が出土した。4~5層は酸化の顕著なシルト質粘土～粘土質シルト。6~7層は粘性の強い湿地性堆積層である。8層は水田耕作土の可能性が高い。古式土師器細片が混在していた。

【出土遺物・出土遺物】検出遺構はなし。出土遺物は3層内より平瓦細片が、8層内より古式土師器細片が少量出土した。

(3)まとめ：今回の調査では、3層と8層において遺物包含層を確認した。この内3層は、古代～平安時代に機能していた河川堆積層の可能性が高い。8層については、古墳時代初頭～前期の水田耕作土層の可能性が推測される。周辺において、当水田を経営した集団の居住域が検出されることが予測され、周辺で行われる開発等には注意が必要と思われる。



第68図 断面図

13) 久宝寺遺跡(2009-302)の調査

(1) 調査地：渋川町6丁目4-1(第32図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 4箇所、 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 1箇所(北から1~5区)、面積約 29m^2 について、現地表(T.P.+9.1m)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点20B14(調査地西部:T.P.+8.911m)である。

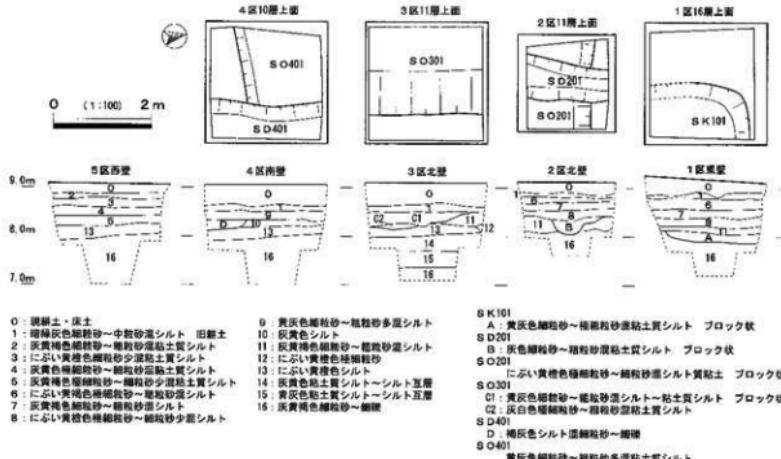
【地層】0層は現耕土・床土。以下現地表下2.0m前後までの1.9m間において16層の基本層序を確認した。1層は旧耕土(T.P.+8.5~+8.9m)で、1~4区に見られる。1~2・5区2~8層(T.P.+8.2~+8.8m)にはMn斑を多く含む均質な層相で、島畑盛土である。時期は近世であろう。1~4区9~11層(T.P.+8.1~+8.5m)は搅拌された水田耕作土である。1~4区で溝等の遺構を検出した。12層以下(T.P.+8.3m以下)は河川堆積の水成層で、12~15層がシルト～極細粒砂互層、16層が細粒砂～細礫互層である。

【検出遺構】

1区11層下面(T.P.+8.1m) - 土坑1基(SK101)を検出した。南北2.0m以上・東西1.1m以上・深さ約20cmを測り、埋土はブロック状を成す。耕作に伴う遺構の可能性があるが詳細は不明である。11世紀頃の黒色土器碗・土師器皿の細片が数点出土した。

2区11層上面(T.P.+8.4m) - 溝1条(SD201)、落込み1基(SO201)を検出した。SD201は幅約0.8m・深さ約35cmを測り、南北方向に伸びSO201を切っている。埋土はブロック条を成す。SO201は東西方向の肩から南に約20cm落ち込むもので、耕作に伴う段差と思われる。遺物は出土していない。

3区11層上面(T.P.+8.5m) - 落込み1基(SO301)を検出した。耕作に伴う段差と思われる。南北方向の肩から東に約40cm落ち込むもので、埋土はブロック状の上層(C1)と水成層の下層(C2)から成る。上層



第69図 平断面図

から16世紀代に比定される土師器羽釜・甕、瓦器鉢、備前焼摺鉢等が出土した。

4区10層上面(T.P.+8.3m)一構1条(S D401)、落込み1基(S O401)を検出した。S D401は幅0.8m以上・深さ約20cmを測り、南北方向に伸びS O401を切っている。埋土はめ碌層で、洪水で一気に埋まつた可能性がある。S O401は東西方向の肩から北に約10cm落ち込むもので、耕作に伴う段差と思われる。遺物は出土していない。

【出土遺物】

S K101-1は「て」の字状口縁の土師器皿で11世紀代に比定される。

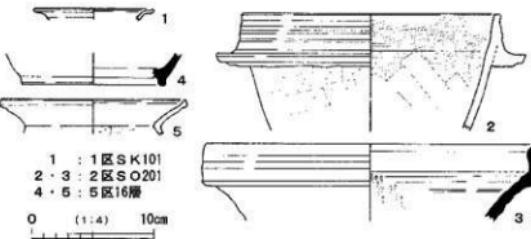
S O201-2は土師器羽釜で、銚子下面以下に煤が付着する使用品である。3は備前焼摺鉢で、摺目は6本以上で右下から左上方向に施す。共に16世紀代に比定される。

5区16層-4は奈良時代に比定される須恵器杯身である。5は庄内式甕で、古墳時代初頭後半(庄内式期新相)に比定される。共に磨耗が著しい。

(3)まとめ: 調査では全域で中世末(16世紀)～近世の生産関連遺構を検出した。また北端の1区では平安時代後期のS K101を検出した。遺構の性格としては耕作関連が考えられ、下位の河川が奈良時代頃に埋没した後、この時期に生産域となつた可能性がある。

【参考文献】

- ・藤井邦弘1998「1. 久宝寺遺跡(97-186)の調査—南久宝寺地区埋蔵文化財試掘調査概要報告ー」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書II 八尾市文化財調査報告39 平成9年度公共事業』八尾市教育委員会



第70図 出土遺物実測図

14) 郡川遺跡(2009-318)の調査

(1) 調査地：郡川3丁目39番の一部、40番の一部(第33図参照)

(2) 調査概要：平面規模約2.0×1.5m(1区)と2.0×3.0m(2区)を各1箇所、計2箇所(面積約9.0m²)について、現地表(T.P.+20.5m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南西約100m地点:T.P.+16.950m)である。

【地層】0層は客土・盛土。以下6層の基本層序

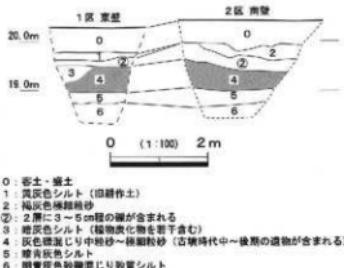
を確認した。1層は旧耕土(T.P.+19.5～19.6m)2区は既存の造成によって削平)。2～4層(T.P.+19.0～19.6m)は、層厚0.7m前後を測る河川あるいは洪水に起因される堆積層で、出土遺物から古墳時代前期～後期に比定されるものと思われる。5・6層(T.P.-19.0m以下)は湿地性の砂質シルトである。

【検出遺構】なし。

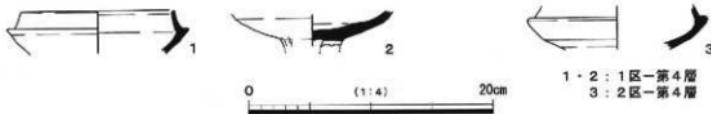
【出土遺物】両地区とも河川あるいは洪水に起因されるとみられる4層から、古墳時代後期(6世紀中葉)に比定される須恵器の破片が数点出土した。そのうち図化できたものは、1区から杯身(1)・

高杯(2)、2区から杯身(3)の3点である。杯身2点(1・3)は、口縁部の内傾度が強く、端部を丸くおさめる。高杯(2)は長脚で透かしのあるものと見られる。以上は、TK10型式におさまるものであろう。

(3)まとめ：調査では集落等に伴う遺構は確認されなかつたが、河川あるいは土石流に起因すると見られる堆積層と、これらの流れ込みによる古墳時代中期～後期にかけての遺物を検出することができた。当該期について、当遺跡内で実施された既往の調査成果を見ると、北約50m地点に郡川東塚古墳(6世紀前半)、西約30m地点(当研究会第6～8次)で河川跡や包含層、また、南西約300m地点(当研究会第2次)では、東西幅約18m、深さ約2mを測る河川が検出されている。検出した遺物や堆積層の状況から、付近に当該期の居住域が存在することは必至であり、当地がもと谷状の地形を呈していたことも想定される。



第71図 断面図



第72図 出土遺物実測図

【参考文献】

- ・藤井淳弘2003『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48
- ・原田昌則1999『III 郡川遺跡第2次調査(KR90-2)』財團法人八尾市文化財調査研究会報告64
- ・木村健明・成海佳子・西村公助2009『郡川遺跡 I 第6次調査 II 第7次調査』財團法人八尾市文化財調査研究会報告125

15) 小阪合遺跡(2009-197)の調査

(1) 調査地：山本町南8丁目169番の一部(第34図参照)

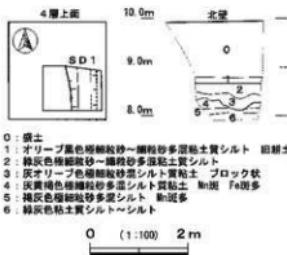
(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 1箇所、面積約 4.0m^2 について、現地表(T.P.+9.9m)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3D074(調査地南部:T.P.+9.917m)である。

【地層】0層は客土・盛土。以下現地表下 2.0m 前後までの 0.9m 間において6層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+8.65~8.8m)。2層(T.P.+8.4~8.65m)も搅拌された作土で、時期は中世~近世であろう。3層(T.P.+8.3~8.5m)はブロック状を呈し、4層上面で検出した溝(SD1)にも落ち込んでいる。作土か、あるいは整地層の可能性もある。4層(T.P.+8.15~8.35m)は土壤化の著しい遺物包含層である。5層(T.P.+8.05~8.15m)は6層の土壤化部分である。6層(T.P.+8.05m以下)は水成層である。

【検出遺構】4層上面(T.P.+8.3m)で南北方向の溝1条(SD1)を検出した。幅約60cm・深さ約20cmを測り、埋土は3層にあたる。遺物は出土していない。

【出土遺物】4層-古墳時代前期頃の土器片が数点出土。

(3)まとめ：調査では古墳時代前期頃の遺物包含層を確認した。遺構は見られなかつたが、西部で確認している当該期の集落が当地にも広がっていると考えられる。



第73図 平断面図

【参考文献】

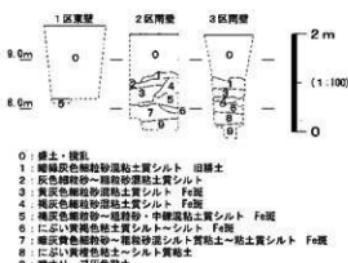
- 坪田真「I 小阪合遺跡(第42次調査)」『小阪合遺跡 中田遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告126』財団法人八尾市文化財調査研究会

16) 渋川廃寺(2008-217-2)の調査

(1) 調査地：春日町1丁目11番1(一部)(第29図参照)

(2) 調査概要：今回の調査は平成20年度調査に引き続き対象地内東部で実施したものである。平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 1箇所、 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 2箇所(西から1~3区)、面積約 14.25m^2 について、現地表(T.P.+9.5~9.7m)下 $1.5\sim 2.1\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南東部に位置する交差点中央:T.P.+9.6m)である。

【地層】0層は客土・盛土。以下現地表下 2.1m 前後までの 1.2m 間において9層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+8.4~8.7m)。2~4層(T.P.+8.1~8.6m)、5層(T.P.+8.0~8.3m)は搅拌された作土で、前者が近世頃、後者が中世頃に比定されよう。2~3区の3・4層下面では南北方向に平行する耕作溝が見られた。6層(T.P.+7.9~8.1m)の粘土質シルトシルトは水成層である。8層以下(T.P.+7.9m以下)は粘土を基調とする水成層で、沼沢地状の堆積である。2区7層(T.P.+7.8~8.1m)は8層に似るが、搅拌が



第74図 断面図(水平:1/200)

認められ作土化していると考えられる。時期は古代頃か。

【検出遺構】2・3区の3・4層下面(T.P.+8.1m)－南北方向に平行する耕作溝を検出した。

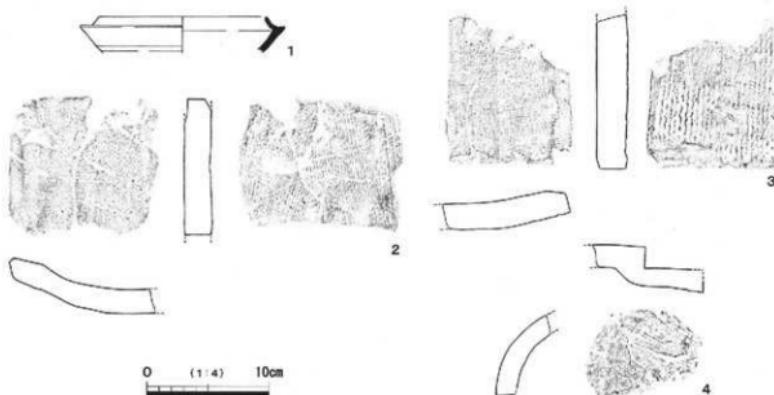
【出土遺物】3・4層－古代～中世頃の土師器。平瓦。5層－6世紀以降の土師器・須恵器。平瓦。7層－6世紀以降の土師器・須恵器。平瓦・丸瓦。9層－時期不明の土師器。

2区7層出土の1～4を図化した。1は須恵器杯身で6世紀後半に比定される。2・3は共に凹面布目、凸面縄目タタキの平瓦で、焼成は2がやや不良、3は良好、色調は2が暗灰色、3が淡褐色を呈する。4は丸瓦の玉縁部で、調整は凹面布目、凸面ナデである。奈良～平安時代に比定される。

(3)まとめ：調査では中世～近世頃の耕作土及び耕作溝や、古代頃の耕作土と思われる地層を確認した。西部の20年度調査区と同様、渋川庵寺関連の遺構は認められず、耕作土中より瓦が出土する状況であった。相当量の瓦が含まれていることから、当地が渋川庵寺の寺域に含まれる可能性もあるが、出土した平瓦は布目タタキを施す奈良時代以降のもので、創建期である飛鳥時代に遡るものは認められない。

【参考文献】

- 坪田真一・金親満夫 2003『渋川庵寺 第2次調査・第3次調査 財団法人八尾市文化財調査研究会報告79』財団法人八尾市文化財調査研究会

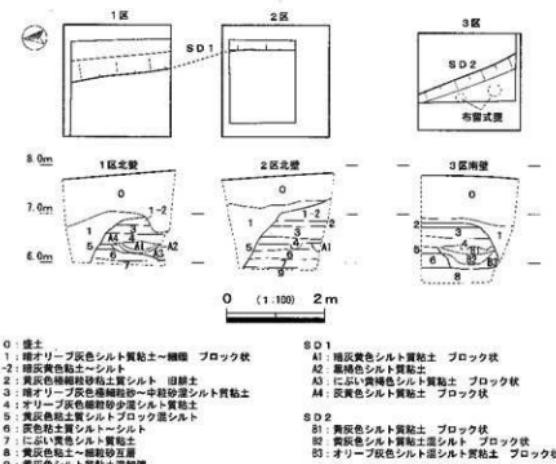


第75図 出土遺物実測図

17) 東郷遺跡(2009-126)の調査

(1) 調査地：桜ヶ丘3丁目112-1～5(第36図参照)

(2) 調査概要：平面規模約2.0×2.0m-3箇所(北から1～3区：面積約12.0m²)について、現地表(約T.P.+7.8m)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1A085(調査地北西部：T.P.+7.667m)である。



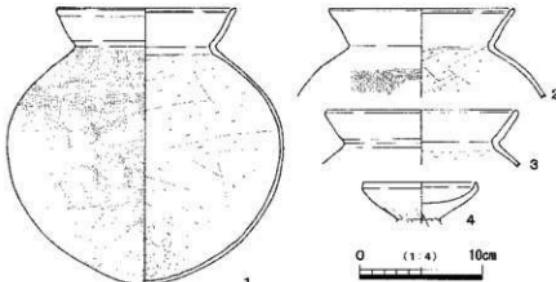
第76図 平断面図

【地層】0層は盛土。以下現地表下2.0m前後までの1.4m間において9層の基本層序を確認した。1層は調査地西部を縦断する河川(水路)の埋土、1-2層はその肩付近の堆積土。この河川は昭和36年の地図に見られるもので、現地表下2.0m以下に及んでいる。2層(T.P.+6.8m前後)は旧耕土。3・4層(T.P.+6.4～6.8m)は攪拌されグライ化した層相で、中世～近世の作土であろう。4層下面では耕作痕と考えられる起伏が認められる。5

層は6層の土壤化部分で、上面(T.P.+6.4m)が遺構面である。6層以下は水成層である。

【検出遺構】

1～2区で溝1条(S D 1)、3区で溝1条(S D 2)を検出した。南北方向、北西～南東方向に伸びる溝で、共に深さは40cm程度を測る。埋土はS D 1が4層、S D 2が3



第77図 出土遺物実測図

層から成り、よく似た層相でブロック土を基調とする。古墳時代前期(布留式期中相)の土器が出土しており、SD1は破片が少量、SD2は横位で土圧により潰れた状況の甕2点を含んでいる。

【出土遺物】

SD2-1～3は布留式甕である。1・2が土圧により潰れた状況で出土したもので、1は図上で完形に復元したが、2は遺存状況が悪く復元不可能であった。共に体部外面ハケ調整で、1は最上位にタテハケを施す。1は口径14.8cm・器高22.6cm・体部最大径22.5cmを測る。4は小形器台である。これらは古墳時代前期前半(布留式期古相)に比定される。

(3)まとめ：調査では古墳時代前期布留式期の構2条を検出した。同様の溝は北部・南部の調査地でも検出されており、有機的な関連が窺え、いずれかの溝に連続する可能性もある。

【参考文献】

- ・西村公助2006「III 東郷遺跡第59次調査(TG2003-59)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告90』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪井真一・島田裕弘・菊井伸弥・河村恵理2006「22. 東郷遺跡第64次調査(TG2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

18) 東郷遺跡(2009-170)の調査

(1)調査地：桜ヶ丘3丁目112番地の一部(第36図参照)

(2)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0m²1ヶ所について、現地表(T.P.+7.8m前後)下2.1m前後までを調査した。調査で使用した高さの基準は、八尾市街区多角補助点IA085(調査地北西50m地点:T.P.+7.667m)である。

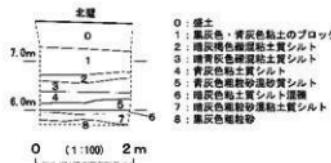
【地層】現地表(T.P.+7.8m)下0.5～0.6m前後までは、既存建物取壊しの際の盛土・攪乱や建設時の整地(0層)が見られる。以下現地表下2.1m前後までの1.6m間において8層の地層を確認した。1層は黒灰色粘土・青灰色粘土などからなるブロック層で、近年の埋立てによる整地層である。以下2～4層はいずれもグラウイ化しており、中世頃までの作土の可能性がある。5層は上面が土壤化しており、古墳時代前期の遺構ベースとなる地層である。6・7層は砂礫を含む粘土質シルトで、以下、含水層である8層黒灰色粗粒砂に至る。

【出土遺物】1層から、近現代の遺物とともに、古墳時代の須恵器片が若干出土しているほか、4層からは土師器片・瓦片のほか、不明金属製品(銅か?)が出土している。

(3)まとめ：今回の調査では、現地表下1.6m(T.P.-6.2m)前後で古墳時代の遺構ベースとなる5層を検出した。当地の北西25m地点の調査地(2009-126)では、古墳時代前期布留式期の遺構が検出されていることから、当地にも同時期の遺構面が存在していることが判った。

【参考文献】

- ・本書平成21年7月23日調査
- ・坪井真一・島田裕弘・菊井伸弥・河村恵理2006「22. 東郷遺跡第64次調査(TG2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助2006「III 東郷遺跡第59次調査(TG2003-59)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告90』財団法人八尾市文化財調査研究会



第78図 断面図

19) 東郷遺跡(2009-187)の調査

(1) 調査地：桜ヶ丘1丁目56(第36図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $3.0 \times 3.0\text{m}$ - 1箇所、 $3.0 \times 2.5\text{m}$ - 2箇所(北から1～3区)、面積約 24.0 m^2 について、現地表(T.P.+7.7m～8.0m)下1.5m～2.6m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1A142(調査地南西部:T.P.+7.838m)である。

【地層】0層は盛土・搅乱。以下現地表下2.6m前後までの0.9～2.2m間において12層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+7.0～7.2m)で、2・3区に見られる。1・2区2・3層(T.P.+7.0～7.5m)は島畑盛土・作土、3区4層(T.P.+6.85～7.1m)は水田作土で、近世以降の耕作土である。1・2区5層(T.P.+6.9～7.1m)は搅拌の著しい作土で、奈良時代頃までの土器片が多く含む。1・2区6・7層(T.P.+6.7～6.9)はFe斑を多く含み土壤化している。8層(T.P.+6.7m前後)は1区でのみ見られた。粘土質シルト～極粗粒砂が互層状を成す層で、炭を含んでいる。整地層の可能性がある。9層は10層の土壤化層で、搅拌される。上面(T.P.+6.8m前後)が古墳時代初頭の遺構面である。10層以下は水成層で、遺物は見られなかった。2区は10層のシルト～極細粒砂が厚く堆積する。

【検出遺構・出土遺物】

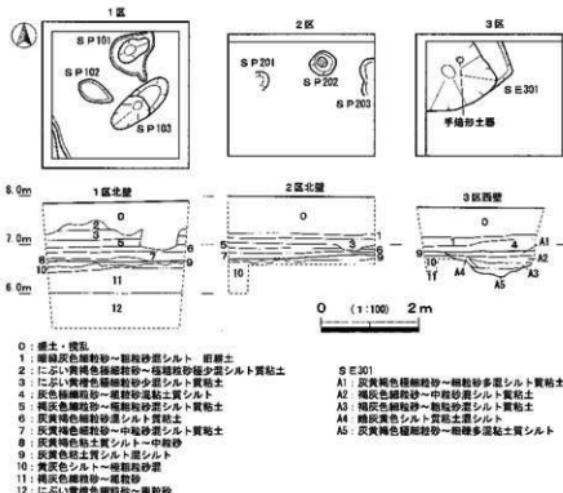
9層上面(T.P.+6.8m前後)で古墳時代初頭(庄内式期)の井戸1基(S E301)、ピット6個(S P101～103、201～203)を検出した。

S E301 - 捨方平面形は方形に近く、規模は一边2.0m以上、深さ約0.8mを測る。埋土はブロック状の5層から成る。遺物は上層から完形の手培り形土器1点(近江系)の他、土器片が少量出土した。

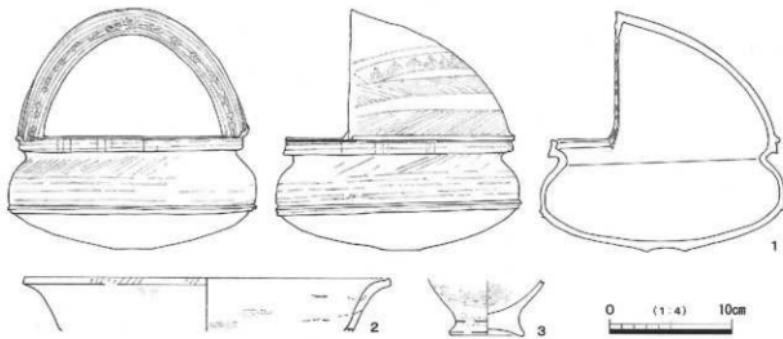
S P101～103、201～203 - S P102が深さ約5cmと浅いものである以外は、深さ20～55cmを測り柱穴と考えられる。埋土は1～3層から成る。

【出土遺物】

S E301上層 - 1は手培り形土器で完形品である。法量は器高19.7cm・口径18.2～18.8cm・底径3.1cm・鉢部高9.2cmを測る。覆部の端部を内側に肥厚させ面を作り出し、底部は上げ底を成すもので、近江系と



第79図 平断面図



第80図 出土遺物実測図

考えられる。加飾されており、覆部前面には凹線と2個一組の竹管円形浮文14組巡らせる。覆部外面は凹線により3段の文様帶を有し、上から鏤齒文・左上がり斜線文・右上がり斜線文を巡らせる。鉢口縁部外面には凹線文と3本一組の直線文を15方向に巡らせる。体部外面には上位に右上がり斜線文、下位に凹線文4条を巡らせる。底部外面の約1/2、及び覆部外面の一部に黒斑を有する。2は複合口縁壺の口縁部と考えられる。口縁端部に刻み目を施す。3は台部～体部で、内外面にヘラミガキを施しており、台付き鉢と考えられる。

5層～奈良時代頃までの土師器・須恵器片が多く出土し、1区では丸瓦片1点を含んでいる。

6・7層～奈良時代頃までの土師器・須恵器片が少量出土。

(3)まとめ：調査では全域で古墳時代初頭(庄内式期)の遺構を検出し、南の調査で確認されている当該期の集落域の北への広がりを確認した。また包含層出土遺物からみて、6・7層中に古墳～奈良時代の遺構が存在する可能性がある。

【参考文献】

- ・樋口 薫2005「I 東郷遺跡第58次調査(TG2002-58)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告6』八尾市教育委員会・財團法人八尾市文化財調査研究会

20) 東郷遺跡(2009-234)の調査

(1) 調査地：桜ヶ丘1丁目93番(第36図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 2箇所(北から1・2区)、面積約 12.5m^2 について、現地表(T.P.+7.9~8.0m)下1.4m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1A142(調査地西部:T.P.+7.838m)である。

【地層】0層は客土・盛土。以下現地表下1.4m前後までの0.8m間において12層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+7.3~7.4m)。1区では2~6層(T.P.+6.9~7.3m)、2区では9層(T.P.+7.0~7.3m)が攪拌された作土で、時期は中世～近世であろう。3層・6層の下面では東西方向の耕作歴が見られた。1区7層(T.P.+6.8~6.9m)は土壤化の著しい遺物包含層である。8層は水成層で、上面(T.P.+6.8~6.9m)が遺構面である。2区10層以下(T.P.+7.0m以下)はブロック状の層相で、池等を埋め立てたような状況である。

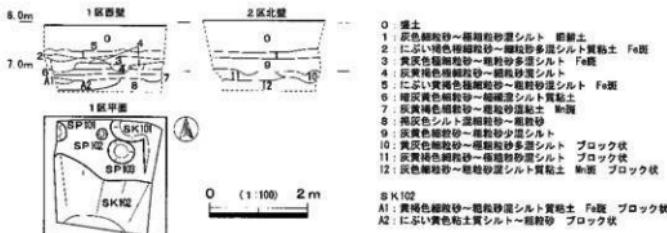
【検出遺構・出土遺物】1区8層上面(T.P.+6.8~6.9m)で土坑2基(SK101・102)、ピット3個(SP101~103)を検出した。

SK102-調査区南半を占める土坑で、深さ最大35cmを測る。埋土はブロック状の4層から成る。古墳時代後期頃の須恵器片や時期不明の土師器片が出土した。

ピットは直径20~50cm・深さ10cm程度の浅いものである。埋土は褐灰色細粒砂～粗粒砂混粘土でブロック状を呈する。SP101・103から土師器片(平安時代?)が出土した。

1区7層-平安時代までの土師器・須恵器、平瓦の他、弥生時代後期の土器が出土。

(3)まとめ：調査では1区で土坑・ピットを検出した。時期は明確ではないが、包含層出土遺物からみて古墳時代後期～平安時代と考えられる。東部の第52次調査では奈良時代～平安時代前期のピット群を検出しており、この集落域に含まれるものと考えられる。



第81図 平断面図

【参考文献】

・高萩千秋1998「XIV 東郷遺跡(第52次調査)」[財團法人八尾市文化財調査研究会報告60] (財)八尾市文化財調査研究会

21) 中田遺跡(2008-424)の調査

- (1) 調査地：刑部3丁目1番の一部(第37図参照)
- (2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 2箇所(北から1・2区：面積約 8.0m^2)について、現地表(T.P.+10.3m前後)下1.8m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西側道路上：T.P.+10.2m)である。
- 【地層】** 0層は盛土。以下現地表下1.8m前後までの0.7m間において4層の層序を確認した。1層(T.P.+9.2m)は旧耕作土。2層(T.P.+9.1m)は粗粒砂混粘土で、中世～近世の耕作土と思われる。3層(T.P.+9.0m)は細粒砂混粘土で、上面は搅拌を受けている。層内からは古式土師器の破片が出土した。4層(T.P.+8.8m)は細粒シルト質粘土で、上面が土壤化しており、1区で土坑(SK101)と小穴(SP101)、2区で土坑(SK201)を検出した。

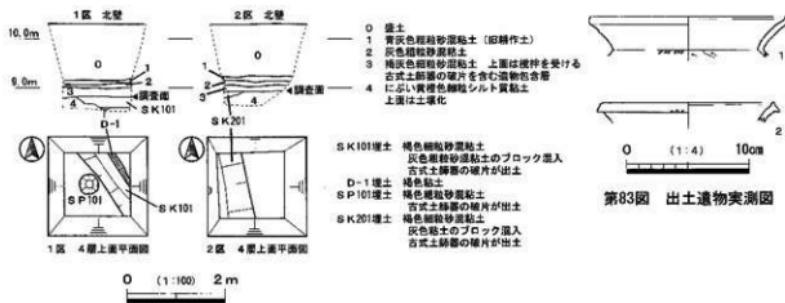
【検出遺構】

1区SK101：北東側で検出した。掘形の平面形状は南東から北西方向に直線に伸びる。幅0.85m以上を測る。断面形状は逆台形と思われ、深さ0.25mを測る。埋土は細粒砂混粘土で、粘土のブロックが混入している。土坑内からは、掘形と平行して伸びる溝(D-1)を検出した。D-1の幅は0.15m、深さ0.05mを測り、埋土は粘土である。古墳時代初頭の古式土師器の破片が出土した。この遺構は竪穴住居の可能性を考えられる。

1区SP101：ほぼ中央で検出した。平面形状は円形で、径0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。古墳時代初頭の古式土師器の破片が出土した。

2区SK201：西側で検出した。掘形の平面形状は南北方向に直線に伸びる。幅0.7m以上を測る。断面形状は逆台形と思われ、深さ0.15mを測る。埋土は細粒砂混粘土で、粘土のブロックが混入している。古墳時代初頭の古式土師器の破片が出土した。

【出土遺物】 1区SK101、SP101、2区SK201と1・2区の3層からは古墳時代初頭の古式土師器の破片が出土した。このうち図化したものは、1区SK101の甌(1)と、2区3層の壺(2)である。1は庄内式甌の口縁部で、屈曲部は「く」の字に折れ曲がり、口縁部は外反する。端部は上方へつまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを、外面は右上がりのタタキを施す。角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。2の口縁部は外反する。端部は上下へつまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。口縁端部には部分的にキザミ目を施す。角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。



第82図 平断面図

(3)まとめ：T.P.+8.8mで古墳時代初頭の遺構を検出した。隣接する調査地(成海1995)でも、同時期の遺構を検出していることから、周辺に同時期の集落が広がっていると推測できる。

【参考文献】

- ・成海佳子1995「II 中田遺跡第6次調査(N T90-6)」『中田遺跡 (II) 八尾市文化財調査研究会報告49』(財)八尾市文化財調査研究会

22) 中田遺跡(2009-39)の調査

(1)調査地：刑部4丁目220-1(第37図参照)

(2)調査概要：平面規模約2.5m×2.5m、面積約6.25m²

1ヶ所について、現地表(T.P.+11m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地西50mの交差点中央:T.P.+11.0m)を使用した。

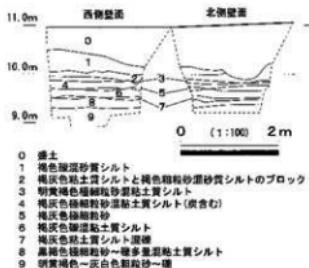
【地層】現地表面の標高はT.P.+11m前後である。盛土以下現地表下2.0m前後までの2.0m間において9層の層序を確認した。1層は褐色礫混砂質シルト(T.P.+10~10.5m)で、木の根や瓦などを含んでいる。2層は褐色粘土質シルトと褐色粗粒砂混砂質シルトのブロック層(T.P.+10m前後)、3層は明黄褐色極細粒砂混粘土質シルト(T.P.+9.9m前後)、4層は褐色極細粒砂混粘土質シルト(T.P.+9.8~9.9m前後)で、炭を含む。5層は褐色極細粒砂で、6層の窪みに薄く堆積する。6層は褐色藻泥粘土質シルト(T.P.+9.7m前後)で上面に波状痕跡が見られることから、作土の可能性がある。7層は褐色粘土質シルト混疊で、6・8層間に部分的に堆積する。8層は黒褐色極細粒砂～礫を多量に含む粘土質シルト(T.P.+9.45m前後)である。9層は明褐色～灰白色粗粒砂～礫(T.P.+9.3m前後)は含水層で、層厚0.4m以上を確認した。

【出土遺物】6層からは中世の、8層中からは古墳時代前期初頭・古墳時代中期・平安末～鎌倉初期などの遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。

(3)まとめ：今回の調査地では、現地表下1.5mで、古墳時代前期初頭以降の遺物包含層(8層)を検出した。遺物量は比較的多く、その直下の水を含む粗砂～礫層(9層)上面が、当該時期の遺構面であろうと考えられる。当遺跡は、弥生時代後期以降の複合遺跡であるが、当調査地近辺に限っても、西80m地点では、古墳時代前期初頭(庄内式期古相)の吉備地方の土器が多く出土した土坑が検出されており、当該時期の標識資料となっている(高木1981)。また、東100m地点では、古墳時代中期(5世紀末)の落込みから多量の須恵器や埴輪が出土しており、古墳の裾～周溝部分に当たると考えられている(坪田2000)。これらのことから、当地周辺には古墳時代中期初頭以降の生活の痕跡が遺存しているものと考えられる。

【参考文献】

- ・高木良光1981.3 「7. 中田遺跡(刑部地区)」『昭和53・54年度 埼玉文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会
- ・坪田真一2000.3 「X II 中田遺跡第42次調査」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会八尾市文化財調査研究会



第84図 断面図

23) 中田遺跡(2009-19)の調査

(1) 調査地：八尾木北2丁目37番3(第37図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 1箇所、面積約 6.25m^2 について、現地表(T.P.+10.3m)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成 $1/2500$ 地図記載の標高値(調査地北部の市道交差点中央:T.P.+9.9m)である。

【地層】0層は盛土・搅乱。以下現地表下 2.0m 前後までの 1.0m において7層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+9.0~9.2m)。2・3層は中世～近世の作土であろう。3層下面(T.P.+8.7m)では南北方向に平行する耕作溝2条を検出した。4層(T.P.+8.7m前後)は流水堆積である。5・6層(T.P.+8.45~8.65m)はブロック状を呈しFe斑を多く含む層相で作土と考えられる。7層のシルト～粗粒砂層は非常に汚れた層相で、上部は土壤化していると考えられる。

【検出遺構・出土遺物】

3層下面(T.P.+8.7m) - 南北方向に平行する耕作溝2条(幅 25cm ・深さ $5\sim 10\text{cm}$)を検出。

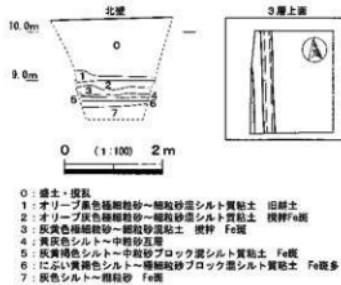
6層 - 須恵器杯片1点。

7層 - 弥生時代後期～古墳時代初頭頃の高杯片2点。

(3)まとめ：調査では古墳時代以降の数枚の作土層を確認した。また7層からは弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器が出土した。あまり磨耗しておらず、周辺に当該期の遺構が存在する可能性が高い。

【参考文献】

- ・吉山野川1995「5. 中田遺跡(94-311)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業』八尾市教育委員会

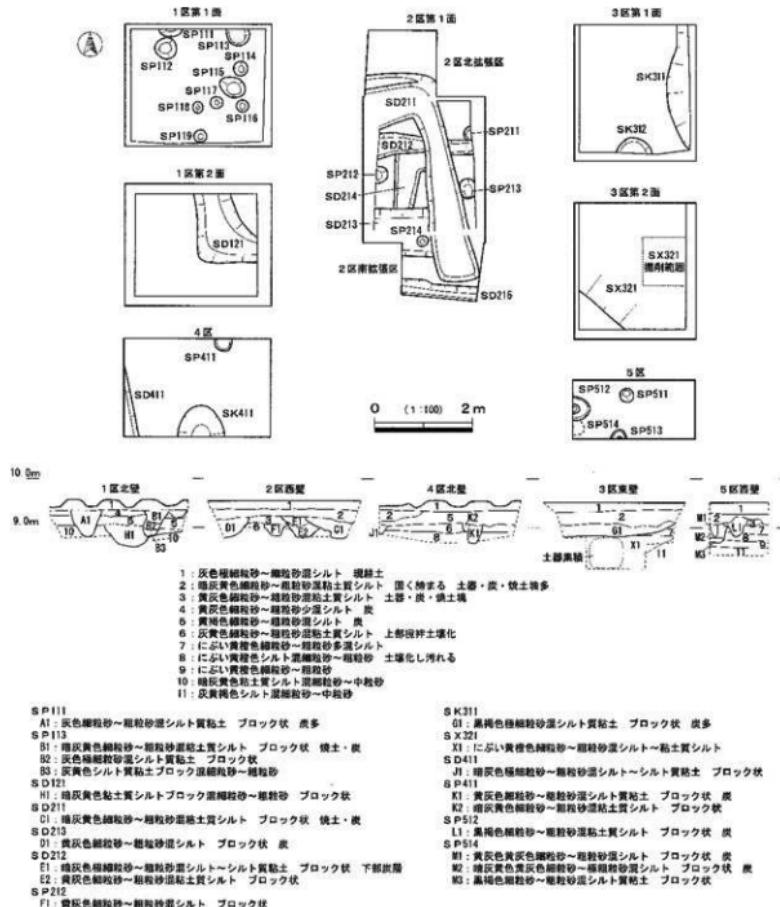


第85図 平断面図

24) 中田遺跡(2009-99)の調査

(1) 調査地：中田3丁目47番2の一部、47番1(第37図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m} \sim 3\text{箇所}$ 、 $3.0 \times 2.0\text{m} - 1\text{箇所}$ 、 $2.0 \times 1.0\text{m} - 1\text{箇所}$ (北から1~5区：面積約 26.75m^2)について、現地表(約T.P.+9.6m)下 $0.8 \sim 1.3\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点3E001(調査地南西部：T.P.+10.060m)である。また2区の北・南を拡張させ調査を実施した。



第86図 平断面図

【地層】 1層は現耕作土。2~5層(T.P.+9.0~+9.4m)は整地層と考えられ、中世頃の土器片や炭・焼土塊が多く含んでおり、特に2区でそれが顕著であった。2区6層、3区7層は上部が搅拌された土壤化層である。第1面として1区4層上面、2区3・6層上面、3区7層上面、4区6層上面、5区3層上面で遺構を検出した(T.P.+9.1~+9.3m)。5区8層(T.P.+8.7~+8.9m)は搅拌が認められる土壤化層で、弥生時代後期や時期不明の土器が少量出土した。9層(T.P.+8.6~+8.7m)は下位の水成層の土壤化部分である。10・11層は細粒砂~粗粒砂からなる水成層で、上面(T.P.+8.8~+9.1m)が第2面である。

【検出遺構】

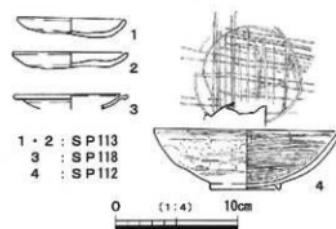
第1面-1区でピット9個(SP111~119)を検出した。SP111~113・115は直径50cm・深さ50cm程度を測り柱穴と思われ、SP115では炭化した柱根が見られた。各ピットからは12世紀代の土師器・瓦器等が出土しており、特にSP111~113が多く含んでいる。2区では溝5条(SD211~215)、ピット4個(SP211~214)を検出した。溝は3層、ピットは6層上面の構築と考えられる。SD211は東西方向から南にL字状に屈曲し、約3.5m伸びて終結する。陸橋部を経てさらに南に続くことも考えられよう。規模は幅80cm・深さ40cm、断面逆台形を呈する。12世紀後半の土師器皿・瓦器碗・中国製白磁等が出土しており、南部では集積する状況が見られた。SD212・213は東西方向に平行する溝で、SD212上層には厚い炭層が見られた。両溝からは12世紀前半~中葉の土器が出土している。ピットは直径30~40cm・深さ25cm程度を測る。遺物はSP213から時期不明の須恵器・瓦器片が出土した。なお2区では第1面検出時に多量の遺物を検出しており、包含層遺物として69~78を図化したが、多くはSD211に帰属すると考えられる。3区では土坑2基(SK311・312)を検出した。SK311は弧状を成す掘方から西に落ち込むもので、埋土中には炭を多量に含む。SK312は直径約75cmの円形を成すと思われる。両土坑からは12世紀後半の土師器・瓦器が出土している。4区では土坑1基(SK411)、ピット1個(SP411)、溝1条(SD411)を検出した。SK411は直径1m程度の円形を呈すると思われ深さ約30cmを測る。SD411は2区SD211とほぼ同じ方向で南北に伸びる。各遺構からは12世紀代の土師器・瓦器が出土しており、SK411は弥生後期の土器も含んでいる。5区ではピット3個(SP511~513)を検出した。SP512から12世紀後半の土師器・瓦器、SP511・513からは時期不明の土師器・須恵器が出土した。

第2面-1区で溝1条(SD121)を検出した。幅0.5~1.1m・深さ45cmを測り、L字に屈曲する。弥生時代後期の土器が多く出土している。3区では不明遺構1基(SX321)を検出した。北西~南東方向の肩から北東に落ち込む状況で、一部分の掘削であるが深さ70cm程度を確認した。遺物は古墳時代前期(布留式期古層)の土器が重層的に集積して出土しており、完形の土器も含まれる。また平面では捉えられなかつたが、5区7層上面構築のピット(SP514)を確認している。

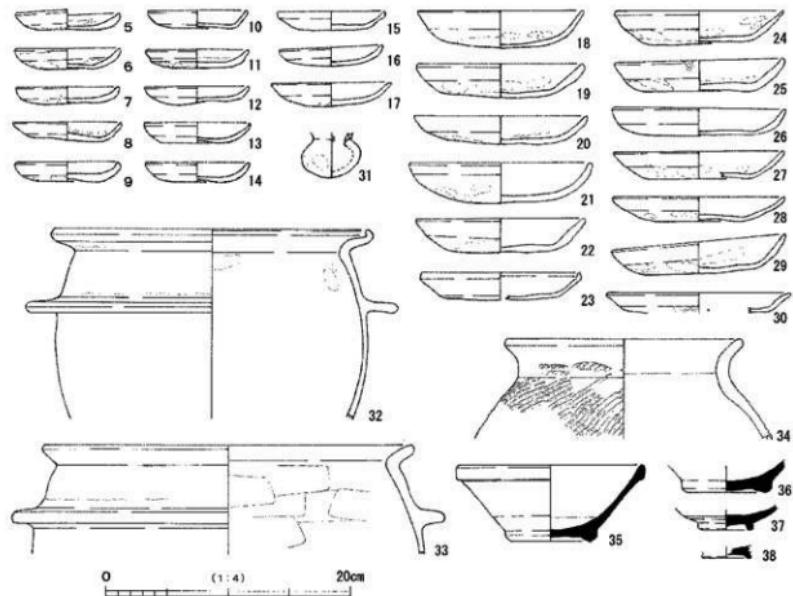
【出土遺物】

SP113-1・2は土師器小皿である。2はやや扁平で皿が大きい。
SP118-3は薄手の「て」の字口縁皿で、10~11世紀に比定される。
SP112-4は瓦器碗で、見込みの格子状暗文は間隔が均等で、体部外面の指頭圧痕も明瞭に残る。12世紀後半に比定される。

SD211-5~17は土師器小皿である。8・10・11・15は口縁端部のヨコナデが強く、底部との境に明瞭な段を生じている(以降、A形態とする)。17のみ口縁端部が外反する形態で、口径も他に比して1cm程度大きい。14は口縁端部に灯芯痕の煤が残り灯明皿である。18~30は大皿である。21のみ底部へ口縁部が丸味を持っており、他はA形態かそれに近いものである。30は口縁端部が外反する形態で、また23は外反した後、端部が小さく直立する。25の底部外面には製作時の痕跡である平行する直線状の段がみられる。31は手捏ね成形による土師器小壺で



第87図 出土遺物実測図(1)



第88図 出土遺物実測図(2)

ある。32・33は土師器羽釜である。32は大和型、33は河内型で、共に12世紀後半に比定される。34は体部に平行タタキを施す瓦器蓋で、タタキは頭部に及んでいる。東播系須恵器窯を模した初現期の瓦器窯と思われる。35～37は中国製白磁である。35・36は見込みに沈線を巡らせるもので、大宰府分類のIV類に当たる。36は見込みに釉切れが見られる。37は見込みの釉を蛇の目状に搔き取るもので、同V類に当たる。35～37は11世紀末～12世紀前半に比定される。38は施釉陶器である。淡黄色の総釉に、斑点状に緑色の釉が見られ、二彩、あるいは三彩陶器と思われる。39～43は瓦器皿である。形態的に底部へ口縁部が丸い39～41、稜を成す42、土師器皿のA形態に当たる43がある。いずれも口縁部内面に圓線状暗文が見られ、見込みは39が格子状、40～42が平行線状暗文で、43は施さない。底部外面は、41が丁寧にナデている他は未調整で、掌文や指頭圧痕が残る。44～59は瓦器楕である。見込みの暗文は44～53が格子状、54が斜格子状、55が螺旋状、56～59が平行線状で、内面の圓線状暗文も概ねこの順に密～疎となっている。外面の暗文は49・51・55～57・59が施しておらず、他のものも疎で、口縁部のみや、体部上位までである。46は見込みに重ね焼き時の高台痕が見られる。瓦器楕の時期は12世紀後半で全般にわたっている。

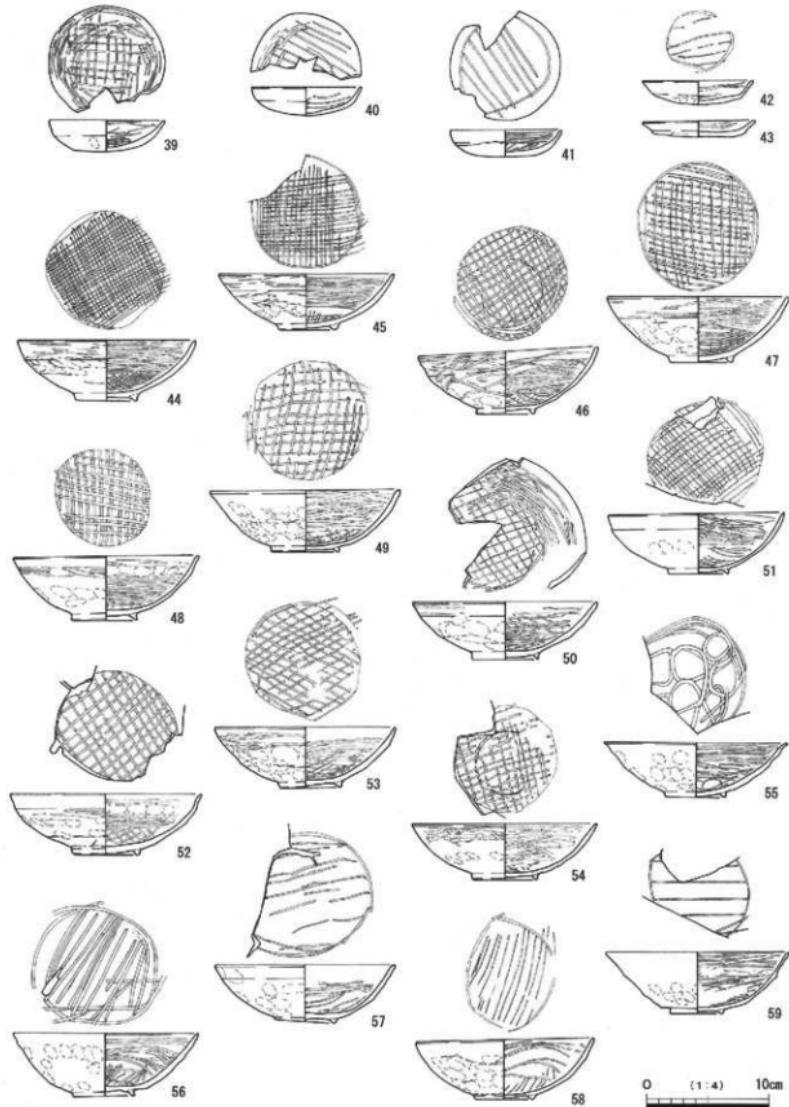
S D213～60は瓦器楕である。暗文は見込みが一定方向、内面が乱方向、外面がおそらく四分割で、密に施される。12世紀初頭頃に比定されよう。

S K311～64は土師器小皿である。65は東播系須恵器鉢で、時期は12世紀前半までにおさまる。

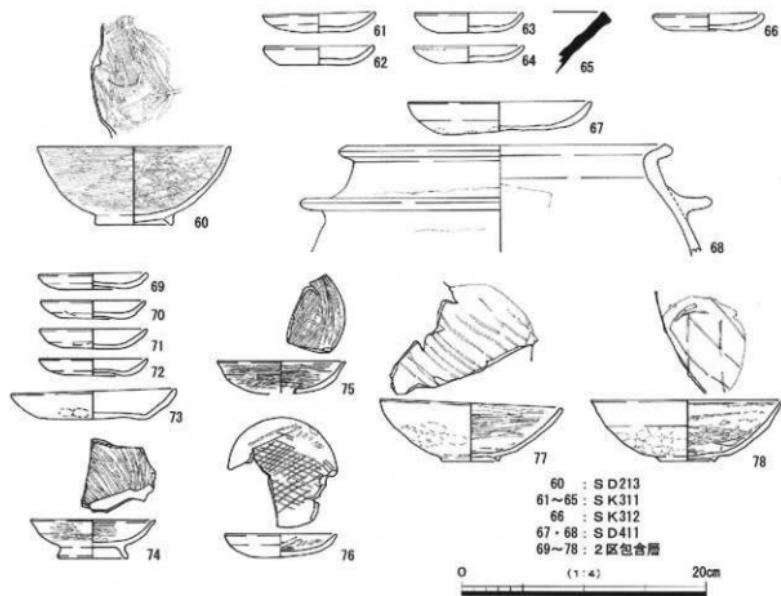
S K312～66は土師器小皿である。

S D411～67は土師器大皿である。68は土師器羽釜で、12世紀後半に比定される。

2区包含層～69～72は土師器小皿、73は土師器大皿である。74は瓦器台付き皿である。暗文は見込みが一定方向に密に、内外面も密に施される。12世紀前半までに比定されよう。75・76は瓦器皿である。



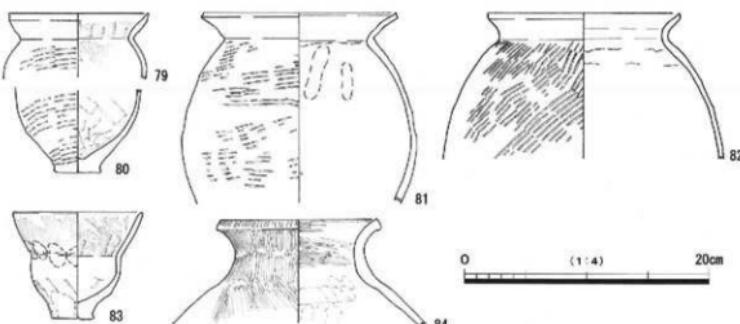
第89図 出土遺物実測図(3)



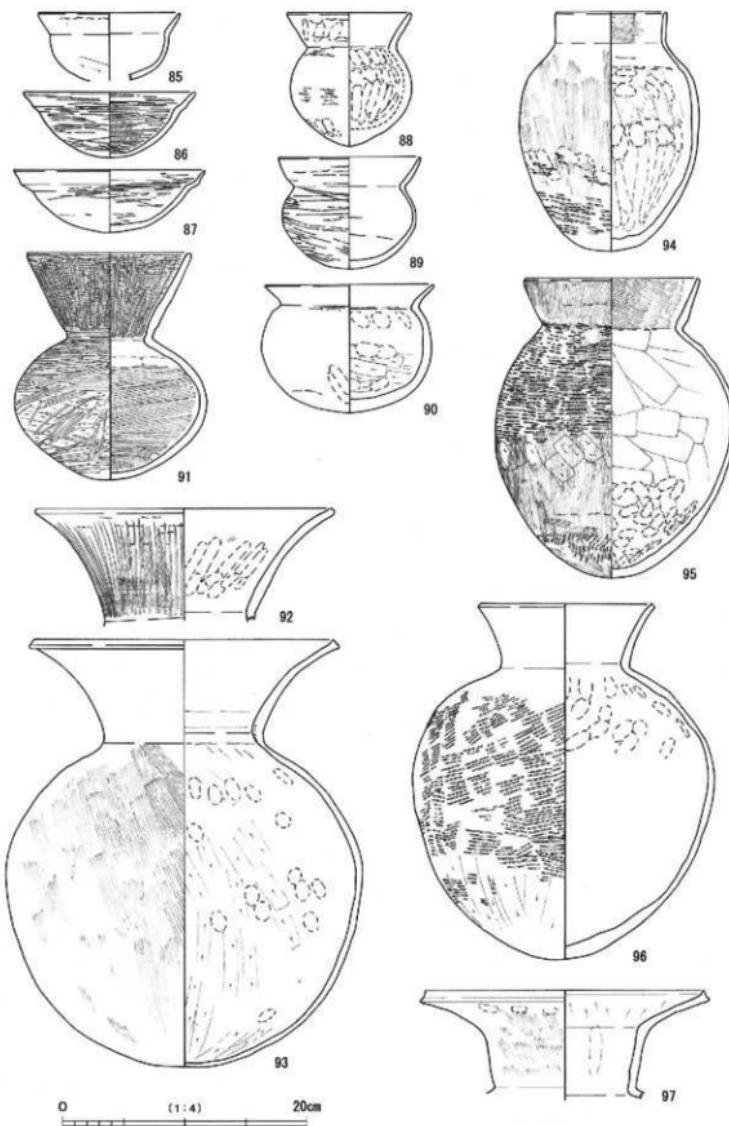
第90図 出土遺物実測図(4)

暗文は75が内外面全面に、76は内面のみである。77・78は瓦器碗である。見込みの暗文は77が平行線状、78が非常に疎な斜格子状で、共に外面上には施さない。12世紀末頃に比定される。

S D121-79-82は甕である。いずれも外面平行タキ、内面は79がハケ、80が板ナデ、81・82がナデである。79の口縁端部外面には2条の沈線が巡る。79・80は同一個体と思われる。83は小形の広口壺である。口縁部外面下端には上から下への板ナデによる粘土の皺が生じている。口縁部外面に黒斑を有する。84は広口壺である。調整はヘラミガキで、口縁端部に刻み目を施す。

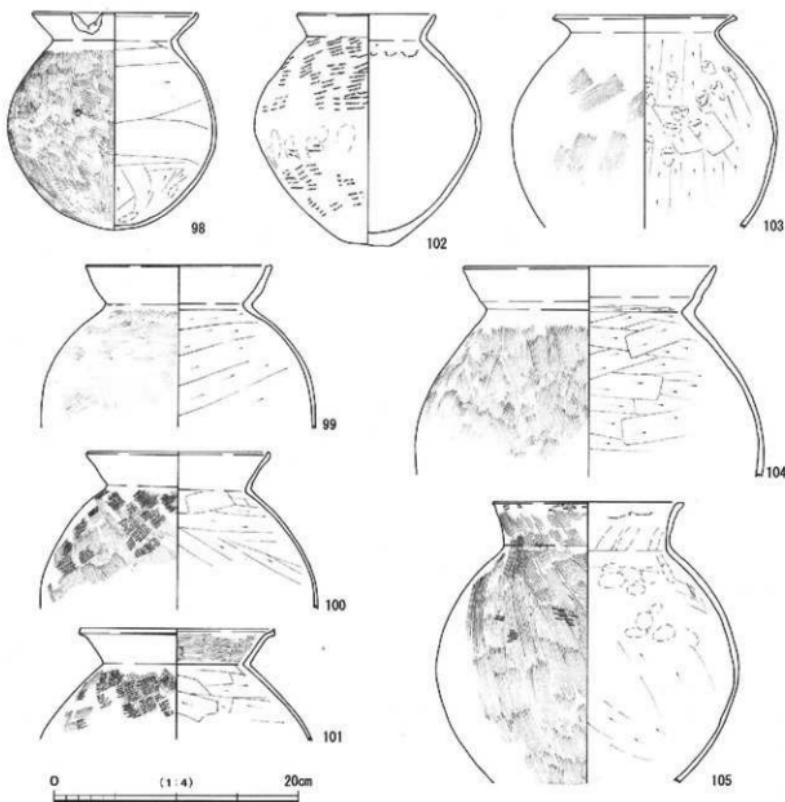


第91図 出土遺物実測図(5)



第92図 出土遺物実測図(6)

S X 321-85は小形鉢である。調整はナデで、底部外面はヘラケズリ。86・87はヘラミガキを多用する精製の有段鉢である。88～90は小形壺である。88は厚手でいわゆるV様式系のものである。89はヘラミガキを多用する精製品。90はあまり例を見ない形態で、粗製品である。底部～体部外面に黒斑を有する。91～97は壺である。91はヘラミガキを多用する精製の直口壺で、ほぼ完形品である。92・93は広口壺である。92は口縁部外面にヘラミガキを加える。93は口縁端部を三角形に摘み上げるもので、四国系と思われる。94は口縁部がほぼ直立する直口壺で、外面調整は体部ハケで、底部付近にはタタキが残る。全体的に歪で器壁に凹凸が著しい。底部に黒斑を有する。95は短頸の直口壺で、体部外面調整はタタキ後下半にヘラケズリ・ハケを加える。口縁部は内外面ハケである。96は広口壺で、底体部完形品である。外面調整は体部平行タタキ後一部ハケ、底部ヘラケズリである。肩部に黒斑を有する。94～96は搬入品と考えられる。97は複合口縁壺で、93と同様、口縁端部を三角形に摘み上げるもので、四国系と思われる。胎土は生駒西麓産に類似する。98～105は壺である。98は全体ハケ調整で、完形品であるが、口縁部の一部を幅2.7cmで打ち欠き、その下位にあたる体部に直径約5mmの穿孔を施す。底体部の約1/2を占め



第93図 出土遺物実測図(7)

る黒班を有する。102は胴が張り平底で、調整は粗い平行タキである。搬入品であろう。103は形態的に四国系である。104・105も搬入品であろう。104は口縁部形態が山陰系の特徴といえるが、胎土は生駒西麓産と思われる。105はハケ調整で、口縁端部外面にほぼ水平の平行タキと考えられる調整が残る。これらの土器は古墳時代前期前半(布留式期古相)に比定される。

(3)まとめ: 調査では全域で中世の遺構が見られ(第1面)、2・5区では複数の遺構面の存在を確認した。当地は金性寺・善坊寺という中世寺院推定地に近く、一帯に中世集落が展開していたのであろう。下層では1区で弥生時代後期、3区で古墳時代前期の遺構を検出した(第2面)。他の調査区ではその広がりは確認できなかったが、古墳時代前期は北部・南部で、また弥生時代後期では南西部の調査地で遺構が検出されており、これらの集落に関連すると考えられる。古墳時代前期前半(布留式期古相)に比定されるS X321は一部分の調査であったが、膨大な量の土器を包蔵している。甕では口縁部を打ち欠き体部に穿孔を施す祭祀色の強い個体も見られた。中田遺跡では北西約250mの「中田1丁目39土坑」が、この時期の標識遺構として認識されているが、土器の出土状況や、他地域からの搬入土器を多く含む特徴から見て類似する性格の遺構である可能性がある。

【参考文献】

- ・中世土器研究会編1995『概説 中性の土器・陶磁器』真陽社
- ・(財)人間文化財センター2003『古墳出現期の土師器と尖年代 シンポジウム資料集』

25) 中田遺跡(2009-88)の調査

(1)調査地: 刑部1丁目88番1(第37図参照)

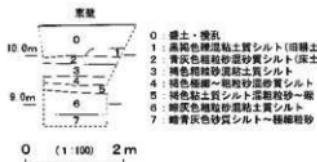
(2)調査概要: 平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0m²1ヶ所について、現地表(T.P.+10.6m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した高さの基準は、八尾市街区多角点10D70(調査地北西50m地点:T.P.+10.439m)である。

【地層】現地表(T.P.+10.6m)下0.4~0.6m前後までは、既存建物取壊しの際や建設時の盛土・整地(0層)

で、調査区北西部には深さ1.5mに及ぶ擾乱が見られた。以下現地表下2.0m前後までの1.4~1.6m間ににおいて7層の地層を確認した。1層黒褐色疊混粘土質シルトは旧耕土、2層青灰色粗粒砂混沙質シルトは床土にあたる。3~5層は酸化マンガンを含む褐色系の地層で、3層褐色粗粒砂混粘土質シルト、4層褐色極細~粗粒砂混沙質シルトはいずれも硬く縮まるが、5層褐色粘土質シルト混粗粒砂へ礫は軟弱な土質である。5層の底には酸化マンガンが沈着している。6層暗灰色粗粒砂混粘土質シルトは粘性が高い。7層暗青灰色砂質シルト~極細粒砂は河川埋土と考えられ、下ほど砂粒は粗くなる。

【出土遺物】4~6層からは土器の小破片が数点出土している。

(3)まとめ: 今回の調査では、現地表下1.0~1.8m付近で遺物が出土した。小片のため時期の特定は難しいが、平安時代以降の土師器と考えられる。調査地北西70m地点に位置する第1次調査では、現地表下1.4m(T.P.+9.5m)で近世の遺物を含む第3~5層、以下0.2~0.3m(T.P.+9.2m)に中世の遺物を含む第6・7層、以下0.4m(T.P.+8.7m)に湧水層である第8層を確認している(成海1988)。今回確認した地層に対応させれば、4層が第3~5層に、5・6層が第6・7層に、7層が第8層にあたるものと考えられる。なお、この第1次調査地では、第8層直下の第9層から須恵器が、以下の第10層からは弥生土器が、第11層(T.P.+9.1~8.4m)上面では、弥生時代後期の集落を検出していることから、当地にも下層部に当該時期の遺構面のある可能性は高い。



第94図 断面図

【参考文献】

- ・成海佳子1988「24. 中田遺跡(第1次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成6年度』(財)八尾市文化財調査研究会 報告16』(財)八尾市文化財調査研究会

26) 中田遺跡(2009-128)の調査

(1) 調査地: 刑部1丁目56(第37図参照)

(2) 調査概要: 平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 1箇所(面積約 4 m^2)について、現地表(約T.P.+10.8m)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点3D099(調査地南西部: T.P.+10.502m)である。

【地層】 0層は盛土。以下現地表下2.0m前後までの1.5m間ににおいて11層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+10.1~10.2m)、2~4層(T.P.+9.7~10.1m)も搅拌された耕作土で、4層上面・5層上面で東西方向の溝構(A層)や耕作底と思われる落ちを確認した。時期は中世~近世であろう。5~8層(T.P.+9.1~9.7m)は流水堆積で、河川あるいは溝の埋土である。5層上面で捉えた東西方向の溝(B層)はこの最終段階の流路であろう。9~11層もグライ化した層相で、溝等の埋土である可能性が高く、5層以下は大規模な溝の一連の堆積と考えられる。

【検出遺構・出土遺物】

4層-中世頃の瓦器・土師器細片が出土。

11層-中世までの土師器・瓦器・須恵器細片の他、弥生土器細片が出土。

(3)まとめ: 調査では中世~近世の耕作関連遺構を検出した。またそれ以下では中世頃に埋没する大規模な溝の存在を確認した。南約160mでも同様の溝が敷設箇所で確認されており関連が考えられる。

【参考文献】

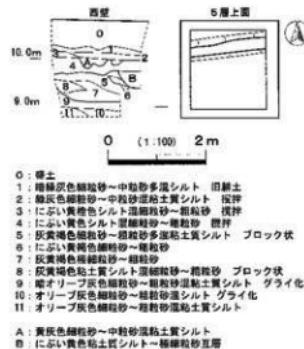
- ・坪山真一1998「IV 中田遺跡(第30次調査)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告61』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野川1997「10. 中田遺跡(95-22)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書II 八尾市文化財調査報告37 平成8年度公共事業』八尾市教育委員会

27) 中田遺跡(2009-208)の調査

(1) 調査地: 中田5丁目25番(第37図参照)

(2) 調査概要: 平面規模約 $3.0 \times 3.0\text{m}$ 、面積約 9.0 m^2 1ヶ所について、現地表(T.P.+10.3m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1A249(調査地南約40m地点: T.P.+10.431m)を使用した。

【地層】 現地表(T.P.+10.3m)下0.8m前後までは、盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.2m間ににおいて6層の地層を確認した。1層は暗灰色細粒砂混粘土の旧耕作土である。2層は青灰色粗粒砂混粘土で、中世頃の土師器の破片が少量出土した。3層は褐色細粒砂混粘土で、土師器の破片が少量出土した。上面は搅拌を受け土壤化しており、中世の遺構を検出した。4層は褐灰色細粒砂混粘土で、弥生



第95図 平断面図

土器の破片が少量出土した。上面は土壤化し、弥生時代後期の遺構を検出した。5層は灰色粘土で、湿地帯を示す泥状の堆積層である。6層は灰白色細粒砂の河川堆積層である。

【検出遺構】

3層上面で溝1条(SD101)、4層上面で溝1条(SD201)を検出した。

SD101は中央から西部で検出した。平面形状は南北に直線に伸び、幅は1.1m以上、深さは0.15m以上を測る。埋土は暗青灰色粗粒砂混粘土で、中世の土師器・瓦器の破片が少量出土した。

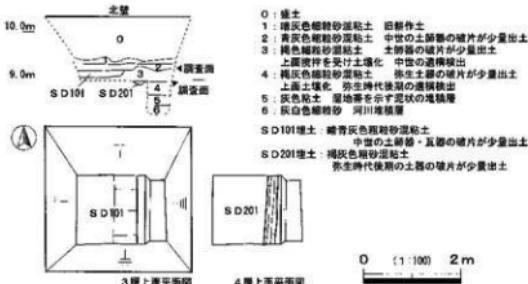
SD201は東部で検出した。平面形状は南北に直線に伸び、幅は0.2m、深さは0.1mを測る。埋土は褐色粗粒砂混粘土で、弥生時代後期の土器の破片が少量出土した。

【出土遺物】2層からは中世頃の土師器の破片、3層からは土師器の破片、4層からは弥生土器の破片が少量出土し、SD101からは中世の土師器・瓦器の破片、SD201からは弥生時代後期の土器の破片が少量出土した。この内図化したものはSD201から出土した高杯(1)である。1は脚部で、柱状の脚から裾部が「ハ」の字にひらく形状である。脚部および裾部の内面はユビナデを施し、シボリ目がある。外面は縱方向のヘラミガキを施すが、表面の磨耗が著しく、不明瞭である。後期後半中～新相の時期のものと思われる。

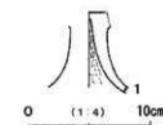
(3)まとめ：今回の調査では、中世と弥生時代後期の遺構を検出した。中世の遺構は、攪拌を受け土壤化している3層上面から切り込んでおり、水田または畑の耕作に関連する素掘り溝の可能性が考えられる。また、弥生時代後期の遺構は、周辺の調査(西村1997)でも検出していることから、後期前半～後半頃の集落が広がっていた可能性が高いと推測される。

【参考文献】

- 西村公助1997「I中H遺跡第15次調査(NT92-15)」「中H遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告56」(財)八尾市文化財調査研究会
- 原H昌則2003『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う－』(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会



第96図 断面図



第97図 出土遺物実測図

28) 中田遺跡(2009-214)の調査

(1) 調査地：刑部4丁目83の一部(第37図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 3.0\text{m}$ - 1箇所、面積約 6.0m^2 について、現地表(T.P.+11.15m)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3D105(調査地北東部:T.P.+11.394m)である。

【地層】0層は客土・盛土。以下現地表下 2.5m 前後までの 2.0m 間において6層の基本層序を確認した。1層(T.P.+10.1~10.2m)は旧耕土。2・3層(T.P.+9.8~10.1m)も攪拌された作土で、時期は中世～近世であろう。2層下面では南北方向の耕作構が見られた。4層(T.P.+9.7~9.8m)はMn斑を多く含み、上部の攪拌が著しい土壤化層である。中世頃までの土器片を多く含む。5層以下(T.P.+9.7m以下)のシルト質粘土は湿地性の堆積と考えられる。

【検出遺構・出土遺物】

4層-13世紀頃までの土師器・瓦器・須恵器片が多く出土。

5・6層-時期不明(奈良時代頃か?)の土師器片が少量出土。

(3)まとめ：調査では中世頃の遺物包含層(4層)が検出された。遺物は相当量含まれており、周辺に遺構が存在する可能性が高いといえ、北部で確認されている同時期の集落域が南に広がっているものと考えられる。

【参考文献】

- ・西村公助1995「V 中田遺跡(第28次調査)」『中田遺跡 財團法人八尾市文化財調査研究会報告49』(財)八尾市文化財調査研究会

29) 中田遺跡(2009-244)の調査

(1) 調査地：刑部2丁目355番の一部(第37図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ - 1箇所、面積約 6.25m^2 について、現地表(T.P.+10.8m)下 2.5m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南西約47m地点:T.P.+10.501m)である。

【地層】0層は客土・盛土。以下9層の基本層序を確認した。1層は旧耕土(T.P.+9.6~9.8m)。2層はにぶい黄褐色シルトで、中世の土師器片や瓦器片を包蔵する遺物包含層(T.P.+9.5~9.6m)である。3層(T.P.+9.3~9.5m)はにぶい

黄褐色シルト、4層(T.P.+9.2

~9.3m)は暗灰色シルト、5層

(T.P.+9.1~9.2m)は褐灰色シ

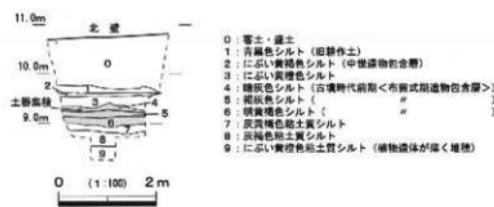
ルト、6層(T.P.+9.0~9.1m)

は明黄褐色シルトで各層とともに

古墳時代前期(布留式期古相)の

土器を包蔵する。7層(T.P.+8.8

~9.0m)は灰黄褐色粘土質シル



第99図 断面図

ト、8層(T.P.+8.5~8.8m)は灰褐色粘土質シルト、9層(T.P.+8.5m以下)は植物遺体の薄層を有する湿地性の堆積層である。

【検出遺構・出土遺物】4~6層から、古墳時代前期前半(布留式期古相)に比定される甕・鉢・器台が出土した。

【出土遺物】4~6層から出土した土器類のうち、固化できたものは、4層-甕(1)・鉢(2~4)・器台(5・6)の計6点、6層-甕あるいは鉢の底部と見られるもの(7)、甕(8)、鉢(9)、器台(10)の計4点である。

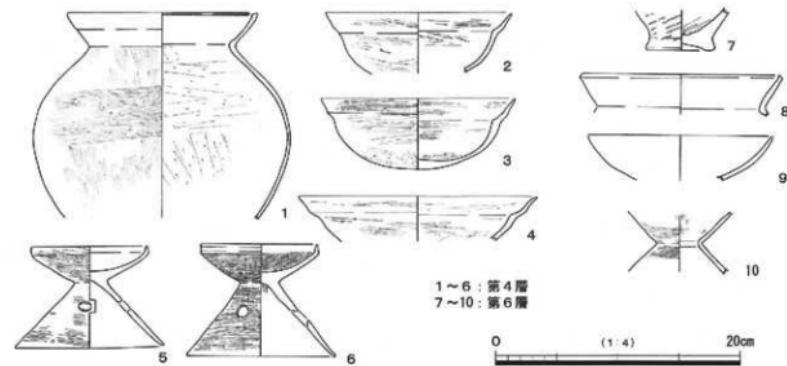
<4層>1は球形化した体部から、内部肥厚して面をなす口縁部を有する。2~4は、丸底の体部に2段屈曲の口縁部が付くいわゆる精製の「有段鉢」である。5・6はいずれも皿状の受部を有し、受部と脚部は貫通しない小型の器台である。

<6層>7はやや上げ底で「ハ」の字形に開く底部を有する。8は口縁端部がやや肥厚する布留式甕であるが、庄内式甕に見られる端部まみ上げの特徴を残す。9は器壁が薄く、底部は丸底を呈するものと思われる。10はその形状から「鼓形器台」と呼ばれるもので、外面は精製(ヘラミガキ)される。

(3)まとめ:調査では古墳時代前期前半(布留式期古相)に比定される土器集積および遺物包含層を検出することができた。当地一帯においては数次に亘る既往の調査から、古墳時代初頭(庄内式期)~前期(布留式期)に比定される遺構・遺物が多数確認されており、本調査地点も当該期の集落の一部を示唆するものと言える。

【参考文献】

- ・成海佳子1995「II 中田遺跡第6次調査(NT90-6)」『中田遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告49



第100図 出土遺物実測図

30) 東弓削遺跡(2009-116)の調査

(1) 調査地：東弓削3丁目47番1(第36図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 2.5×2.5 m、面積約 $6.25m^2$ 1ヶ所について、現地表(12.8~12.9m前後)下2.1m前後までを調査した。調査で使用した高さの基準は、八尾市街区多角補助点3E160(調査地南50m地点:T.P.+12.910m)である。

【地層】現地表(T.P.+12.8~12.9m)下0.8m前後までは、既存建物取壟しの際の盛土・攪乱や建設時の整地(0層)が見られる。以下現地表下2.1m前後まで

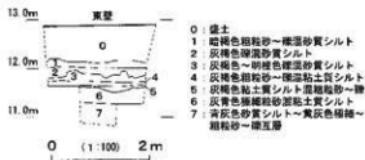
の1.3m間において7層の地層を確認した。1層黒灰色粗粒砂～礫混砂質シルトは旧耕土、2層灰褐色礫混砂質シルトは床土にあたる。3層灰褐色～明橙色礫混砂質シルトには酸化鉄・酸化マンガンの混入が見られ、攪拌されていることから作土と考えられ、4層灰褐色細粒砂～礫混粘土質シルトは、3層の床を形成していたものと考えられる。5層灰褐色粘土質シルト混粗粒砂～礫は平安時代末期以降(12~13世紀頃)の遺物を含む層である。以下の6層灰青色極細粒砂混粘土質シルトが当該時期の造構面にあたり、6層上面の標高はT.P.+11.5~11.7m程度を指す。それ以下には、含水層である青灰色砂質シルト～黄灰色極細粒～粗粒砂～礫の互層が5.0m以上堆積する。

【出土遺物】現地表下1.3m(T.P.+11.6m)前後に堆積する5層から、瓦器柄等の小破片が少量出土している。

(3)まとめ：今回の調査では、現地表下1.3m付近の比較的浅いところで、平安時代末期以降の遺物包含層(5層)・造構面(6層)を検出することができた。さらに下層では埋没河川の可能性のあるシルト・粗粒砂などからなる互層(7層)を検出した。出土遺物の遺存状態は良いことから、近隣に当該時期の生活面があることは明らかである。調査地南100m地点では瓦の集積などが検出されている(道2000)ことから、その地点との有機的な関連が考えられる。

【参考文献】

- ・沿 線2000.3 79. 東弓削遺跡(98-572)の調査』『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅰ 平成11年度国庫補助事業』八尾市教育委員会



第101図 断面図

31) 八尾寺内町(2009-16)の調査

(1) 調査地：本町2丁目109の一部(第38図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ - 1箇所(面積約 4.0m^2)について、現地表(T.P.+9.0m前後)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南東側の道路上:T.P.+9.0m)である。

【地層】0層は盛土。以下現地表下 2.0m 前後までの 1.5m 間において6層の層序を確認した。1層(T.P.+8.5m前後)は近世の整地土である。上面では溝1条(S D101)を検出した。2層(T.P.+8.3m)は中世末～近世の整地土と思われる。上面では土坑1個(S K201)を検出した。3層(T.P.+8.0m)は上面が荒拌を受け土壤化しており、耕作土の可能性がある。層内からは鎌倉～室町時代に比定できる瓦器の破片が出土した。4層(T.P.+7.8m)は砂層の水成堆積である。5層(T.P.+7.55m)からは平安時代以前に比定できる土師器の破片が出土しており、土壤化していることから、調査を行ったが遺構の検出はなかった。6層は砂層の水成堆積である。

【検出遺構】

S D101：平面形状は南北から北東方向に直線に伸び、幅 1.5m を測る。断面形状は逆台形で、深さ 0.5m を測る。埋土は褐色粗粒砂混粘土である。

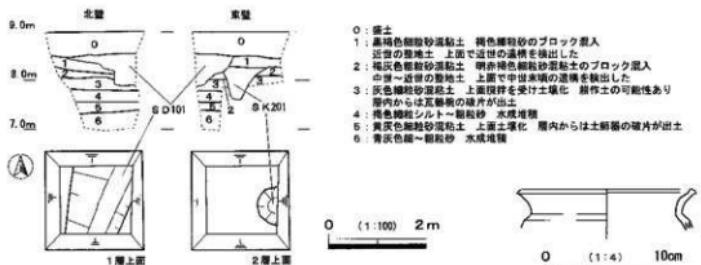
S K201：平面形状は半円形を呈し、径 0.8m 以上を測る。断面形状はU字形で、深さ 0.7m を測る。埋土は褐色細粒砂混粘土である。

【出土遺物】S D101とS K201からは土師器の破片が、5層からは土師器の破片が出土した。このうち図化したものは甕(1)である。1の口縁部は外反する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを、体部の内外面はナデを施す。口縁部と体部の境は強いヨコナデにより凹線状に窪んでいる。平安時代の9～10世紀頃に比定できる。

(3)まとめ：今回の調査では、T.P.+8.5mで近世、T.P.-8.3mで中世末～近世頃に比定できる遺構を検出した。これらの遺構は八尾寺内町の形成時期の遺構と考えられる。また、T.P.+8.0mの粘土層は中世の耕作土と思われる。さらに、下層のT.P.+7.55mでは平安時代の土師器を含む地層が存在していることから周囲に遺構が存在している可能性が高いと思われる。

【参考文献】

- ・原田昌則他1999「II 東部遺跡第37次調査(TG91-37)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会



第102図 平断面図

第103図 出土遺物実測図

32) 八尾寺内町(2009-18)の調査

(1) 調査地：本町5丁目65番3(第38図参照)

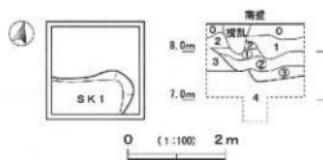
(2) 調査概要：平面規模約 2.0×2.0 m、面積約 $4.0m^2$ 1ヶ所について、現地表(T.P.+8.56m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地東部を南北に伸びる市道中央:T.P.+8.6m)である。

【地層】現地表下0.2~0.5m前後までは、現代の整地に伴う土・盛土、及び攪乱(0層)である。以下現地表下2.0m前後までの1.5~1.8m間ににおいて4層の基本層序を確認した。1層は暗灰黄色粘土質シルト～シルト。炭化物が混在する3~5cmの大のブロック層である。2層は灰黄褐色粘土質シルト～シルト。3層は土師器細片が混在する褐灰色粘土質シルト～シルト。上面においてSK1を検出した。4層は黄灰色粗粒砂～極粗粒砂。河川堆積層である。

【検出構造】3層上面において土坑を1基(SK1)検出した。SK1は西部から南部が調査区外に広がるため、全容は不明である。検出規模は、東西長が1.8m以上、南北長が0.9m以上、深さが0.6mである。埋土は、ブロック土の3層から成る。この内、多量の炭化物が混在する②層からは、江戸時代後期に比定される土器群が出土した。遺物の出土状況に規格性は認められないことから、ゴミ棄て土坑の可能性が考えられる。

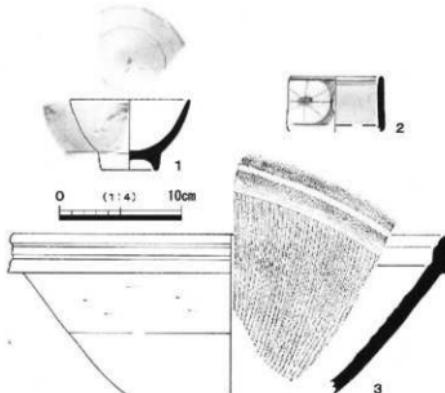
【出土遺物】SK1からは陶磁器・屋瓦などが出土した。この内図化したものは1~3である。1・2は肥前系磁器碗である。1はいわゆる廣東碗で、外面に草花文を描く。疊付きは露胎で砂が付着する。2は筒形碗で、外面に菊花文を描く。3は壺摺鉢である。

(3)まとめ：今回の調査では、江戸時代後期のゴミ棄て土坑と推測されるSK1を検出した。当該期における本調査地周辺は、『河内国若江郡八尾郷絵図(京都大学文学部地理学教室蔵)』から推測すると、八尾寺内町の北東部を占める『此處不残西郷領之内金地院永小作也』と墨書きされた箇所の北東外れに当たり、寺内町の外に位置する。当該期の八尾寺内町の外側の土地利用を推測する上で、貴重な成果と思われる。



0 : 暗灰褐色粘土質シルト～シルトブロック (3~5cm大) (客土・盛土)
1 : 灰黄褐色粘土質シルト～シルトブロック (3~5cm大) (炭化物を含む)
2 : 褐灰色粘土質シルト～シルト
3 : 暗灰褐色粘土質シルト～シルト (土師器混在)
4 : 黄灰色粗粒砂～極粗粒砂ブロック (3~5cm)

第104図 平断面図



第105図 出土遺物実測図

[参考文献]

- ・櫻井敏雄・大草一憲1988『寺内町の基本計画に関する研究－久宝寺寺内と八尾寺内を中心として－』八尾市教育委員会

33) 八尾寺内町(2009-188)の調査

(1) 調査地：本町2丁目33番3(第38図参照)

(2) 調査概要：平面規模約2.0×3.0m、面積約6.0m²1ヶ所について、現地表(T.P.+9.15m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10C52(調査地北東約100m地点:T.P.+8.692m)を使用した。

【地層】現地表(T.P.+9.15m)下0.6m前後までは、盛土(0層)。以下現地表下1.0m前後までの0.4m間において3層の地層を確認した。1層は灰色粗粒砂混粘土。2層は灰色細～粗粒シルトである。上面は土壤化し、江戸時代の遺構を検出した。3層は灰色細～粗粒砂で、2・3層は河川堆積である。

【検出遺構】2層上面で調査を行い、江戸時代の溝1条(SD101)を検出した。

SD101は、中央から東部で検出した。

平面形状は南北方向に直線に伸び、構造の東側は調査区外に至る。検出した幅は2.5mを測る。溝の西部は緩やかに東に下がるテラス状の段をもつ。断面形状はU字形を呈し、深さは1.3mを測る。埋土は上下に分かれ、上層は灰褐色細粒砂混粘土(粗粒シルト質粘土のブロック混入)で、下層は暗青灰色粗粒砂混粘土(細粒砂混粘土のブロック混入)である。江戸時代の陶磁器・瓦などの破片が出土した。

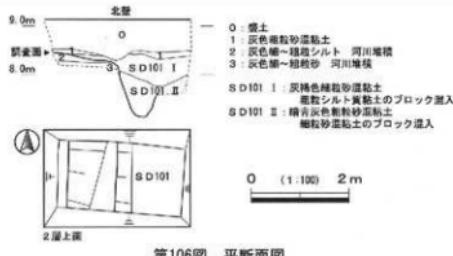
【出土遺物】SD101からは江戸時代の陶磁器・瓦などが出土した。この内訳化したもののは1～5である。1は土師器皿で口縁部形態から見てへそ皿と思われる。2は瀬戸美濃系陶器の灰釉丸碗で、高台置付け～高台内には露胎である。3は型作りの白磁缸皿である。4は陶器摺鉢で、胎土中に砂粒を多く含む。摺目は細く密で9本以上である。丹波焼と思われ17世紀代に比定される。5は巴文軒丸瓦である。

(3)まとめ：今回の調査では、江戸時代の溝(SD101)を検出した。この溝は、南北方向に直線に伸び、西肩はテラス状の段をもつが、急激に落ち込む形状で、埋土には陶磁器・瓦などの破片を含んでいた。溝の東側は調査区外に至るため構造の性格は不明な点があるが、形状、規模などから推測すると、堀状の遺構になる可能性が考えられる。

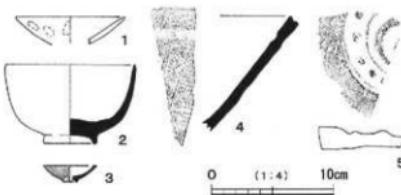
なお、『寺内町の基本計画に関する研究』(櫻井他1988)によると、今回の調査地はⅠ期町割計画区域(慶長期)の東端に位置している。したがって、今回の調査で検出した溝は、東端に存在した堀になると考えられる。

【参考文献】

- ・櫻井雄雄他1988『寺内町の基本計画に関する研究-久宝寺寺内と八尾寺内を中心として-』八尾市教育委員会
- ・原田昌則他1999「II 東郷遺跡第37次調査(1991-97)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会



第106図 平断面図



第107図 出土遺物実測図

34) 八尾寺内町(2009-264)の調査

(1) 調査地：本町3丁目91番の一部(第38図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $4.0 \times 1.5m$ 、面積約 $6.0m^2$ 1ヶ所について、現地表(9.0m前後)下1.0m前後までを平面的に調査した。また、下層確認としてさらに約1mを掘削し、地層の確認を行った。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10C62(調査地南東100m地点:8.727m)を使用した。

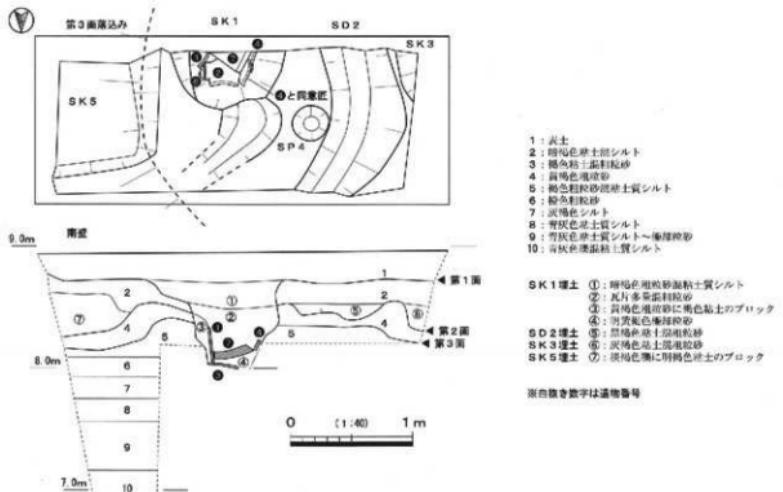
【地層】現地表(9.0m前後)下0.1~0.2mまでは表土、以下現地表下2.0m前後において10枚の地層を確認した。2層暗褐色粘土質シルトは層厚0.1~0.2m、調査区南西部に見られる。3層褐色粘土混粗粒砂は層厚0.1~0.2m、調査区北東部に見られる。ともに近世陶磁器・瓦片などを含む。4層黄褐色粗粒砂は層厚0.3m前後で、河川埋土と考えられる。5層褐色粗粒砂混粘土質シルトは層厚0.3m以上、近世の基盤層となるものである。以下、6層橙色粗粒砂、7層灰褐色シルト、8層青灰色粘土質シルト、9層青灰色粘土質シルトへ極細粒砂、10層青灰色礫混粘土質シルトは下層部分で確認したため、詳細は不明瞭であるが、いずれも軟弱な水成層である。

【検出構造】2層上面(第1面)で溝をともなう土坑SK1、4層上面(第2面)で土坑SK3・SK5・柱穴SP4・溝SD2、5層上面(第3面)で落込み1か所を検出した。

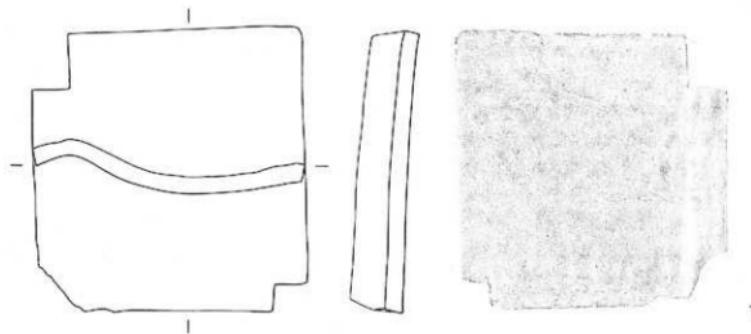
SK1：南半分は調査区外に至るが、径0.9m・深さ0.8m程度を測る。平面の形状は円形と考えられ、北側には小溝が取付く。断面の形状は二段掘りで、下段掘形内には棟瓦4枚(1・2・4他)・丸瓦1枚(6)からなる枠があり、底には棟瓦(3)・井戸瓦(7)がある。枠の構造は、東辺に棟瓦1・北東角に丸瓦6・北辺に棟瓦2・西辺に棟瓦4および同意匠のもの2枚が立てられたものである。底には、上に井戸瓦7・下に棟瓦3が2枚重なっていた。その他に3点の瓦(5他)が出土しており、これらは南辺の枠の可能性が高い。北に取付く溝は北東から南西にカーブして枠内に流下している。また、このカーブは枠の方向と一致している。近世陶磁器や多量の瓦の小片が出土したが、上部の①層からは煉瓦等が出土していることから、埋没時期は近世末~近代にかけてであろう。

SK3：調査区南端で検出した。検出幅0.4・深さ0.25mを測る。丸瓦が出土した。

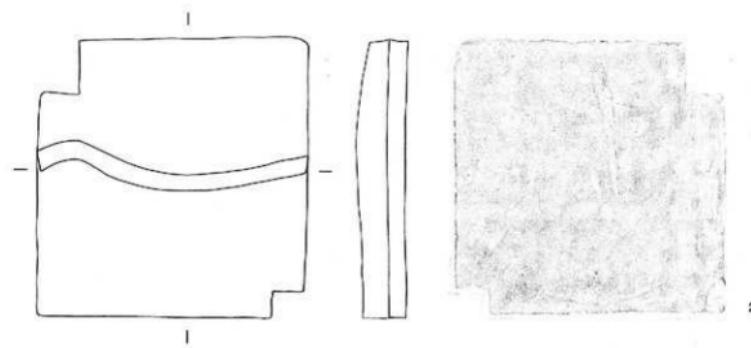
SP4：径0.3m・深さ0.4mを測る。断面の形状は二段掘りで柱痕と考えられる。埋土は⑤黒褐色粘



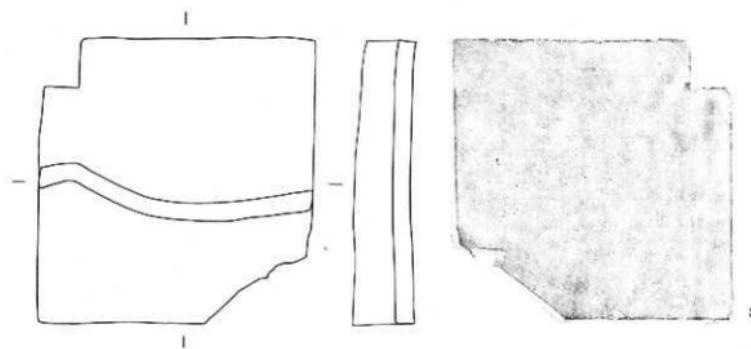
第108図 平断面図



1



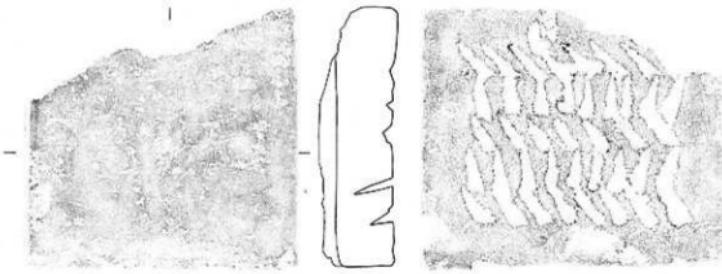
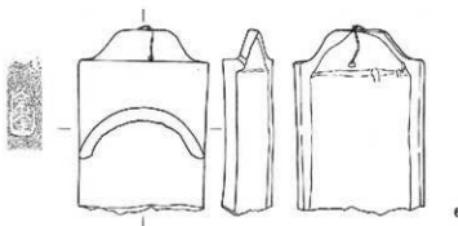
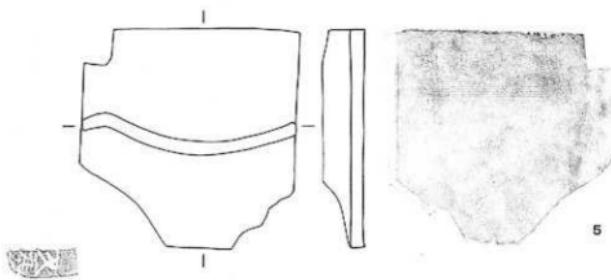
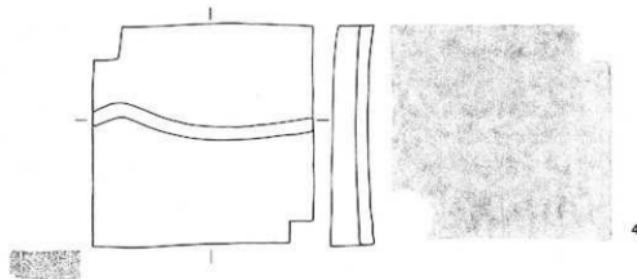
2



3

0 (1:5) 20cm

第109圖 出土遺物實測圖(1)



0 (1:5) 20cm

第110図 出土遺物実測図(2)

土混粗粒砂・③茶褐色粘土質シルトの2層からなる。

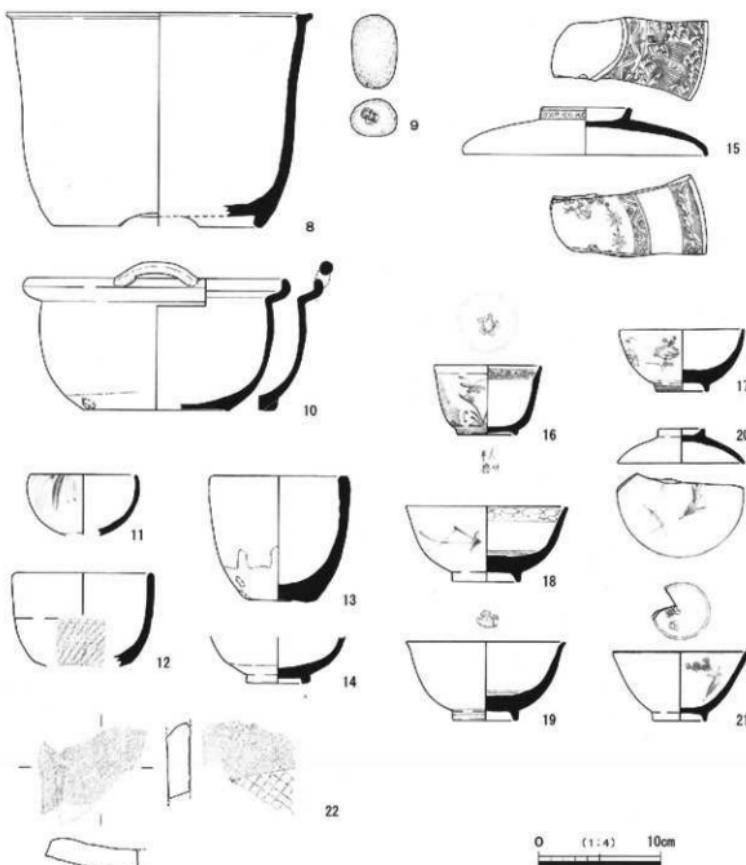
SK 5：調査区西端で検出した方形の土坑である。検出幅1.1m・深さ0.5mを測る。内部からは多量の日常雜器(10~21)や瓦のほか、奈良時代の平瓦(22)が出土している。

SD 2 : SK 1にとりつく溝と同方向に曲がる。炮烙や国産磁器碗、丸瓦等が少量出土した。

落込み：調査区東部で5層が北東側へ落込んでいるのを確認した。

【出土遺物】出土遺物は、いずれも江戸時代後期(18世紀後半~19世紀前半頃)のものと考えられる。

SK 1：棟瓦には大型の1~3・小型の4~5がある。1~3は凸面の「棟」部分にハケ状工具の圧痕が見られる。4~5は凸面狹端面側に滑り止めのカキ目をもつもので、4は斜格子、5は直線文間に波状文である。いずれも広端面に「久瓦金」と読める押印が見られる。丸瓦6は玉縁部分の小孔に針金を通して、端部で捻っている。凸面狹端縁際には4~5と同じ押印が見られる。井戸瓦7は凸面に楔形と円形を



第111図 出土遺物実測図(3)

組み合わせた雷文の滑り止めを配している。脚付きの鉢8は、低い脚台部の4方にえぐりの入るその形態から植木鉢の可能性がある。右9は端面に擦痕が見られる。砂岩と考えられる。

S K 5 : 10は輪状の把手を持つ陶器上鍋で、腰以下が露胎、底部脇に豆粒状の脚が付く。碗11は京都系の小碗で、赤絵・錦手の文様を描く。碗12の外面体部上半へ内面は透明釉が施され、外面下半には褐色の釉を掛けた後飛びガラス風の文様を施している。13は筒型平底で、褐色釉が施され、口縁端部は釉を剥き取って水平な面をなす。瀬戸・美濃系の「錢盤」と称されるものかと考えられる。14は丸い腰を持つ碗で、13同様瀬戸・美濃系の可能性が高い。15~21は肥前系磁器である。蓋15は大碗または鉢のもので、口縁部は垂直に折れる。外面には鳥を主とした文様が隙間なく描かれ、高台脇には○×文が巡る。内面は、見込みに松竹梅を環状に配し、さらに環状の文様帯が2周する。小碗または猪口16は口縁端部が直線的に屈曲するもので、外面には蝶・草花を描き、高台内に「大明平典」と読める銘がある。口縁内面には蕨手文が巡り、見込みには2条の圓線内にコンニャク判の五弁花が配される。碗17はやや小型のもので、外面には草花文が描かれ、見込みには蛇の目釉剥がれが見られ、18・19はやや大型の端反り碗で、18の外面には草花文、口縁内面には蕨手文状の文様があり、19とともに見込みに2条の圓線が巡っている。20・21は青磁碗の蓋・身のセットである。ともに口紅を施し、内面に松竹梅文が描かれている。碗21の見込みには2条の圓線内に梅が描かれている。平瓦22は凸面に斜格子タタキを持つもので、鎌倉時代以前のものと考えられる。

(3)まとめ:今回の調査では、表土直下から近世の遺構を検出した。SK1は現代の「集水溝」のようなもの(市教委藤井氏の御教示による)そこから、北東方向へ水を供給していたものと考えられる。植松遺跡第10次調査(成海2008)では、同時期の遺構とした、瓦を立てた土坑への排水溝が検出されており、同類の施設と考えることができる。第1・2面の溝が南東へ流下していること、第3面の落ち込みがそれらに直交することから、古長瀬川に起因する微地形が想定できる。第3面以下では水成層のみを確認したが、このうちのいずれかが第1次調査(岡田1995)で検出した中世の河川や水田に対応するものと考えられる。

出土遺物一覧表

遺構	番号	器種	法量	備考
S K 1	1	棲瓦	幅 27.7 長さ 29.2 厚さ 1.9	側①
	2	棲瓦	27.7	28.5 1.9~2.1 側②
	3	棲瓦	28.1	29.2 1.8~1.9 底(長 F)
	4	棲瓦	22.6	23.3 1.3~1.5 側③、側④と河原底、広端面に「久瓦金」の押印
	5	棲瓦	22.6	22.5 1.3~1.4 広端面に「久瓦金」の押印
	6	丸瓦	径 13.5	— 1.4 側②、正面狭端側面に「久瓦金」の押印
S K 5	7	井戸用瓦	幅 30.5 長さ 24.7	6.0 底③
	8	陶器碗	口径 21.8 高さ 17.6 底径	腰台脇の4方に半円形の透かし、△波浪模小鉢? 19世紀中葉
	9	叩石?	径 3.1~3.8	長さ 6.0 叩石
	10	陶器碗	口径 20.9 器高 12.1 底径	受口状の口縁部、半円形の把手を持つ
	11	陶器碗	8.6	— 外院、赤絵、金彩、京窓系、18世紀後半
	12	陶器碗	11.0	7.6 — 腹以下に褐色釉(鉢釉か?)、飛びガラス風の文様
	13	陶器碗	10.8	10.2 5.8 褐色釉、口縁端部の剥き取り、瀬戸・美濃系「錢盤」か? 18世紀
	14	陶器碗	—	— 外院、瀬戸・美濃系、19世紀以降
	15	磁器蓋	10.0	3.9 總径 7.0 肥前系、19世紀以降
	16	磁器碗	8.7	5.7 底径 見込みに五弁花、高台裏に「大明平典」、肥前系、18世紀末
	17	磁器碗	10.1	5.1 4.2 蛇の目剥がれ、肥前系、18世紀末
	18	磁器碗	13.1	6.2 5.4 遷反碗、蛇の目剥がれ、肥前系、19世紀初頭
	19	磁器碗	12.9	6.5 5.0 遷反碗、蛇の目剥がれ、見込みに五弁花、肥前系、19世紀初頭
	20	磁器蓋	10.4	2.8 — 背銀鏡・蓋のセット、口紅、肥前系、19世紀初頭
	21	磁器碗	11.1	5.7 —
	22	平瓦	—	川上式片瓦痕、凸面斜格子タタキ、斜格子タタキ、鎌倉以前

【参考文献】

- ・岡出清一 1999『III 八尾寺内町遺跡第1次調査』財団法人八尾市文化財調査研究会報告63』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 2008『植松遺跡第10次調査(UM2006-10)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告113

35) 八尾寺内町(2009-254)の調査

(1) 調査地：本町3丁目46番1(第38図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ —1箇所(面積約 0.25m^2)について、現地表(T.P.+8.8m)下 2.0m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北約50m:T.P.+8.965m)である。

【地層】0層は客土・盛土。以下3層の基本層序を確認した。1層は灰黄褐色シルト(T.P.+7.7~8.2m)、2層(T.P.+7.4~8.1m)は青灰色シルトに青黒色粘土質シルトが混入するもので、両層は地形的に東から西に向かって緩やかに落ち込む。3層(T.P.+7.8m前後)は青灰色粘土質シルトで、今回検出した遺構である井戸(SE-1)および溝(SD-1)の構築層となる。

【検出遺構】

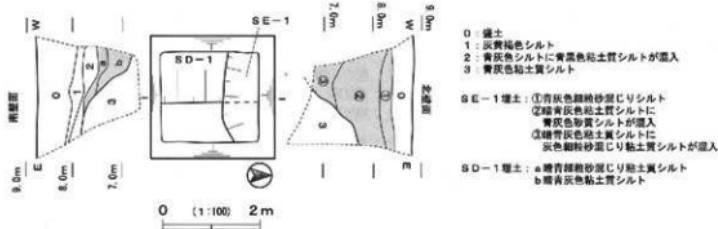
SE-1—調査区北部で、南側掘り方の北側の一部を検出した。検出状況から想定して、径 2.5m 以上、深さは 2.0m 以上測るものと思われる。埋土は上から①青灰色細粒砂混じりシルト、②暗青灰色粘土質シルトに青灰色砂質シルトが混入、③暗青灰色粘土質シルトに灰色細粒砂混じり粘土質シルトが混入、の3層からなる。遺物は②層から瓦・染付陶磁器・植木鉢をはじめ、井戸側として使用されていたと見られる曲物の一部や木製部材の一部が出土したが、図化できるものはなかった。

SD-1—調査区西側で、東岸にあたると見られる掘り方を検出した。北部は、既述の井戸の掘り方に沿って削平される。位置的に南北方向に伸びる溝と思われる。規模は検出状況から想定して、幅 1.1m 以上、深さは検出できたところで最深 1.2m を測る。埋土は、上からa:暗青灰色細粒砂混じり粘土質シルト、b:暗灰色粘土質シルトの2層からなる。遺物は両層から陶磁器、焰烙、瓦片等が出土した。

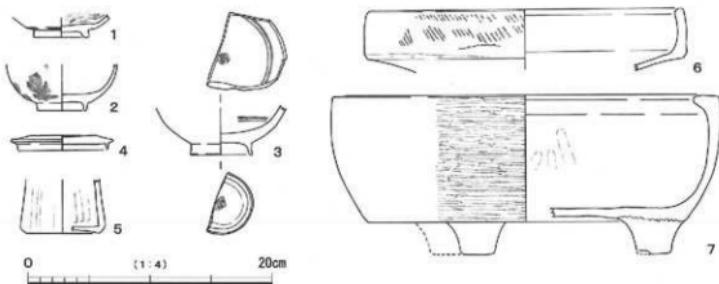
【出土遺物】

出土遺物のうち、図化できたものはSD-1内埋土からのもので、1~3は肥前系陶磁器碗、4は香炉蓋、5は香炉身、6は焰烙、7は火鉢の計7点である。1—高台部は無釉で内面は白泥による刷毛目文様を施す。2—染付青磁で、見込みに五弁花文、高台内に「渦福」銘を染付ける。3—外面に菊葉?の染付文様を施す。4—外面は透明釉が掛かり、内面は無釉である。5—赤味の胎土の陶器で、内外面には薄く釉が掛かる。6—難波分類のC類に比定されるもので、口縁部外面を櫛状工具で左上がりに搔き上げた後に回転ナデが施されている。7—短い円筒の脚を貼り付けた瓦質のもので、内外面は丁寧なヘラミガキを施す。以上の出土遺物は18世紀後半~19世紀初頭に比定されるものである。

(3)まとめ：今回の調査で検出した溝は、現存する「河内国若江郡八尾郷絵図」(京都大学文学部地理学教室蔵)から照合すると、江戸時代初頭(17世紀初頭)に形成された八尾寺内町の環濠の一部である可能性が高いと言える。そういう見方からすると、本溝は寺内町の西側にあたり、調査区南東部に位置する慈願寺の西側の溝(環濠)につながるものと想定される。そして、本溝内埋土と溝を削平する井戸内埋土双方の遺物の年代観から、江戸時代末(19世紀初頭頃)の宅地造成時に埋められたものと考えられる。



第112図 平断面図



第1113図 出土遺物実測図

・櫻井敏雄・大草一憲1988「寺内町の基本計画に関する研究 一久宝寺寺内町と八尾寺内町を中心として」八尾市教育委員会
・難波洋三1992「第V章 第6節 徳川氏大坂城期の焼跡」『難波宮址の研究 第九』財団法人大阪市文化財協会

36) 矢矢遺跡(2009-46)の調査

(1) 調査地：高美町4丁目1-1, 1-2, 1-3, 3-1, 3-4の一部。3-5(第39図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $3.0 \times 3.0\text{m}$ - 4箇所(面積約 36m^2)について、現地表(T.P.+9.6~9.8m)下 2.5m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市作成 $1/2500$ 地図記載の標高値(調査地西側の道路上:T.P.+9.5m)である。

【地層】0層は盛土。以下現地表下 2.5m 前後までの 1.9m 間において5層の層序を確認した。1層は旧耕作土(T.P.+9.1m前後)である。2層(T.P.+9.0m)は平安時代～中世の遺物が混入する整地土で、厚みは約 $0.3\sim 0.4\text{m}$ を測る。3層(T.P.+8.6m)は土師器・須恵器の破片を少量含み、上面は土壤化している。1区で平安時代の井戸1基(S E101)と中世の遺構A～C、2区で中世の土坑1基(S K201)・小穴1個(S P201)、3区で中世の溝1条(S D301)、4区で古墳時代中期・平安時代・中世の小穴3個(S P401～403)を検出した。4層(T.P.+8.5m)は弥生土器の破片を極少量含む。5層は河川堆積層で、厚 1.1m 以上を測る。

【検出遺構】

S E101は1区で検出した。平面形状は円形を呈し、径 1.6m 以上を測る。断面形状は逆台形で、深さ 0.9m を測る。井戸の底には径約 0.3m 、高さ約 0.3m の木棒を設置していた。埋土は灰褐色粗粒砂混粘土、明黄褐色粗粒砂混粘土で、平安時代頃の土師器・須恵器の破片が少量出土した。

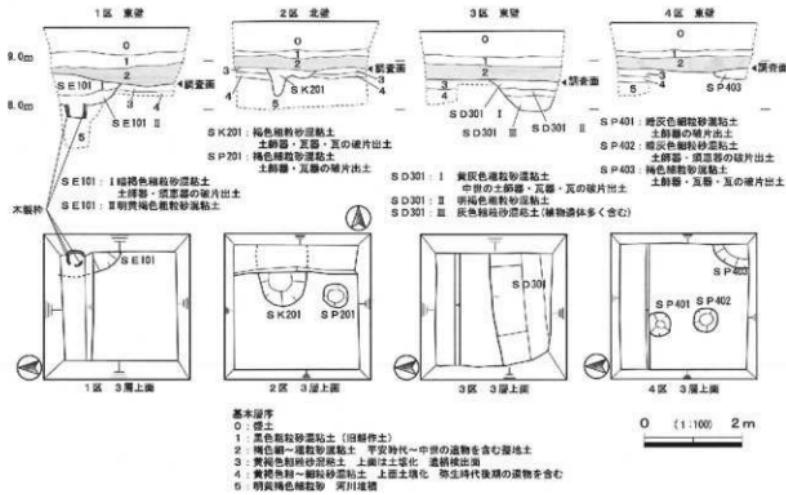
遺構Aは1区の北壁で検出した。幅 0.4m 、深さ 0.2m を測る。埋土は灰黄褐色細粒砂混粘土で鎌倉時代の土師器の破片が出土した。

遺構Bは1区の北壁で検出した。幅 0.5m 、深さ 0.2m を測る。埋土は明褐色粗粒砂混粘土で土師器の破片が出土した。

遺構Cは1区の西壁で検出した。幅 1.35m 、深さ 0.2m を測る。埋土は黒褐色細粒砂混粘土で遺物の出土はなかった。

S K201は2区で検出した。平面形状は梢円形を呈し、径 1.5m 以上を測る。断面形状は皿状形で、西侧が1段低くなる。深さ 0.55m を測る。埋土は褐色粗粒砂混粘土で、鎌倉時代の土師器・瓦器・瓦の破片が出土した。

S P201は2区で検出した。平面形状は円形を呈し、径 0.5m を測る。断面形状はU字形である。深さ 0.2m を測る。埋土は褐色細粒砂混粘土で、鎌倉時代の土師器・瓦器の破片が出土した。



第114図 平断面図

S D301は3区で検出した。東西方向に直線に伸びる。幅1.6m以上を測る。断面形状は逆台形で、深さ0.7mを測る。埋土は黄灰色粗粒砂混粘土、明褐色粗粒砂混粘土、灰色粗粒砂混粘土で、鎌倉～室町時代の土師器・瓦器・瓦の破片がコンテナ箱約3箱分出土した。

S P401は4区で検出した。平面形状は円形で、径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色粗粒砂混粘土で、平安時代の土師器の破片が少量出土した。

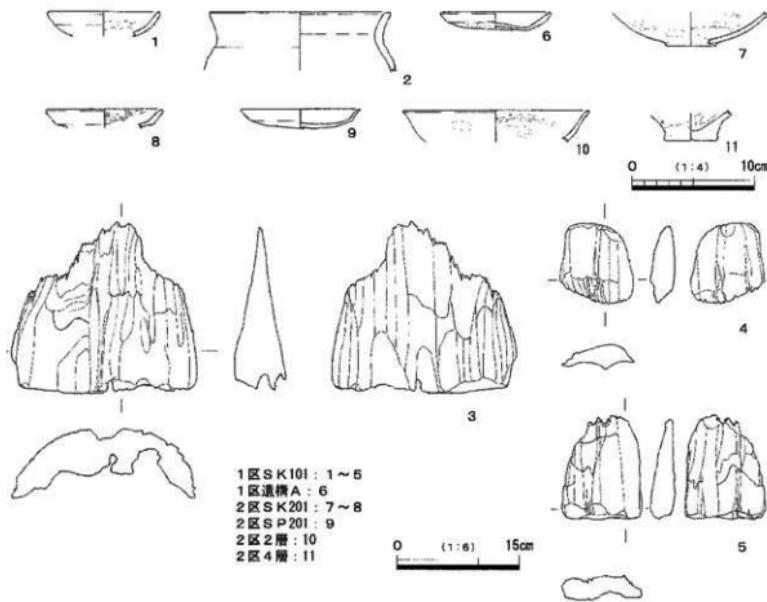
S P402は4区で検出した。平面形状は円形で、径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色粗粒砂混粘土で、古墳時代中～後期頃の土師器・須恵器の破片が少量出土した。

S P403は4区で検出した。平面形状は円形と思われ、径0.6m以上、深さ0.25m以上を測る。埋土は褐色粗粒砂混粘土で、土師器・瓦器・瓦の破片が出土した。

【出土遺物】

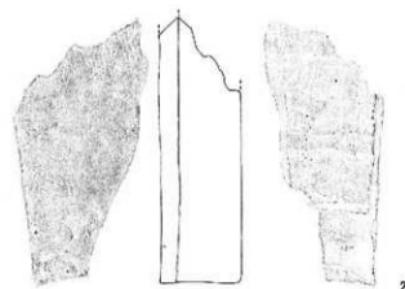
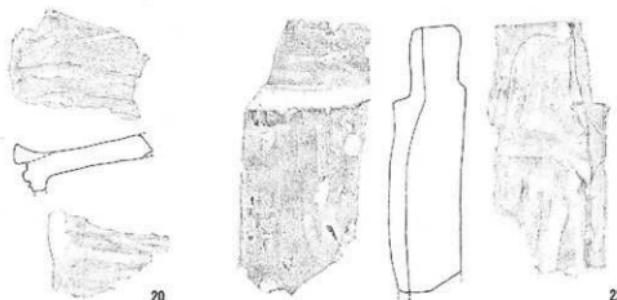
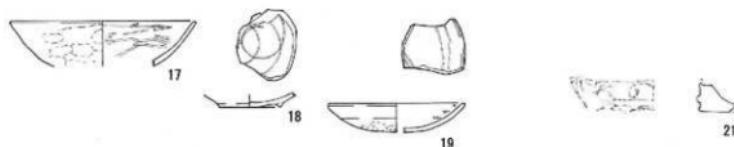
1区のSE101からは平安時代の土師器皿(1)、土師器壺(2)、木製井戸枠(3～5)が、遺構Aからには鎌倉時代の土師器皿(6)が出土した。1の口縁部は外反する。端部は丸く終わる。底部は平らである。体部および口縁部の内外面はユビナデを施す。2の口縁部は外反する。端部は丸く終わる。体部は丸みをもつ。体部の内外面はナデ、口縁部の内外面はヨコナデを施す。3～5は木の幹を削り貫き、底面は平らに裁断している。6の口縁部は内湾する。端部は丸く終わる。底部は平らである。体部および口縁部の内外面はユビナデを施す。

2区のSK201からは鎌倉時代の瓦器碗(7)、瓦器小皿(8)、SP201からは鎌倉時代の土師器小皿(9)、2層からは鎌倉時代の瓦器碗(10)、4層からは弥生時代後期の甕(11)が出土した。7の底部は平らで、断面形状が三角形の低い高台が貼り付く。内面は螺旋状の暗文を、外面はユビナデを施す。8の口縁部は外反する。端部は平らである。体部の内面ヘラミガキ、外面はユビナデを施す。口縁部の内外面はユビナデを施す。9の口縁部は外反する。端部は丸く終わる。底部は平らである。体部および口縁部の内外面はユビナデを施す。10の口縁部は内湾する。端部は丸く終わる。口縁部および体部の内面はヘラミガキ、口縁部および体部の外面はユビナデを施す。11の底部は突出する平底で、内面はハケナデをクモの巣状に施す。外面は右上がりのタタキ後ナデを施す。



第115図 出土遺物実測図(1)

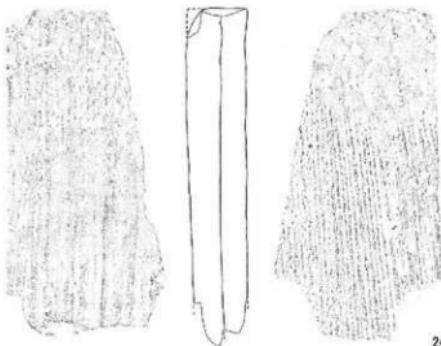
3区のSD301からは室町時代(15世紀前半)の土師器小皿(12~16)、鎌倉~室町時代(13世紀中~末)の瓦器椀(17)、室町時代(14世紀)の瓦器椀(18~19)、鎌倉時代(13世紀)の軒丸瓦(20)、鎌倉時代(13世紀)の軒丸瓦(21)、鎌倉時代(13世紀)の丸瓦(22~23)、鎌倉時代(13世紀)の平瓦(24~30)、鎌倉時代(13世紀)の道具瓦?(31~33)、用途不明の石(34~35)が出土した。12~16の口縁部は外反する。端部は内側へつまみ出し丸く終わる。底部は上げ底である。体部および口縁部の内外面はユビナデを施す。外面には全体的に指圧痕が見られる。17の口縁部は内湾する。体部の外面はユビナデを施し、指圧痕が多く見られる。内面はヘラミガキを横方向に施す。18の底部は平らで、断面形状が三角形の低い高台が貼り付く。内面は螺旋状暗文を、外面はユビナデを施す。19の口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。体部の外面はユビナデを施し、指圧痕が多く見られる。内面はヘラミガキを横方向に施す。20の瓦当部には珠紋を等間隔に配し、細い縦線を廻らす。瓦当の中心部分は欠損しているが、巴文を描くと思われる。外縁の幅と高さはほぼ同じで断面形状は四角形を呈する。丸瓦の凹面には布目の痕跡がある。凸面は板状工具によるナデを施す。21の瓦当の文様は唐草文を描き、圓線を配する。顎凸面はケズリを施す。顎凸面と顎裏面の境の屈曲は鋭く折れ曲がっている。22の玉縁部凹面には布目のちユビナデを、凸面はユビナデを丁寧に施している。丸瓦の凹面には布目のちユビナデを、凸面は繩目タタキのちユビナデを施す。23の凹面には布目、凸面は繩目タタキのちユビナデを丁寧に施す。24の凹面には布目が残存するが、その後、繩目タタキ?を施しさらにユビナデを丁寧に施すため、布目はほとんど残っていない。凸面は繩目タタキを施す。25の凹面には葉巻状の網目の粗い布?を使用している。凸面は繩目タタキを施す。26の凹面には布目。凸面は繩目タタキのちユビナデを丁寧に施す。27の凹面には布目。凸面は横方向に長い凹凸(繩目タタキか?)があるが、ナデて、平らにしている。28の凹面には布目が残存するが、その後、繩目タタキ?を施しさらにユビナデを丁寧に施すため、布目はほとんど残っていない。凸面は繩目タタキ



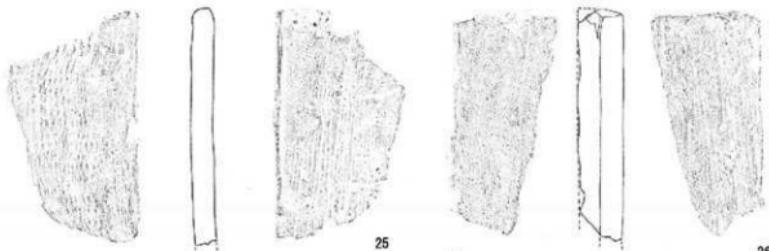
3区 S D301 : 12~23

0 (1:4) 10cm

第116図 出土遺物実測図(2)



24



25

26



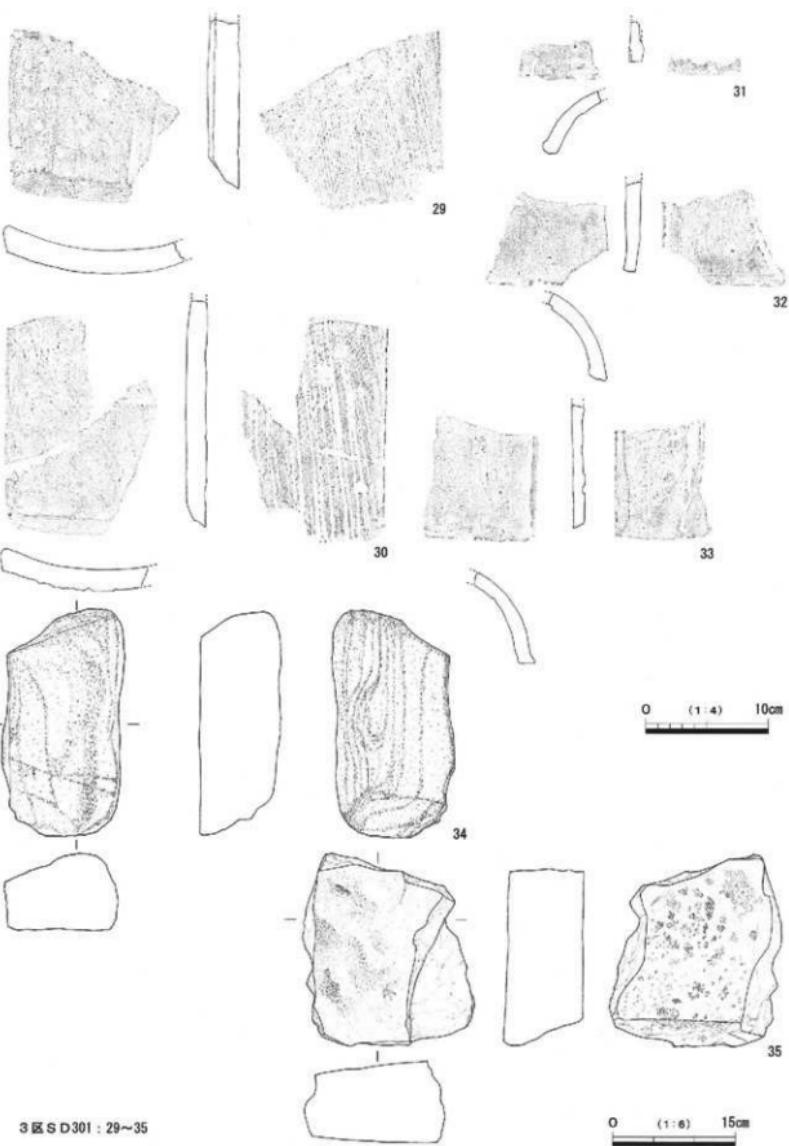
27

28

3区 S D301 : 24~28

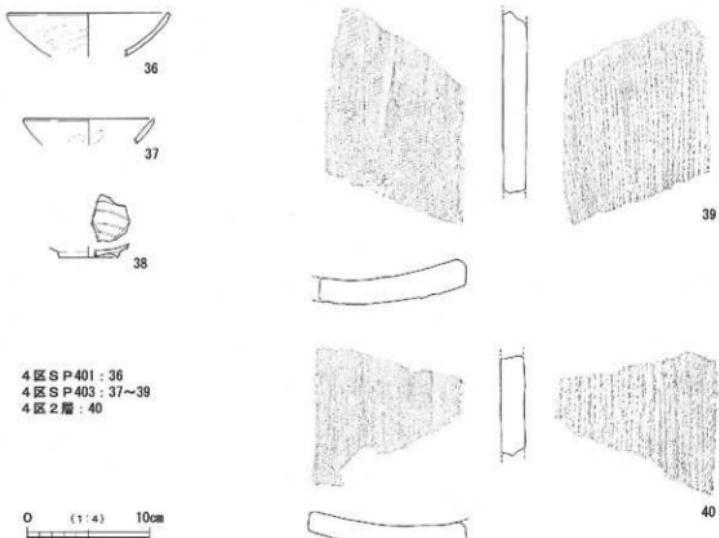


第117図 出土遺物実測図(3)



3区 S D301 : 29~35

第118図 出土遺物実測図(4)



第119図 出土遺物実測図(5)

を施す。29の凹面には布目。凸面は縄目タタキを施す。30の凹面には布目があり、糸切り法を用いて切断している。凸面は縄目タタキを施す。31の凹・凸面はナデを施す。32の凹面には布目。凸面はナデを施す。33の凹面には布目。凸面はナデを施す。34は平らに加工している面が1面、35は2面ある。

4区のS P 401からは平安時代の土師器杯(36)、S P 403からは鎌倉時代の土師器小皿(37)、瓦器椀(38)、平瓦(39)、2層からは平瓦(40)が出土した。36の口縁部は内湾する。端部は丸く終わる。内外面はユビナデを施す。37の口縁部はやや内湾ぎみに上外方に直線に伸びる。端部は丸く終わる。内外面はユビナデを施す。38の底部は平らで、断面形状が逆三角形の低い高台が貼り付く。内面は平行線の暗文を、外面はユビナデを施す。39・40の凹面には布目。凸面は縄目を施す。

(3)まとめ：今回の調査では、T.P.+8.6mで古墳時代後期・平安時代・中世の遺構を検出した。これらの遺構は、北側約50m地点で(財)八尾市文化財調査研究会が昭和61年度に実施した矢作遺跡第1次発掘調査(原田1989)で検出した遺構と同様のもので、同時期の遺構が南側に広がっていることを確認した。

特筆すべき遺構には3区で検出したS D301がある。この溝からは鎌倉時代～室町時代(13～15世紀)の遺物が多く出土していることから、当地に同時代の寺院が存在していた可能性が高いと考えられる。

【参考文献】

- ・米田敏幸 1982『宮町遺跡発掘調査概要 I -穴太神社境内内施千眼寺の調査』八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1989「I 矢作遺跡(第1次調査)発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告22 (財)八尾市文化財調査研究会

37) 矢作遺跡(2009-120)の調査

(1) 調査地：南本町5丁目96-11の一部(第39図参照)

(2) 調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0m² 1ヶ所について、現地表(T.P.+9.8m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3C396(調査地北西約30m地点:T.P.+9.601m)を使用した。

【地層】現地表下1.0m前後までは、盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.0m間において4層の地層を確認した。1層は暗灰色細粒砂混粘土の旧耕作土。2層は暗青灰色粗粒砂混粘土で、上面は搅拌を受け土壤化。3層は灰色細粒砂。4層は褐色細粒砂。3・4層は河川堆積である。

【検出遺構】なし。

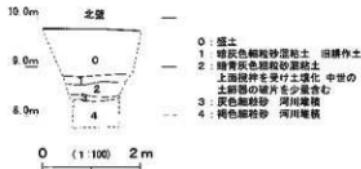
【出土遺物】

2層内からは中世の土師器の破片が少量出土したが、図化できるものはなかった。

(3)まとめ：2層上面は搅拌を受け土壤化していることから、中世の耕作土の可能性が考えられる。今回の確認した2層(中世の地層)に相当する地層は、矢作遺跡(2004-302)の調査(原田2005)でも確認していることから、同時期の遺構が近隣に存在している可能性があると予想される。

【参考文献】

- ・原田昌則2005「49 矢作遺跡(2004-302)の調査」『八尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告50 平成16年度図庫補助事業』八尾市教育委員会



第120図 断面図

38) 龍華寺跡(2009-130)の調査

(1) 調査地：陽光園2丁目39(第35図参照)

(2) 調査概要：平面規模約3.0×2.5m、面積約7.5m² 2ヶ所について、現地表(9.7m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1A162(調査地西約20m地点：9.619m)を使用した。

【地層】現地表(9.7m)下0.7m前後までは、盛土(0層)。以下現地表下1.6m前後までの0.9m間において4層の地層を確認した。1層は黒色細粒砂混粘土の旧耕作土。2層は暗青灰色細粒砂混粘土。3層は黄褐色細粒砂混粘土で、褐色細粒砂混粘土のブロックが混入する鎌倉時代の整地土である。上面で鎌倉時代の遺構を検出した。4層は青灰色粘土質細粒砂の河川堆積である。

【検出遺構】

1区の3層上面で小穴1個(S P101)、2区の3層上面で小穴1個(S P201)、溝1条(S D201)を検出した。

S P101は、南部で検出した。平面形状は円形で径0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は褐色細粒砂混粘土で、瓦器の破片が出土した。

S P201は、東部で検出した。平面形状は円形で径0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は褐色細粒砂混粘土で、土師器の破片が出土した。

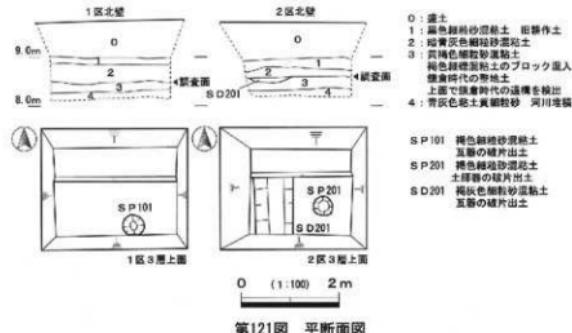
S D201は、西部で検出した。南北方向に伸びる。幅0.8mを測る。断面形状は皿形で、深さ0.15mを測る。埋土は褐色細粒砂混粘土で、瓦器の破片が出土した。

【出土遺物】S P101、S P201、S D201、および3層からは土師器・須恵器・瓦器の破片が少量出土した。このうち図化したものは、2区S P201の瓦器(1)、S D201の瓦器(2)、1区3層出土の瓦器(3)である。1の体部は内湾し、口縁部は丸く終わる。体部の外表面は横向のヘラミガキを施す。2の底部には断面逆台形の高台が貼り付く。見込みの内面は平行線状のヘラミガキを施す。体部の外表面はユビナデを施す。3の体部は内湾し、口縁部はやや外反する。体部の内面は横向のヘラミガキ、外表面はユビナデを施す。1～3は13世紀に比定できる。

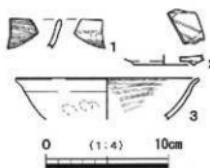
(3)まとめ：今回の調査では鎌倉時代の遺構を検出した。この時期の遺構は、北西約75m地点の調査(坪田1990)で検出しており、付近一帯に居住域が存在していると推測できる。

【参考文献】

- ・坪田真一1990「21. 龍華寺跡(R K89-1)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告28』(財)八尾市文化財調査研究会



第121図 平断面図



第122図 出土遺物実測図

39) 埋蔵文化財包蔵地外(2009-194)の調査

(1) 調査地：竹渕西4丁目247(第39図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5m - 5$ 箇所(北西から1～5区：面積約 $31.25m^2$)について、現地表(約T.P.+7.2～7.8m)下2.0～2.6m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点4A283(調査地南西部：T.P.+7.567m)である。

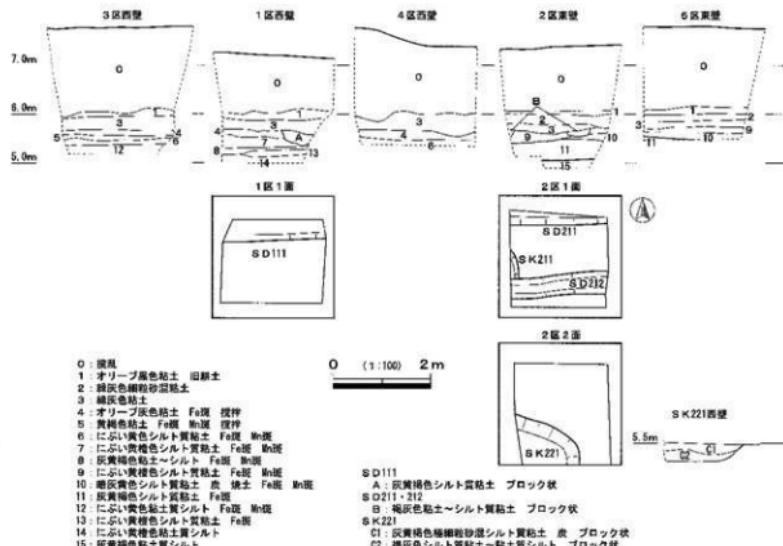
【地層】0層は搅乱。以下現地表下2.6m前後までの1.1m間において15層の基本層序を確認した。1層は旧水田耕作土(T.P.+5.9～6.1m)、2・3層も近世の耕作土であろう。1・2区では3層下面(T.P.+5.7m)で耕作溝を検出した(第1面)。1・3・4区4～6層(T.P.+5.4～5.7m)も搅乱された作土で、時期は中世頃と考えられる。1区7・8層は水成層と考えられるが、8層はやや搅乱が認められ作土かもしれない。東部2・5区の9～11層(T.P.+5.1～5.7m)は奈良時代の遺物包含層で、11層上面(T.P.+5.5m)が第2面である。12層以下のシルト質粘土～粘土質シルトは水成層と思われるが詳細は不明。

【検出遺構】第1面～1区で溝1条(SD111)、2区で土坑1基(SK211)、溝2条(SD211・212)を検出した。いずれも耕作関連構と捉えられ、溝は東西方向に平行している。SD211・212からは巻き上げられた奈良時代の土師器が出土。第2面～2区で土坑1基(SK211)を検出した。平面形は不明で、規模は径1.6m以上、深さ約0.4mを測る。断面逆台形で、埋土はブロック状の2層からなる。

【出土遺物】

SK211～奈良時代(平城III)の土師器杯A・高杯・小型壺・鉢B・製塙土器、須恵器杯Aが出土しており、このうち1～3を図化した。1は土師器杯Aで、口縁部内面に放射状暗文を施す。2は土師器鉢B、3は須恵器杯Aである。

9～11層～奈良時代(平城III)の遺物包含層で、出土土器には土師器杯A・杯B・皿A・椀C・高杯・鉢B・小型壺・甕、製塙土器、須恵器杯A・杯B・皿B・壺・壺A蓋・甕があり、5区9層からは丸瓦



第123図 平断面図

片1点も出土した。このうち2区出土の4~17、5区出土の18~20を図化した。4~13・18は土師器である。4~7は杯Aで、口縁端部に段を作り4~6と丸く收める7がある。8・9は鉢Bで、9は内面が焼けている。10・11は高杯で、杯部内面に放射状暗文・螺旋状暗文を施す。12は小型壺、13は製塩土器である。18は皿Aで、9と同様に内面が焼けている。14~17・19・20は須恵器である。14は杯Aで、焼成不良で土師器風である。15は皿Bで内面に火摺が見られる。16は壺A蓋で、上面全面に自然釉が掛かる。17は杯Bで、器高の高いタイプである。19・20は杯Aあるいは杯B。

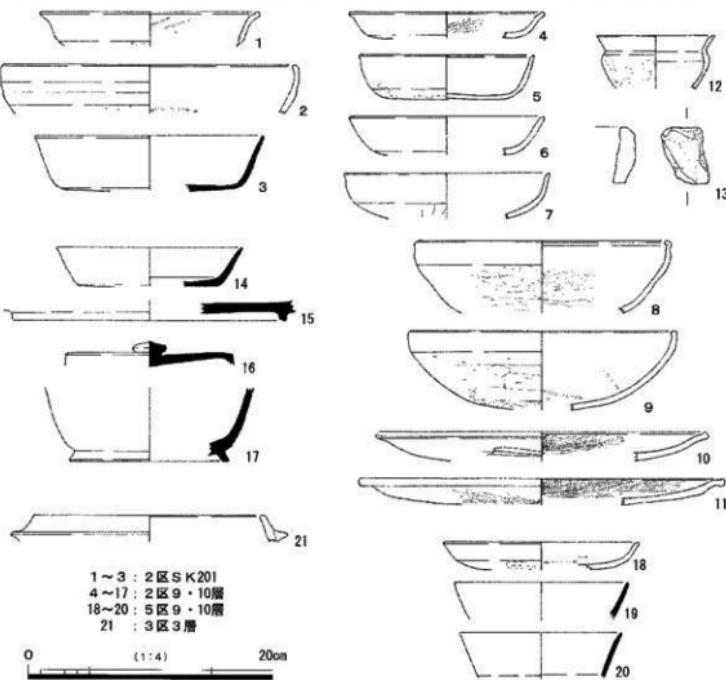
4~6層-1・3・4区では土師器細片の他、3区4層からは13世紀後半に比定される瓦器三足釜の小片(21)が出土した。

(3)まとめ：調査地は竹渕遺跡の西方にあたり、埋蔵文化財包蔵地外のため、これまで発掘調査は行われていない地城であった。今回の調査では、東部で奈良時代の遣構・遺物包含層が検出され、中世頃には全体に生産域となっている様相が確認された。奈良時代の集落域は東に広がる可能性が高いが、竹渕遺跡では南東約500mで平安時代中～後期の包含層等が確認されているのみで、奈良時代の遣構の検出は無く、関連は不明である。

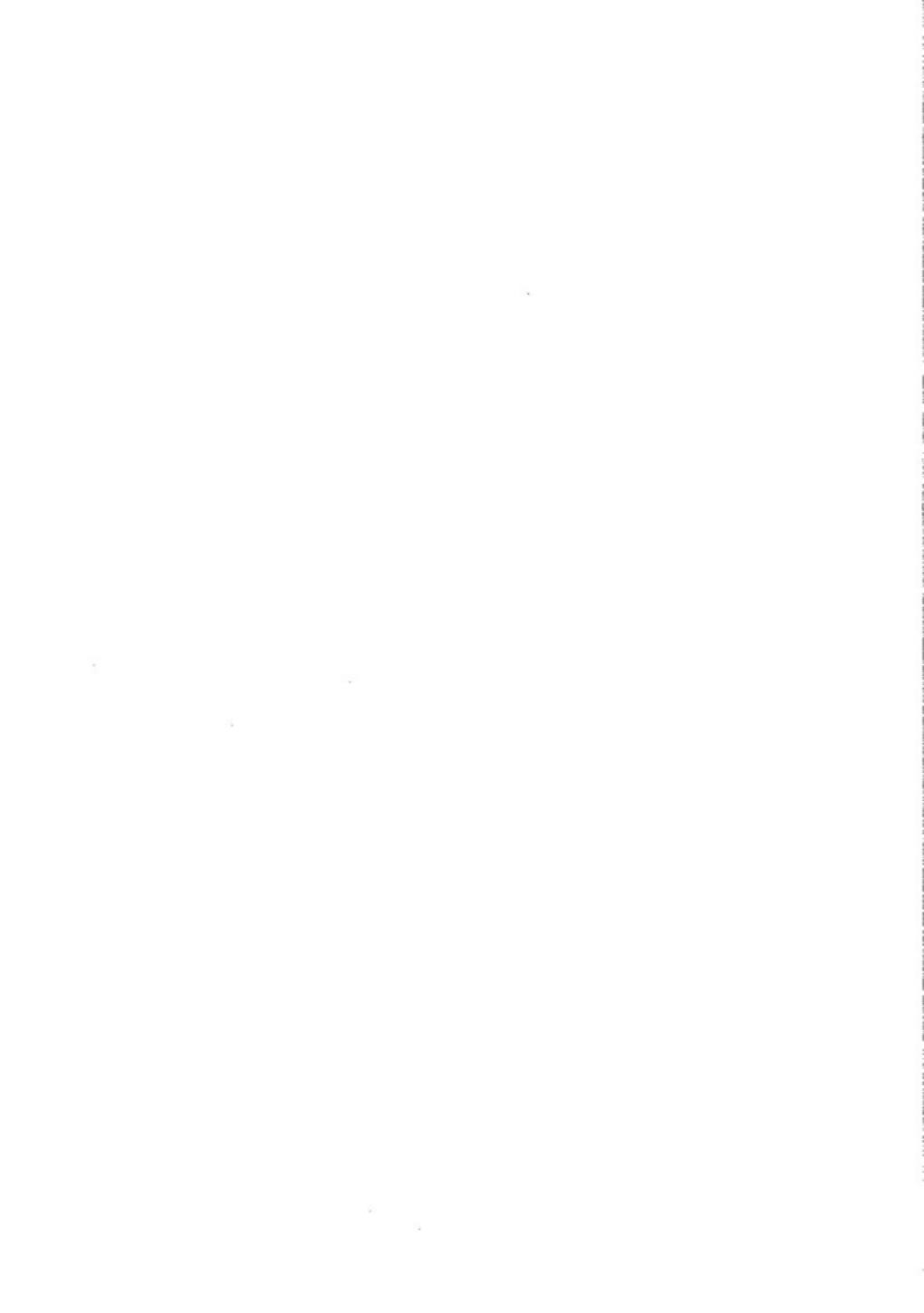
なお、本調査地は「竹渕西四丁目遺跡」として、周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれることとなった。

【参考文献】

- ・原山昌則1996「Ⅲ竹渕遺跡（第6次調査）」『財团法人八尾市文化財調査研究会報告54』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・原山昌則1996「X竹渕遺跡（第6次調査）」『財团法人八尾市文化財調査研究会報告53』（財）八尾市文化財調査研究会



第124図 出土遺物実測図





I-3-1)跡部遺跡(2008-347) 調査地(南東から)



I-3-1)跡部遺跡(2008-347) 1区北壁



I-3-1)跡部遺跡(2008-347) 2区北壁



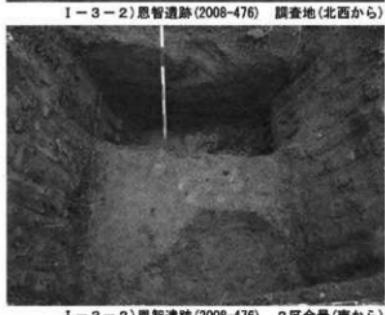
I-3-1)跡部遺跡(2008-347) 3区北壁



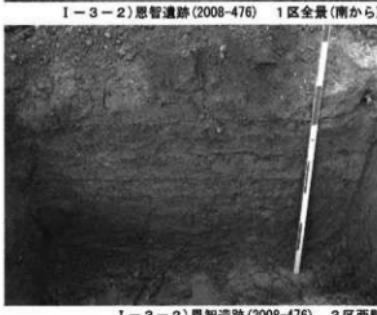
I-3-2)恩智遺跡(2008-476) 調査地(北西から)



I-3-2)恩智遺跡(2008-476) 1区全量(南から)



I-3-2)恩智遺跡(2008-476) 2区全量(南から)



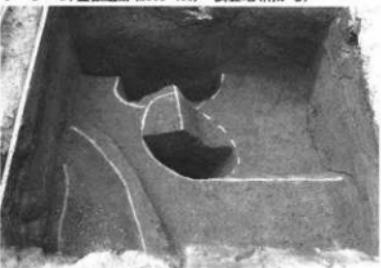
I-3-2)恩智遺跡(2008-476) 3区西壁



I-3-3) 莢振遺跡(2008-460) 調査地(南から)



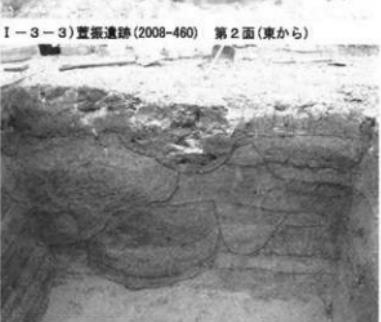
I-3-3) 莢振遺跡(2008-460) 第1面(西から)



I-3-3) 莢振遺跡(2008-460) 第2面(東から)



I-3-3) 莢振遺跡(2008-460) 第3面(西から)



I-3-3) 莢振遺跡(2008-460) 西壁



I-3-3) 莢振遺跡(2008-460) 南壁



I-3-3) 莢振遺跡(2008-460) 出土遺物



I-3-3) 莢振遺跡(2008-460) 出土遺物



I-3-3) 置振遺跡(2008-460) 出土遺物



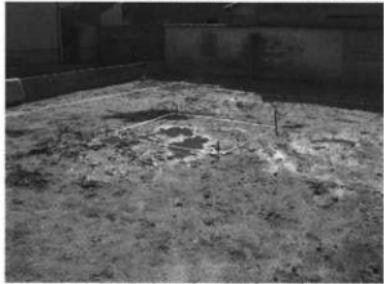
I-3-3) 置振遺跡(2008-460) 出土遺物



I-3-4) 小阪合遺跡(2008-478) 全景(南から)



I-3-4) 小阪合遺跡(2008-478) 南壁



I-3-5) 成法寺遺跡(2008-383) 調査地(北西から)



I-3-5) 成法寺遺跡(2008-383) 北壁(南から)



I-3-6) 太子堂遺跡(2008-232) 調査地(北から)



I-3-6) 太子堂遺跡(2008-232) 1区第1面(北から)

図版
4



I - 3 - 6)太子堂遺跡(2008-232) 1区西壁



I - 3 - 5)太子堂遺跡(2008-232) 2区第1面(南から)



I - 3 - 6)太子堂遺跡(2008-232) 2区南壁



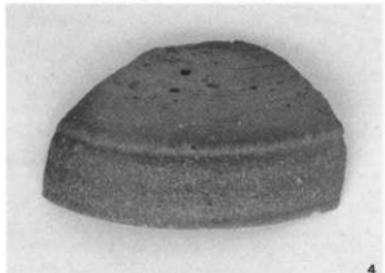
I - 3 - 6)太子堂遺跡(2008-232) 4区南壁



I - 3 - 6)太子堂遺跡(2008-232) 出土遺物



1底



I - 3 - 6)太子堂遺跡(2008-232) 出土遺物



I - 3 - 6)太子堂遺跡(2008-232) 出土遺物



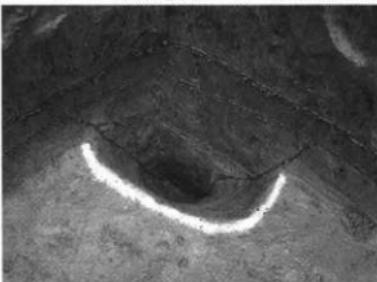
I-3-7 東郷遺跡(2008-454) 調査地(西から)



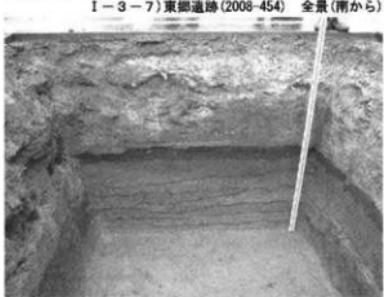
I-3-7 東郷遺跡(2008-454) 調査状況(北から)



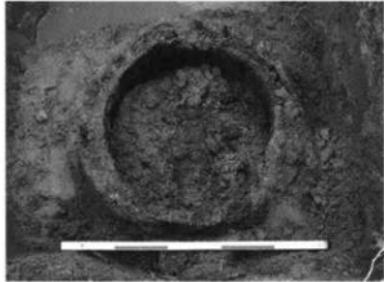
I-3-7 東郷遺跡(2008-454) 全景(南から)



I-3-7 東郷遺跡(2008-454) SP101(南西から)



I-3-7 東郷遺跡(2008-454) 西壁



I-3-8 中田遺跡(2008-500) 全景(西から)



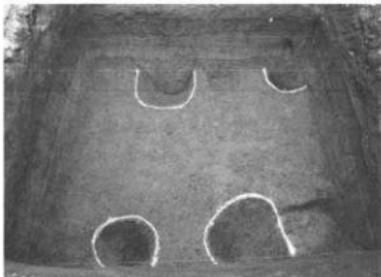
I-3-8 中田遺跡(2008-500) 調査地(西から)



I-3-8 中田遺跡(2008-500) 東壁



I - 3 - 9) 西都廃寺(2008-420) 1区第1面(南から)



I - 3 - 9) 西都廃寺(2008-420) 1区第3面(北から)



I - 3 - 9) 西都廃寺(2008-420) 1区北壁



I - 3 - 9) 西都廃寺(2008-420) 3区南壁



I - 3 - 9) 西都廃寺(2008-420) 出土遺物

5

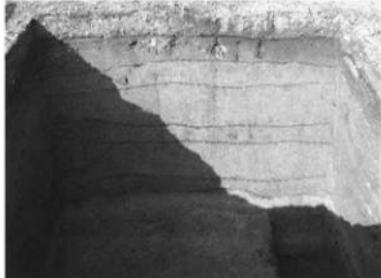


I - 3 - 9) 西都廃寺(2008-420) 出土遺物

8



I - 3 - 10) 東弓削遺跡(2008-461) 調査地(西から)



I - 3 - 10) 東弓削遺跡(2008-461) 1区北壁



I - 3 - 10 東弓削遺跡 (2008-461) 2区南壁



I - 3 - 10 東弓削遺跡 (2008-461) 3区土器格 (東から)



I - 3 - 10 東弓削遺跡 (2008-461) 3区全景 (東から)



I - 3 - 10 東弓削遺跡 (2008-461) 3区北壁



1

I - 3 - 9 東弓削遺跡 (2008-461) 出土遺物



2

I - 3 - 9 東弓削遺跡 (2008-461) 出土遺物



I - 3 - 11 矢作遺跡 (2008-481) 調査地 (南西から)



I - 3 - 11 矢作遺跡 (2008-481) 北壁



II-3-1)跡部遺跡(2009-45) 1区北壁



II-3-1)跡部遺跡(2009-45) 2区北壁



II-3-2)跡部遺跡(2009-157) 3層上面(西から)



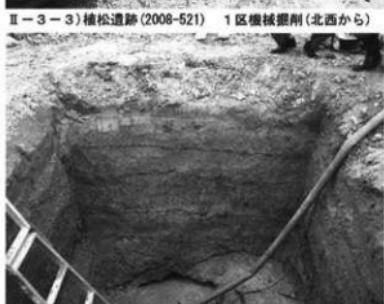
II-3-2)跡部遺跡(2009-157) 西壁



II-3-3)植松遺跡(2008-521) 1区機械搬削(北西から)



II-3-3)植松遺跡(2008-521) 1区西壁



II-3-4)老原遺跡(2009-160) 1区西壁



II-3-4)老原遺跡(2009-160) 1区21層上面(北から)



II-3-4) 老原遺跡(2009-160) 2区東壁



II-3-4) 老原遺跡(2009-160) 2区20層上面(北から)



II-3-4) 老原遺跡(2009-160) 3区東壁



2

II-3-4) 老原遺跡(2009-160) 出土遺物



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 2区北壁



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 6区調査状況(南から)



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 6区東壁



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 6区第1面(南から)



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 7区北壁



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 7区第1面(南から)



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 9区南壁



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 9区第1面(北から)



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 9区第2面(北から)



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 10区北壁



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 10区第1面(西から)



II-3-5) 大竹西遺跡(2009-184) 11区第1面(西から)



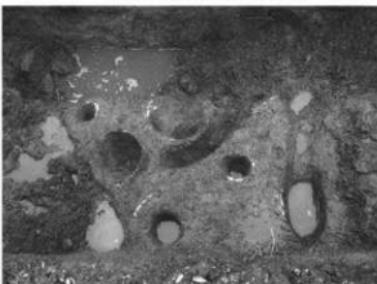
II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 調査地(北西から)



II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 1区北壁



II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 1区107層上面(東から)



II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 2区全景(西から)



II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 5区501層上面(東から)



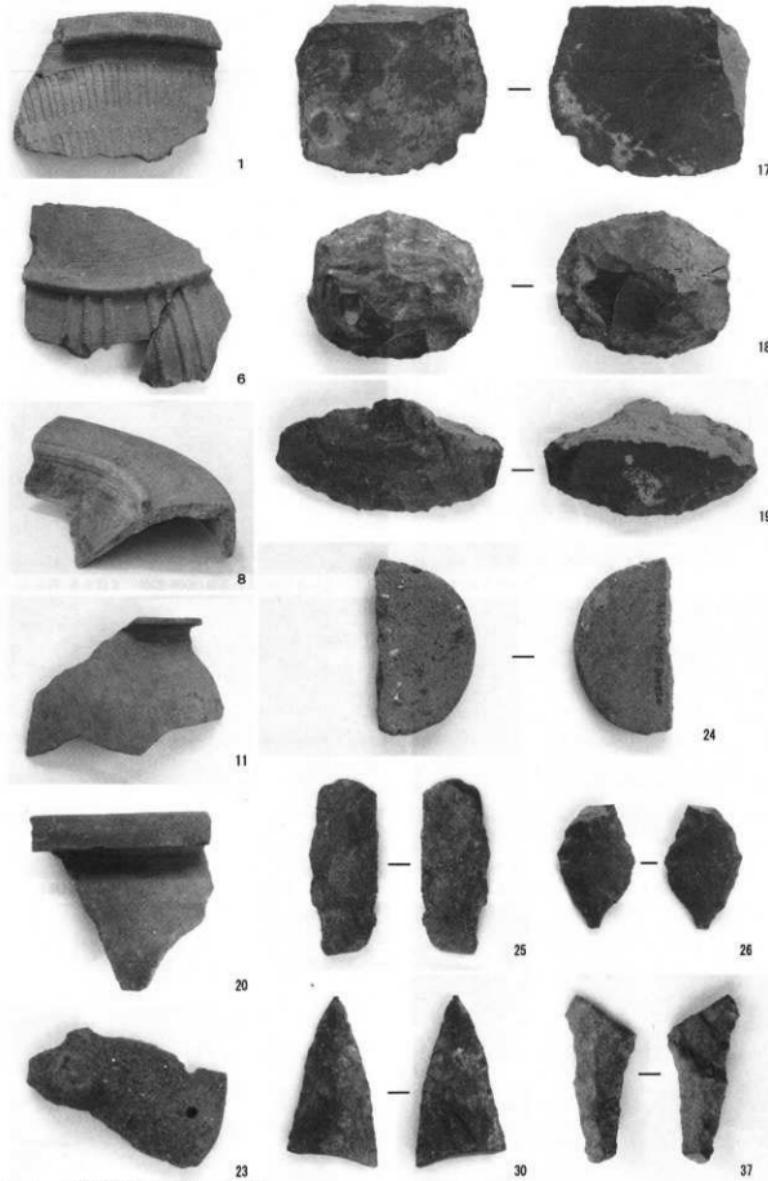
II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 6区601層上面(南から)



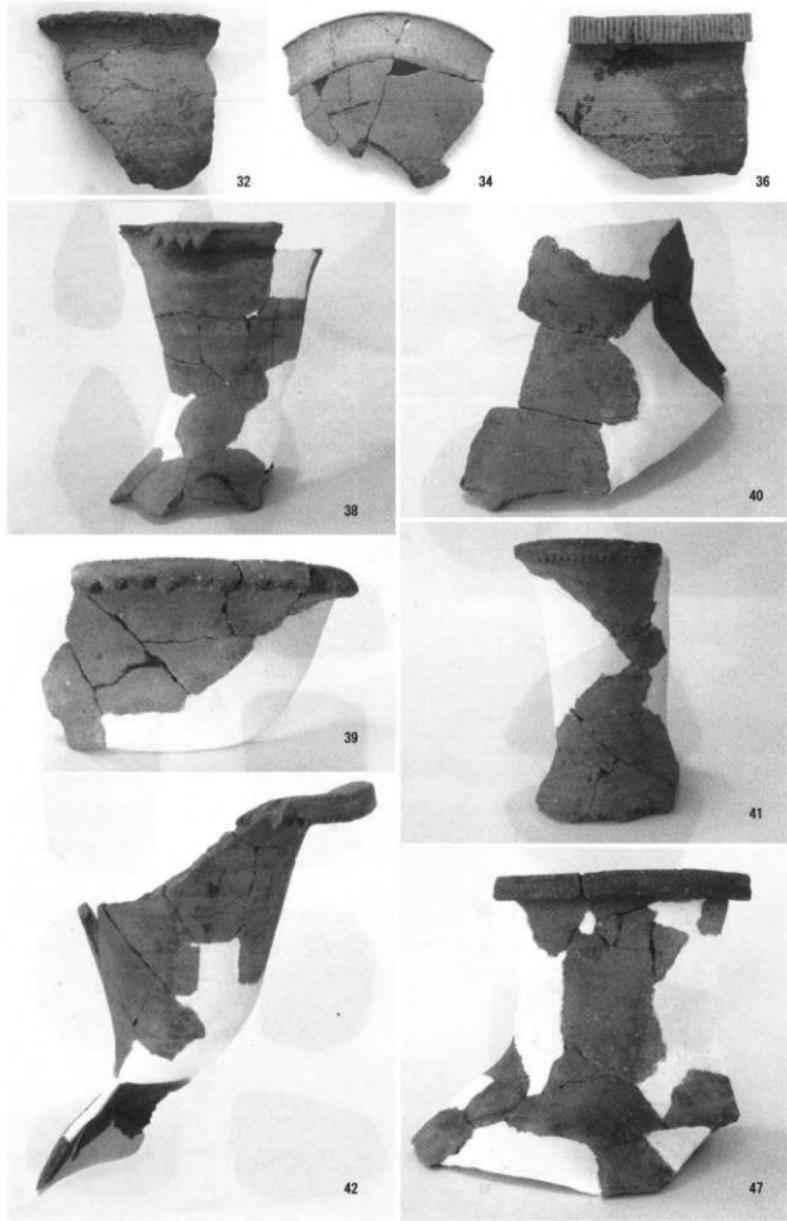
II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 6北区601層上面(北から)



II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 6北区調査状況(北から)

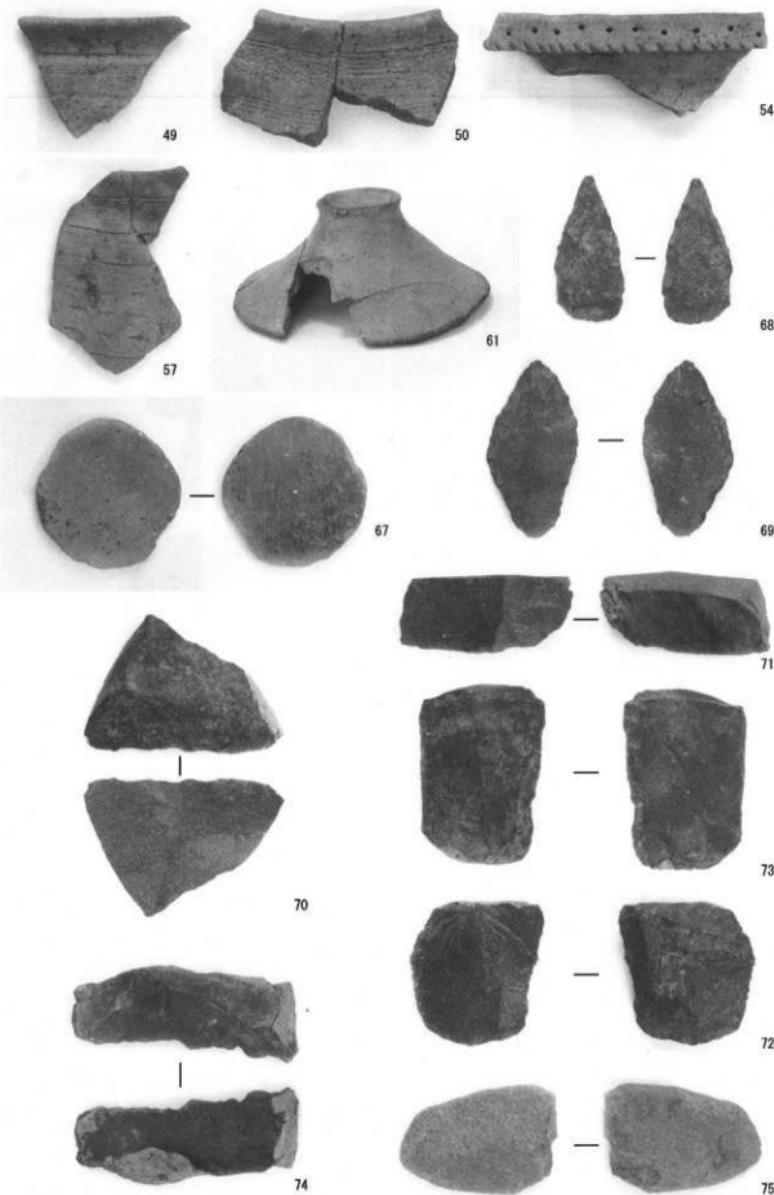


II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 出土遺物 1



II - 3 - 6) 息智遺跡(2008-230) 出土遺物 2

図版
14



II-3-6) 息智遺跡(2008-230) 出土遺物 3



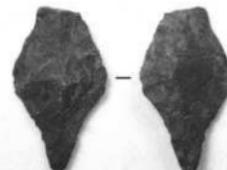
II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 立会C区S D 2(西から)



II-3-6) 恩智遺跡(2008-230) 立会D区東壁



II-3-6) 恩智遺跡(2008-230)〈立会調査〉 出土遺物 1



130



131



132



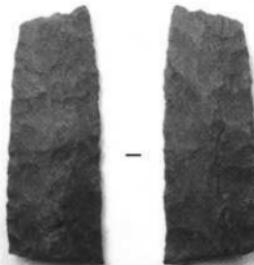
133



134



135



136



137



140



141



142



143



144



II-3-7) 恩智遺跡(2009-220) 1区機械掘削(南西から)



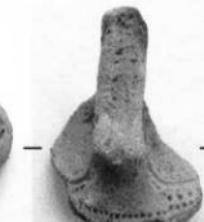
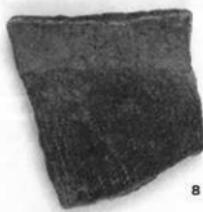
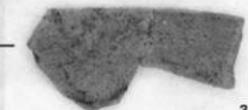
II-3-7) 恩智遺跡(2009-220) 1区調査状況(北東から)



II-3-7) 恩智遺跡(2009-220) 1区西壁



II-3-7) 恩智遺跡(2009-220) 2区南壁



II-3-7) 恩智遺跡(2009-220) 出土遺物



II-3-8) 莢振遺跡(2008-535) 1区西壁



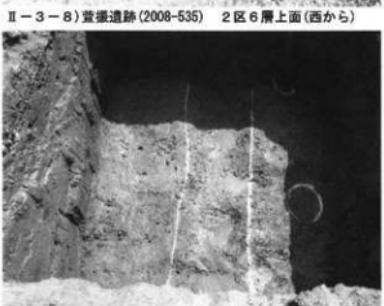
II-3-8) 莢振遺跡(2008-535) 1区5層上面(東から)



II-3-8) 莢振遺跡(2008-535) 2区6層上面(西から)



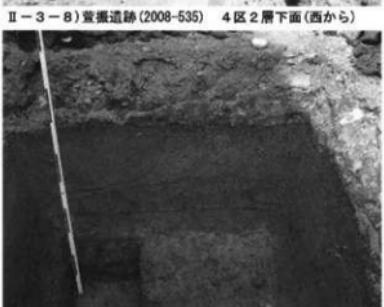
II-3-8) 莢振遺跡(2008-535) 3区6層上面(東から)



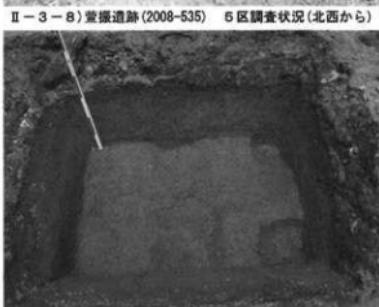
II-3-8) 莢振遺跡(2008-535) 4区2層下面(西から)



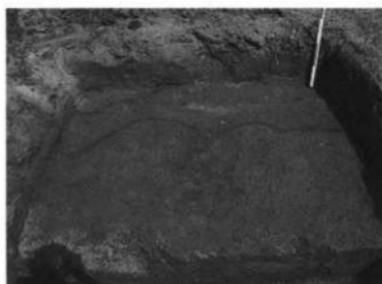
II-3-8) 莢振遺跡(2008-535) 5区調査状況(北西から)



II-3-9) 莢振遺跡(2009-75) 北壁0~6層



II-3-9) 莢振遺跡(2009-75) 3層上面(南から)



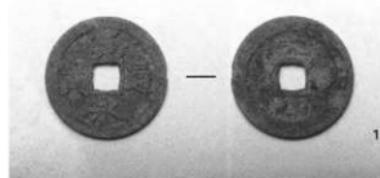
II-3-10 葦振遺跡(2009-179) 第1面(南から)



II-3-10 葦振遺跡(2009-179) 第2面(南から)



II-3-10 葦振遺跡(2009-179) 北壁



II-3-10 葦振遺跡(2009-179) 出土遺物



II-3-11 木の本遺跡(2009-57) 調査地(西から)



II-3-11 木の本遺跡(2009-57) 2区北壁



II-3-11 木の本遺跡(2009-57) 3区北壁



II-3-11 木の本遺跡(2009-57) 7区南壁



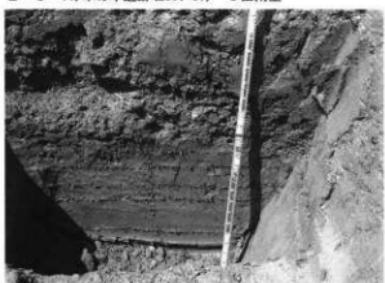
II-3-11)木の本遺跡(2009-57) 8区南壁



II-3-11)木の本遺跡(2009-57) 9区南壁



II-3-11)木の本遺跡(2009-57) 10区南壁



II-3-11)木の本遺跡(2009-57) 11区北壁



II-3-11)木の本遺跡(2009-57) 13区南壁



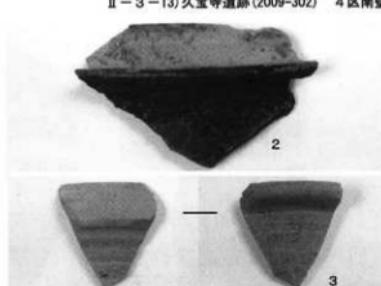
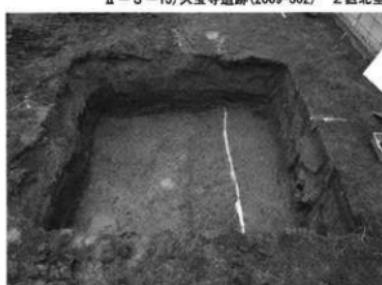
II-3-11)木の本遺跡(2009-57) 15区南壁



II-3-12)久宝寺遺跡(2009-40) 調査地(西から)



II-3-12)久宝寺遺跡(2009-40) 北壁





II-3-14 郡川遺跡(2009-318) 1区東壁



II-3-14 郡川遺跡(2009-318) 2区南壁



II-3-15 小阪合遺跡(2009-197) 北壁



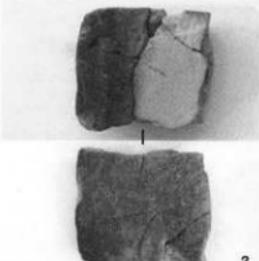
II-3-15 小阪合遺跡(2009-197) 4層上面(西から)



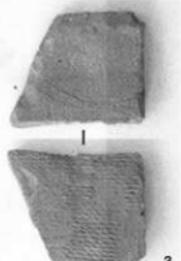
II-3-16 滝川廃寺(2008-217-2) 2区南壁



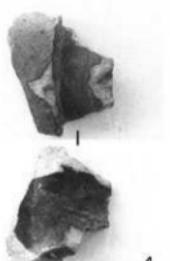
II-3-16 滝川廃寺(2008-217-2) 3区南壁



II-3-16 滝川廃寺(2008-217-2) 出土遺物
2



3



4



II-3-17 東郷遺跡 (2009-126) 1区5層上面 (南から)



II-3-17 東郷遺跡 (2009-126) 2区5層上面 (南から)



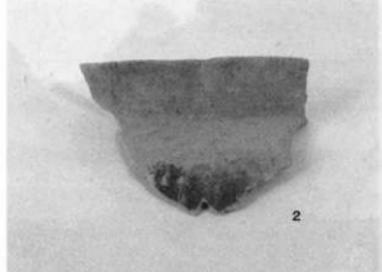
II-3-17 東郷遺跡 (2009-126) 3区南壁



II-3-17 東郷遺跡 (2009-126) 3区5層上面 (北から)



1



2

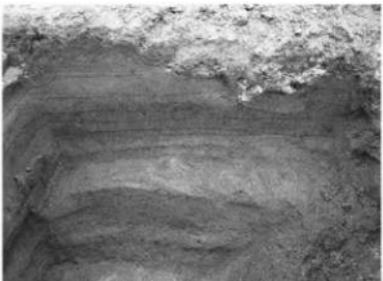
II-3-17 東郷遺跡 (2009-126) 出土遺物



II-3-18 東郷遺跡 (2009-170) 北壁・完掘 (南から)



II-3-18 東郷遺跡 (2009-170) 調査風景 (北東から)



II-3-19) 東郷遺跡(2009-187) 1区北壁



II-3-19) 東郷遺跡(2009-187) 1区9層上面(西から)



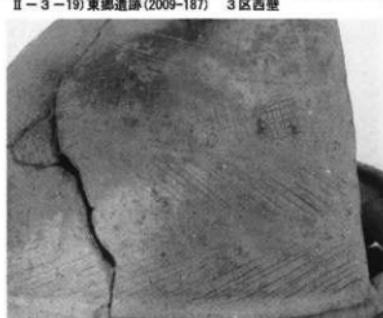
II-3-19) 東郷遺跡(2009-187) 2区9層上面(南から)



II-3-19) 東郷遺跡(2009-187) 3区西壁



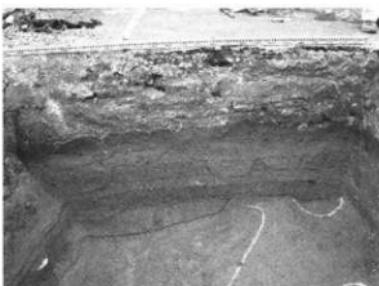
II-3-19) 東郷遺跡(2009-187) 3区S E301北東壁



II-3-19) 東郷遺跡(2009-187) 出土遺物



II-3-20 東郷遺跡(2009-234) 調査地(北から)



II-3-20 東郷遺跡(2009-234) 1区西壁



II-3-20 東郷遺跡(2009-234) 1区8層上面(西から)



II-3-20 東郷遺跡(2009-234) 2区北壁



II-3-21 中田遺跡(2009-424) 1区4層上面(南から)



II-3-21 中田遺跡(2009-424) 2区SK201(南から)



II-3-22 中田遺跡(2009-39) 西壁



II-3-22 中田遺跡(2009-39) 調査状況(南東から)



II-3-23) 中田遺跡(2009-19) 北壁



II-3-23) 中田遺跡(2009-19) 4層上面(南から)



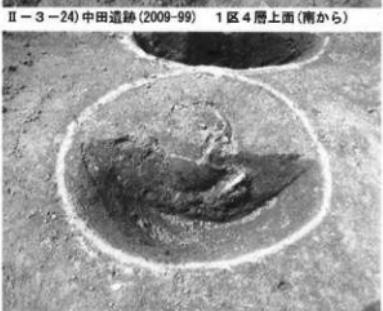
II-3-24) 中田遺跡(2009-99) 調査地(南から)



II-3-24) 中田遺跡(2009-99) 1区4層上面(南から)



II-3-24) 中田遺跡(2009-99) 1区10層上面・北壁



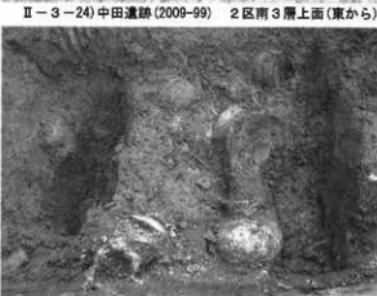
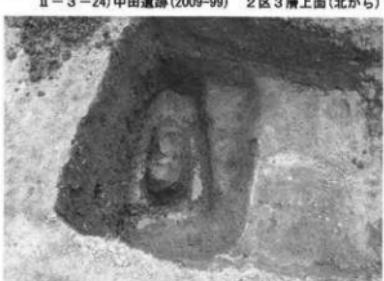
II-3-24) 中田遺跡(2009-99) 1区S P 112(南から)



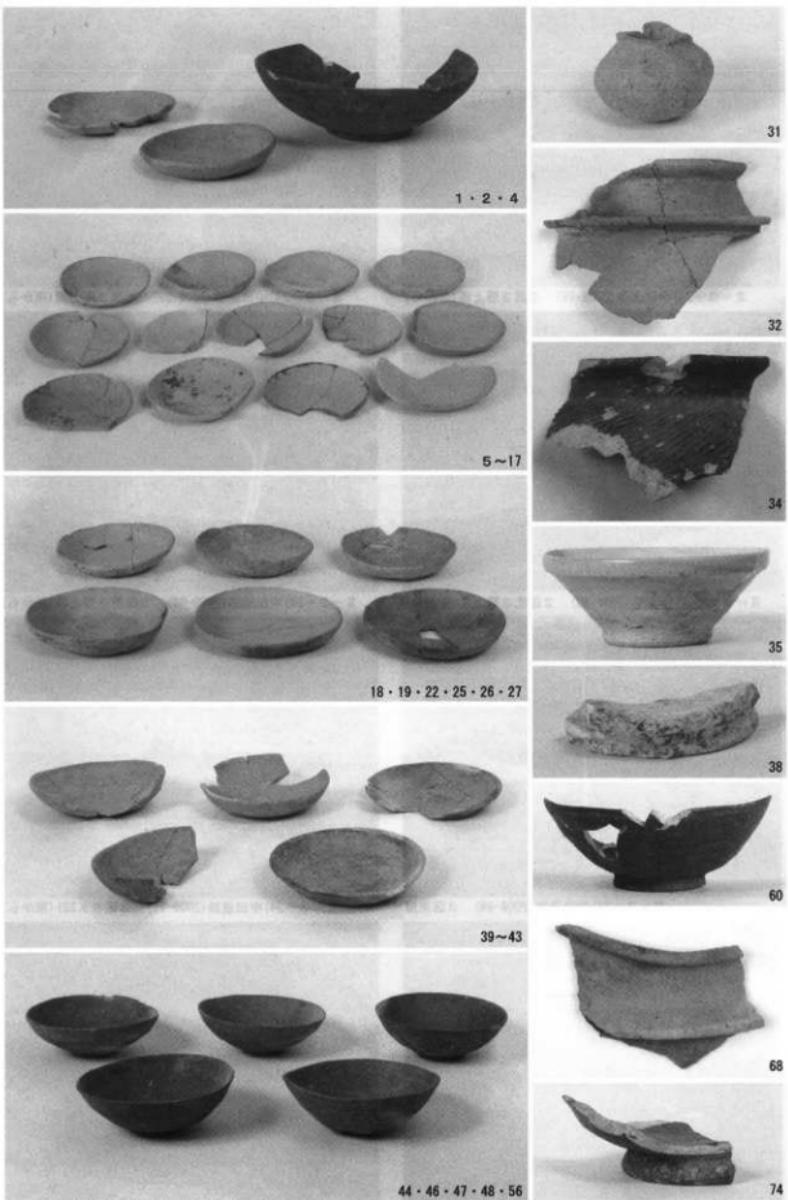
II-3-24) 中田遺跡(2009-99) 2区西壁



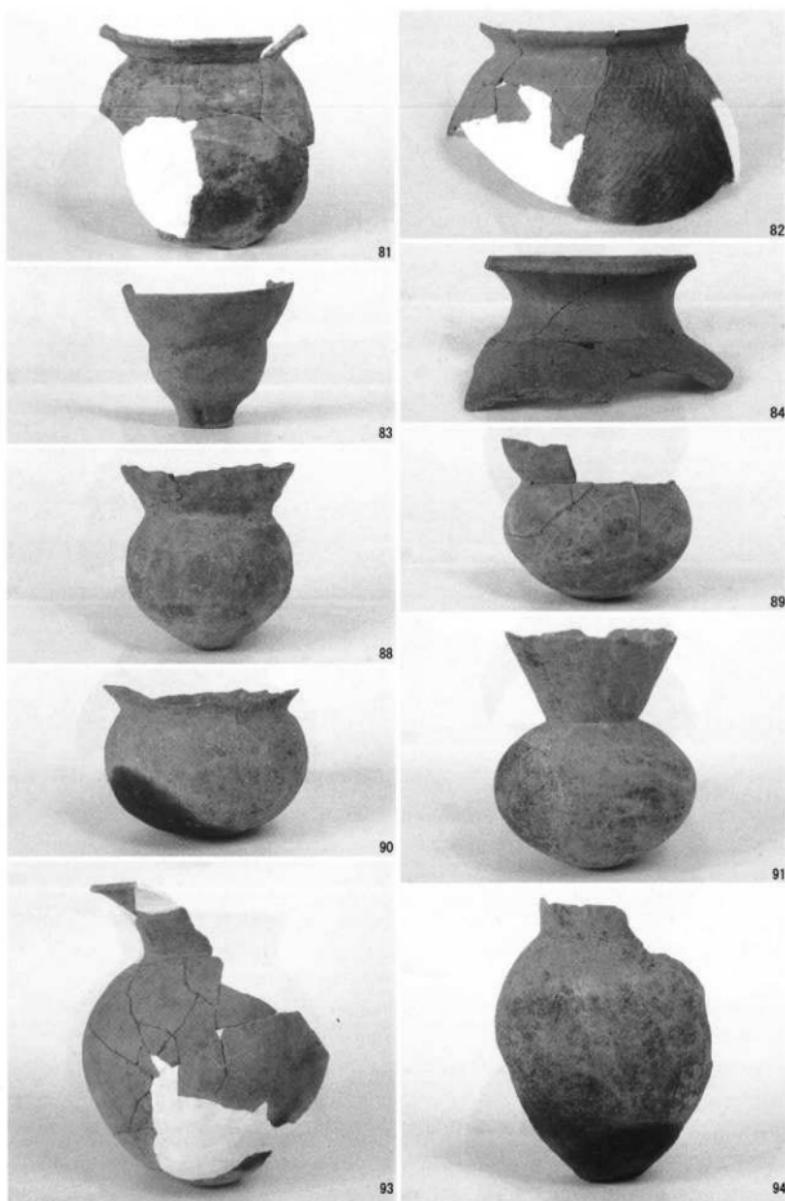
II-3-24) 中田遺跡(2009-99) 2区調査状況(南から)



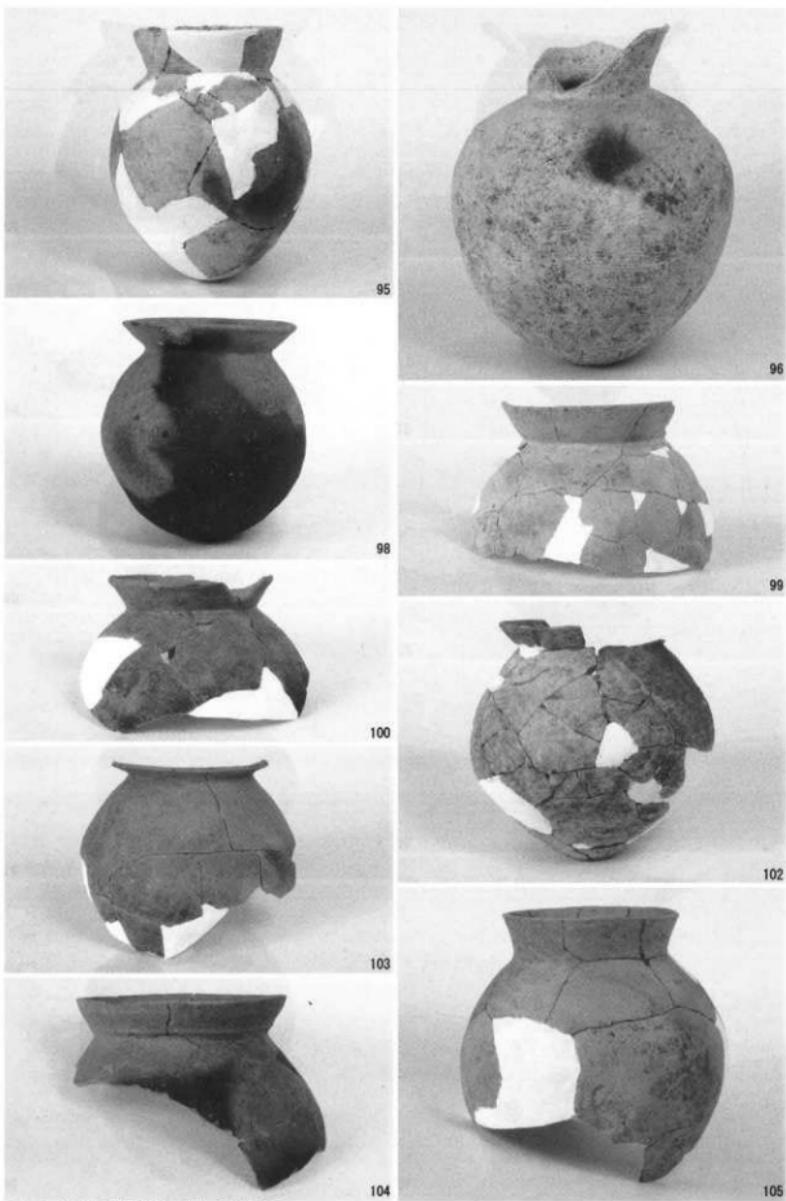
图版 28



II-3-24) 中田遺跡(2009-99) 出土遺物 1



II-3-24) 中田遺跡(2009-99) 出土遺物 2



II - 3 - 24) 中田遺跡(2009-99) 出土遺物3



II-3-25) 中田遺跡(2009-88) 調査地(南東から)



II-3-25) 中田遺跡(2009-88) 東壁



II-3-26) 中田遺跡(2009-128) 西壁



II-3-26) 中田遺跡(2009-128) 5層上面(東から)



II-3-27) 中田遺跡(2009-208) 北壁



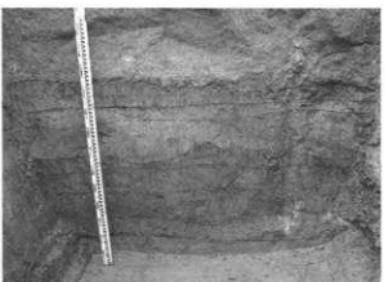
II-3-27) 中田遺跡(2009-208) 3層上面(南から)



II-3-28) 中田遺跡(2009-214) 機械掘削(北から)



II-3-28) 中田遺跡(2009-214) 北壁



II-3-29) 中田遺跡(2009-244) 西壁



II-3-29) 中田遺跡(2009-244) 5層上面(西から)



II-3-29) 中田遺跡(2009-244) 遺物出土状況(北から)



II-3-29) 中田遺跡(2009-244) 出土遺物



II-3-30) 東弓削遺跡(2009-116) 調査地(南から)



II-3-30) 東弓削遺跡(2009-116) 東壁



II-3-31) 八尾寺内町(2009-16) 機械掘削(南西から)



II-3-31) 八尾寺内町(2009-16) 北壁



II-3-31) 八尾寺内町(2009-16) 東壁



II-3-31) 八尾寺内町(2009-16) 3層上面(南から)



II-3-32) 八尾寺内町(2009-18) 周辺状況(南から)



II-3-32) 八尾寺内町(2009-18) 南壁



II-3-32) 八尾寺内町(2009-18) SK 1(北東から)



3

II-3-32) 八尾寺内町(2009-18) 出土遺物



II-3-33) 八尾寺内町(2009-188) 調査地(南西から)



II-3-33) 八尾寺内町(2009-188) 2層上面全景(南から)



II-3-33) 八尾寺内町(2009-188) 出土遺物



3



II-3-34) 八尾寺内町(2009-264) 東~南壁



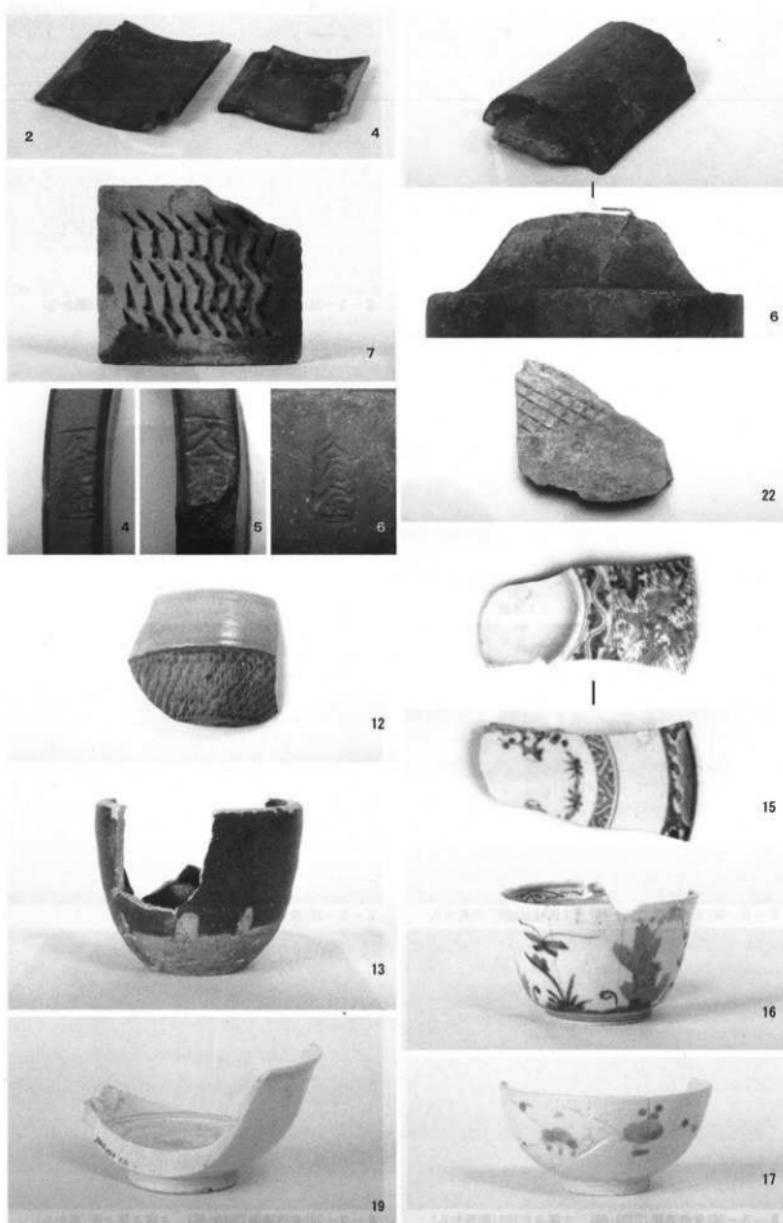
II-3-34) 八尾寺内町(2009-264) 1・2面全景(西から)



II-3-34) 八尾寺内町(2009-264) SK 1 瓦枠(南から)



II-3-34) 八尾寺内町(2009-264) 3面全景(西から)



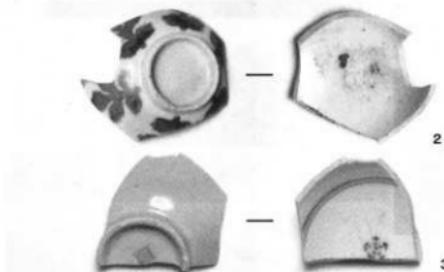
II-3-34)八尾寺内町(2009-264)出土遺物



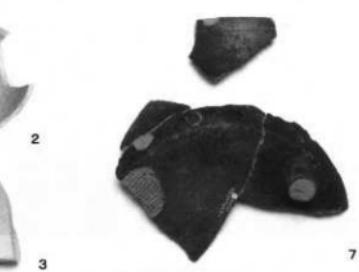
II-3-35) 八尾寺内町(2009-254) 南壁



II-3-35) 八尾寺内町(2009-254) 3層上面(南から)



II-3-35) 八尾寺内町(2009-254) 出土遺物



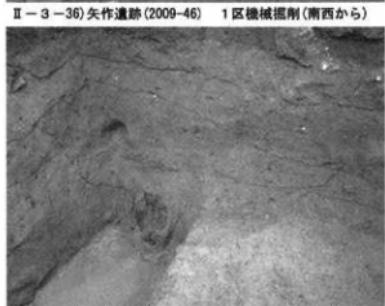
7



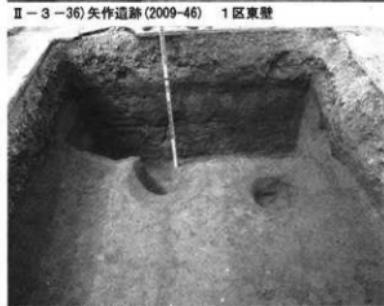
II-3-36) 矢作遺跡(2009-46) 1区機械振削(南西から)



II-3-36) 矢作遺跡(2009-46) 1区東壁



II-3-36) 矢作遺跡(2009-46) 1区S E 101(南西から)



II-3-36) 矢作遺跡(2009-46) 2区3層上面(南から)



II-3-36 矢作遺跡(2009-46) 3区東壁



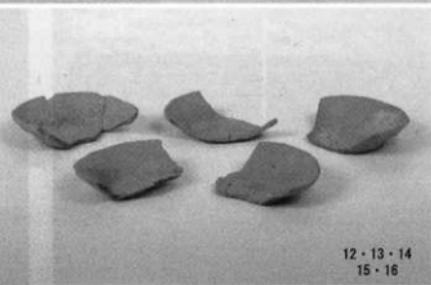
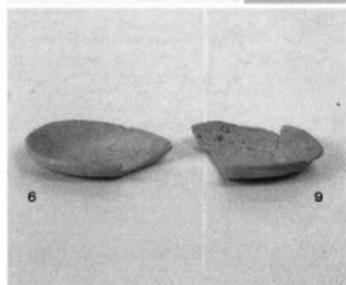
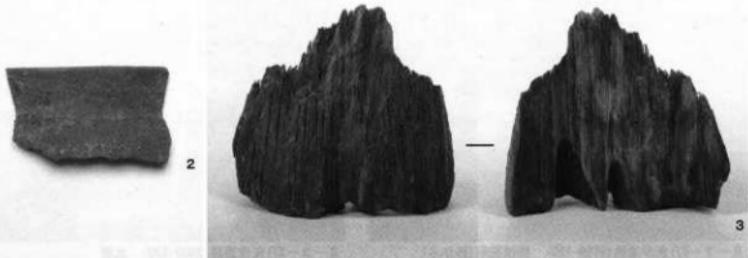
II-3-36 矢作遺跡(2009-46) 3区3層上面(南から)



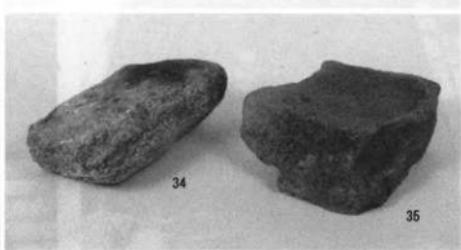
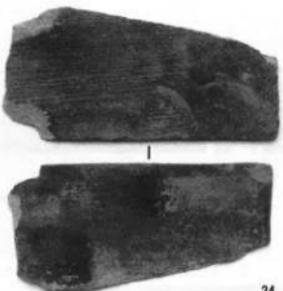
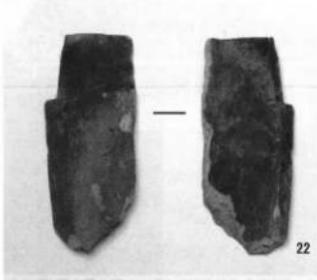
II-3-36 矢作遺跡(2009-46) 3区SD301(西から)



II-3-36 矢作遺跡(2009-46) 4区東壁



II-3-36 矢作遺跡(2009-46) 出土遺物



II-3-36) 矢作遺跡(2009-46) 出土遺物



II-3-37) 矢作遺跡(2009-120) 機械掘削(西から)



II-3-37) 矢作遺跡(2009-120) 北壁



II-3-38) 龍華寺跡(2009-130) 1区3層上面(南から)



II-3-38) 龍華寺跡(2009-130) 2区北壁



II - 3 - 39) 包蔵地外 (2009-194) 調査地 (南西から)



II - 3 - 39) 包蔵地外 (2009-194) 1区4層上面 (東から)



II - 3 - 39) 包蔵地外 (2009-194) 1区西壁



II - 3 - 39) 包蔵地外 (2009-194) 2区9層上面 (東から)



II - 3 - 39) 包蔵地外 (2009-194) 2区11層上面 (東から)



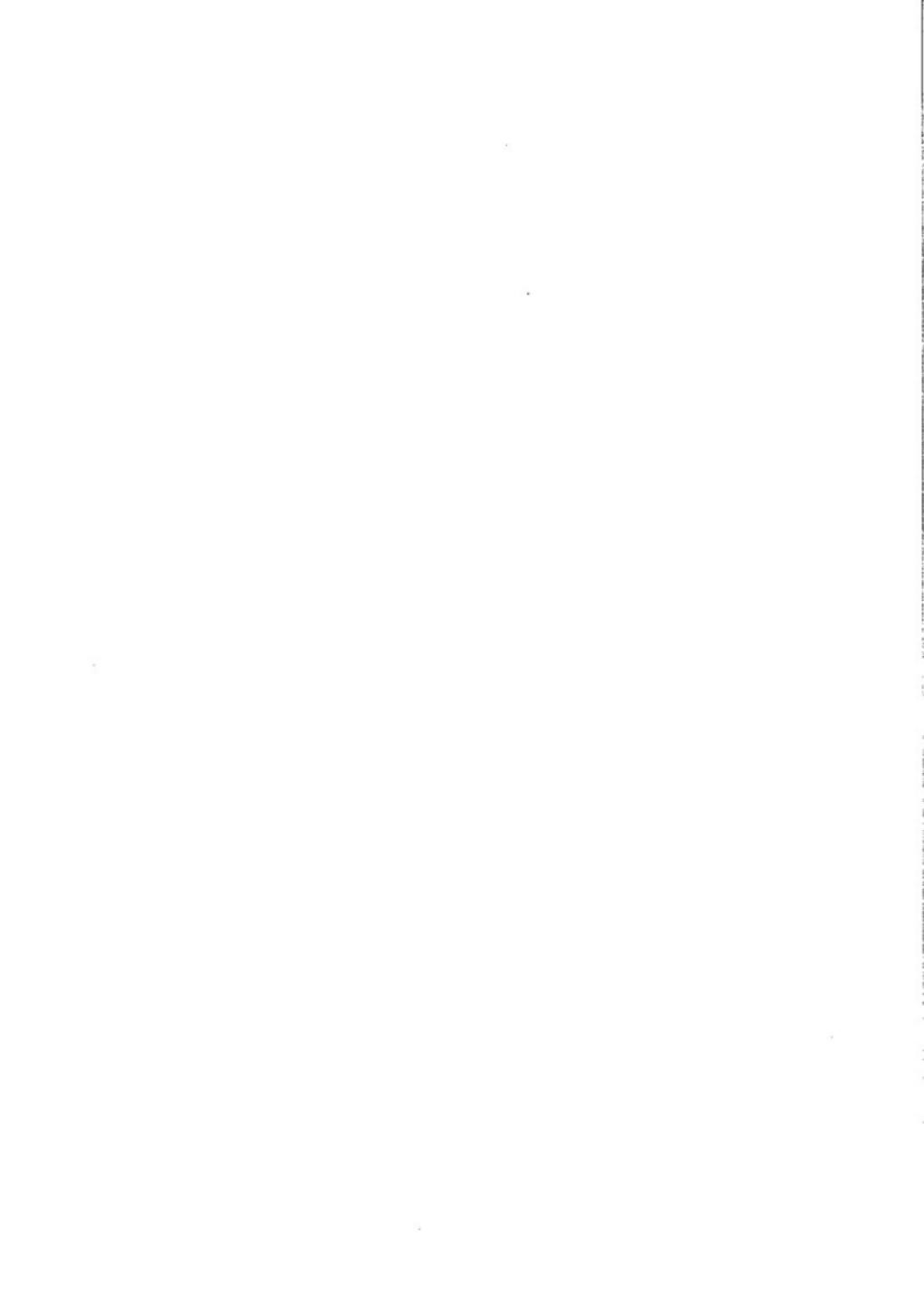
II - 3 - 39) 包蔵地外 (2009-194) 2区東壁



II - 3 - 39) 包蔵地外 (2009-194) 5区東壁



II - 3 - 39) 包蔵地外 (2009-194) 出土遺物



III 平成20・21年度保存処理事業報告

III 平成 20・21 年度保存処理事業報告

1. 保存処理事業の概要

八尾市教育委員会では、平成 18 年度から、埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業の一環として、市内の各種民間開発事業等に伴う発掘調査で出土した木製品や金属製品の中で、脆弱な出土遺物について、順次保存処理を実施し、今後の埋蔵文化財の活用に資することにした。

平成 20 年度保存処理事業 平成 20 年度の保存処理事業は、平成 19 年度の保存処理事業（『八尾市内遺跡平成 20 年度発掘調査報告書』2009 に掲載）に引き続き、平成 18 年度から平成 19 年度にかけて（財）八尾市文化財調査研究会が発掘調査を実施した八尾市若草町の小阪合遺跡第 41 次調査出土の古墳時代前期の水辺の祭祀で使用された刀剣類 2 点や鉄鋒 2 点、鐵斧 1 点、青銅鏡（内行花文鏡）1 面などの金属製品と、鞘と繩の木製品各 1 点、同遺跡で奈良～平安時代の河川（大瀧）から多数の皇朝十二錢とともに出土した斎車 2 点の木製品（それぞれ第 40 次・41 次）の保存処理を行った。

保存処理は、平成 20 年 5 月から平成 21 年 3 月まで（財）大阪市文化財協会に委託し、実施した。特に脆弱な資料であった刀剣類 2 点については、保存処理に引き続いで平成 21 年度に専用の展示保管台を作成し、展示等の利用に供することができるようとした。

平成 21 年度保存処理事業 平成 21 年度の保存処理事業は、小阪合遺跡第 41 次調査で出土した皇朝十二錢 13 点と久宝寺遺跡第 73 次調査で出土した皇朝十二錢（隆平永寶）1 点、郡川東塚古墳出土の各種鉄製品の保存処理を行った。

小阪合遺跡第 41 次調査で出土した皇朝十二錢は、平成 19 年度に保存処理を実施した皇朝十二錢 29 点（菊井 2009・小阪合遺跡第 40 次調査）が出土した奈良～平安時代の河川に連なる南北それぞれに拡張した調査区から出土した。錢貨の種類・点数内訳は、「6. 小阪合遺跡第 41 次調査出土の古代錢貨」を参照していただきたい。これらは、平成 19 年度実施分と同一構造、同時期の出土遺物であるため、前回の成分分析（伊藤 2009）との比較ができ、興味深いデータを得ることができた。

郡川東塚古墳の鉄製品は、平成 13 年度の調査で横穴式石室の攪乱土中から出土したもので、平成 19 年度に保存処理を実施した馬具類以外の、鉄鏃や挂甲小札などの各種鉄製品である。

これらの保存処理は、平成 21 年 4 月から 9 月まで（財）大阪市文化財協会に委託して実施した。

本事業報告は、古墳時代前期と奈良～平安時代にかけての水辺の祭祀に関わる小阪合遺跡出土の各種の金属製品及び木製品と、古墳時代後期の前方後円墳である郡川東塚古墳の副葬品である鉄製品が、それぞれ保存処理が完了したため、2 カ年の事業成果を合わせて収録するものである。各年度の保存処理の工程と、併せて実施した分析調査の結果を報告するとともに、保存処理を実施した出土遺物の内容とその調査成果について記載し、今後の考古資料の活用に資するものである。なお、久宝寺遺跡第 73 次調査の皇朝十二錢の出土遺構等の詳細は、『（財）八尾市文化財調査研究会報告 127（財）八文研編 2009』に報告されているので、参照いただきたい。

保存処理事業を終えたこれら出土遺物は、市内の文化財施設等において、展示・公開等の活用を積極的にはかることにしている。

（八尾市教育委員会 藤井）

【参考文献】

（財）八尾市文化財調査研究会編 2009「1. 久宝寺遺跡（第 73 次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告 127』

八尾市教育委員会編 2009『八尾市内遺跡平成 20 年度発掘調査報告書』

伊藤幸司 2009「2. 金属製品の保存処理について」『八尾市内遺跡平成 20 年度発掘調査報告書』

菊井伸弥 2009「3. 小阪合遺跡第 40 次調査出土古代錢貨の出土状況について」『八尾市内遺跡平成 20 年度発掘調査報告書』

以下の章立ては下記のとおりとなる。執筆担当者はそれぞれの章の文末に記している。

[平成 20 年度保存処理事業分]

2. 小阪合遺跡出土遺物の保存処理
3. 小阪合遺跡出土木製品の樹種同定
4. 小阪合遺跡第 41 次調査出土の古墳代前期後半の遺物

[平成 21 年度保存処理事業分]

5. 市内遺跡出土金属製品の保存処理
6. 小阪合遺跡第 41 次調査出土の古代銭貨
7. 郡川東塚古墳出土の挂甲小札に付着した織縫品
8. 郡川東塚古墳出土の鉄製品

[平成 20 年度保存処理事業分]

2. 小阪合遺跡出土遺物の保存処理

1) 対象

保存処理の対象とした資料は、下記の表 2-1 のとおりである。便宜上、通し番号を付した。

処理番号	材質	種別	資料名称	時期	法量(cm・g)	備考
YOS08001	鉄製品 鹿角製品	武具 祭祀具	鹿角装鉄劍	古墳前期 後半	長さ : 約 59	第 41 次調査
YOS08002	鉄製品 鹿角製品	武具 祭祀具	鹿角装鉄刀	古墳前期 後半	長さ : 約 30	第 41 次調査
YOS08003	鉄製品	武具	鉄鉢	古墳前期 後半	長さ : 約 32.4	第 41 次調査
YOS08004	鉄製品	武具	鉄鉢	古墳前期 後半	長さ : 約 29	第 41 次調査
YOS08005	鉄製品	工具	鉄斧	古墳前期 後半	長さ : 7.3 最大幅 : 4.2 最大厚 : 0.5	第 41 次調査
YOS08006	銅製品	祭祀具	内行花文鏡	古墳前期 後半	径 : 6.9 厚さ : 0.1 重さ : 34.022	第 41 次調査
YOS08007	木製品	武器	轟	古墳前期 後半	長さ : 39.5 最大幅 : 4.6 最大厚 : 1.7	第 41 次調査
YOS08008	木製品	農耕具	一木平鋤	古墳前期 後半	身 長さ : 17.6 最大幅 : 12.0 以上 最大厚 : 2.4 柄 長さ : 64.0 以上 径 : 2.7	第 41 次調査
YOS08009	木製品	祭祀具	斎車	奈良～平安	長さ : 15.0 以上 最大幅 : 2.4 最大厚 : 0.8	第 41 次調査
YOS08010	木製品	祭祀具	斎車	奈良～平安	長さ : 10.0 最大幅 : 2.0	第 40 次調査

表 2-1 保存処理対象資料一覧

2) 鉄製品 (YOS08001~5) の保存処理工程 (写真 2-1)

基本的には以下のとおりであるが、遺存状態によって繰返し回数・使用薬剤を適宜変更した。
また、YOS08001・2については鹿角装であることを考慮して脱塩処理は行っていない。

2-1 事前調査・記録

保存処理前の状態の観察とともに、記録のため外観の写真撮影、X線透過画像撮影をおこなった。

2-2 クリーニング・脱水処理

アルコールに浸漬し、表面に付着している砂などを除去するとともに、水分を除去した。

2-3 鑽落とし

資料上、また保存上取り除く必要のある鑽についてはハンドグラインダー・メスなどを用いて物理的に取り除いた。

2-4 脱塩処理

金属が鏽びる原因のひとつである塩分を除去した。

高温高圧脱酸素水法による。

2-5 樹脂含浸処理

酸素との接触を出来る限り防ぎ、傷んでいる遺物自体の強度を向上させるため、減圧下で合成樹脂含浸をおこなった。

使用した合成樹脂は非水溶性アクリル樹脂（商品名：パラロイド B72）、非水溶性アクリルエマルジョン（商品名：パラロイド NAD10）である。

2-6 接合・復元

協議の上、必要なものに限り接合・復元をおこなった。

接合復元には非水溶性アクリル樹脂、セルロース系接着剤（商品名：セメダイン C）などを用いた。欠失箇所の補填にはエポキシ系合成樹脂（商品名：クイック 5）などを使用した。

2-7 処理後記録・保管

処理後の記録のため写真撮影をおこない、低温度状態で経過観察をおこなった。

3) 銅製品 (YOS08006) の保存処理工程 (写真 2-2)

前記鉄製品と同様、遺存状態によって繰返し回数・使用薬剤を適宜変更した。

3-1 事前調査・記録

保存処理前の状態の観察とともに、記録のため外観の写真撮影、X線透過画像撮影をおこなった。

3-2 クリーニング・脱水処理

アルコールに浸漬し、表面に付着している砂などを除去するとともに水分を除去した。

3-3 鑽落とし

資料上、また保存上取り除く鑽についてはハンドグラインダー・メスなどを用いて物理的に取り除いた。

3-4 ベンゾトリアゾール処理

塩化物イオンによる鏽化を防ぐため、ベンゾトリアゾールのアルコール溶液に浸漬した。

3-5 樹脂含浸処理

酸素との接触を出来る限り防ぐとともに傷んでいる遺物自体の強度を向上させるため、減圧下で合成樹脂含浸をおこなった。使用した合成樹脂は非水溶性アクリル樹脂、非水溶性アクリルエマルジョンである。

3・6 处理後記録・保管

処理後の記録のため写真撮影をおこない、低温度状態で経過観察した。

4) 木製品 (YOS08007~10) の保存処理工程 (写真 2-2)

糖アルコール含浸処理法により次の工程で保存処理を実施した。

4-1 事前調査・記録

保存処理前の状態の観察とともに、記録のため外観の写真撮影をおこなった。

4-2 洗浄・脱色処理

温水に浸漬し、砂や汚れを除去するとともに、鉄分による黒色化を出来る限り除去するためにキレート剤を用いて脱色をおこなった。

4-3 含浸処理

含浸処理槽に糖アルコール水溶液（以下、含浸処理液）を満たして加熱、そこへ木製品を浸漬した。

木製品に含まれている水分を徐々に含浸処理液に置き換えた。

含浸処理液の初期濃度は 20% で、最終含浸濃度は 75~80% である。

4-4 取上げ・洗浄

含浸処理槽から取り上げ、木製品の表面に付着している含浸処理液を熱湯で洗浄したのち表面の水分を除去した。

4-5 固化・乾燥

木製品にしみ込んだ含浸処理液を結晶させるため、表面を糖アルコール粉末で覆い、結晶化を促進した。この工程は結晶化促進室内で 50°C と室温 (0~10°C) の間を繰り返し上下することで安定的な結晶化・乾燥を図った。

4-6 洗浄・表面処理

結晶化を促進するために遺物表面を覆った糖アルコール粉末を除去、洗浄した後、水分を拭取り乾燥した。

4-7 接合・復元

指示のあった部分については接合等の処置を施した。

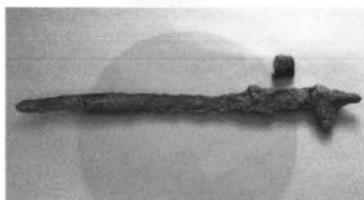
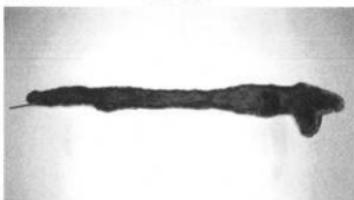
4-8 処理後観察

処理後の木製品の経時変化を観察したところ、異常は認められなかった。

((財)大阪市文化財協会 伊藤幸司)

鉄製品

(処理前)



YOS08001



YOS08002



YOS08003



YOS08004



YOS08005

写真 2-1 鉄製品の保存処理 (YOS08001~5)

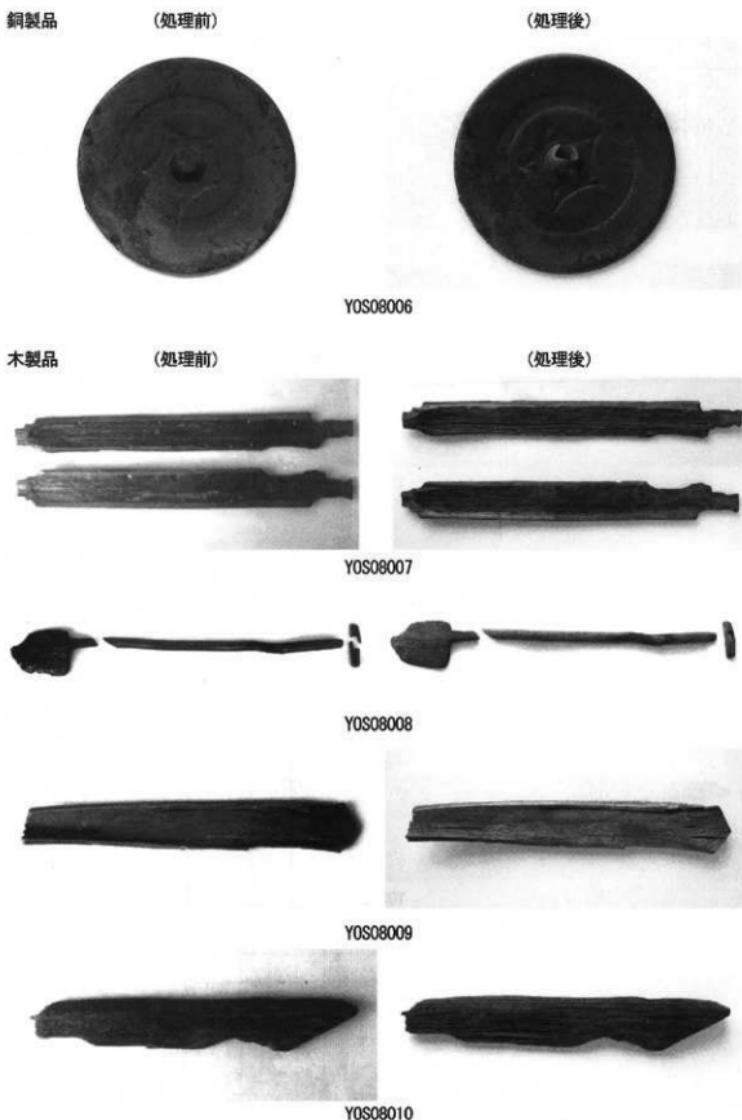


写真 2-2 銅製品の保存処理 (YOS08006)・木製品の保存処理 (YOS08007~10)

3. 小阪合遺跡出土木製品の樹種同定

1) 同定の対象

小阪合遺跡から出土した木製品 4 点 (YOS08007・YOS08008 の部位を同定・以下 No. 7 及び 8 と略称) である。

2) 同定方法

まず安全剃刀を使用し、木口、柾目、板目の各切片を遺物から採取した。次いでこれらの切片をガムクローラー（泡水クローラー、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水を混合したもの）でスライドガラス上に封入したプレパラートを作成、これを生物顕微鏡で観察し、樹種を同定した。同定にあたっては島地・伊東（1982）、伊東（1995・1996・1997・1998・1999）を参照したほか、適宜手持ちの現生標本を比較対照に供した。

3) 同定結果（写真 3-1 顕微鏡写真）

結果は表 3-1 に示すとおりである。以下、同定に利用した各樹種・分類群の識別拠点を記載する。

No.	名称	樹種	時期	備考
1 7A	轆	ヒノキ	古墳前期後半	第 41 次調査
2 7B	轆	ヒノキ	古墳前期後半	第 41 次調査
3 8（身）	一木平鋸身	アカガシ亜属	古墳前期後半	第 41 次調査
4 8（柄）	一木平鋸柄	ヒサカキ属	古墳前期後半	第 41 次調査

表 3-1 樹種同定結果

各分類群の識別拠点について

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endl.) 針葉樹材。樹脂道を持たない。木口面では、樹脂細胞は晩材部に近い位置で接線方向に並ぶ傾向がある。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。分野にはヒノキ型の壁孔が 1 分野あたりおおむね 2 個存在している。

・アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) 広葉樹放射孔材。道管は年輪界に関係なく放射方向に配列する。放射組織はほとんど同性で、単列のものと広放射組織の 2 者が認められる。道管放射組織間壁孔は大型の槽状。日本産の樹種としては、イチイガシ、アラカシ、シラカシ等がある。

・ヒサカキ属 (*Eurya* sp.) 広葉樹散孔材。径の小さな道管が単独あるいは複合し、均等かつ比較的まばらに分布する。道管は階段穿孔を有しているが、その間隔は狭く bar の数が多い。放射組織は異性で、上下縁辺部の直立細胞の高さは高く、接線方向における放射組織全体の幅は厚め。日本産の樹種には、ヒサカキ、ハマヒサカキ等がある。

（奈良文化財研究所年代学研究室 客員研究員 藤井裕之）

【引用・参考文献等】

島地謙・伊東隆夫 1982 「図説 木材組織」 地球社

伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』第 31 号、pp.81-181

伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』第 32 号、pp.66-176

伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』第 33 号、pp.83-201

伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』第 34 号、pp.30-166

伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』第 35 号、pp.47-216

北村四郎・村田源 1971 「原色日本植物図鑑・木本編 [I]」保育社

北村四郎・村田源 1979 「原色日本植物図鑑・木本編 [II]」保育社

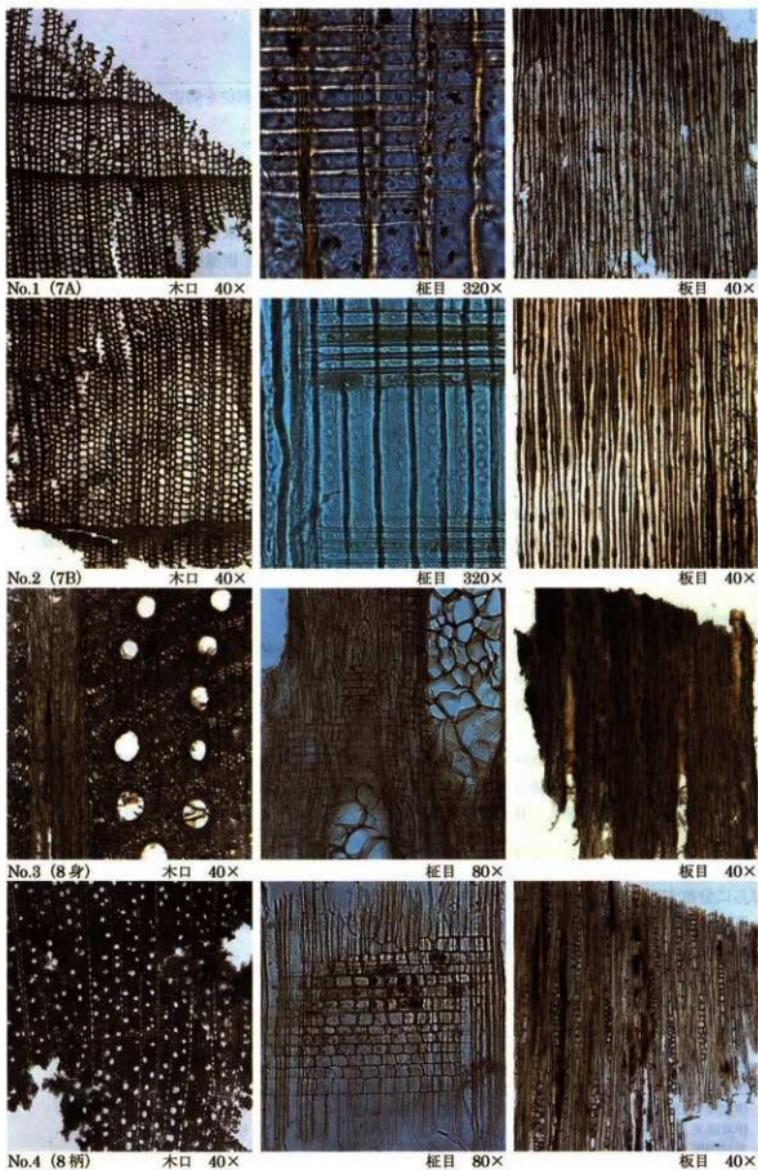


写真 3-1 視微鏡写真

4. 小阪合遺跡第41次調査出土の古墳時代前期後半遺物

1)はじめに

小阪合遺跡は、八尾市のほぼ中央、現在の行政区画では若草町、小阪合町1・2丁目、南小阪合町2・4丁目、青山町1～5丁目、山本町南7・8丁目の東西0.5～1.0km、南北約1.0kmがその範囲と推定される。地形的には、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川により形成された沖積地上に立地する。現地表面高を見ると、遺跡南東端がもっとも高く標高9.0m前後、北西端がもっとも低く標高8.0m前後を測る。比高差は約1.0mであり、概ね南東から北西方向に緩やかに傾斜する地勢を有している。

本遺跡は、昭和30年に若草町で実施された大阪府住宅供給公社による住宅建設工事の際に、古墳～鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土したこと、その存在が初めて確認された。以後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)大阪府文化財センター((財)大阪府文化財調査研究センターを含む)・当研究会によって、約60件の調査が行われ、その結果、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡として周知されるようになった。

今回報告する第41次調査地を含む若草町周辺では、平成10年以降、大規模な調査が行われてきた。当調査地の北を見ると、(財)大阪府文化財調査研究センターによる小阪合遺跡第1次調査地、及び(財)大阪府文化財センターによる小阪合遺跡第2次調査地が隣接するほか、南東では(財)大阪府文化財センターによる小阪合遺跡第3次調査地や当研究会第39次調査地(K S 2004-39)が位置する。また、今回の調査地内では平成17年に当研究会第40次調査(K S 2005-40)が行われている。

これらの調査のうち、(財)大阪府文化財調査研究センターによる小阪合遺跡第1次調査や、当研究会第40次調査では、南北に伸びる奈良～平安時代の河川跡を検出し、埋土からは和同開珎をはじめとする皇朝十二錢が約100枚出土したほか、多量の土師器、須恵器とともに、墨書き土器・墨書き人面土器・瓦・木製品・石製品などの遺物、さらに獸骨が出土した。これらの成果は、律令期における当遺跡の性格を知る上で貴重な資料として注目される。

2) 調査概要

第41次調査は、病院建設工事に伴い実施された。調査区は、当研究会第40次調査地(K S 2005-40)を囲むように設定され、調査面積は約5350m²を測る。調査は、2007年3～9月までを行い、5面に及ぶ遺構群を検出した。出土遺物はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)200箱である。

第1面では、室町時代以降に比定される遺構群を検出した。調査区全域において水田耕作に関連する井戸や鍬溝を検出したほか、A区北方やB東区では、寺院またはそれに関連する施設を構成する可能性の高い掘立柱建物や溝などが見つかった。

第2面については、A北区北方～B北区西端、B北区東端、B東区で遺構の分布が顕著である。平安時代末～鎌倉時代に比定される井戸、土坑を検出したことから居住域として機能していたことが推測される。

第3面では、A区北方やB南区で古墳時代中期の祭祀に関連する可能性の高い土坑を検出した。これらの土坑からは、韓式系土器や滑石製剣形模造品、滑石製紡錘車、獸骨などが出土している。またA区、B北区西端、B南区西端では、(財)大阪府文化財調査研究センターによる小阪合遺跡第1次調査や、当研究会第40次調査で確認された奈良～平安時代の河川跡(3002N R : 詳細は6を参照)の続きを検出し、皇朝十二錢12枚をはじめ、多量の土師器・須恵器、釘などの鉄製品、墨書き人面土器・軒瓦、獸骨などの出土を見た。

第4面では、A区とB南区において弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居を11基検出した。またB南区では古墳時代初頭～前期に帰属する土坑や溝を検出した。これらの遺構からは、東部瀬戸

内地域や山陰地域から持ち込まれたものを含む多量の古式土器類をはじめ、木製盾の細片や用途不明木製品などが出土した。B東区では、以下で報告する古墳時代前期後半に比定される河川跡(4025NR)において、何らかの祭祀が行われたことを示す遺物群の出土を見た。その他、当地一帯の遺跡形成に大きな影響を及ぼしたことが推測される河川跡(小阪合分流路)を確認した。小阪合分流路は、概ね弥生時代後期以降、沖積活動を活発にし、調査地中央付近から東にかけての範囲を、概ね西から東に移動しながら砂礫を堆積させていく様子を明らかにした。

第5面については、A区南方で弥生時代中期に比定される柱穴などを検出しており、この付近に居住域が展開する可能性が高い。また、地層観察では、弥生時代中～後期の水田耕作土層を確認したことから、A区北方からB区の広い範囲が生産域として利用されていたと思われる。

3) 遺構概要

古墳時代前期後半の河川跡(4025NR)は、調査地の東端に位置する独立した調査区(B東区)で検出された。4025NRは、当研究会第40次調査で検出した河川跡の東岸部分に相当する。検出規模は、長さ25.0m・幅11.0m・深さ1.0mである。堆土は、黒色を呈したシルト質粘土～粘土質シルト優勢の泥状堆積物から成る。4025NRは、上流において流れが変化したことにより、湿地状に取り残された放棄河川と考えられ、池や沼のような地形を呈していた可能性が高い。なお、4025NRは、北に位置するA北区では見つかっておらず、A北区とB東区の間で終息することが推測される。4025NRの東側斜面にはヤナギ科やクワ科の立木が生えていたことが明らかになった。

4) 出土遺物の概要

4025NRの東側斜面に生えていたヤナギ科、クワ科の立木の周辺において、手づくね成形によるミニチュア土器をはじめ、壺・甕・高杯を中心とする多量の古式土器類のほか、小型銅鏡(内行花文鏡)1点、金属製品5点(鹿角装鉄劍1点、鹿角装鉄刀1点、鉄鉢2点、鉄斧1点)、玉類数十点(勾玉2点・管玉1点・白玉454点)、石製模造品(有孔円板)4点、木製品数点(櫛1点・鞘1点・用途不明品数点)などが出土した。これらの遺物は、完形に近い状態で出土したこと、ミニチュア土器が入れ子状態で出土したことなどから、廃棄された遺物ではなく、置くに近い行為で形成された遺物群と推測される。このうち鉄鉢や刀劍類については、切先を南東～東方向に意図的に向けていた可能性が指摘でき、注目される。以下、主要な遺物の概説を行う。

内行花文鏡は1枚出土した。径は6.9cm、厚さ1mmである。内行花文鏡は仿製鏡で、鏡背には5枚の花弁(五連弧)と櫛齒文様を配する。鏡部分をはじめ鏡背全体が手擦れにより丸みを持つ。

鹿角装刀劍については、片方にだけ刃をもつ刀が1点(全長約30cm)と、身の両方に刃をもつ劍(全長約59cm)が1点それぞれ出土した。両者ともに身の部分は劣化し、状態は不良である。とともに柄の部分は鹿角の分岐部を用いており、柄縁から直角に伸びた突起も認められる。柄表面は劣化が著しい。劍には、鞘金具のような突起物のほか、木質も確認できたことから、木製の鞘が存在した可能性も考えられる。

鉄鉢は2点(鉄鉢①:全長32.4cm・鉄鉢②:全長約29cm)出土した。両者ともに遺存状態は良好である。いずれも身の部分の断面形状は扁平な菱形を呈し、鏽も見える。闊は小さく、袋部と呼ばれる柄を挿入する部分は筒状で、袋端部は、切り込みを入れない直基式であったと思われる。鉄鉢②の袋部内面には木質が観察できることから、柄が装着されていた可能性が高い。

玉類は、勾玉が2点(勾玉①:長さ3.2cm・勾玉②:長さ2.6cm)、管玉が1点(長さ2.2cm)、白玉が454点出土した。いずれも材質は未鑑定。勾玉②と管玉は同じ材質、白玉は滑石製と推測される。

有孔円板は4点(有孔円板①:径2.7cm・有孔円板②:径2.5cm・有孔円板③:径3.5cm・有孔円板④:径5.0cm)出土した。いずれも滑石製と推測され、中央に2つの孔(孔径は各1mm)をあけた

扁平な円板を成し、研磨痕が明瞭に残る。

木製品は、鋤が1点、鞘が1点、用途不明品が數点出土した。鋤(復原長：約98cm)は、身と柄を一本から作るものである。柄は直線を成し、握り部側の先端は柾を形成し、柾孔を有する握り部が装着されT字形を成す。身と柄の角度は鈍角である。鞘は、長さ約40cmの板状を呈し、先端を二段のソケット状に加工を施している。内側には劍の形状をトレイスした溝みが見える。

ミニチュア土器は、大きさが約4～5cmで、手づくねにより製作されている。口縁部や底部の形状により複数に分類が可能である。出土数は当研究会40次調査と合わせると100点以上を数える。

上記遺物の帰属時期は、共伴した古式土師器高杯や甕の特徴から、古墳時代前期後半(4世紀後半)に比定される。

5)まとめ

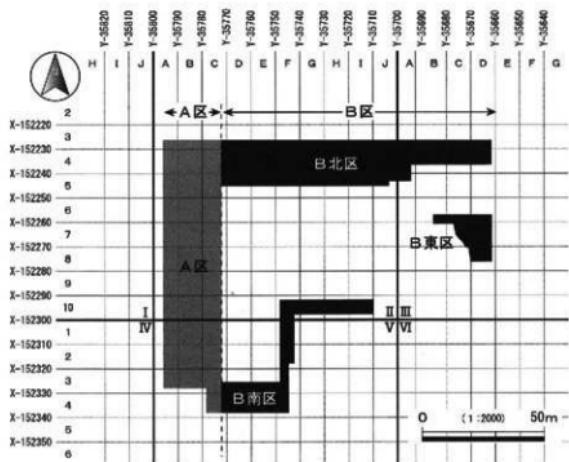
以上の成果から、古墳時代前期後半の河川跡の立木周辺において、上記遺物群を用いた何らかの祭祀が行われた可能性が高くなった。古墳時代の祭祀遺構において、ミニチュア土器とともに鏡・刀剣類、玉類が揃って出土したのは、府下では初例であり、全国的にも極めて貴重な事例である。以上のことから、これらの中遺物群を用いて祭祀を行うことのできた有力者と、有力者を輩出した集落が小阪合遺跡に存在した可能性が高くなつた。なお祭祀の種類については、検討の余地があり、今後の課題としたい。

【参考文献】

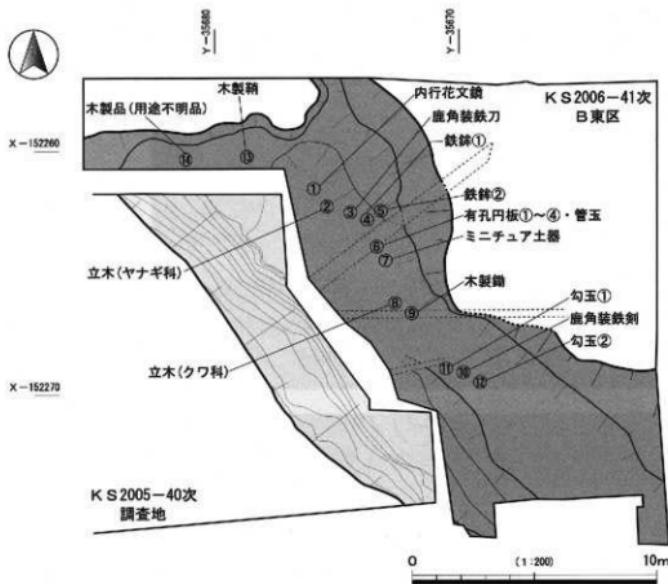
- ・駒井正明編2000『八尾市若草町所在小阪合遺跡－都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書－』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・木間元樹編2004『小阪合遺跡(その2) 八尾用地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第2次)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第116集』(財)大阪府文化財センター
- ・岡田清一他2006「16. 小阪合遺跡第40次調査(KS2005-40)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・橘口 薫2007「小阪合遺跡の発掘調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第55回)資料』(財)大阪府文化財センター
- ・橘口 薫他2008「9. 小阪合遺跡第41次調査(KS2006-41)」『平成19年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会



第4-1図 調査地周辺図



第4-2図 調査区設定図



第4-3図 4025N R平面図

図版
4-1-1



今回の調査地全景(北西から)



4025 N R 掘出状況(B東区:南から)
※番号は第4-3図に対応



4025 N R 遺物出土状況
(B東区:西から)

図版4-2(4025NR遺物出土状況)



内行花文鏡出土状況(北から)



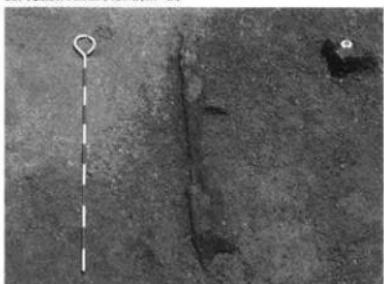
内行花文鏡出土状況(拡大: 北東から)



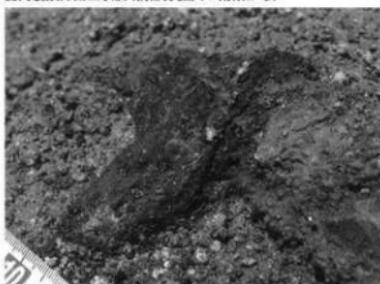
鹿角装鉄刀出土状況(東から)



鹿角装鉄刀出土状況(柄部分拡大: 南東から)



鹿角装鉄剣出土状況(北西から)



鹿角装鉄剣出土状況(柄部分拡大: 南東から)

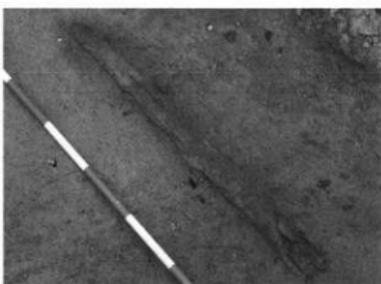


鉄鉾①出土状況(西から)



鉄鉾①出土状況(袋部拡大: 北西から)

図版
4-3 (4025 NR
遺物出土状況)



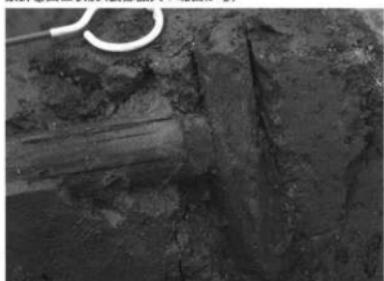
鉄鋤②出土状況(北西から)



鉄鋤②出土状況(袋部拡大: 北西から)



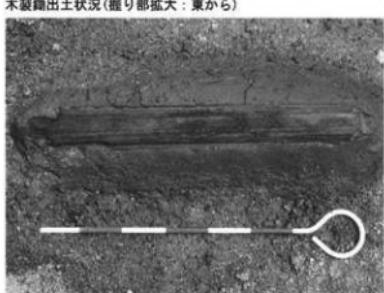
木製鋤出土状況(南東から)



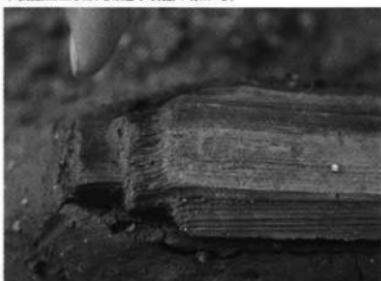
木製鋤出土状況(握り部拡大: 東から)



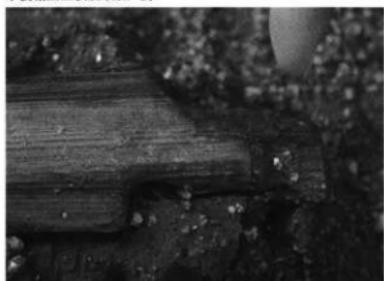
木製品出土状況(用途不明品: 東から)



木製輻出土状況(北から)



木製輻出土状況(西端拡大: 南から)



木製輻出土状況(東端拡大: 南から)

[平成 21 年度保存処理事業分]

5. 市内遺跡出土金属製品の保存処理

1) 対象

保存処理および成分分析の対象とした資料は表 5・1 のとおりである。便宜上、通し番号を付した。銭貨については法量を記した。

処理番号	遺物名	遺物番号	縦径 (mm)	横径 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)	遺跡名
YOS09001	神功開寶	古銭⑦	25.42	24.82	1.41	3.24	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09002	陸平永寶	古銭⑨	24.85	24.9	1.53	2.85	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09003	陸平永寶	古銭③	24.39	24.13	1.68	3.89	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09004	富壽持寶	古銭⑧	24.01	23.62	1.36	3.6	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09005	富壽神寶	古銭⑩	23.44	23.16	1.55	3.36	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09006	富壽神寶	古銭①	23.46	23.36	1.48	3.48	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09007	富壽神寶	古銭⑤	23.51	23.26	1.54	2.97	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09008	承和昌寶	古銭④	20.95	20.93	1.24	2.03	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09009	承和昌寶	古銭②	21.07	20.99	1.25	2.15	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09010	長年大寶	古銭⑥	20.24	19.64	1.26	2.04	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09011	長年大寶	古銭⑪	19.74	19.95	1.54	1.65	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09012	長年大寶	古銭⑫	19.72	19.7	1.31	2.07	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09013	貞觀永寶	古銭⑬	20.2	19.94	1.66	1.61	小阪合遺跡第 41 次調査
YOS09014	陸平永寶		25.53	25.12	1.67	3.38	久室寺遺跡第 73 次調査
YOS09015	馬具						郡川東塙古墳
YOS09016	鉄釦						郡川東塙古墳
YOS09017	鉄釦						郡川東塙古墳
YOS09018	鉄剣片						郡川東塙古墳
YOS09019	挂甲小札						郡川東塙古墳
YOS09020	挂甲小札						郡川東塙古墳
YOS09021	挂甲小札						郡川東塙古墳
YOS09022	挂甲小札						郡川東塙古墳
YOS09023	挂甲小札						郡川東塙古墳
YOS09024	挂甲小札						郡川東塙古墳
YOS09025	挂甲小札						郡川東塙古墳
YOS09026	挂甲小札						郡川東塙古墳

表 5-1 保存処理・成分分析等対象資料一覧

2) 銅製品（銭貨）の保存処理工程 (YOS09001~ YOS09014)

銅製品（銭貨：皇朝十二銭）の保存処理は以下のとおりである。遺存状態によって繰返し回数・使用薬剤を適宜変更した。

2-1 事前調査・記録

保存処理前の状態の観察とともに、記録のため外観の写真撮影、X線透過画像撮影（写真 5-1）をおこなった。

2-2 クリーニング・脱水処理

アルコールに浸漬し、表面に付着している砂などを除去するとともに水分を除去した。

2-3 銛落とし

資料上、または保存上取り除く錫についてはハンドグラインダー・メスなどを用いて物理的に取り除いた。

2-4 ベンゾトリアゾール処理

塩化物イオンによる錫化を防ぐため、ベンゾトリアゾールのアルコール溶液に浸漬した。

2-5 樹脂含浸処理

酸素との接触を出来る限り防ぐとともに傷んでいる遺物の強度を向上させるため、減圧下で合成樹脂含浸をおこなった。使用した合成樹脂は非水溶性アクリル樹脂（商品名：バラロイドB72）、非水溶性アクリルエマルジョン（商品名：バラロイドNAD10）である。

2-6 処理後記録・保管

処理後の記録のため写真撮影（写真5-2）をおこない、低湿度状態で経過観察した。

3) 鉄製品（YOS09015～YOS09026）の保存処理工程

基本的に以下のとおりであるが、個々の遺物の遺存状態によって順序・繰返し回数を適宜変更した。

3-1 事前調査・記録

保存処理前の状態の観察とともに、記録のため外観の写真撮影、X線透過画像撮影（写真5-3）をおこなった。

3-2 クリーニング・脱水処理

アルコールに浸漬し、表面に付着している砂などを除去した。この後、熱風乾燥器中で水分を除去した。

3-3 錫落とし

資料上、または保存上取り除く必要のある錫についてはハンドグラインダー・メスなどを用いて物理的に取り除いた。

3-4 脱塩処理

高温高圧脱酸素水法を用いて、金属が錫びる原因のひとつである塩分を除去した。

3-5 樹脂含浸処理

酸素との接触を出来る限り防ぎ、傷んでいる遺物自体の強度を向上させるため、減圧下で合成樹脂を含浸した。

使用した合成樹脂は非水溶性アクリル樹脂、非水溶性アクリルエマルジョンである。

3-6 接合・復元

協議の上、必要なものに限り接合・復元をおこなった。

接合・復元には非水溶性アクリル樹脂、セルロース系接着剤（商品名：セメダインC）などを用いた。欠失箇所はエポキシ系合成樹脂（商品名：クイック5）にガラスマイクロバルーンなどを添加したもので補った。

3-7 処理後記録・保管

処理後の記録のため写真撮影（写真5-4～5-6）し、低湿度状態で経過を観察した。

4) 銭貨の成分分析（YOS09001～YOS09014）

対象としたのは銭貨14点である。事前に行ったX線透過写真的観察では、数点の銭貨に鉛の偏析が確認できた。

成分分析は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて資料表面を非破壊で測定した（註1）。

得られた結果から、銅(Cu)・鉛(Pb)・砒素(As)・銀(Ag)・錫(Sn)・アンチモン(Sb)の6元素に着目し、その一覧を表5-2に掲げた（註2）。

処理番号	種類	Cuk		Ask		Pbk		Agk		Snk		Sbk	
		int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%
YOS09001	神功開寶	1251.98	83.33	7.15	0.17	31.66	13.44	0.80	0.25	4.18	1.91	0.88	0.49
YOS09002	隆平永寶	795.23	76.60	9.44	0.31	35.29	20.50	0.71	0.33	1.27	0.88	0.43	0.36
YOS09003	隆平永寶	1146.58	83.47	7.84	0.21	31.32	14.68	0.95	0.33	0.51	0.26	0.44	0.27
YOS09004	富壽神寶	1048.39	78.75	7.89	0.20	41.37	19.10	1.90	0.70	0.89	0.37	0.19	0.12
YOS09005	富壽神寶	1093.37	67.53	9.17	0.18	88.79	30.90	0.87	0.28	0.26	0.12	0.14	0.08
YOS09006	富壽神寶	1125.18	81.85	6.86	0.18	36.94	17.07	0.70	0.25				
YOS09007	富壽神寶	1443.22	74.25	13.75	0.23	78.92	24.09	1.03	0.27	0.62	0.23	0.58	0.27
YOS09008	承和昌寶	1038.50	73.92	11.55	0.27	55.77	23.47	0.94	0.34			0.35	0.23
YOS09009	承和昌寶	964.94	78.33	10.35	0.29	40.61	20.26	0.84	0.34	0.21	0.12	0.31	0.22
YOS09010	長年大寶	1102.45	73.54	11.76	0.26	63.72	25.07	0.92	0.31	0.37	0.18	0.31	0.19
YOS09011	長年大寶	574.33	41.86	19.46	0.35	161.04	56.10	0.90	0.38	0.32	0.20	0.25	0.19
YOS09012	長年大寶	1372.63	80.92	7.07	0.15	48.32	17.90	1.16	0.33	0.32	0.13	0.35	0.18
YOS09013	貞觀永寶	1101.46	73.65	8.04	0.18	61.64	24.28	1.24	0.42	1.30	0.64	0.48	0.29
YOS09014	隆平永寶	941.30	64.58	12.84	0.27	88.92	33.61	0.84	0.30	0.51	0.27	0.42	0.27

表 5-2 成分分析結果一覧

一昨年度、錢貨 30 点に対して同様の調査を行った際、錫の量比の多寡と製作（初鋳）年代とが相關することが判明、8世紀代に初鋳された和同開珎・神功開寶・隆平永寶の3銭種が錫を多く含有するグループとしてまとまつた（伊藤 2009）。今年度については、点数が少ないために明瞭ではないが、一昨年度分と合せると同様の傾向がみられた（表 5-3）。また、一昨年度調査分の中には 9世紀以降の銭種の中でも貞觀永寶については錫の検出量が多い個体があった。これについてはイレギュラーなものとしてとらえていたが、今回の結果でも同様のものがあることから、貞觀永寶は錫の多いものと少ないものとが存在している可能性がある。

以上のように銭貨の成分分析について、一昨年度調査分と整合性が高く興味深い結果が得られた。しかし、銭貨の製造については、時として私鋳銭の存在が云々される。これは皇朝十二銭についても例外ではなく、もし、私鋳銭が出土品の中に紛れ込んでいれば、その成分分析結果は正規に鋳造されたものとは異なる数値を示すであろう。想像をたくましくすれば、同一銭種でも各元素濃度が一定せず大きくばらつく可能性が高いと思われる。このような事柄を考えると、一昨年度、今年度に行った合計 44 点についての成分分析は一定の傾向を示しており、幸いにも理解しやすいものであった。今後も銭貨の成分分析を継続することは重要であるが、資料そのものが必ずしも一元的な管理の下で鋳造されたものであるとは限らないことも考え合わせておく必要があろう。

註 1) 使用した機器は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 BX95（エダックス社製、人間歴史博物館設置）である。

測定条件は次のとおりである。

対陰極：ロジウム (Rh)、検出器：半導体検出器、管電圧 40kV、管電流 20 μA、測定ガス開気：真空、測定範囲 5m

m₀、測定時間 1000sec (デッドタイム補正有)

註2) 半定量的な含有量 (wt%) の算出について、使用したソフトウェアはDX95に搭載されている「NSTD32」である。測定試料の成分組成に近い標準試料を1点測定し、その結果からノンスタンダード法で用いる係数テーブルを補正して使用する手法をとった。よって表中の数値は、必ずしも真の含有量を示しているものではなく、同一条件下測定・算出した試料間での量比の比較についてのみ有効である。標準試料は、錢貨にはCu-Sn-Pb系合金を用いた。

(伊藤)

【参考文献】

伊藤幸司 2009 「2. 金属製品の保存処理について」『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』

処理番号	銭種	Snk
YOS07023	貞觀永寶	0.00
YOS07022	長年大寶	0.00
YOS07016	承和昌寶	0.00
YOS07024	承和昌寶	0.00
YOS07015	承和昌寶	0.00
YOS07025	承和昌寶	0.00
YOS09006	富壽神寶	0.00
YOS09008	承和昌寶	0.00
YOS09005	富壽神寶	0.12
YOS09009	承和昌寶	0.12
YOS09012	長年大寶	0.13
YOS07006	承和昌寶	0.15
YOS07013	富壽神寶	0.15
YOS07020	承和昌寶	0.16
YOS07028	承和昌寶	0.17
YOS09010	長年大寶	0.18
YOS09011	長年大寶	0.20
YOS07027	承和昌寶	0.21
YOS07017	承和昌寶	0.22
YOS07002	富壽神寶	0.23
YOS07005	承和昌寶	0.23
YOS09007	富壽神寶	0.23
YOS07021	承和昌寶	0.24

処理番号	銭種	Snk
YOS09003	陸平永寶	0.26
YOS09014	陸平永寶	0.27
YOS07008	神功開寶	0.35
YOS07003	富壽神寶	0.35
YOS07007	富壽神寶	0.36
YOS09004	富壽神寶	0.37
YOS07001	陸平永寶	0.38
YOS07018	和同開珎	0.40
YOS07029	和同開珎	0.43
YOS07009	陸平永寶	0.43
YOS07019	陸平永寶	0.44
YOS07010	陸平永寶	0.61
YOS09013	貞觀永寶	0.64
YOS07004	神功開寶	0.71
YOS07011	神功開寶	0.82
YOS07012	陸平永寶	0.88
YOS09002	陸平永寶	0.88
YOS07038	貞觀永寶	1.36
YOS07014	神功開寶	1.44
YOS09001	神功開寶	1.91
YOS07026	和同開珎	8.84

表5-3 錫含有量の多寡
(一昨年度の分析結果と併合・ゴシック斜体の分は8世紀鋳造の銭種)



YOS09001



YOS09002



YOS09003



YOS09004



YOS0905



YOS0906



YOS0907



YOS0908



YOS0909



YOS09010



YOS09011



YOS09012



YOS09013



YOS09014

写真 5-1 銭貨 (YOS09001~14) X線透過写真

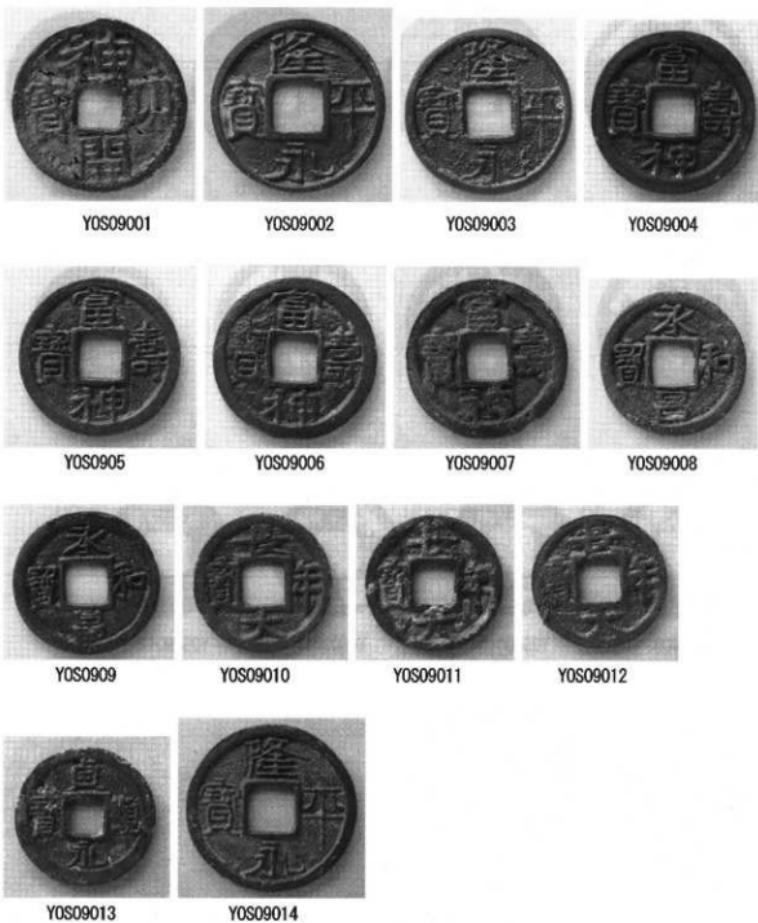
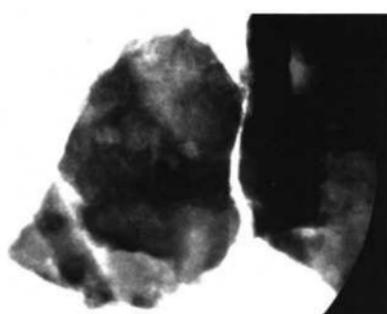


写真5-2 銅製品（銭貨：YOS09001～14）写真：保存処理後



YOS09015



YOS09016



YOS09017



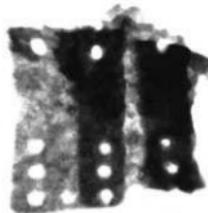
YOS09018



YOS09019



YOS0920



YOS0921



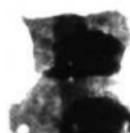
YOS09022



YOS09023



YOS0924



YOS09025

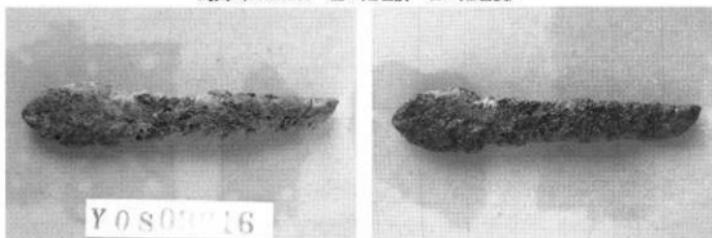


YOS09026

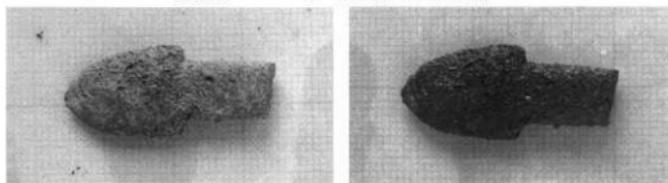
写真5-3 鉄製品 (YOS09001~14) X線透過写真



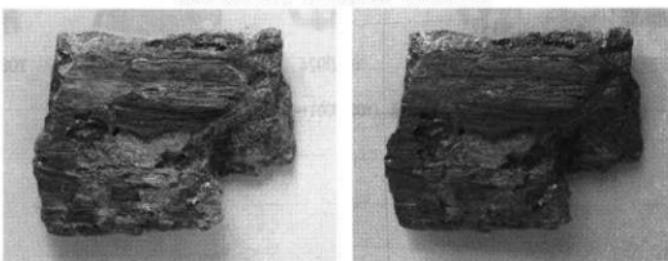
馬具 (YOS09015・左：処理前・右：処理後)



鐵鎌 (YOS09016・左：処理前・右：処理後)



鐵鎌 (YOS09017・左：処理前・右：処理後)

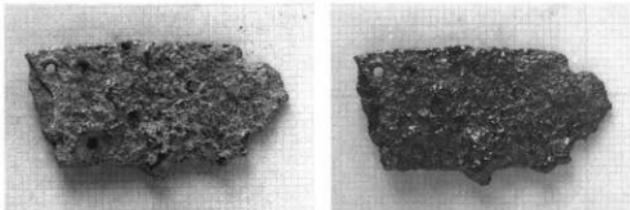


鐵劍 (YOS09018・左：処理前・右：処理後)

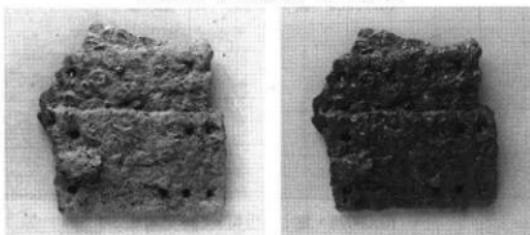
写真5-4 鉄製品 (YOS09015~18) 写真



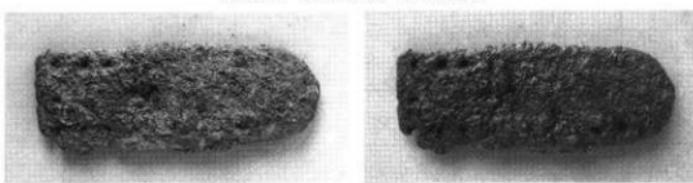
YOS09019・左：処理前・右：処理後



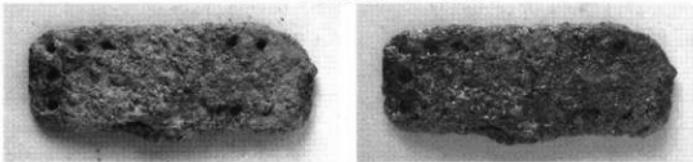
YOS09020・左：処理前・右：処理後



YOS09021・左：処理前・右：処理後

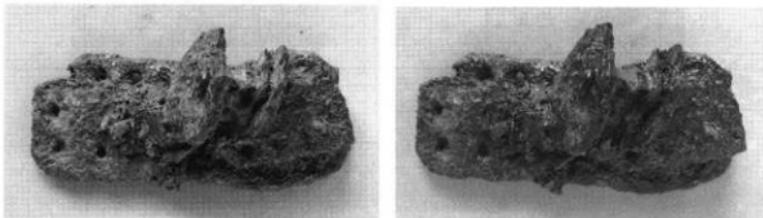


YOS09022・左：処理前・右：処理後

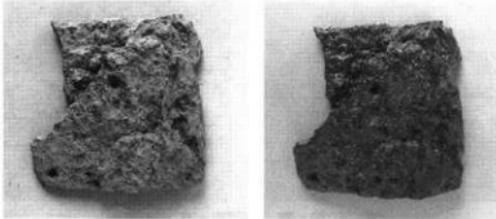


YOS09023・左：処理前・右：処理後

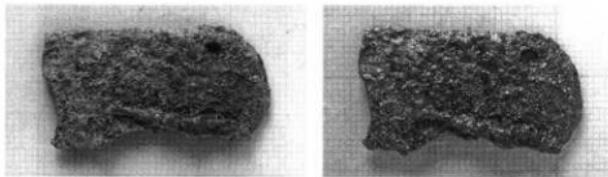
写真 5-5 鉄製品 (YOS09019~23) 写真



YOS09024・左：処理前・右：処理後



YOS09025・左：処理前・右：処理後



YOS09026・左：処理前・右：処理後

写真5-6 鉄製品 (YOS09024~26) 写真

6. 小阪合遺跡第41次調査出土の古代銭貨

1) 遺構概要

古代銭貨は、(財)八尾市文化財調査研究会による第41次調査第3面検出の3002N Rより出土した。3002N Rは、A区北端、南端、B北区西端、B南区西端で検出した河川跡で、当研究会40次調査で検出した大溝1の北と南の延長に相当する。検出長は100m以上、幅は18m前後を測る。小さく蛇行はするものの、巨視的にはほぼ南北に伸びる河川跡である。東西両肩の一部には、両肩に平行するように打設された木杭を検出した。これらは護岸に伴うものと推測される。河川内埋土は、ラミナ構造の発達した粘土質シルト～細礫で構成される。埋土からは、以下に報告する古代銭貨をはじめ、多量の遺物が出土した。

2) 出土状況

今回の調査で出土した銭貨は、神功開寶1枚、隆平永寶2枚、富壽神寶4枚、承和昌寶2枚、長年大寶3枚、貞觀永寶1枚の計13枚である。ほとんどが、埋土の最下層から出土している。銭貨の分布は大きく4グループ(B北区：北からA～Cグループ B南区：Dグループ)に分類できた(第6-1図・表6-1を参照)。出土状況からは、いずれも上流からの流れ込みではなく、付近から投棄されたものと推測される。

次に各銭貨の遺存状況を概説する。①は文字が明瞭で、研磨痕が見える。②～④は文字、研磨痕ともに明瞭に加え、黒を確認した。⑤・⑥は文字が鈎潰れている。⑦は文字が明瞭であるが、裏面には型ずれを認めた。⑧・⑨は文字が極めて明瞭である。⑩は文字が明瞭で研磨痕も見える。⑪～⑯は文字が鈎潰れにより不明瞭で、鈎不足や型ずれも顕著である。⑯には緑色を呈した鏽も認められる。傾向としては、神功開寶、隆平永寶、富壽神寶、承和昌寶は遺存状態が良好で、文字や研磨痕が明瞭であるのに対し、長年大寶、貞觀永寶は劣化が進行し、文字が不明瞭で鈎潰れも目立つ。ただし、この差は時期的な鋳造技術によるものと推測され、使用等による劣化ではない。

共伴遺物は、土師器や須恵器、讃岐國分寺同范瓦(軒丸瓦・軒平瓦)をはじめとする瓦類、釘や用途不明の鉄製品、斎串などの木製品、馬と推測される獸骨などが認められる。

遺物の帰属年代は、奈良時代初頭(8世紀初頭)～平安時代前半(10世紀前半)であり、銭貨の時期もこれに納まる。

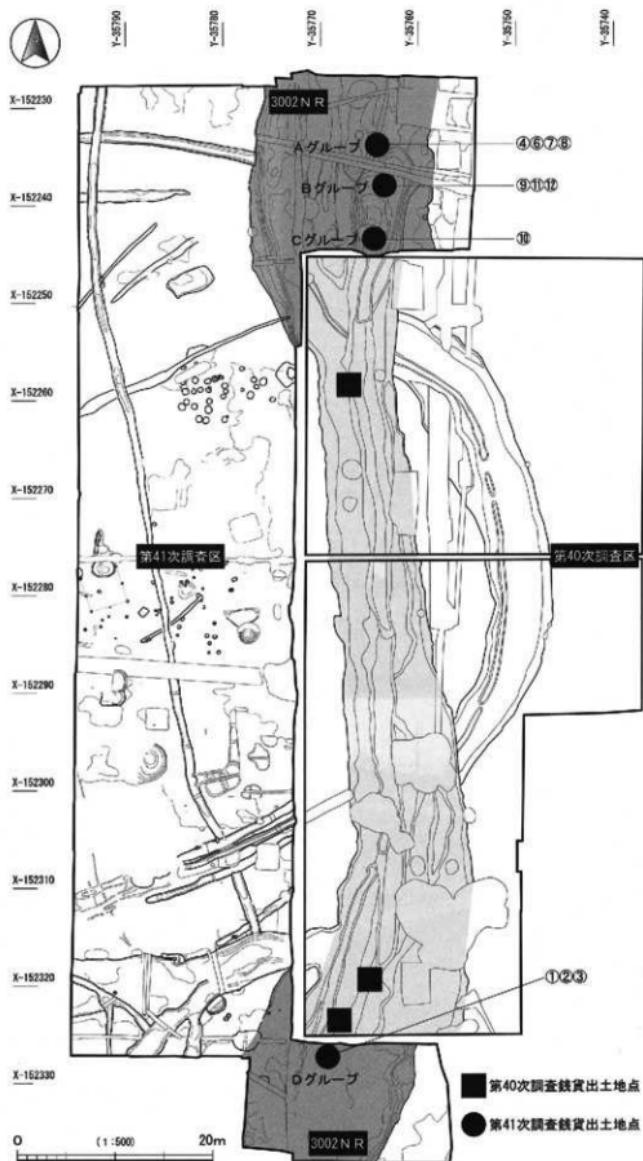
3)まとめ

今回検出した3002N Rについては、(財)大阪府文化財調査研究センターによる第1次調査(川200・川719)をはじめ、当研究会第40次調査(大溝1)でも検出しており、この河川跡がほぼ南北に伸び、その規模は、長さ200m以上、幅18m前後であることを明らかにした。この河川跡からは、銭貨が合計111枚(センター：69枚 第40次調査：29枚 今回の調査：13枚)出土した。銭貨は、概ね研磨痕が明瞭であることから、流通していたものとは考えにくい。また、一箇所からこれほどの枚数の皇朝十二銭が出上した例は極めて特異であり、他の遺物の内容と合わせて、当該期における河川祭祀の一端を知る上で貴重な成果といえる。なお、祭祀の内容については検討を要するため、今後の課題としたい。

【参考文献】

- ・岡井正明編2000『八尾市若草町所在小阪合遺跡 -都市基盤整備公団八尾団地建設に伴う発掘調査報告書-(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・岡田清一他2006「16. 小阪合遺跡第40次調査(KS2005-40)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・橋口薫他2008「9. 小阪合遺跡第41次調査(KS2006-41)」『平成19年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

番号	種類		表面	裏面	色調	備考
① (YOS09006)	富壽神寶	Dグループ	文字明瞭 研磨痕あり	—	黒褐色 (5YR2/1) 赤銅色	—
② (YOS09009)	承和昌寶	Dグループ	文字明瞭 難あり	型ずれあり 平坦	黒褐色 (7.5YR3/1) 若干赤銅色	側面に研磨 痕あり
③ (YOS09003)	陸平永寶	Dグループ	文字明瞭 難あり 研磨痕あり	難あり 研磨痕あり	黒褐色 (7.5YR2/1) 若干赤銅色	—
④ (YOS09008)	承和昌寶	Aグループ	文字明瞭 難あり	平坦	黒褐色 (5YR2/1) 赤銅色	—
⑤ (YOS09007)	富壽神寶	—	文字鋳慣れ	—	黒褐色 (7.5YR3/1) 若干赤銅色	—
⑥ (YOS09010)	長年大寶	Aグループ	文字不明瞭 『寶』鋳慣れ	平坦	褐色 (7.5YR4/3)	—
⑦ (YOS09001)	神功開寶	Aグループ	文字明瞭 鋳不足(又は難)箇所あり	型ずれあり 難あり	黒褐色 (5YR2/1) 赤銅色	歪みあり
⑧ (YOS09004)	富壽神寶	Aグループ	文字極明瞭	若干難あり	黒褐色 (5YR2/1) 赤銅色	—
⑨ (YOS09002)	陸平永寶	Bグループ	文字極明瞭 研磨痕あり	研磨痕あり	黒褐色 (5YR2/1) 赤銅色	—
⑩ (YOS09005)	富壽神寶	Cグループ	文字明瞭 研磨痕あり	研磨痕あり	黒褐色 (5YR2/1) 赤銅色	—
⑪ (YOS09011)	長年大寶	Bグループ	文字不明瞭・鋳慣れ 鋳不足(又は難)箇所あり	鋳不足(又は難)箇所あり	黒褐色 (5YR2/1) 赤銅色	—
⑫ (YOS09012)	長年大寶	Bグループ	『長』『寶』鋳慣れ	型ずれあり 平坦	黒褐色 (5YR2/1) 赤銅色	—
⑬ (YOS09013)	貞觀永寶	—	文字不明瞭 『觀』『寶』鋳慣れ 鋳不足(又は難)箇所あり	鋳不足(又は難)箇所あり	褐色 (7.5YR4/3)	一部緑色の 跡が見える



第6-1図 3002 N R 鉄貨出土位置図



第41次調査航空写真



3002 N R 堆積状況(北西から)



銭貨⑦出土状況(日北区Aグループ：北東から)



銭貨⑨出土状況(日北区Bグループ：北西から)



銭貨⑤出土状況(日北区Cグループ：西から)



銭貨④出土状況(日北区Aグループ：南から)



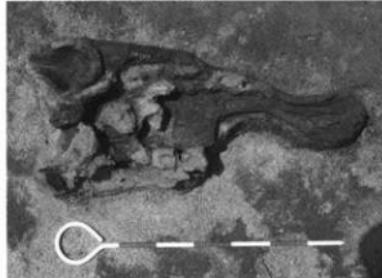
須恵器壺出土状況(日北区：南西から)



軒平瓦出土状況(日北区：北西から)



獸骨(馬顎骨)出土状況(日南区：南から)



獸骨(馬顎骨)出土状況(日南区：東から)

7. 郡川東塚古墳出土の挂甲小札に付着した繊維品

1) はじめに

郡川東塚古墳出土の挂甲小札に付着している繊維品の調査を行ったので報告する。

2) 調査方法

実体顕微鏡を用いた非破壊調査で繊維束の太さや繊維の撚り、その特徴を確認した。

3) 結果

調査した資料のうち、繊維の残存がよい小札資料6点の結果を表7-1にまとめる。

資料番号	資料名	繊維番号	素材推定	繊維束の撚り	繊維束の太さ
YOS09019	小札	-1	絹	無撚り（弱い右撚り部分あり）	0.3mm程度
YOS09020	小札	-1	絹	無撚り	0.3mm程度
YOS09021	小札	-1	絹	不明瞭	0.3mm程度
YOS09022	小札	-1	絹	無撚り（弱い右撚り部分あり）	0.3mm程度
		-2	絹	無撚り（弱い右撚り部分あり）	0.3mm程度
		-3	絹	無撚り（弱い右撚り部分あり）	0.3mm程度
		-4	絹	不明瞭	0.3mm程度
YOS09025	小札	-1	絹	無撚	不明
YOS09026	小札	-1	絹	無撚り（弱い右撚り部分あり）	0.3mm程度
		-2	絹	無撚り（弱い右撚り部分あり）	0.3mm程度

表7-1 繊維調査結果

①YOS09019（写真7-1）

1cm程度の細長い紐状の繊維品を確認した。一部に右撚りの繊維束を観察したが、その多くは無撚りの繊維であった（写真7-2・7-3）。

②YOS09020（写真7-4）

孔の周囲に繊維品を確認した（写真7-5）。繊維束は見にくくなっていたが、紐状のものと推定した。

③YOS09021（写真7-6）

繊維品（写真7-7）は撚りについては不明瞭であったが、繊維束は0.3mm程度であった。

④YOS09022（写真7-8）

繊維品を4か所確認した。いずれもゆるい右撚りの繊維が確認できるものの、全体的には無撚りの繊維であり、繊維束は0.3mm程度であった。他の資料と同様の紐状の繊維品と考えられた。また、1つは孔に2本の繊維束がまとわりつくように広がる形態を呈しており、1つは長い繊維状であった。紐の通し方に違いがあると推定した（写真7-9）。

⑤YOS09025（写真7-10）

繊維品を1か所確認した。いずれも無撚りの繊維束であり、太さは不明瞭であった。

繊維品の断面は橙色を呈しており、繊維内部まで小札のさびが浸食し、鉱物化していると推定した（写真7-11）。

⑥YOS09026（写真7-12）

2か所に繊維束が確認できた（写真7-13）。いずれも若干右撚りの部分があるものの、無撚りの繊

維束と判断した。0.3mm程度の太さであった。両繊維品ともに孔に通してあり、YOS09022でも確認した孔に2本の繊維束がまとわりつくように広がる形体であった（写真7-14）。しかし、一つは孔を完全にふさいでいる状態であった。

4) 結果考察

この調査結果から、本調査資料には同一の紐状の繊維品が使用されていたと考えられる。これまで甲冑に使用された繊維品¹⁾や皮革品の調査結果が示されているが、その研究例は僅少であり、このような紐状の同一繊維束が複数の小札に広がって確認できる資料は非常に貴重なものである。また、この紐状の繊維品はいずれも小札の孔をとおっており、小札どうしを留めた素材であることは明らかである。よって、この残存する紐状繊維品の広がりを確認することと既往の小札甲の製作技術研究²⁾の比較から、本資料らがどのように繋がっていたかについても推察できる可能性がある。特に、小札の孔の周間に繊維束がまとわりつくように広がる形体を示した繊維品は2本の紐を通して括られたものとも推察でき、小札甲の製作技法推定にとっても有意義な資料であろう。

他方、繊維品の素材同定のために電子顕微鏡で観察する試料片を得ようと、繊維品形体を壊さない部分から1mm程度を採取した。しかし、非常に脆弱であったため、絹や麻類の特徴を示す組織の遺存状態が悪く、判定することはできなかった。

以上のようなことから、今回は非破壊調査で確認した繊維束の燃りだけで素材を断定することは難しかつたため、素材を推定するにとどめた。保存処理した後の繊維品は強化されていることが期待できる。小札資料自体を電子顕微鏡の資料室にセットすることが可能ならば、繊維品の素材同定のための特徴が観察できる可能性がある。

(東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター 手代木美穂)

1) 「宮崎県島内地下式横穴墓群の出土繊維」 中野和浩 季刊考古学第91号 37-40 2005

2) 「小札甲の製作技術と系譜の検討」 清水和明 月刊考古学ジャーナルNo.581 22-26 2009



写真 7-1 YOS09019

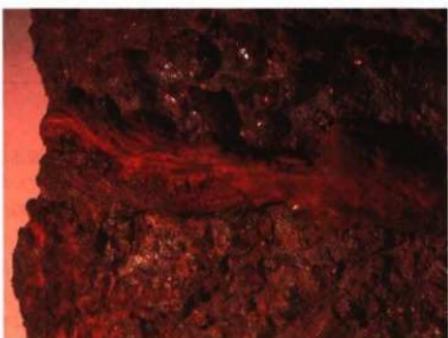


写真 7-2 YOS09019 繊維束写真



写真 7-3 写真2繊維束の接写写真



写真 7-4 YOS09020



写真 7-5 YOS09020 繊維品写真



写真 7-6 YOS09021

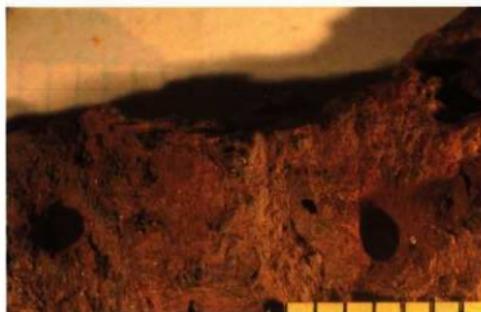


写真 7-7 YOS09021 繊維部分写真



写真 7-8 YOS09022

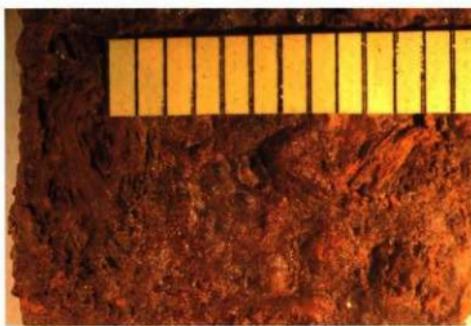


写真 7-9 YOS09022 2種類の繊維を確認



写真 7-10 YOS09025



写真 7-11 YOS09025 繊維束接写写真



写真 7-12 YOS09026



写真 7-13 YOS09026 2種類の繊維を確認

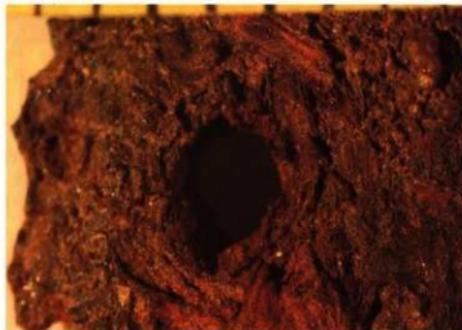


写真 7-14 YOS09026 2種類の繊維を確認

8. 郡川東塚古墳出土の鉄製品

1) 鉄製品の出土状況

郡川東塚古墳は、八尾市東部の生駒山地西麓を南北に通じる東高野街道沿いにある古墳時代後期の前方後円墳である。全長約56m以上と推定（財）八尾市文化財調査研究会編（2006）される墳丘を、後円部を南に、前方部を北に向けて築造されている。また、東高野街道を隔てて、郡川東塚古墳の西方約150mには、同じく前方後円墳である郡川西塚古墳が築造されている。

郡川東塚古墳の主体部となる横穴式石室については、明治30年（1897）の石室開口時の様子を聞き取り調査し、合わせて昭和49年（1974）に出土した副葬品の資料調査を行った清原得蔵氏の報告から詳細を知ることができる（清原1976）。その後、平成13年（2001年）に八尾市教育委員会が実施した郡川東塚古墳の発掘調査（八尾市教委編2002）で、後円部の主体部となる横穴式石室の位置や石室構築のための基礎構造の存在が明らかとなった。

後円部の真南側に羨道入口を持つ横穴式石室は、明治期の石室開口以降、東側壁の一石を現位置で残す以外すべて抜き取られており、石室石材のほとんどが西側壁側から持ち出されていた。木棺は残っておらず、石室床面の大部分が深いところで約0.6m前後も掘り下げられるなど、徹底的に破壊されていたことがわかった。石室の破壊は、明治期の開口時と、さらに昭和3年（1928）の陸軍大演習の折の新道採土工事（吉岡1988）と2回以上に及んだ可能性が高い。その後、破壊された石室部分は埋め戻され、残った墳丘東側を中心に庭園の築山として取り込まれ、後円部中央付近に石室石材の一部を使用したと考えられる南北方向の低い石垣が積まれていた。調査前の状況では、石室の位置等は明らかではなく、石室の側石と考えられる石材の一部が残されるのみであった（八尾市教委編2002・図版3参照）。

市教委の調査で出土し、今回保存処理を行った鉄製品は、すべて横穴式石室を埋め戻した攪乱層から出土したもので、副葬当時の位置が明らかなものはない。平成13年度（八尾市教委編2002）に図化したものが含まれるが、保存処理を行った平成20年度報告の馬具類2点（八尾市教委編2009）と今回報告の鉄製品が、攪乱層から出土した鉄製品のすべてである。2ヵ年の再整理と保存処理を経て、再実測を行い、出土鉄製品の種類や内容を明らかにでき、新たな知見を得ることができた。今年度報告する鉄製品には、武器では、鉄劍（1）、鉄鎌（2・3）、武具では小札（4～11）、馬具の被片（12）、その他不明鉄製品（13～15）がある。

（藤井）

2) 鉄製品の概要（X線透過写真は写真5-3を参照）

武器 1は鉄劍の破片であり、残存長5.35cm、同最大幅3.9cm、同最大厚0.8cm、重さ40.5gを測る。小片であるため全形を推測することは難しい。鎌は認められず、両面の広い範囲に木質が付着していることから、元来鞘に納められていたと考えられる。

2・3は小型の身部をもつ長頭鎌の破片で、どちらも身部は完存しているが頭部の途中で破損している。2は身部長1.7cm、身部最大幅1.1cm、身部厚0.3cm、頭部残存長4.5cm、重さ7.4g、3は身部長1.7cm、身部最大幅1.3cm、身部厚0.4cm、頭部残存長1.3cm、重さ3.6gを測る。ともに身部断面は両丸で、頭部断面は方形を呈する。有機質の付着は確認できない。

武具 4～11は小札甲（挂甲）もしくはその付属具に用いられたとみられる小札である。全形のわからない破片も多いが、全て頭部が円頭系を呈し、縫孔2列4孔、縫孔下位4孔、下掲孔・覆輪孔下端3孔の平札になると考えられ、腰札や裾札と判断できるものは確認できない。ただし、法量をまとめた表8-1をみてわかるように、大きさにバリエーションが存在し、特に幅の数値に関しては最大で0.8cmという明らかな違いが認められる。これらの違いが何に起因するものかは、出土数の少ない本古墳では判然としないが、他の古墳における小札の分類などを参考にすると、その差異は小札が用いられた部位によると考えるのが妥当であろう。複数枚の小札が銹着している個体をみると、それぞれにほぼ法量差

が認められないことは、この考えを傍証する。特に最大0.8cmという幅の差異から、おそらく2~3種類の異なる型式の小札が存在したと想定できる。

多くの個体で有機質の付着が認められるが、縫技法や縫合法などがわかるほどに残存のよいものはほとんどない。ただし、6に付着する有機質を観察すると、上から下りてきた縫組が下段の縫孔に入り、裏から上段の縫孔に入るような紐の痕跡が確認できる。この有機質のありかたを積極的に評価すると、清水和明による通段縫（清水1993a）、塚本敏夫による括付技法（塚本1997）と考えることができる。

このような縫・縫孔配列と縫技法の組み合わせは清水による胴丸式挂甲の分類における稻荷山型に該当し、須恵器型式に置きかえると、TK47型式からTK10型式までの間に類例が多い（内山2006）。この小札の年代観は出土している須恵器や馬具の年代と大きく齟齬をきたすものではないといえる。

馬具 12は馬具と考えられる鉄製品の破片である。2本の方向が異なる帶状の金具をその位置関係から礪金具に伴う縁金具であると判断したため、以下では礪金具の破片として詳細を述べていくこととする。

周囲が全て破断面となっているため全形を復元することは困難であるが、鉄板の厚さは2.0~4.0cmを測り、重さは157.5gである。全体的に強く湾曲し平らなものではないが、それが副葬當時からの形であるのか、後の土圧などにより変形したものかは判然としない。上辺の縁金具は地板となる鉄板に鍛留され、下辺のものは2枚の鉄板をつなぎ合わせる形で鍛留されている。縁金具は両辺ともに幅1.0cm前後を測る、径0.5cm弱の鉄紙が密に打ちこまれ、残存範囲内で上辺には6個、下辺には3個の鍛が確認できる。上辺の縁金具の上には何らかの鉄製品が接着しているように観察できるが、X線透過写真では判断できず詳細はわからない。表面に木質が付着している。上辺の縁金具よりさらに外側、海に相当する部分にも鉄板が続いていることから、宮代栄一の研究における鉄地金銅装鞍である可能性が指摘できる（宮代1996）。ただし、表面に金銅を貼ったような痕跡は現状で認められない。

ここまで細部の特徴を述べてきたが、注意しておかなければならぬ点が2つ存在する。1つは上で述べた下辺の縁金具の構造である。本資料では、下辺の縁金具からさらに下方に向かって鉄板がのびているが、このような形態を示す礪金具は管見ながら認められない。通常の鞍であれば、礪金具の下方はすぐに馬の背中であるため、このような形にはなりようなく、礪金具ではない別の製品である可能性も考慮する必要がある。2つはサイズの問題である。縁金具幅1.0cm、鍛径0.5cmという数値は礪金具の数値にしてはやや大きすぎる感がある。他の事例を逐一計測したわけではないため感覚的なことではあるが、この点にも留意しておく必要があろう。

礪金具とは異なる部品であるとしたときに類例と指摘できるものは、奈良県市尾墓山古墳出土の馬具があげられる。この馬具は海にも放射状の縁金具がつくように復元されており（河上1984）、その観点でみると本資料も同様に、海に取り付けられた放射状縁金具と考えることも可能である。ただし、そのように考えたとしても、市尾墓山古墳例に比べて縁金具の間隔が狭いため全く同じ型式のものと考えることはできず、複数枚の鉄板をつなぎ合わせて海を覆っていたとも考えにくいくことからすると、若干の類似点を指摘するにとどまる。解釈の羅列になってしまった感が否めないが、今後類例を検討していく中で全体像を明らかにしていきたい。

不明鉄製品 13~15は器種の特定ができない鉄製品の破片である。13は残存長3.2cm、同最大幅2.1cm、同最大厚0.3cm、重さ5.7gを測る。緩い湾曲をもつ板状を呈し、幅は上述の小札と近い数値であるが、小札に比べて分厚いことや残存部分で穿孔を確認できることから小札ではないと判断した。有機物の付着は確認できない。

14は残存長3.05cm、同幅0.25~1.4cm、同厚0.4~1.1cm、重さ2.5gを測る。4つの鉄片が重なっており、一部鉄錠の茎と考えられる形態のものも存在することから、鉄錠が複数個体接着したものと考えることもできる。

15は残存長3.3cm、同幅0.4~0.55cm、同最大厚0.4cm（木質部を含むと0.5cm）、重さ2.1gを測る。断面隅丸方形で先細りの形態を呈し、X線透過写真によると中心に穿孔がおこなわれている様子が観察

できる。破断面における孔径は0.2cmほどで、途中で収束するようであるが、単なる亀裂の可能性も残る。全面に木質が付着していることは、この遺物の性格を反映しているものと思われるが、現状でどういったものであるかは判然としない。

(金澤雄太)

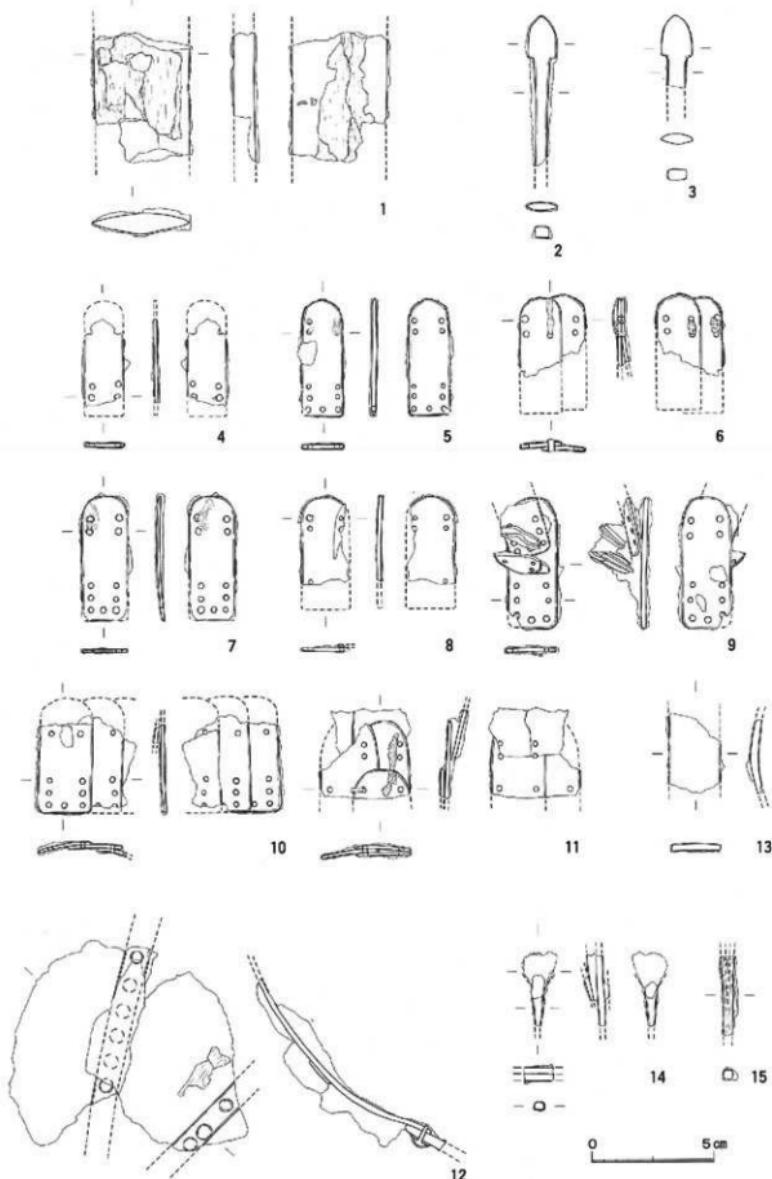
表8-1 小札法量表

実測図番号	長さ	幅	厚さ	孔径	重さ
4	(3.6)	1.6	0.15	0.25	3.6
5	4.75	1.7	0.2	0.2	7.2
6	(3.2)	1.8	0.2	0.25	6.2
7	5.15	1.9	0.15	0.25	8.0
8	(3.6)	2.0	0.2	0.2	4.5
9	5.35	2.0	0.2	0.2	19.6
10	(4.05)	2.2	0.15	0.2	14.8
11	(3.2)	2.4	0.15	0.2	15.2

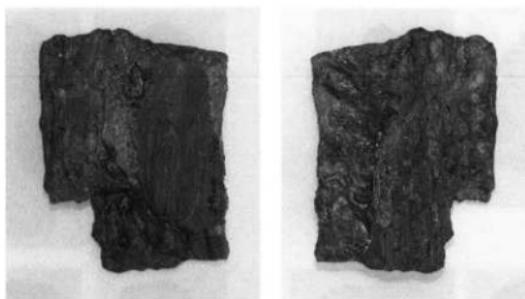
単位は長さ・幅・厚さ・孔径がcm、重さがg、()は残存値
複数枚が銹着している場合は最も残りの良いものを計測した

【参考文献】

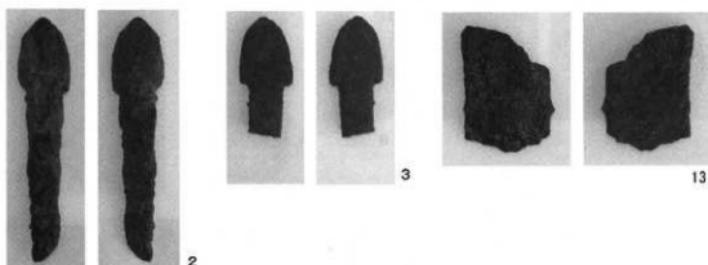
- 内山敏行 2006 「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第7号 古代武器研究会 pp. 19-28
- 小川良祐 1980 「挂甲」『塙下・福井山古墳』塙下県教育委員会 pp. 68-71
- 河上邦彦 1984 「市尾草山古墳」高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 清水利明 1990 「挂甲」『坂場 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』坂場町・坂場町教育委員会 pp. 362-375
- 1993a 「挂甲—製作技法の変遷からみた挂甲の生産—」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第33回埋蔵文化財研究集会 pp. 13-27
- 1993b 「挂甲の技術」『月刊考古学ジャーナル』第366号 ニューサイエンス社 pp. 27-30
- 2009 「小札甲の製作技術と系譜の検討」『月刊考古学ジャーナル』第581号 ニューサイエンス社 pp. 22-26
- 榎本敏大 1997 「長持山古墳出土挂甲の研究」『工者の武装—5世紀の金工技術—』京都大学総合博物館 pp. 64-87
- 松尾充品 1999 「馬具」『上塙治篠山古墳の研究』島根県古代文化センター pp. 79-107
- 宮代栄一 1996 「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』第3号 pp. 53-82
- 森川祐輔 2009 「シショツカ古墳出土小札甲の編年的位置づけ」『加納古墳群・平右古墳群』大阪府教育委員会 pp. 371-382
- 安村俊史 1996 「小札」『高井田山古墳』柏原市教育委員会 pp. 168-172
- 吉澤利男 2002 「武具」『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市教育委員会 pp. 113-116



第8-1図 鉄製品実測図 ($S = 1/2$)

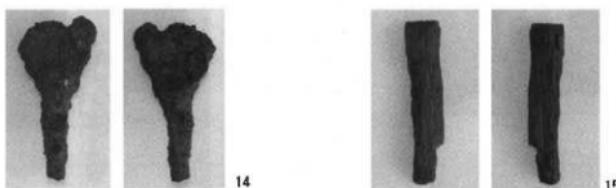


1



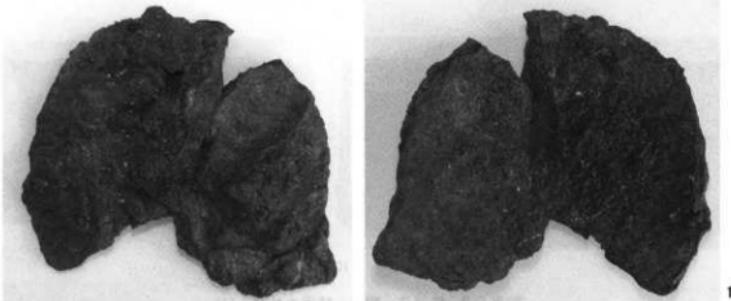
3

13



14

15



12

写真 8-1 鉄製品 写真：鉄剣(1)・鐵鎌(2・3)・馬具(12)・不明鉄製品(13～15)



4



5



6



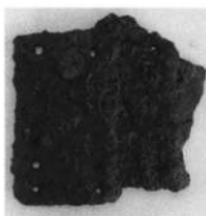
7



8



9



10

11

写真 8-2 鉄製品 写真：挂甲小札(4~11)

3) 郡川東塚古墳の再検討

①副葬品の構成

郡川東塚古墳（以下「東塚古墳」と略称）の副葬品の多くは、明治30年（1897）の石室開口時に散逸しており、明らかでない部分が多い。現存する副葬品は、石室開口時に出土し、その後、明治43年（1910）に作成された目録とともに地元久保田家に所蔵されている副葬品（以下「久保田家所蔵」と略称）と、市教委調査で出土した2カ年にわたり保存処理を行った鉄製品（八尾市教委編2009及び前項）、管玉や須恵器・土師器（八尾市教委編2002）がある（以下、「市教委調査」と略称）。

開口時の聞き取り調査に基づく清原氏の報告（清原1976・以下、「清原氏報告」と略称）と平成15年（2003）に行われた久保田家所蔵資料の調査報告（吉田2004及び吉田氏資料調査記録をご好意により実見）、市教委調査で確認した副葬品を合わせて、東塚古墳の副葬品の構成について再検討してみたい。

久保田家所蔵の鏡や装身具等の資料を昭和49年（1974）に実見、整合した上で、清原氏は報告を作成しており、これらの多くは現存している。特に画文帶神獸鏡については、昭和10年（1935）には国の重要美術品に指定されており、東塚古墳の鏡は古くから知られていたことがわかる。鏡は、同型鏡を中心として研究（梅原1944・小林1976他）が進められてきた。

多量に出土したとされる刀剣類は、すべて散逸しているが、唯一残った鉄劍の破片を観察すると、劍身部に木質が残っており、鞘に入った大型の劍が含まれていたことがわかる。しかし、今回報告した挂甲小札や鉄鎗などの武具・武器類や、鞍などの馬具等の配置はおろか、存在そのものが記録に残っていないため、刀剣類以外のこれら鉄製品は、見落とされていた可能性が高い。

明治30年の東塚古墳の石室開口に引き続き、5年後の明治35年（1902）には郡川西塚古墳（以下、「西塚古墳」と略称）の横穴式石室が開口され、出土した副葬品は指定等になっていないものの、明治36年（1903）には、和歌山県隅田八幡神社所蔵の癸未年人物画像鏡（国宝）の原鏡として知られる神人歌舞画像鏡や仮製四獸鏡や須恵器等が東京国立博物館に寄贈され（木村1981）、また、もう一両の神人歌舞画像鏡を和泉市久保惣記念美術館が所蔵している（和泉市久保惣記念美術館1985）。このように、西塚、東塚の両古墳の副葬品の散逸が著しいことがわかるだろう。

断片的ながら、豊富な東塚古墳出土の副葬品の構成を整理すると、下記のようになる。

[副葬品の構成]

青銅鏡：画文帶神獸鏡1面（国旧重要美術品：清原氏報告及び久保田家所蔵）

装身具：耳環大小4点（清原氏報告は金環とする・銅芯製と考えられるが、金環が大小それぞれ1点あり、残り2点は、表層が剥離しており、銅芯もしくは銀環と見えるものがあるものの本米の仕上判は不明・渡辺1997）

青銅製金銅張鈴4点（小型の鈴で幣具等の装飾品の一部と考えられる・田中1992）

勾玉（琥珀製1点・翡翠製1点・アルビタイト製1点・水晶製3点）

碧玉製管玉32点・翡翠製糸玉1点・水晶製六角玉1点・水晶製切子玉30点・ガラス製青色小玉84点（以上、清原氏報告及び久保田家所蔵）・碧玉製管玉1点（市教委調査・久保田家所蔵の吉田2004第6図の管玉1と類似する色調）

武器：刀剣類（40~50本・清原氏報告）・劍破片1点・長頸瓶2点（市教委調査）

武具：挂甲小札8点（市教委調査）

馬具：鞍金具1点・銜具1点・礪金具破片1点（市教委調査）

土器：須恵器 長頸壺（久保田家所蔵・清原氏報告の大壺か）・壺（蓋・身）：MT15型式、TK10型式
土師器 高杯・壺破片（市教委調査）

②副葬品の配置

清原氏の聞き取り調査によると、石室内は、石室奥壁沿いに石室主軸に直交して、朱詰めの木棺が配置されており、棺内の被葬者が頭部を西側に向けて埋葬され、金環と鏡が副葬されていた。さらに木棺

と奥壁の間には、木棺に平行して多量の鉄剣や鉄刀が置かれていた。そして、棺周辺に土器、羨道付近に須恵器の壺などの土器が置かれていたとされる。

この奥壁木棺が初葬の位置であることから中心被葬者と考えると、多量の刀剣類は中心被葬者に帰属するものであり、同じく主要副葬品のひとつである馬具と鉄鎌が説明している破片が見られることから、武器や武具、馬具類はともに奥壁木棺の周辺に置かれていた可能性が高い。

奥壁沿いの40~50本の刀剣類の一括副葬は大量なもので他に類例がない、東塚古墳と築造時期が近く、横穴式石室の可能性もある古市古墳群の峯ヶ塚古墳の埋葬施設のように、石室奥壁沿いに刀剣類を載せた板材もしくは木箱(櫛)に納められていた可能性もあるが、峯ヶ塚古墳でも大刀15振り程度(羽曳野市教委編2002)で、本数の差は著しいため、その存否や副葬方法は不明である。

単棺埋葬であったのか、追葬があったのかは清原氏報告からは不明だが、大小の耳環が2対あることと2型式の須恵器の存在から、2棺埋葬で、追葬があった可能性が考えられる。多様な石材等で製作されている玉類の装身具類はそれぞれの被葬者に伴うものであると考えられるが、個々の種類の帰属は明らかでない。2棺目の棺配置は、石室内の左片袖部側(次項③で後述)の側壁沿いに石室主軸に対し平行して配置されていた可能性が高い。石室開口時にはすでに棺は腐朽もしくは損壊していたのかもしれない。2つの木棺が石室主軸に並列していたとされる西塚古墳とは異なる棺配置である(清原1976)。

以上のように、清原氏報告をもとに、今回の副葬品の構成の検討も合わせて、他の古墳での横穴式石室の副葬事例等を参考に副葬品の配置場所を想定すると、下記のとおりとなる。

[副葬品の配置(第8-2図)]

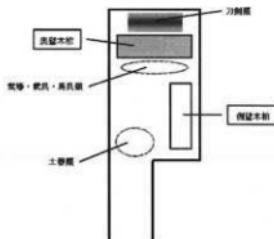
奥壁木棺内(中心主体) : 金環(大)・画文帯神獸鏡・装身具

奥壁と木棺の間 : 刀剣類40~50本

奥壁木棺周辺 : 土器(須恵器・土師器)・武器(鉄鎌)・武具(挂甲)・馬具類

側壁木棺内(想定) : 金環(小)・装身具

玄門付近 : 土器(須恵器・壺等を含む)・土師器



第8-2図 副葬品配置のイメージ

③横穴式石室プランの再検討

今回の出土遺物の再整理において、上記の副葬品や棺の配置を考える上で必要となるのが、副葬品を納めていた横穴式石室の様相である。先述したように、明治期の開口時の後の聞き取り調査により、副葬品配置と石室形態が清原氏報告に概略図が残されている。しかし、石室痕跡を確認した発掘調査では、以前に報告(八尾市教委編2002)したように、石材の抜き取り痕から左片袖式(玄室から羨道を見た)の横穴式石室を想定したが、清原氏報告の両袖式とは不一致であった。

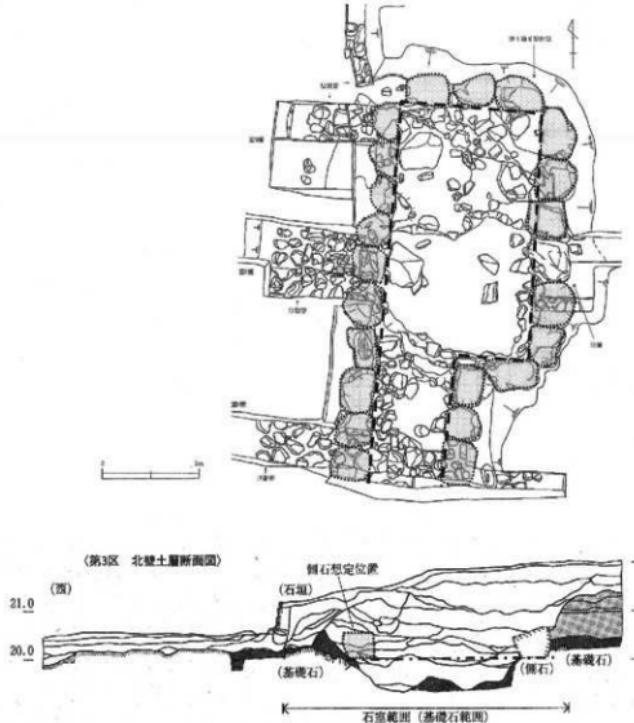
そこで、今回改めて、石室平面プランを再検討したところ、玄室幅5.1m、玄室幅3m、羨道長2.7m以上、羨道幅1.5mで復元できた(第8-3図 石室復元図 参照)。石室最下部の石材は、玄室奥壁3石、左側石(奥壁から見て左側・以下共通)で6石、羨道部の左側壁で3石以上となる。右側壁の側石は、抜き取り痕が一部不明確であるが、玄室部分で6石程度と考えられる。玄門部分の袖部石材の抜き取り痕の位置が左右で非対称であること、さらにその右玄門部の石材が石室主軸に平行した方向に据えられていることから、清原氏の概略図のとおり両袖式とするには、右側の袖部を作成するための石材配置となつていない。また、石室下部の基礎構築石材の上面に盛られた石室構築土となる黒色シルト層の残存位置を見ると、復元した右側壁の石材の想定ラインから、さらに両袖式にするための右側に広げるスペースはないと考えられるためである。

使用された石室石材は、現位置で残っていた縦約0.4m、横約0.7mの面取りした玄室側石や転落した

ものがあり、近畿地方の初期横穴式石室に見られるような板材ではなく、高安山山麓周辺で入手できる花崗岩の石材である。石材は、高安古墳群の造墓が始まる時期の横穴式石室である郡川16号墳（八尾市教委編2008）などの石材の大きさに類似している。河内地域の導入期の横穴式石室である高井田山古墳の系譜を引く古墳として、西塚古墳が位置づけられ（太田2003・安村2008）、石室の使用石材は、板材が想定されている。このことから、石室構築技術は、前段階の西塚古墳ではなく、次段階に東塚古墳から高安古墳群へと引き継がれた可能性が高い。

東塚古墳の横穴式石室の平面プランを見てみると（表8-2）、玄室長と玄室幅の玄室比率は1.70で、玄室比率1.50の西塚古墳より長方形プランを志向している。また、群集墳における初期横穴式石室は、郡川16号墳の玄室比率1.39のように正方形プランに近いものが多い。おそらく、西塚古墳と東塚古墳などの前方後円墳での横穴式石室採用にあたっては、玄室幅をさほど広げずに玄室長だけを延ばし、室内空間の規模を拡大したためであったと考えられる。同時期ではほぼ同規模の前方後円墳である奈良県市尾墓山古墳は、玄室面積が東塚古墳とほぼ同等で、さらに長方形プランを志向したものとなっている。

初期横穴式石室の石室プランのほとんどが右片袖式であり、特に高安古墳群ではその傾向が顕著（花田2008）であり、本復元案の左片袖式や記録にある両袖式も稀有な例であることは留意しなければならない（森岡1983）。今後、各地の前方後円墳への横穴式石室の採用事例も含めて、横穴式石室導入期の石室の出自や系譜の検討が必要であろう。



第8-3図 郡川東塚古墳 横穴式石室復元図（八尾市教委編2002図面を追加・修正）

古墳名	袖型式	玄室長	玄室幅	玄室比 (玄室長/ 玄室幅)	玄室面積	羨道長	羨道幅	羨道幅比 (羨道幅/ 玄室幅)	須恵器
藤の森古墳	右方袖式	3.5	1.5	2.33	5.25	1	0.9	0.6	—
高井田山古墳	右片袖式	3.73	2.34	1.59	8.7	2	1.18	0.5	TK47
※郡川西塚古墳	右片袖式	5.4	3.6	1.50	19.4	—	—	—	TK47
※郡川東塚古墳	左片袖式	5.1	3	1.70	15.3	2.7*	1.5	0.5	MT15
郡川16号墳	右片袖式	3.9	2.8	1.39	10.9	4.3	1.4	0.5	MT15
長原七ノ坪古墳	右片袖式	3.57	2.5	1.43	8.9	2.1	1.1	0.44	MT15
※市尾墓山古墳	右片袖式	5.87	2.6	2.26	15.3	3.58	1.7	0.65	MT15-
※勝福寺古墳	右片袖式	4.72	2.3	2.05	10.9	4.22	1.41	0.61	MT15

表 8-2 主な初期横穴式石室の平面プラン（※は前方後円墳）

④郡川東塚古墳の被葬者像（予察）

今回の鉄製品の再整理で明らかにできた副葬品の内容や構成、さらに横穴式石室プランの再検討により、古墳時代後期の中河内で有数の前方後円墳の一つである東塚古墳の被葬者像を知る手がかりが得られた。

東塚古墳の被葬者像を考える前にまず、出土している須恵器の型式（TK47型式）から、東塚古墳（MT15型式）に先行する時期の前方後円墳である全長約60mの西塚古墳の概要を整理してみることにする。前述したように、西塚古墳は、初期横穴式石室を主体部に持つ古墳として、扁平な板石を使用した玄室長5.4m、幅3.6mを計る右片袖式の石室であると考えられている。玄室の長軸辺に沿って、二棺（うち西侧の棺は木棺）が葬られ、奥壁付近に武器・武具類が置かれていた。副葬品は、神人歌舞画像鏡や銀製四獸鏡を含む3面の銅鏡や、勾玉、管玉、壺玉、小玉などの玉類、銀製垂飾付耳飾り、金環、銀環、銀鈴、刀剣類、槍、鉢留短甲、須恵器などが出土した（清原1976・木村1981）。鏡や垂飾付耳飾りに象徴されるように、その特徴的かつ豊富な副葬品から、郡川の地での前方後円墳築造の嚆矢となった人物であったことがわかる。

そして、西塚古墳に続く、東塚古墳の被葬者は、多量の刀剣類、最新の武具である挂甲、騎乗に必要な馬具を保持していることから、武人的要素が強い人物であった可能性が高いことがわかる。また、西塚古墳出土の神人歌舞画像鏡が、大阪府長持山古墳や東京都亀塚古墳など11面の同型鏡があるのと同様に、東塚古墳の画文帶神獸鏡も、「ワカタケル（雄略）大干」の銀象嵌の銘文のある鉄刀が出土した熊本県江田船山古墳や奈良県新沢千塚10号墳など全国各地に26面もの同型鏡（川西2004）がある。これらは、中国からの舶載鏡（小林1976）と考える意見と、舶載鏡を踏み返して国内で作られた復古鏡とする意見（河上2005）があるが、倭の五王の時代を象徴する副葬品のひとつである。鏡の評価は今後の課題であるが、鏡の配布を主導した倭の五王と、同型鏡を入手・保有した各地の古墳相互に関係性が指摘できる副葬品であることは間違いない。

さらに、東塚古墳で確認した東西約6m、南北約9mの範囲の横穴式石室下部の基礎構造は、石材を多用する横穴式石室と堅牢な墳丘を構築する上で必要な技術であった。東塚古墳の築造時期となるMT15型式前後の有力な前方後円墳である奈良県高取町市尾崩山古墳、京都府宇治市五ヶ庄二子塚古墳、大阪府羽曳野市峯ヶ塚古墳、さらに縦体人工の墓と考えられる大阪府高槻市今城塚古墳（高槻市教委2007）で共通し、かつ限定的な横穴式石室構築技術（寺前2007）である。「畿内型横穴式石室の採用を促し、技術的援助を主導したいわば「元締め」ともいいくべき中心勢力（福永2005）である今城塚古墳の被葬者であろう縦体大王と、中河内を始めとする近畿地方各地の有力な前方後円墳被葬者との関係がうかがえるものである。

また、西塚古墳、東塚古墳が築造された郡川遺跡周辺では、高安古墳群の造墓の時期と並行する古墳時代中～後期、飛鳥時代にかけての種の羽口や鉢津が出土（藤井2007）しており、実態は明らかでない

ものの、鉄鍛冶遺跡の存在が指摘できる地域である。「郡川古墳群」とも称し、ほぼ同規模の前方後円墳が系列化して築造された両古墳の被葬者は、「高安地域の渡来系集団の統治・管理を職掌する首長（花田 2008）」とも考えられており、高安地域の渡来系集団の役割のひとつが鉄鍛冶・鉄器生産であった可能性が高い。鉄鍛冶集団の掌握こそ、北方に位置する古墳時代中期に築造された中河内最大の前方後円墳である心合寺山古墳に代表される「楽音寺・大竹古墳群」（藤井 2002）とは異なる新たな勢力として、台頭できた要因ではないだろうか。

以上のように、中河内で最後に築造された前方後円墳である東塚古墳の被葬者は、副葬品の同型鏡を各地に持つ画文帶神獸鏡の伝世・所有から考えると、おそらく倭の五王の最後の「武」と考えられる雄略大王の時期に勢力を始めめたことがわかり、限的な横穴式石室構築技術からは、その後の新たな王権となる雄略大王とも関係を持った新進の被葬者であったことが指摘できる。軍事力と鉄生産力を背景に各干権との密接な関係を保持することで、中河内を新たに担うこととなった地域首長の古墳であったと理解できる。

近年、高安古墳群の詳細分布調査（八尾市教委編 2008）や「高安千塚シンポジウム」（八尾市教委編 2009）等を経て、高安古墳群の実態が徐々に明らかになりつつある。西塚古墳、東塚古墳の築造は、古墳時代後期の生駒山地西麓の首長墓や鉄鍛冶遺跡に代表される生産遺跡の動向と合わせて、高安山麓部に集中的に造営される高安古墳群の出現と発展を考える上でも重要であり、高安古墳群との関係は今後も検討の余地があろう。

今回の鉄製品の再整理を通じて明らかにできた東塚古墳の副葬品の構成と同様に西塚古墳についても代表的な鏡や副葬品の構成など今後再検討を行いたい。さらに、東塚古墳の復元した横穴式石室プランと他の初期横穴式石室との比較など今後の検討課題が多いが、先述した東塚古墳の被葬者像も含めて、古墳時代中期から後期にかけての生駒山地西麓の首長墓の動向を、稿を改めて論ずることにしたい。

（藤井）

【1)と3)の参考文献】

- 柳原末治 1944 「上代財鏡に就いての一所見」『考古学雑誌』第三十四巻第二号
- 太田宏明 2003 「畿内導入期の横穴式石室」『関西人文学考古学研究室開設五十周年記念考古学論叢』
- 川西宏幸 2001 「同型鏡とワカケル」同成社
- 河上邦彦 2005 「中・後期古墳出土のいわゆる舶載鏡について」『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』櫻京考古学研究所研究成果第8冊
- 木村豪章 1981 「古墳時代の基礎研究積一資料編（1）」『東京国立博物館紀要』第16号
- 清原得哉 1976 「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』第2卷第2号、（財）大阪文化財センター
- 和泉市久保惣記念美術館 1985 「和泉市久保惣記念美術館 藏鏡図録」
- 小林行雄 1976 「倭の五王の時代」『古墳文化論考』平凡社
- 高槻市教育委員会編 2008 「史跡今城塚古墳・平成18年度 第10次規模確認調査一」
- 川中 裕 1992 「小型埋葬施設出土の日本初期の鏡」『史跡森特軍塚古墳-史跡整備事業発掘調査報告書一』
- 寺前直人 2007 「畿内型横穴式石室の基礎構造」『考古学論究一笠原好彦先生退任記念論集一』
- 中村 浩 1991 「大阪府八尾市郡川西塚古墳出土の須恵器の再検討」『人谷女子大学紀要』26-1
- 花田勝広 2008 「高安千塚の基礎的研究」『八尾市文化財紀要13』
- 羽曳野市教育委員会編 2002 「史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書」
- 福永伸哉 2005 「いわゆる縦休期における威儀財変化とその意義」『井ノ内船荷塚古墳の研究』
- 藤井淳弘 2002 「心合寺山古墳研究歴史」『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』第13号
- 2007 「心合寺山古墳のまわりの遺跡3 一郡川遺跡一」八尾市立しおんじやま古墳学者館 展示解説
- 森岡秀人 1983 「追堀と棺体配置-後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二、三の考察-」『関西大学考古学研究室開設二十周年記念考古学論文』

- 古岡 哲 1988 「八尾市郡川東塚古墳・西塚古墳の測量調査」『探訪古代の道 第三巻』徳法蔵館
- 古田野々 2004 「生駒西麓古墳出土の基礎報告—久保田家所蔵の郡川東塚・西ノ山古墳・うし塚古墳等の山上品の紹介」
『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』第15号
- 八尾市教育委員会編 2002 「5. 郡川東塚古墳（2000-306）の調査」『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書1』
- 八尾市教育委員会編 2008 『八尾市文化財紀要13 高安古墳群の基礎的研究』
- 八尾市教育委員会編 2009 「郡川東塚古墳山上の馬具について」『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』
- 八尾市教育委員会編 2009 『八尾市文化財紀要14 高安千塚シンボジウム記録集』
- (財)八尾市文化財調査研究会編 2006 「郡川東塚古墳（第1次）」『八尾市埋蔵文化財調査センター報告7』
- 安村俊史 2008 「横穴式石室の導入」『群集墳と終末期古墳の研究』清文堂出版
- 渡辺智恵美 1997 「耳環小考」『元興寺文化財研究所 創立三十周年記念誌』

報告書抄録							
ふりがな	やおしないひいせきへいひいわんどはくつちゅうさぼうこくしょ						
書名	八尾市内連続平成21年度発掘調査報告書						
副書名	平成21年度国庫補助事業						
巻次							
シリーズ名	八尾市文化財調査報告						
シリーズ番号	61						
編著者名	藤井竹久/吉田純一/坪田英一/西村公助/海田清一/鏡口薫/成海佳子/木村健明/米井友美/伊藤幸司/塩井裕之/千代木美精/金澤謙太						
編集機関	八尾市教育委員会						
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町一丁目1番1号 TEL072-924-8555						
発行年月日	2010年3月31日						

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間		調査面積 (m ²)	調査原因
					市町村	遺跡番号		
I-3-1) 前畠遺跡 (2008-347)	八尾市前畠町の町1	27212	64°34'59"40"	135°35'24"24"	2009/02/04 - 05		18.75	工場 (遺構確認調査)
I-3-2) 恵養寺跡 (2008-476)	八尾市恵養寺町4	27212	20°34'36"20"	135°38'07"07"	2009/03/03 - 11		21.50	分譲住宅 (遺構確認調査)
I-3-3) 葦坂遺跡 (2008-460)	八尾市芦坂町6	27212	65°34'38"13"	135°36'26"26"	2009/02/09		6.25	個人住宅 (個人住宅危険調査)
I-3-4) 小坂合通跡 (2008-478)	八尾市小坂町4	27212	40°34'37"08"	135°36'46"46"	2009/03/16		6.25	専用住宅 (個人住宅危険調査)
I-3-5) 東坂寺遺跡 (2008-383)	八尾市東坂寺町2	27212	73°34'37"16"	135°36'27"27"	2009/03/12		4.00	個人住宅 (個人住宅危険調査)
I-3-6) 太子堂遺跡 (2008-232)	八尾市太子堂4	27212	62°34'36"24"	135°35'19"19"	2009/01/09		18.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
I-3-7) 東御遺跡 (2008-454)	八尾市光町1	27212	37°34'37"45"	135°36'23"23"	2009/02/03		9.00	店舗付住宅 (遺構確認調査)
I-3-8) 中山通跡 (2008-500)	八尾市中牟田5	27212	28°34'36"52"	135°37'10"10"	2009/03/05		4.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
I-3-9) 両都院寺 (2008-420)	八尾市東ノ町3	27212	46°34'38"44"	135°36'26"26"	2009/01/23 - 24		27.00	工場 (遺構確認調査)
I-3-10) 東ノ前通跡 (2008-461)	八尾市八尾木5	27212	31°34'37"05"	135°36'14"14"	2009/02/05		21.25	共同住宅 (遺構確認調査)
I-3-11) 大作通跡 (2008-481)	八尾市高美町4	27212	74°34'36"54"	135°36'44"44"	2009/02/19		6.25	専用住宅 (遺構確認調査)
I-3-12) 小坂合通高麗院跡地 (2008-537)	八尾市旭ヶ丘2	27212	34°37'32"	135°36'56"56"	2009/03/27		16.00	分譲住宅 (試掘測定(埋蔵文化財包蔵地外))

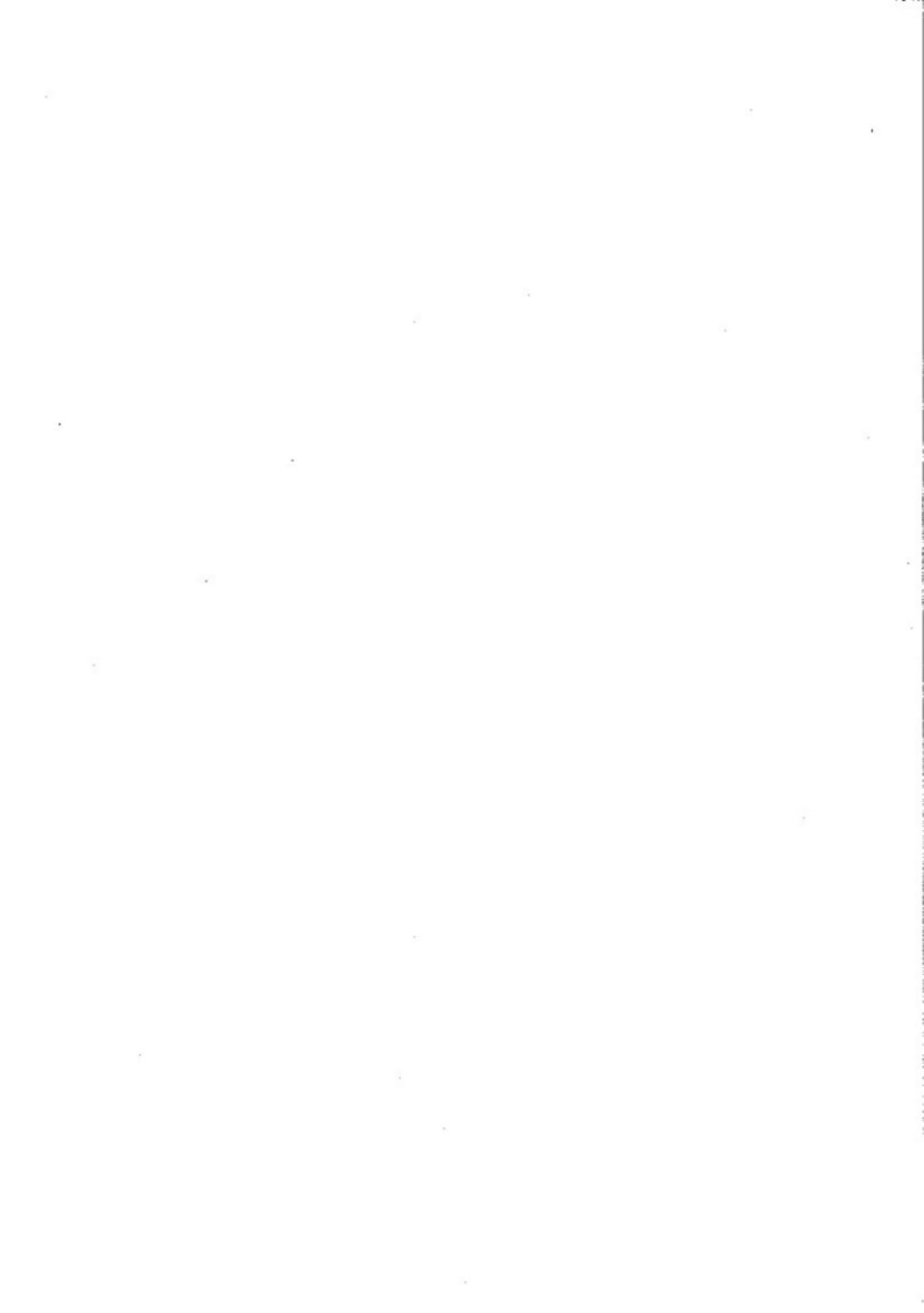
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
II-3-1) ^{あさひといとう} 前部道路跡 (2009-45)	八尾市春日町2	27212	64	34 36 50	135 35 46	2009/06/02	8.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-2) ^{あさひといとう} 前部道路跡 (2008-157)	八尾市東太子子1	27212	64	34 36 43	135 35 40	2009/07/27	14.25	個人住宅 (個人住宅発掘調査)
II-3-3) ^{あさひといとう} 植松遺跡 (2009-521)	八尾市山吹町2	27212	63	34 36 37	135 35 53	2009/05/12	27.00	共同住宅 (遺構確認調査)
II-3-4) ^{あさひといとう} 老原遺跡 (2009-160)	八尾市東老原2	27212	38	34 36 10	135 36 39	2009/07/30・31	45.00	電気機器基礎設置 (遺構確認調査)
II-3-5) ^{あさひといとう} 大竹西遺跡 (2009-184)	八尾市奈谷寺1	27212	54	34 38 19	135 38 17	2009/08/31～ 09/04・07	99.00	店舗 (遺構確認調査)
II-3-6) ^{あさひといとう} 恵谷遺跡 (2008-230)	八尾市恵谷中町2	27212	20	34 36 22	135 37 55	2009/08/04～05	30.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-7) ^{あさひといとう} 恵青遺跡 (2009-220)	八尾市恵青中町2	27212	20	34 36 21	135 38 05	2009/09/14	9.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-8) ^{あさひといとう} 菅原遺跡 (2008-636)	八尾市菅原町3	27212	65	34 38 04	135 36 29	2009/04/06～07	36.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-9) ^{あさひといとう} 宜振遺跡 (2009-75)	八尾市緑ヶ丘1	27212	65	34 38 13	135 36 35	2009/09/03	6.25	個人住宅 (個人住宅発掘調査)
II-3-10) ^{あさひといとう} 菅振遺跡 (2009-179)	八尾市菅振町5	27212	65	34 38 47	135 36 38	2009/09/07	6.25	個人住宅 (個人住宅発掘調査)
II-3-11) ^{あさひといとう} 木の本遺跡 (2009-57)	八尾市南木の木3	27212	35	34 37 54	135 35 54	2009/05/11～14	99.75	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-12) ^{あさひといとう} 久川遺跡跡 (2009-40)	八尾市波川町5	27212	23	34 36 34	135 35 35	2009/05/15	4.00	専用住宅 (個人住宅発掘調査)
II-3-13) ^{あさひといとう} 久々寺遺跡 (2009-302)	八尾市波川町6	27212	23	34 37 08	135 35 34	2009/11/10	29.00	共同住宅 (遺構確認調査)
II-3-14) ^{あさひといとう} 郡川遺跡 (2009-318)	八尾市郡川3	27212	60	34 37 08	135 38 19	2009/12/09	9.00	個人住宅 (個人住宅発掘調査)
II-3-15) ^{あさひといとう} 小坂口遺跡 (2009-197)	八尾市山本町南8	27212	40	34 37 01	135 37 09	2009/09/25	4.00	個人住宅 (個人住宅発掘調査)
II-3-16) ^{あさひといとう} 渡川施字 (2008-217)	八尾市春日町1	27212	75	34 36 55	135 35 40	2009/05/25	14.25	店舗 (遺構確認調査)
II-3-17) ^{あさひといとう} 東郷遺跡 (2009-126)	八尾市桜ヶ丘3	27212	37	34 37 42	135 36 36	2009/07/23	4.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-18) ^{あさひといとう} 東郷遺跡 (2009-170)	八尾市桜ヶ丘3	27212	37	34 37 42	135 36 37	2009/08/27	4.00	個人住宅 (個人住宅発掘調査)
II-3-19) ^{あさひといとう} 東郷遺跡 (2009-187)	八尾市桜ヶ丘1	27212	37	34 37 33	135 36 40	2009/08/31～ 09/01	24.00	共同住宅 (遺構確認調査)
II-3-20) ^{あさひといとう} 東郷遺跡 (2009-234)	八尾市桜ヶ丘1	27212	37	34 37 32	135 36 42	2009/09/18	12.50	店舗 (遺構確認調査)

ふりがな	ふりがな	コード		北緯 東経		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		所在地	市町村	遺跡番号	...			
II-3-21 中田遺跡 (2008-424)	八尾市刑部3	27212	28	34 36 41	135 37 14	2009/04/02	8.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-22 中田遺跡 (2009-39)	八尾市刑部4	27212	28	34 36 34	135 37 21	2009/04/23	6.25	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-23 中田遺跡 (2009-19)	八尾市八尾木北2	27212	28	34 36 39	135 36 55	2009/05/13	6.25	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-24 中田遺跡 (2009-99)	八尾市中田3	27212	28	34 36 51	135 36 52	2009/06/18 - 07/09	26.75	老人ホーム (遺構確認調査)
II-3-25 中田遺跡 (2009-88)	八尾市刑部1	27212	28	34 36 55	135 37 24	2009/06/19	6.25	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-26 中田遺跡 (2009-128)	八尾市刑部1	27212	28	34 36 51	135 37 24	2009/07/17	4.00	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-27 中田遺跡 (2009-208)	八尾市中田5	27212	28	34 36 50	135 37 13	2009/09/09	9.00	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-28 中田遺跡 (2009-214)	八尾市刑部4	27212	28	34 36 40	135 37 27	2009/09/10	6.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-29 中田遺跡 (2009-244)	八尾市刑部2	27212	28	34 36 43	135 37 15	2009/10/02	6.25	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-30 東弓削遺跡 (2009-116)	八尾市東弓削前3	27212	31	34 35 60	135 37 15	2009/07/24	6.25	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-31 八尾市中本町 (2009-16)	八尾市中本町2	27212	80	34 37 24	135 36 08	2009/04/16	4.00	専用住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-32 八尾市中本町 (2009-18)	八尾市中本町5	27212	80	34 37 34	135 36 07	2009/04/20	4.00	分譲住宅 (遺構確認調査)
II-3-33 八尾市中本町 (2009-188)	八尾市中本町2	27212	80	34 37 28	135 36 09	2009/08/28	6.00	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-34 八尾市中本町 (2009-264)	八尾市中本町3	27212	80	34 37 26	135 35 60	2009/10/21	6.25	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-35 八尾市中本町 (2009-254)	八尾市中本町3	27212	80	34 37 27	135 35 57	2009/11/01	6.25	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-36 大作遺跡 (2009-46)	八尾市高美町4	27212	74	34 36 56	135 36 46	2009/05/19 - 20	35.00	店舗 (遺構確認調査)
II-3-37 大作遺跡 (2009-120)	八尾市南木町5	27212	74	34 37 01	135 36 29	2009/07/03	4.00	個人住宅 (個人住宅実施調査)
II-3-38 龍華寺跡 (2009-130)	八尾市陽光園2	27212	44	34 36 58	135 36 12	2009/10/01	15.00	店舗 (遺構確認調査)
II-3-39 壁文化財包 壁地外 (2009-194)	八尾市竹鶴西4	27212	34	36 59	135 33 55	2009/08/25 - 26	31.25	店舗 (遺構確認調査)

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
I-3-1) <small>新井川流域</small> (2008-347)	集落	奈良～平安、中世～近世	整地層・溝	土師器・須恵器・瓦器・瓦	
I-3-2) <small>忍曾遺跡</small> (2008-476)	集落	平安時代末	土坑	土師器・瓦器	
I-3-3) <small>笠振遺跡</small> (2008-460)	集落	近世～近代、中世～近 世、平安時代後期、古墳 時代初期	土坑・井戸・ビット ト	布留式土器・土師器・陶器・磁器	
I-3-4) <small>小坂合道跡</small> (2008-478)	集落	平安時代中期以降	土坑・溝	瓦器	
I-3-5) <small>成法寺廃跡</small> (2008-383)	集落	古墳時代初頭	遺物包含層	円内式甕等	
I-3-6) <small>太了立遺跡</small> (2008-232)	集落	奈良～平安時代	井戸・土坑・水 田・落ち込み	土師器・須恵器	
I-3-7) <small>栗駒遺跡</small> (2008-450)	集落	古代～中世、古墳時代初 頭	水田・ビット	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器	
I-3-8) <small>中川遺跡</small> (2008-500)	集落	近現代	井戸	弥生土器	
I-3-9) <small>青部砦跡</small> (2008-420)	集落	飛鳥～奈良時代	ビット・溝・落込 み	土師器・須恵器・瓦	
I-3-10) <small>東弓削遺跡</small> (2008-461)	集落	奈良時代	土器堆積	土師器	
I-3-11) <small>大作遺跡</small> (2008-481)	集落	平安時代末・鎌倉時代	土坑・溝	陶器器・土師器	
I-3-12)					
小坂合道跡発掘実施場 (2008-537)	集落	中世～近世	井戸		
II-3-1) <small>新井川流域</small> (2009-45)	集落				
II-3-2) <small>新井川流域</small> (2008-157)	集落	古墳時代後期～奈良時 代・中世	遺物包含層・自然 河川		
II-3-3) <small>桂松遺跡</small> (2008-521)	集落	古墳時代～古代・中世～ 近世	水田		
II-3-4) <small>老原遺跡</small> (2009-160)	集落	中世～近世	土坑・ビット・耕 作溝	土師器・瓦器	
II-3-5) <small>人竹西遺跡</small> (2009-184)	集落	弥生時代後期～古墳時代 前期	ビット・土坑・溝	弥生土器・古式土器器・須恵器・本調査実施 サヌカイト	(OTN2009-6次)
II-3-6) <small>忍曾遺跡</small> (2008-230)	集落	弥生時代中期後半	ビット・土坑	弥生土器・石器	
II-3-7) <small>忍曾遺跡</small> (2009-220)	集落	縄文時代中～後期		縄文土器	
II-3-8) <small>笠振遺跡</small> (2008-535)	集落	古墳時代後期以降、中世 ～近世	ビット・溝・耕作 溝		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
II-3-9) ^{重要文化財} 要波遺跡 (2009-75)	集落	縄文時代	ピット・溝	土師器・須恵器	
II-3-10) ^{登録文化財} 笠置遺跡 (2009-179)	集落	縄文時代、江戸時代	ピット・溝	土師器・瓦器・近世陶磁器・銅鏡 (高水通寶)	
II-3-11) ^{木の辻遺跡} (2009-67)	集落	中世		土師器・瓦器・瓦	
II-3-12) ^{久宝寺遺跡} (2009-40)	集落			土師器・瓦	
II-3-13) ^{久宝寺遺跡} (2009-302)	集落	古墳時代初頭・奈良時代・平安時代・中世末～近世	生産遺構	古式土師器・古式土器・須恵器・黑色土器	
II-3-14) ^{郡川遺跡} (2009-318)	集落	古墳時代中～後期	土石流	須恵器	
II-3-15) ^{小坂合遺跡} (2009-197)	集落	古墳時代前期	遺物包含層		
II-3-16) ^{渡川庵寺} (2008-217)	寺跡	中世～近世	耕作層	土師器・須恵器・瓦	
II-3-17) ^{東郷遺跡} (2009-126)	集落	古墳時代前期	唐	古式土師器	
II-3-18) ^{東郷遺跡} (2009-170)	集落			土師器・須恵器・瓦	
II-3-19) ^{東郷遺跡} (2009-187)	集落	古墳時代初頭・古墳～奈良時代	井戸・ピット・溝・手焼き形土器		木製竈火施 (TG2009-73次)
II-3-20) ^{東郷遺跡} (2009-234)	集落	古墳時代後期～平安時代	土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・瓦	
II-3-21) ^{中田遺跡} (2008-424)	集落	古墳時代初頭	土坑・ピット・溝・古式土師器		
II-3-22) ^{中田遺跡} (2009-30)	集落	古墳時代初頭・中期・平安時代末～縄文時代		土器類	
II-3-23) ^{中田遺跡} (2009-19)	集落	古墳時代以降	耕作層	古式土師器・須恵器	
II-3-24) ^{中田遺跡} (2009-99)	集落	弥生時代後期・古墳時代	土坑・ピット・不古式土師器・土師器・瓦器・中國前期・中世	明道焼(SX321)製白磁	
II-3-25) ^{中田遺跡} (2009-88)	集落	平安時代以降		土器	
II-3-26) ^{中田遺跡} (2009-128)	集落	中世～近世	耕作層	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器	
II-3-27) ^{中田遺跡} (2009-208)	集落	弥生時代後期・中世	溝・耕作層	弥生土器・土師器・瓦器	
II-3-28) ^{中田遺跡} (2009-214)	集落	奈良時代・中世		土師器・須恵器・瓦器	

所以遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
II-3-29) 中田遺跡 (2009-244)	集落	古墳時代前期	上坑集積	古式土師器	
II-3-30) 東町削礫跡 (2009-116)	集落	平安時代末期以降	遺物包含層	瓦器	
II-3-31) 八尾寺内町 (2009-16)	集落	中世～近世	上坑・溝	平安時代の土師器	
II-3-32) 八尾寺内町 (2009-18)	集落	近世	上坑	近世陶磁器	
II-3-33) 八尾寺内町 (2009-188)	集落	近世	溝	近世陶磁器	
II-3-34) 八尾寺内町 (2009-264)	集落	近世	土坑・ピット・溝・蔵込み	近世陶磁器、瓦	瓦棒を持つ土坑は集木棒の可能性がある
II-3-35) 八尾寺内町 (2009-254)	集落	近世	井戸・溝	近世陶磁器	溝は環濠の可能性がある
II-3-36) 天作遺跡 (2009-46)	集落	古墳時代後期・平安時代・中世	井戸・上坑・ピット・溝	上師器・瓦器・瓦	
II-3-37) 天作遺跡 (2009-120)	集落	中世		上師器	
II-3-38) 能勢寺跡 (2009-130)	寺跡	鎌倉時代	ピット・溝	土師器・須恵器・瓦器	
II-3-39) 理藏文化財包含地外 (2009-194)		奈良時代	土坑・溝	土師器・須恵器	



八尾市文化財調査報告 61
平成 21 年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成 21 年度発掘調査報告書

発 行 日 平成 22 年 (2010) 3 月 31 日

編集・発行 八尾市教育委員会

〒581-0003 八尾市本町一丁目一番一号

T E L (072) 924-8555(直通)

印 刷 古賀印刷株式会社

〈八尾市刊行物番号 H21-142〉